静岡県豊田町

広野北遺跡発掘調査報告書

本　　編

1985

平　安　博　物　館

序

東に旭日と共に遠景の秀麗富士の山，北に赤石の連峰を眺め，南に黒潮の海原躍り輝き，落日に天竜の川も又穏やかに染まるを一望せるところこの広野の豊饒の沃野丘陵に，豊田町東小学校の建設を意図し着手のはたてをもくろむも，この地域周辺は広野遺跡として文化財の埋蔵が伝えられる位置でありました。

貴重な国民的財産である文化財を記録に留めることなく破壊することは『格調高き田園文化都市づくり』を標榜の所以からも認容し難く，又，文化財保護法に明記されている『文化財はわが国の歴史・文化等の正しい理解のため欠くことのできないものであり，且つ，将来の文化の向上発展の基礎をなすものである』との趣旨からも，文化遺産を後世に伝えることは私たちの責務でもあり，この為，発掘調査を行うべく県教育委員会文化課と協議を重ね，再度にわたる事前調査を行った結果本調査を実施することに決定・着手いたしました。

調査の結果，先土器・縄文・弥生・古墳時代の遺物・遺構が多数発見され，特に先土器時代の遺構等は全国的にも大変貴重な資料であるとの結論が出されました。このことは我が豊田町が往古の昔から快適性と安全性そして利便性を兼ね備えた居住生活に適した地であったこと，又，他地域に先がけて文化発展の素地が育まれていたことを証明してくれるものであり，今日まで連綿として続いてきた町の歴史に改めて先哲の労苦を思い懐古すると共に，本書が多くの方々に愛読され，文化財の保護と理解のために役立ち，郷土の歴史を知るうえでの貴重な資料となる事を心から願うものであります。

今回の調査にあたり県教育委員会文化課の各位，京都平安博物館の角田文衛館長及び鈴木忠司・山下秀樹氏，又，県外より応援賜った尊氏各位，文化財愛護と教育愛の使命感に燃え，一致協力，酷暑風塵の中にあって日に夜を継いでのご労苦を頂いた調査補助員，作業員，地元小学校ＰＴＡ並びに調査に協力して下さった皆様方に対し，深甚なる敬意と感謝の意を表し発刊のことばといたします。

昭和60年10月

静岡県豊田町

町長　大庭　孝

序

豊田町は，人口急増により，10年前には１中学校２小学校が，昭和60年４月には２中学校４小学校と倍増します。４校目の新設豊田町立豊田東小学校は，磐田原台地に昭和58年４月に開校しました。この地は静岡県の遺跡分布図によると遺跡が埋蔵されていると予想されたため，昭和56年校地決定とともに静岡県教育委員会文化課と種々協議指導のもとに，昭和56年９月下旬に第１次発掘調査(予備調査)を実施，遺跡が未撹乱の状態で保存されていることを確認，昭和57年２月約１ケ月の期間で，第２次発掘調査(予備調査)を実施，遺跡の性格・広がり・堆積状態等の概況が把握され，豊田町教育委員会・静岡県教育委員会文化課と本調査方法の検討を行う中で，財団法人古代學協會・平安博物館に依頼協力を得て，ようやく昭和57年５月より広野北遺跡発掘第３次の本調査が開始された。

調査進行過程では幾多の困難に直面した。それは校地面積約２万５千平方メートルの内調査面積１万３千平方メートルという広域，更に昭和58年４月に開校が迫り建設工事も急ぎ，平行する作業は相方とも非能率と無理を重ね，教育委員会は文化財保護の責務と児童の教育施設の整備の責務と二重の責任の中で心労の募る日々でした。このような悪条件の中で調査員・調査補助員の先生方，多くの調査作業員の方々の絶大な献身的協力を得て，昭和57年12月23日発掘調査の全てを完了しました。

調査報告書作成は先土器時代は平安博物館に，縄文時代以降は静岡県教育委員会文化課にご依頼して３年計画により発刊の運びになりました。　この３ケ年を振り返り静岡県教育委員会文化課，平安博物館の諸先生，又調査作業員の方々，動員による地域の方々に深甚なる感謝を申し上げ序文といたします。

昭和60年10月

静岡県豊田町

教育長　野口昭夫

序

平安博物館は，静岡県豊田町の御依頼によって，同町高見丘の旧石器時代の遺跡の発掘調査を昭和57年５月より同年12月にかけて実施した。遺跡の広さは約１万３千平方メートルある上に，発掘は精密に進められ出土の土坑や石器類が数多かったため，整理に多くの日子を費したが，この度ようやく調査報告書を公刊する運びに至った。

広野北遺跡出土の遺物には旧石器時代，縄文，弥生，大和の各時代のものが認められるが，特に旧石器時代に関しては約２万２千年前から１万３千年くらいまでの間に，ナイフ形石器文化期４，尖頭器文化期１，細石器文化期１の，合計６つの異なる文化段階を識別することができた。これは磐田原台地に留まらず，静岡県から中部四国地方の間で初めての発見である。遺跡のある遠踏見地方は優勢な茂呂系文化圏の西縁に位置し，国府系文化圏との狭間にあって，両者の関係を検討する上で極めて重要な位置を占めているのであるが，従来編年的にも内容的にも，役立つ遺跡がほとんど見られなかった。この意味において豊富な内容と共に編年的にも示唆に富む本遺跡の調査は重視されよう。

遺跡に関しては，特に多数発見された土坑(18基)が大きな意味をもっている。その分布を検討した結果，少なくともナイフ形石器文化段階の終末から，尖頭器文化段階に該当することが判明するに至った。これら土坑の形状，遺物との共伴関係から集落内での日常活動に密着した性質のものである可能性が多分に想定される。特に食糧貯蔵との関わりが大きく泛び上ってきた。さいわいにこれらの推定が妥当であるならば，従来の旧石器時代イコール狩猟活動という時代観に異った視座を与えるのではないかと思う。

更に究極的な目的の一つとして，集落景観の復原を旧石器時代の６文化段階について試みた結果，少なくともナイフ形石器文化段階から細石器文化段階にかけて，大きな転換期が三度もあったことが判明した。今のところ試論の域を出ないが，今後類例の増加をまって，それらは再検討されるのではなかろうか。

以上数有る調査成果の中から，三点を特記したが，本遺跡の日本旧石器文化の研究にもつ意義は並々ならぬものがあると信じられ，本報告書が今日刊行を見るに至ったのは，当博物館の責任を果たしたばかりでなく学界のため慶賀にたえぬことである。

昭和60年10月

平安博物館

館長　角田文衛

例　言

1. 本書は，静岡県磐田郡豊田町大字高見丘に所在する，広野北遺跡の発掘調査報告書である。
2. 約13,000㎡の調査範囲から出土した遺構・遺物のうち，中央区約6,000㎡に含まれるものを中心に報告した。遺構では土坑，遺物ではトゥールの記載についてはできる限り全調査区のものを取扱うように努めた。しかし全体の分布とか，分析に関わる部分については対象を中央区に限った。
3. 中央区出土の資料は，報告後豊田町立東小学校にて一括保管・展示される。北・南区出土資料については，さらに平安博物館にて分析が継続される。
4. 一覧表・接合資料等に示した遺物番号は遺物台帳と符合する。一部については，これによって実物との照合が可能である。
5. 石器実測図中，縁辺に微小剥落痕が連続する場合と敲石類の機能部については，実線・破線を添えてその範囲を示した。
6. 別添図には多色刷りを用いた。この場合黒は石器，青は土坑・配石・ブロックライン，赤は礫および礫群を示す。
7. 参考・引用文献は巻末に一括した。
8. 執筆分担は，目次と各章・節・項末に示した。
9. 本文中でしばしば用いられる略号について，以下に一括して示す。

A　：トゥール類	B　：剥　　片
C　：砕　　片	D　：石　　核
MB：細 石 刃	MC：細 石 核
Pt　：尖 頭 器	Kn　：ナイフ形石器
Sc　：スクレイパー	Gr　：彫　　器
RF：加工痕ある剥片	UF：使用痕ある剥片
CRF：打面調整剥片	M　：細石刃文化
P　：尖頭器文化	K2：第2b層ナイフ形石器文化
K3：第3層ナイフ形石器文化	

ex：2H2＝第2b層第2配石
　　3H2＝第3層第2配石
　　2R2＝第2b層第2礫群
　　3R2＝第3層第2礫群

執筆者一覧

〔所属は執筆時〕

市川　米太	奈良教育大学教授
上田　健夫	花園大学教授
加藤　芳朗	静岡大学教授
黒坪　一樹	京都府埋蔵文化財センター
小橋川　明	京都産業大学理学部
島地　謙	京都大学木材研究所教授
島立　桂	広島大学大学院
鈴木　忠司	平安博物館考古学第一研究室
竹広　文明	広島大学大学院
徳永　裕	平安博物館嘱託
林　昭三	京都大学木材研究所
藤田有利子	京都女子大学卒業
保坂　康夫	山梨県教育委員会
堀田　良雄	静岡県教育委員会
宮坂　直子	京都女子大学卒業
柳沢　順	京都女子大学学生
山下　秀樹	平安博物館考古学第一研究室
山田　治	京都産業大学教授
山田　元広	静岡県教育委員会

目　　次

序 …… i

例　言 …… iv

はじめに …… 1

第Ⅰ章　遺跡の位置と環境（山下秀樹）…… 3

第1節　地理的環境 …… 3

第2節　歴史的環境 …… 6

第Ⅱ章　発掘調査の経過（山下秀樹） …… 7

第1節　発掘調査に至る経過 …… 7

第2節　発掘調査の方法と経過 …… 7

第Ⅲ章　層序と遺構・遺物の遺存状態（山下秀樹，加藤芳朗）…… 15

第1節　層　　序 …… 15

第2節　火山ガラスの検索 …… 19

1．まえがき …… 19
2．土層断面 …… 19
3．試料と方法 …… 21
4．結　　果 …… 21
5．磐田原台地上の他の遺跡土層との対比 …… 23
6．土層中の砂画分含量の垂直変化 …… 24
7．おわりに …… 27

第3節　撹　　乱 …… 28

第4節　遺構・遺物の検出層準と分布 …… 29

第5節　第2b層出土遺物の所属時期 …… 30

1．細石刃群と尖頭器群 …… 31
2．尖頭器群とナイフ形石器群 …… 36

第Ⅳ章　細石刃文化（鈴木忠司，徳永　裕，黒坪一樹）…… 39

第1節　資料の由来 …… 39

第2節　石　　器 …… 39

1．集中部の遺物分布範囲と出土層準 …… 39
2．集中部出土の石器 …… 40

1）細石刃　　7）楔　　石
2）削　　器　　8）石　　斧
3）使用痕ある剥片（ＵＦ）　　9）剥　　片
4）加工痕ある剥片（ＲＦ）　　10）砕　　片
5）ナイフ形石器?（Kn?）　　11）石　　核
6）敲　　石　　12）受熱剥片

3．周辺部出土の石器 …… 61

1）細石刃　　2）細石核

第3節　接合資料と剥片剥離技法 …… 62

1．剥片剥離作業A …… 62
2．剥片剥離作業B …… 67
3．剥片剥離作業C …… 68
4．細石刃剥離過程 …… 68
5．細石核の類型と細石刃剥離過程との関係 …… 76

第4節　石器の分布 …… 78

1．ブロックの区分 …… 78
2．ブロックの石器組成 …… 79
3．器種別の分布とブロックの性格 …… 79

第5節　個体別資料の検討 …… 81

1．個体別資料の認定 …… 81
2．個体別資料の分布 …… 82
3．個体別資料群の分布とブロック区分の検討 …… 89
4．ブロックの石器組成と性格 …… 90

第6節　ユニットの設定 …… 91

第V章　尖頭器文化 …… 99

第1節　遺　　構（保坂康夫） …… 99

1．礫　　群 …… 99
1）礫群構成礫の平面分布・垂直分布および規模
2）礫の分類
3）礫の重量
4）礫の形
5）礫の石質
6）礫の完形度
7）礫の接合関係
8）礫の付着物
9）礫群相互およびブロックとの位置関係
10）まとめ
2．配　　石 …… 108
1）配石の区分
2）配石の特徴
3）配石周辺の礫の特徴
4）配石相互および礫群・ブロックとの位置関係
5）まとめ

第2節　遺　　物（山下秀樹，黒坪一樹，藤田有利子，宮坂直子） …… 116

1．尖頭器 …… 116
2．ナイフ形石器 …… 126
3．スクレイパー …… 128
4．彫　　器 …… 128
5．敲石類・台石 …… 129
6．RF …… 131
7．UF …… 134
8．剥片・砕片 …… 139
9．石　　核 …… 140

第3節　個体別資料と技術（山下秀樹） …… 146

1．剥片剥離技術を示す個体別資料 …… 146
2．尖頭器製作技術を示す個体別資料 …… 153

第4節　石器の分布（島立　桂，黒坪一樹） …… 161

1．ブロックの設定 …… 161

2．器種別分布……166
1）尖頭器　4）UF
2）ナイフ形石器・スクレイパー・彫器・RF　5）剥　片
3）礫石類・台石　6）砕　片
7）石　核
3．尖頭器石器群の器種組成……172
第5節　個体別資料の検討と分布（島立　桂，徳永　裕）……176
1．個体別資料の外観的特徴……176
2．個体別資料の分布……180
1）各個体の分布状況　3）尖頭器石器群北群の領域相互の関係
2）ブロック別個体類型
3．尖頭器石器群南群について……192
第6節　水洗選別による微細遺物の検討（山下秀樹）……194
1．微細遺物検討の目的……194
2．資料の採取方法……194
3．資料の処理……195
4．分析結果……197
5．まとめ……200
第7節　小　結（山下秀樹，保坂康夫，島立　桂）……201
1．石器群の特性と集落の性格……201
2．集落の景観と構成……202
第Ⅵ章　ナイフ形石器文化（K2）—第2b層—……205
第1節　遺　構（保坂康夫，上田健夫，柳沢　順，山下秀樹）……205
1．礫　群……205
1）礫群構成礫の平面分布・垂直分布および規模　6）礫の完形度
2）礫の分類　7）礫の接合関係
3）礫の重量　8）礫の付着物
4）礫の形　9）礫群相互およびブロックとの位置関係
5）礫の石質　10）まとめ
2．礫群構成礫の赤化に関する理科学的検討……257
3．配　石……260
1）配石の区分　6）焼けと割れ
2）規模と平面分布　7）配石周辺の礫の特徴
3）重　量　8）配石相互および礫群・ブロックとの位置関係
4）形
5）石　質　9）まとめ
4．土　坑……269
第2節　遺　物（山下秀樹，黒坪一樹，藤田有利子，宮坂直子）……299
1．尖頭器……300
2．ナイフ形石器……302
1）形　態　4）計測値
2）ブランティングチップ　5）素　材
3）その他　6）ナイフ形石器の機能

3．スクレイパー……316
4．彫　器……332
5．敲石類・台石……334
6．打　器……346
7．RF……346
8．UF……355
9．剥片・砕片……356
10．石　核……370

第3節　個体別資料と剥片剥離技術（山下秀樹）……384

第4節　石器の分布（島立　桂，黒坪一樹）……407

1．ブロックの設定……407
2．器種別分布……415
1）尖頭器
2）ナイフ形石器
3）スクレイパー
4）彫　器
5）敲石類・台石
6）打　器
7）RF
8）UF
9）剥　片
10）砕　片
11）石　核
12）受熱剥片
3．ブロックの石器組成……426
1）ブロック別石器組成
2）ブロック群および散漫分布域別石器組成

第5節　個体別資料の検討と分布（島立　桂，徳永　裕）……436

1．個体別資料の外観的特徴……436
2．個体別資料の分類とその分布……438
1）ブロック別個体類型
2）ブロック群別個体類型
3．個体別資料から見たブロック間の関係……453
1）個体別資料の個別分布
2）ブロック間の関係
4．石器群の分布より見た集落景観……474

第6節　水洗選別による微細遺物の検討（山下秀樹）……481

1．資　料……481
2．分析結果……481
3．まとめ……491

第7節　小　結（山下秀樹，保坂康夫，島立　桂）……492

1．石器群と技術基盤……492
2．ユニットの設定と集落景観……493
1）ユニットの設定
2）時期別の集落景観

第Ⅶ章　ナイフ形石器文化（K3）—第3層—……507

第1節　遺　構（保坂康夫，林　昭三，島地　謙）……507

1．礫　群……507
1）礫群の区分
2）礫群構成礫の平面分布・垂直分布および規模
3）礫の分類
4）礫の重量
5）礫の形

6）礫の石質
7）礫の完形度
8）礫の接合関係
9）礫の付着物
10）礫群相互・配石および
ブロックとの位置関係
11）礫ブロックと
非焼け礫群の特徴
12）まとめ
2．礫群伴出木炭の樹種 …540
3．配　石 …540
1）配石の区分
2）規模と平面分布
3）重　量
4）形
5）石　質
6）焼けと割れ
7）配石周辺の礫の特徴
8）1kgを超える礫群構成礫と
配石構成礫との違い
9）配石相互および礫群・
ブロックとの位置関係
10）まとめ
第2節　遺　物（山下秀樹，黒坪一樹，藤田有利子，宮坂直子） …558
1．ナイフ形石器 …559
2．スクレイパー …563
3．彫　器 …565
4．敲石類・台石 …568
5．石　斧 …576
6．RF …577
7．UF …581
8．剥片・砕片 …581
9．石　核 …581
第3節　個体別資料と剥片剥離技術（山下秀樹） …600
第4節　石器の分布（竹広文明） …621
1．ブロックの設定 …621
2．器種別分布 …629
1）器種別分布
2）各器種の分布の
相互関係
3．ブロックの石器組成 …638
1）ブロックの石器組成
2）ブロック群の石器組成
3）ブロック群周辺部・
散漫分布域の石器組成
第5節　個体別資料の検討と分布（竹広文明，徳永　裕） …645
1．個体別資料の外観的特徴 …645
2．個体別資料の分類 …646
3．個体別資料の分布 …649
1）製作個体の分布
2）C類個体の分布
4．ブロック等の個体構成 …657
1）ブロックの個体構成
2）ブロック群の個体構成
5．ブロックの相互関係 …665
1）接合資料の共有関係
2）個体別資料の共有関係
3）ユニットの設定
6．石器群の分布から見た集落の景観と構造 …669

第6節　小　　結（山下秀樹，保坂康夫，竹広文明）……676
1．世帯ユニットの設定……676
2．集落の景観……682
第Ⅷ章　縄文時代（山田元広）……683
第1節　遺　　構……683
第2節　遺　　物……684
第3節　小　　結……689
第Ⅸ章　弥生時代（山田元広，堀田良雄）……691
第1節　遺　　構……691
第2節　遺　　物……698
第3節　小　　結……700
第Ⅹ章　古墳時代（山田元広，堀田良雄）……703
第1節　遺　　構……703
第2節　遺　　物……703
第3節　小　　結……705
第XI章　年代測定……707
第1節　礫群伴出炭化物の ^{14}C 年代（山田　治，小橋川　明）……707
1．はしがき……707
2．測定結果……707
3．結果の考察……708
第2節　礫群構成礫による熱ルミネッセンス年代（市川米太）……708
第XII章　結　　語（山下秀樹，保坂康夫）……711
第1節　礫　　群……711
第2節　配　　石……713
第3節　土　　坑……714
1．所属時期……714
2．用　　途……714
第4節　水洗選別……716
第5節　集落構造と景観の変遷……716
註……722
引用・参考文献……723
英文要旨……727
あとがき……737
図　　版（44図）
別 添 図（34葉）

表　目　次

第１表　火山ガラス％の計測例 …… 22
第２表　西ブロック構成石器群の帰属 …… 31
第３表　東ブロック構成石器群の帰属 …… 33
第４表　集中部出土石器集計表 …… 40
第５表　細石刃部位別構成表 …… 40
第６表　細石刃の計測値集計表 …… 43
第７表　細石刃一覧表 …… 44
第８表　細石核作業面長・打面角計測値一覧表 …… 48
第９表　周辺部出土の細石刃一覧表 …… 61
第10表　ブロック別石器組成表 …… 79
第11表　個体別資料のブロック別・器種別分類表 …… 82
第12表　再編ブロック別石器組成表 …… 91
第13表　集中部・周辺部出土の石器一覧表 …… 94
第14表　尖頭器文化の配石構成礫観察表 …… 109
第15表　配石区域，礫群，およびその周辺の
非焼け礫と焼け礫の分布個数表 …… 111
第16表　尖頭器文化所属石器の組成表 …… 116
第17表　尖頭器文化所属石器のブロック別石材構成 …… 117
第18表　尖頭器の形態別破損分類 …… 125
第19表　尖頭器のブロック別形態組成 …… 126
第20表　尖頭器文化段階所属石器属性表 …… 141
第21表　尖頭器文化所属石器のブロック別組成表 …… 162
第22表　ブロック別ＵＦ出現頻度 …… 170
第23表　尖頭器北群領域別石器組成 …… 173
第24表　尖頭器南群領域別石器組成 …… 175
第25表　尖頭器文化に属する個体別資料一覧表 …… 178
第26表　ブロック群別個体類型 …… 189
第27表　ブロック間相対強度（Ｐ） …… 190
第28表　ブロック間相互強度 …… 191
第29表　尖頭器南群ユニット別属性表 …… 202
第30表　第２b層ナイフ形石器文化の礫群観察表 …… 215
第31表　第２b層ナイフ形石器文化の礫群構成礫分類別構成表 …… 225

第32表　第２b層ナイフ形石器文化の礫群構成礫接合関係表 …… 237
第33表　第２b層ナイフ形石器文化の礫群内接合距離表 …… 239
第34表　第２b層ナイフ形石器文化と尖頭器文化の礫群類型と他の属性対照表 …… 248
第35表　第２b層ナイフ形石器文化と尖頭器文化の礫群重量区域区分表 …… 249
第36表　第２b層ナイフ形石器文化と尖頭器文化の礫群欠落礫推定総重量表 …… 252
第37表　第２b層ナイフ形石器文化の配石構成礫観察表 …… 262
第38表　土坑属性表 …… 296
第39表　中央区第２b層ナイフ形石器文化所属の石器組成表 …… 299
第40表　中央区第２b層ナイフ形石器文化所属石器の石材 …… 299
第41表　ナイフ形石器形態別出土点数 …… 302
第42表　ナイフ形石器の形態別石材構成表 …… 313
第43表　ナイフ形石器の形態と素材 …… 313
第44表　ナイフ形石器の形態別破損類型 …… 315
第45表　第２b層ナイフ形石器文化段階所属石器属性表 …… 317
第46表　ブロック・ブロック群別ナイフ形石器破損状況 …… 417
第47表　ナイフ形石器ブロック別形態組成 …… 418
第48表　領域別剥片占有表 …… 423
第49表　領域別石器組成表 …… 428
第50表　中央区第２b層ナイフ形石器文化に属する個体別資料一覧表 …… 439
第51表　ブロック別個体モデル(1), (2) …… 445
第52表　ブロック群別個体モデル組成 …… 449
第53表　ブロック間相対強度(Ｋ２) …… 471
第54表　ブロック間相互強度 …… 472
第55表　第２b層ナイフ形石器文化(Ｋ２)ユニット別属性表 …… 494
第56表　第３層ナイフ形石器文化の礫群観察表 …… 518
第57表　第３層ナイフ形石器文化の礫群構成礫分類別構成表 …… 519
第58表　第３層ナイフ形石器文化の礫群構成礫接合関係表 …… 526
第59表　第３層ナイフ形石器文化の礫群内礫接合距離表 …… 527
第60表　第３層ナイフ形石器文化の礫群類型と他の属性対照表 …… 534
第61表　第３層ナイフ形石器文化の礫群重量区域区分表 …… 535
第62表　第３層ナイフ形石器文化の礫群欠落礫推定総重量表 …… 536
第63表　樹種同定表 …… 540

第64表　第３層ナイフ形石器文化の配石構成礫観察表 …… …542
第65表　中央区第３層出土石器組成表 …… …558
第66表　中央区第３層出土石器の石材 …… …558
第67表　ナイフ形石器の形態と素材 …… …563
第68表　第３層ナイフ形石器文化段階所属石器属性表 …… …595
第69表　中央区第３層ブロック別石器組成表 …… …622
第70表　中央区第３層ブロック群別石器組成表 …… …626
第71表　中央区第３層ブロック群周辺部別石器組成表 …… …627
第72表　中央区第３層散漫分布域別石器組成表 …… …628
第73表　中央区第３層器種別ブロック別配分表 …… …630
第74表　中央区第３層ナイフ形石器ブロック群別形態組成表 …… …631
第75表　中央区第３層ナイフ形石器ブロック別形態組成表 …… …631
第76表　中央区第３層ナイフ形石器ブロック別残存部位一覧表 …… …632
第77表　中央区第３層ブロック類型別石器組成表 …… …640
第78表　中央区第３層の個体別資料一覧表 …… …647
第79表　中央区第３層個体別資料構成表 …… …650
第80表　中央区第３層ブロック類型別個体別資料構成表 …… …658
第81表　中央区第３層ブロック群別個体別資料構成表 …… …663
第82表　中央区第３層ブロック・ブロック群依存度(1), (2) …… …664
第83表　中央区第３層個体別資料搬入搬出関係表〔折込み〕 …… 673・674
第84表　中央区第３層ナイフ形石器文化ユニット別属性表 …… …679
第85表　広野北遺跡縄文時代土坑一覧表 …… …683
第86表　焼石のＴＬ年代 …… …709
第87表　集落構成要素の変遷 …… …721

挿 図 目 次

第1図　広野北遺跡(1)と周辺の先土器時代の遺跡 …… 3
第2図　地形区分概念図 …… 4
第3図　広野北遺跡周辺の地形 …… 5
第4図　調査区配置関係図 …… 8
第5図　第3層調査範囲図〔折込み〕…… 11・12
第6図　土層柱状図 …… 15
第7図　第1セクション東半部，西端部 …… 16
第8図　2E17区セクション図 …… 19
第9図　分析試料採取地点 …… 20
第10図　分析試料採取層位 …… 21
第11図　火山ガラス%の垂直変化 …… 22
第12図　火山ガラス(扁平型)の大きさ …… 23
第13図　磐田原土層の対比 …… 25
第14図　砂画分の含量%の垂直変化 …… 26
第15図　チャート製石器接合図〔折込み〕…… 35・36
第16図　細石刃実測図(1) …… 41
第17図　細石刃実測図(2) …… 42
第18図　細石刃実測図(3) …… 43
第19図　細石刃長計測値出現頻度図 …… 47
第20図　細石刃幅計測値出現頻度図 …… 47
第21図　削器・使用痕ある剥片実測図 …… 49
第22図　使用痕ある剥片・加工痕ある剥片・
ナイフ形石器？実測図 …… 50
第23図　敲石実測図 …… 52
第24図　槌石実測図 …… 53
第25図　磨製石斧実測図 …… 53
第26図　細石核調整剥片実測図 …… 54
第27図　細石核・ブランク実測図 …… 56
第28図　細石核ブランク・素材実測図 …… 57
第29図　細石核素材実測図 …… 58
第30図　周辺部出土細石刃・細石核分布図 …… 59
第31図　周辺部出土細石刃・細石核実測図 …… 60

第32図　接合資料実測図（個体別資料M１）〔折込み〕…… 63・64
第33図　接合資料実測図（個体別資料M３）…… 66
第34図　接合資料実測図（個体別資料M７）〔折込み〕…… 69・70
第35図　接合資料実測図（個体別資料M８）〔折込み〕…… 71・72
第36図　接合資料実測図（個体別資料M９）〔折込み〕…… 73・74
第37図　石器分布等量線図 …… 78
第38図　敲石・槌石・台石・石斧・受熱剥片分布図 …… 80
第39図　個体別資料M１分布図…… 83
第40図　個体別資料M２実測図…… 83
第41図　個体別資料M３分布図…… 84
第42図　個体別資料M７分布図…… 85
第43図　個体別資料M８分布図…… 86
第44図　個体別資料M11・12実測図 …… 87
第45図　個体別資料分布範囲図…… 88
第46図　個体別資料分布中心域図 …… 90
第47図　石器・第６配石垂直分布図 …… 93
第48図　尖頭器群に伴う礫群（Ｒ２・３・４），配石（Ｈ10)…… …100
第49図　尖頭器群に伴う礫群（R41），
配石(Ｈ４・５・６），散布礫 …… …102
第50図　尖頭器群に伴う礫群（Ｒ５），配石(Ｈ11)…… …104
第51図　尖頭器文化の礫群の構成礫重量分布グラフ …… …104
第52図　尖頭器文化第５礫群の重量別礫分布図 …… …104
第53図　尖頭器文化の全礫群構成礫形分布グラフ…… …105
第54図　尖頭器文化の礫群の石質組成グラフ …… …105
第55図　尖頭器文化の礫群構成礫完形度グラフ …… …105
第56図　尖頭器群に伴う配石（Ｈ７・９・16・44） …… …109
第57図　配石区域，礫群，およびその周辺の重量別礫分布図 …… …110
第58図　配石区域，礫群，およびその周辺の礫の
重量別構成状況グラフ …… …111
第59図　配石区域，礫群，およびその周辺の接合個体分布図 …… …112
第60図　尖頭器文化に属する尖頭器（Ａ類） …… …118
第61図　尖頭器文化に属する尖頭器（Ａ類，Ｂ類） …… …119
第62図　尖頭器文化に属する尖頭器（Ｂ類，Ｃ類，Ｄ類，Ｅ類)…… …120
第63図　尖頭器文化に属する尖頭器（Ｅ類，未成品） …… …122
第64図　尖頭器文化に属する尖頭器（未成品，形態不明）…… …123

第65図　尖頭器形態別長幅関係グラフ …… 124
第66図　尖頭器形態別長幅比と厚さの関係グラフ …… 124
第67図　尖頭器形態別先端角分布グラフ …… 125
第68図　尖頭器形態別周縁調整角度分布グラフ …… 125
第69図　尖頭器文化に属するナイフ形石器，スクレイパー …… 127
第70図　尖頭器文化に属する彫器 …… 129
第71図　尖頭器文化に属する敲石類（Ⅰa類） …… 130
第72図　尖頭器文化に属する敲石類（Ⅰa類，Ⅲ類） …… 131
第73図　尖頭器文化に属する台石 …… 132
第74図　尖頭器文化に属するＲＦ …… 133
第75図　尖頭器文化に属するＲＦ …… 134
第76図　尖頭器文化に属するＵＦ …… 135
第77図　尖頭器文化に属するＵＦ …… 136
第78図　尖頭器文化に属するＵＦ …… 137
第79図　尖頭器文化に属するＵＦ …… 138
第80図　尖頭器文化に属する石核 …… 140
第81図　個体別資料Ｐ－１Ｆ① …… 146
第82図　個体別資料Ｐ－１Ｆ③〔折込み〕 …… 147・148
第83図　個体別資料Ｐ－２Ｆ④ …… 150
第84図　個体別資料Ｐ－１Ｇ①〔折込み〕 …… 151・152
第85図　個体別資料Ｐ－２Ｆ⑥ …… 155
第86図　個体別資料Ｐ－０Ｈ① …… 156
第87図　個体別資料Ｐ－０Ｈ⑥ …… 157
第88図　個体別資料Ｐ－０Ｈ⑧ …… 157
第89図　個体別資料Ｐ－１Ｉ① …… 158
第90図　個体別資料Ｐ－１Ｉ⑩ …… 159
第91図　個体別資料Ｐ－２Ｆ④分布図 …… 182
第92図　個体別資料Ｐ－２Ｆ⑥分布図 …… 183
第93図　個体別資料Ｐ－０Ｈ⑧分布図 …… 186
第94図　ブロック相互強度図 …… 191
第95図　１Ｆ・１Ｇ区水洗選別資料分布等量線図 …… 196
第96図　尖頭器南群集落概念図 …… 203
第97図　中央区第２b層ナイフ形石器群(Ｋ２)に伴う礫群
（Ｒ１・３・６・７・８），配石（Ｈ２） …… 206

第 98図　K 2に伴う礫群（R 9 ・11～14），
配石（H14・21・22）……207
第 99図　K 2に伴う礫群（R10），配石（H15）……209
第100図　K 2に伴う礫群（R16・18・19），配石（H25・28）……210
第101図　K 2に伴う礫群（R15・20・21・33），
配石（H23・33～36）……211
第102図　K 2に伴う礫群（R17），配石（H26）……212
第103図　K 2に伴う礫群（R22・23・25），配石（H37・41）……214
第104図　K 2に伴う礫群（R28・37），配石（H46・55）……216
第105図　K 2に伴う礫群（R26・32・39）……218
第106図　K 2に伴う礫群（R27・31），配石（H47・48・49）……219
第107図　K 2に伴う礫群（R29）……220
第108図　K 2に伴う礫群（R24・36），配石（H39・40・54）……221
第109図　K 2に伴う礫群（R30・34），配石（H52）……222
第110図　K 2に伴う礫群（R35），配石（H53）……223
第111図　K 2に伴う礫群（R38・40・42）……224
第112図　第2b層ナイフ形石器文化の礫群の
構成礫重量分布グラフ（1）……226
第113図　第2b層ナイフ形石器文化の礫群の
構成礫重量分布グラフ（2）……227
第114図　第2b層ナイフ形石器文化の礫群の
重量別礫分布図（1）……229
第115図　第2b層ナイフ形石器文化の礫群の
重量別礫分布図（2）……230
第116図　第2b層ナイフ形石器文化の
全礫群構成礫形分布グラフ……233
第117図　第2b層ナイフ形石器文化の礫群の石質組成グラフ……234
第118図　第2b層ナイフ形石器文化の礫群構成礫完形度グラフ……236
第119図　第2b層ナイフ形石器文化の礫群内接合角度グラフ……240
第120図　第2b層ナイフ形石器文化の第37礫群内接合関係図……241
第121図　尖頭器文化と第2b層ナイフ形石器文化の
礫群の平均重量一構成礫数関係グラフ……246
第122図　蛍光X線分析による鉄(Fe)・珪素(Si)・
アルミニウム（Al)のイオン濃度……259
第123図　尖頭器文化と第2b層ナイフ形石器文化の
配石の平面形一よこ形関係グラフと立体形区分……264
第124図　第 1 号(上)，2 号(下)土坑
（凡例は第140図まで同じ)……271

第125図　第　4　号　土　坑……273
第126図　第　5　号　土　坑……275
第127図　第　6　号　土　坑……276
第128図　第　7　号　土　坑……279
第129図　第　8　号　土　坑……280
第130図　第　9　号　土　坑……281
第131図　第　10　号　土　坑……282
第132図　第　11　号　土　坑……283
第133図　第　12　号　土　坑……284
第134図　第　14　号　土　坑……286
第135図　第　15　号　土　坑……287
第136図　第　16　号　土　坑……288
第137図　第　17　号　土　坑……289
第138図　第　18　号　土　坑……290
第139図　第　20　号　土　坑〔折込み〕……291・292
第140図　第　21　号　土　坑……294
第141図　第2b層ナイフ形石器文化（K2）に属する尖頭器（A類，B類，C類，D類，E類）……301
第142図　K2に属する尖頭器（未成品，形態不明），ナイフ形石器（A1類）……303
第143図　K2に属するナイフ形石器（A1類，A2類）……304
第144図　K2に属するナイフ形石器（A2類，A3類，B類）……305
第145図　K2に属するナイフ形石器（C類）……306
第146図　K2に属するナイフ形石器（D類，E類，ブランティングチップ，形態不明）……307
第147図　K2に属するナイフ形石器（形態不明）……308
第148図　ナイフ形石器形態別長幅関係グラフ……311
第149図　ナイフ形石器形態別長幅比と厚さの関係グラフ……312
第150図　ナイフ形石器形態別先端角分布グラフ……312
第151図　ナイフ形石器形態別刃部角分布グラフ……312
第152図　ナイフ形石器形態別重量分布グラフ……313
第153図　第2b層ナイフ形石器文化（K2）に属するスクレイパー（A類）……330
第154図　K2に属するスクレイパー（Ba類）……331
第155図　K2に属するスクレイパー（Ba類，Bb類）とその他……332

第156図　K2に属する彫器 …… 333
第157図　K2に属する敲石類（Ia類）…… 335
第158図　K2に属する敲石類（Ia類）…… 336
第159図　K2に属する敲石類（Ia類）…… 337
第160図　K2に属する敲石類（Ia類）…… 338
第161図　K2に属する敲石類（Ia類）…… 339
第162図　K2に属する敲石類（Ia類）…… 340
第163図　K2に属する敲石類（Ia類，Ⅲ類） …… 341
第164図　K2に属する敲石類（Ⅳ類，Ⅵ類）…… 343
第165図　K2に属する敲石類（Ⅶa類）…… 344
第166図　K2に属する敲石類（Ⅶb類）…… 345
第167図　K2に属する台石 …… 346
第168図　K2に属する打器 …… 347
第169図　K2に属するRF（A類，B類，C類） …… 348
第170図　K2に属するRF（C類，D類） …… 350
第171図　K2に属するRF（D類，E類） …… 351
第172図　K2に属するRF（E類，F類，G類） …… 352
第173図　K2に属するRF（G類，その他）…… 353
第174図　K2に属するRF …… 354
第175図　K2に属するRF …… 355
第176図　K2に属するUF …… 357
第177図　K2に属するUF …… 358
第178図　K2に属するUF …… 359
第179図　K2に属するUF …… 360
第180図　K2に属するUF …… 361
第181図　K2に属するUF …… 362
第182図　K2に属するUF …… 363
第183図　K2に属するUF …… 364
第184図　K2に属するUF …… 365
第185図　K2に属するUF …… 366
第186図　K2に属するUF …… 367
第187図　K2に属するUF …… 368
第188図　K2に属する剥片長幅関係グラフ …… 369
第189図　第Iブロック群所属の剥片長幅関係グラフ …… 370
第190図　K2に属する石核（A_1類）…… 371

第191図　K2に属する石核（A1類）……372
第192図　K2に属する石核（A1類）……373
第193図　K2に属する石核（A1類，A2類）……374
第194図　K2に属する石核（A2類）……376
第195図　K2に属する石核（A2類）……377
第196図　K2に属する石核（A2類）……378
第197図　K2に属する石核（A2類）……379
第198図　K2に属する石核（A3類）……380
第199図　K2に属する石核（A4類）……381
第200図　K2に属する石核（A4類，B類）……382
第201図　K2に属する石核（B類）……383
第202図　個体別資料K2－3F① ……385
第203図　個体別資料K2－3F⑤ ……386
第204図　個体別資料K2－3F⑦ ……387
第205図　個体別資料K2－3F⑨ ……388
第206図　個体別資料K2－2G⑪ ……389
第207図　個体別資料K2－2G⑭ ……391
第208図　個体別資料K2－2H② ……393
第209図　個体別資料K2－2H⑥ ……394
第210図　個体別資料K2－3H④ ……396
第211図　個体別資料K2－3H⑤ ……397
第212図　個体別資料K2－3H⑦ ……398
第213図　個体別資料K2－3H⑮〔折込み〕……399・400
第214図　個体別資料K2－3H㉒ ……403
第215図　ナイフ形石器の破損形態分類 ……417
第216図　領域別剥片組成率 ……425
第217図　ブロック類型別石器組成図 ……433
第218図　個体のモデルと居住地の関係 ……444
第219図　個体別資料K2－3F①分布図……453
第220図　個体別資料K2－3F⑤分布図……454
第221図　個体別資料K2－2G⑤分布図……455
第222図　個体別資料K2－2G⑫分布図……456
第223図　個体別資料K2－2G⑰分布図……457
第224図　個体別資料K2－2H①分布図……458
第225図　個体別資料K2－2H⑩分布図……460

第226図　個体別資料K２－３H⑦分布図……461
第227図　個体別資料K２－３H⑳分布図……463
第228図　個体別資料K２－２Ⅰ③分布図……464
第229図　個体別資料K２－４H④分布図……465
第230図　個体別資料K２－３H㉒分布図……467
第231図　個体別資料K２－３H㉔分布図……468
第232図　個体別資料K２－３H㉚分布図……469
第233図　ブロック間の個体共有関係図……470
第234図　ブロック間相互強度図……473
第235図　礫全点分布等量線図……482
第236図　赤化砂岩分布等量線図……483
第237図　炭化物分布等量線図……488
第238図　石器分布等量線図……489
第239図　第2b層ナイフ形石器群集落概念図〔折込み〕……495・496
第240図　中央区第３層ナイフ形石器群(K3)に伴う礫群(R１・２・８),配石(H１～４)……508
第241図　K３に伴う礫群（R３・５・６・７）……509
第242図　K３に伴う礫群（R４・13・14),配石（H５・25・57)……510
第243図　K３に伴う礫群（R９・10・16),配石（H８～11・31)……511
第244図　K３に伴う礫群（R11・12),配石（H14)……512
第245図　K３に伴う礫群（R18・21),配石（H48)……513
第246図　K３に伴う礫群（R19・25・26),配石（H20・38)……514
第247図　K３に伴う礫群（R22・23・24),配石（H52）……516
第248図　K３に伴う礫群（R15・17),配石（H30),非焼礫群,礫ブロック……517
第249図　第３層ナイフ形石器文化の礫群の構成礫重量分布グラフ（１)……520
第250図　第３層ナイフ形石器文化の礫群の構成礫重量分布グラフ（２)……521
第251図　第３層ナイフ形石器文化の礫群の重量別礫分布図……523
第252図　第３層ナイフ形石器文化の全礫群構成礫形分布グラフ……524
第253図　第３層ナイフ形石器文化の礫群の石質組成グラフ……524
第254図　第３層ナイフ形石器文化の礫群構成礫完形度グラフ……525
第255図　第３層ナイフ形石器文化の礫群内接合角度グラフ……528

第256図　第3層ナイフ形石器文化の
第22・23・24礫群の接合礫分布図 …… 530
第257図　第3層ナイフ形石器文化の礫群の
平均重量一構成礫数関係グラフ …… 533
第258図　中央区第3層ナイフ形石器群(K3)に伴う配石
(H1・8・12・13・18・24・27)…… 545
第259図　K3に伴う配石（H7・12・13・15～19・23）…… 546
第260図　K3に伴う配石
(H21・22・24・26・27・28・32・33・35)…… 547
第261図　K3に伴う配石（H29・34）…… 548
第262図　K3に伴う配石
(H36・37・39～45・47・49・50・51・55)…… 549
第263図　K3に伴う配石（H46）…… 550
第264図　K3に伴う配石（H56）…… 551
第265図　K3に伴う配石（H31・38・42・43・50・51・57）…… 552
第266図　第3層ナイフ形石器文化の配石の
平面形一よこ形関係グラフと立体形区分 …… 553
第267図　第3層ナイフ形石器文化(K3)に属する
ナイフ形石器（A_1類，A_2類，B類)…… 560
第268図　K3に属するナイフ形石器（B類，C類，D類）…… 561
第269図　K3に属するナイフ形石器(形態不明)と
ブランティングチップ …… 562
第270図　ナイフ形石器形態別長幅関係グラフ …… 562
第271図　ナイフ形石器形態別長幅比と厚さの関係グラフ…… 562
第272図　ナイフ形石器形態別先端角分布グラフ…… 563
第273図　ナイフ形石器形態別刃部角分布グラフ…… 563
第274図　K3に属するスクレイパー（A類，B_1類，B_2類)…… 564
第275図　K3に属する彫器 …… 565
第276図　K3に属する彫器 …… 566
第277図　K3に属する敲石類（Ⅰa類）…… 569
第278図　K3に属する敲石類（Ⅰa類）…… 570
第279図　K3に属する敲石類（Ⅰa類，Ⅱ類，Ⅲ類，Ⅳ類)…… 571
第280図　K3に属する敲石類（Ⅳ類，Ⅵ類，Ⅶa類）…… 572
第281図　K3に属する敲石類（Ⅶa類，Ⅶb類)…… 574
第282図　K3に属する台石 …… 575
第283図　K3に属する台石 …… 576
第284図　K3に属する石斧 …… 576

第285図　K3に属するRF（A類，C類，D類）……578
第286図　K3に属するRF（F類，H類，形態不明）……579
第287図　K3に属するRF（形態不明）……580
第288図　K3に属するUF……582
第289図　K3に属するUF……583
第290図　K3に属するUF……584
第291図　K3に属するUF……585
第292図　K3に属するUF……586
第293図　K3に属するUF……587
第294図　K3に属するUF……588
第295図　K3に属するUF……589
第296図　K3に属する剥片長幅関係グラフ……590
第297図　K3に属する石核（A1類，A2類）……591
第298図　K3に属する石核（A2類，A3類，A4類）……592
第299図　K3に属する石核（A4類，B類）……593
第300図　K3に属する石核（B類，石核素材）……594
第301図　個体別資料K3－1C⑦〔折込み〕……601・602
第302図　個体別資料K3－1C⑪〔折込み〕……605・606
第303図　個体別資料K3－1C⑫……607
第304図　個体別資料K3－2D①……608
第305図　個体別資料K3－2D⑤〔折込み〕……609・610
第306図　個体別資料K3－2E③……612
第307図　個体別資料K3－2F①〔折込み〕……613・614
第308図　個体別資料K3－3F③〔折込み〕……617・618
第309図　個体別資料K3－3G①……619
第310図　個体別資料K3－4I①……620
第311図　第3層出土石器分布密度図……623
第312図　各器種の分布の相互関係……637
第313図　ブロック石器組成率……639
第314図　ブロック石器配分率……639
第315図　ブロック群石器組成率……643
第316図　ブロック群石器配分率……643
第317図　個体別資料K3－4F①分布図……652
第318図　個体別資料K3－4I①分布図……653
第319図　個体別資料K3－2F①分布図……654

第 320 図　個体別資料K 3 ― 3 F④分布図 ……………………………………………655
第 321 図　C類個体と製作個体の分布関係図 ……………………………………656
第 322 図　接合資料共有関係模式図 ……………………………………………666
第 323 図　個体別資料共有関係模式図 …………………………………………667
第 324 図　ユニット・ブロック群のブロック等構成状況
〔折込み〕…………671・672
第 325 図　第 3 層ナイフ形石器群集落概念図〔折込み〕………………677・678
第 326 図　縄文・弥生時代の遺構配置図〔折込み〕……………………685・686
第 327 図　2 号住居址 ……………………………………………………………687
第 328 図　縄文土器 ………………………………………………………………688
第 329 図　1 号方形周溝墓 ………………………………………………………692
第 330 図　2 号方形周溝墓 ………………………………………………………693
第 331 図　3 号方形周溝墓 ………………………………………………………694
第 332 図　4 号方形周溝墓 ………………………………………………………695
第 333 図　1 号住居址・5 号方形周溝墓…………………………………………696
第 334 図　6 号方形周溝墓 ………………………………………………………697
第 335 図　弥生式土器………………………………………………………………699
第 336 図　土壙墓と 2 号溝状遺構 ………………………………………………703
第 337 図　古墳時代の土壙墓出土土器 …………………………………………704

図 版 目 次

図版1　上：遺跡遠望
　　下：土層断面（1 H24区）
図版2　上：3 I・4 I区浅谷（第2b層）
　　下：第41礫群，第5・6配石
　　（第2b層）
図版3　1．第5礫群，第11・16配石
　　2．第41礫群
　　3．第4・6配石
　　4．第7配石
　　5．第9配石
　　6．第10配石
　　7．第16配石
　　8．第44配石　（全て第2b層）
図版4　上：中央区近景（第2b層）
　　下：中央区近景（第2b層）
図版5　上：中央区　2G・2H・3H区
　　礫群・配石分布状態（第2b層）
　　下：中央区　3G・4G・3H・
　　4H区礫群・配石分布状態
　　（第2b層）
図版6　上：中央区　礫群・配石分布状態
　　（第2b層）
　　下：4G区　礫群・配石分布状態
　　（第2b層）
図版7　上：第30礫群周辺（第2b層）
　　下：第20・21・22配石（第2b層）
図版8　1．第1礫群，第2配石
　　2．第7礫群
　　3．第8礫群
　　4．第9礫群，第14配石
　　5．第10礫群，第15配石
　　6．第11礫群
　　7．第14礫群
　　8．第15礫群，第23配石
　　（全て第2b層）
図版9　1．第16礫群
　　2．第17礫群，第26配石
　　3．第19礫群，第28配石
　　4．第22礫群
　　5．第25礫群，第41配石
　　6．第27礫群
　　7．第28礫群，第46配石
　　8．第31礫群，第49配石と周辺の
　　遺物　（全て第2b層）
図版10　1．第32礫群
　　2．第34礫群，第52配石
　　3．第35礫群
　　4．第36礫群，第54配石と周辺の
　　遺物
　　5．第37礫群，第55配石
　　6．第38礫群
　　7．第39礫群
　　8．第40礫群　（全て第2b層）
図版11　1．第1配石
　　2．第8配石
　　3．第13配石
　　4．第24配石
　　5．第27配石
　　6．第29配石
　　7．第31配石
　　8．第34・35・40配石
　　（全て第2b層）
図版12　1．第38配石
　　2．第39配石
　　3．第42配石
　　4．第43配石
　　5．第1号土坑検出状態
　　6．第1号土坑
　　7．第2号土坑
　　8．第2号土坑底面・壁の掘り方
　　（全て第2b層）
図版13　1．第4号土坑検出状態
　　2．第4号土坑
　　3．第5号土坑
　　4．第6号土坑
　　5．第7号土坑

6. 第8号土坑
7. 第9号土坑
8. 第10号土坑　（全て第2b層）

図版14 1. P4aブロック発掘風景
2. 中央区東半発掘風景
3. 3G16区敲石出土状態
4. 3G16区敲石出土状態
5. 3G16区敲石出土状態
6. 土坑発掘風景
7. 採取土砂の水洗
8. 第2層から第3層への掘り下げ,中央区東半（全て第2b層）

図版15 上：第1・3・4礫群と周辺の配石　（第3層）
下：第10・11・12・26礫群と周辺の配石　（第3層）

図版16 上：第18礫群と第46・48配石（第3層）
下：第17・18礫群，第48配石（第3層）

図版17 1. 第1礫群，第1・2・3配石
2. 第2礫群，第4配石
3. 第3礫群
4. 第4礫群
5. 第5礫群
6. 第7礫群
7. 第8礫群
8. 第9礫群，第8・9配石（全て第3層）

図版18 1. 第10礫群，第57配石
2. 第11礫群，第14配石
3. 第12礫群
4. 第13礫群，第25配石
5. 第14礫群
6. 第16礫群，第31配石
7. 第19礫群
8. 第22・23・24礫群，第50・51・52配石　（全て第3層）

図版19 1. 第25礫群，第20・55・56配石
2. 第26礫群
3. 第6配石
4. 第10配石
5. 第26配石
6. 第27配石
7. 第28配石
8. 第29配石　（全て第3層）

図版20 1. 第30配石
2. 第33配石
3. 第34配石
4. 第35配石
5. 第41配石
6. 第42配石
7. 3H21区非焼け礫群
8. 2F19区礫ブロック（全て第3層）

図版21 上：中央区調査終了状態：北半（第3層）
下：中央区調査終了状態：南半（第3層）

図版22 上：北区北半第2b層調査前，1号方形周溝墓完掘（北区第2b層）
下：北区北半第2b層礫群・配石出土状態　（北区第2b層）

図版23 上：1B区東半礫群出土状態（北区第2b層）
下：1C区北東部礫群出土状態（北区第2b層）

図版24 1. 0A19区礫群
2. 0A24区礫群
3. 1A16区礫群
4. 1A22区礫群
5. 0B5区礫群
6. 0B14・15区礫群
7. 0B19区礫群
8. 1B1区礫群（全て北区第2b層）

図版25 1. 1B4・9区礫群
2. 1B6区礫群
3. 1B区中央礫群群
4. 1B12・13区礫群
5. 1B13区礫群
6. 1B14区礫群
7. 1B16区礫群

8. 1 B21区礫群
（全て北区第2b層）
図版26 1. 0 C15区礫群
2. 1 C 2 区礫群
3. 1 C 3 区礫群
4. 1 C 4 区礫群
5. 1 C 5 区礫群
6. 1 C 8 区北礫群
7. 1 C 8 ・13区礫群
8. 1 C 8 区礫群
（全て北区第2b層）
図版27 1. 1 C17区礫群
2. 1 C23区礫群
3. 2 C区礫群群
4. 2 E 4 ・ 5 区礫群
5. 0 A25区礫
6. 2 B21区礫
7. 0 C15区礫
8. 1 C 6 区礫
（全て北区第2b層）
図版28 1. 1 C19区礫
2. 2 C 1 区礫
3. 2 C 6 区礫
4. 2 C17区礫
5. 2 D 5 ・10区礫
6. 2 D 8 区礫
7. 2 D16区礫
8. 2 E10区礫
（全て北区第2b層）
図版29 1. 第12号土坑遺物出土状態
2. 第12号土坑半割
3. 第12号土坑土層断面
4. 第12号土坑完掘
5. 第14号土坑
6. 第15号土坑
7. 第16号土坑検出状態
8. 第16号土坑完掘
（全て北区第2b層）
図版30 1. 第17号土坑検出状態
2. 第17号土坑完掘
3. 第18号土坑遺物出土状態
4. 第18号土坑完掘
5. 第20号土坑遺物出土状態
6. 第20号土坑完掘
7. 第20号土坑底面遺物出土状態
8. 第21号土坑
（全て北区第2b層）
図版31 上：北区北半第 3 層礫群・
配石出土状態 （北区第 3 層）
下：0 B・ 1 B区礫群・
配石出土状態（北区第 3 層）
図版32 上：1 C区礫群・配石出土状態
（北区第 3 層）
1. 0 B10区礫群
2. 0 B14区礫群
3. 1 B 2 区礫群
4. 1 B 3 区礫群
（全て北区第 3 層）
図版33 1. 1 B15区礫群
2. 0 C20・25区礫群
3. 1 C 7 区礫群
4. 1 C 8 区礫群
5. 1 C22区礫群
6. 2 D20区礫群
7. 2 D24区礫群
8. 2 E 1 区礫群
（全て北区第 3 層）
図版34 1. 2 E 8 ・ 9 区礫群
2. 2 E 5 区礫群
3. 0 B15区礫
4. 1 B 3 区礫
5. 1 B区東縁部礫
6. 1 B区南縁部礫
7. 2 B21区礫
8. 2 B21区南西部礫
（全て北区第 3 層）
図版35 1. 1 C区礫
2. 1 C 2 区礫
3. 1 C 2 区礫
4. 1 C 5 区礫
5. 1 D14区礫
6. 2 C11区礫
7. 2 C区礫
8. 2 C 7 区礫
（全て北区第 3 層）

図版36　1．2C13区礫
2．2D21・22・23区礫
3．2D21・22区礫
4．2D23区礫
5．2D22・23区礫
6．2E14区礫
（全て北区第3層）
図版37　1．1K2区礫群
2．2I24区礫
3．1J3区礫
4．2J7区礫
5．2J10区礫
6．1K9区礫
7．1K10区礫
8．第11号土坑
（全て南区第2b層）
図版38　1．2I区南縁部礫群・配石出土状態
2．2I17・22区礫群
3．2I19区礫群
4．1I23区礫
5．1I15区礫
6．2I4区礫
7．2I7区礫
8．2I8区礫
（全て南区第3層）
図版39　1．2I18区礫
2．2I20・25区礫
3．2J4・5区礫
4．2K1区礫
5．2K2区礫
6．2K7区礫
7．南区完掘状態
（全て南区第3層）
図版40　上左：1E3区土壌サンプル採取状態
上右：第16号土坑土壌サンプル採取状態
下：礫群型取り作業
（北区第3層）
図版41　上：1号住居址柱穴
下：2号住居址
図版42　1．2号方形周溝墓
2．3号方形周溝墓
3．4号方形周溝墓
4．4号方形周溝墓東溝壺出土状態
図版43　1．5号方形周溝墓
2．6号方形周溝墓
3．土壙墓
4．土壙墓内遺物出土状態
図版44　第3層礫群伴出炭化物顕微鏡写真

別　添　図　目　次

別添第1図　土　層　断　面　図
別添第2図　先土器時代の遺物分布に影響を及ぼす撹乱溝分布図
別添第3図　第2b層出土遺物全点分布図
別添第4図　第3層出土遺物全点分布図
別添第5図　1F・1G区細石刃・尖頭器群領域関係図
別添第6図　細石刃・尖頭器重複分布域石器，礫全点分布図
別添第7図　細石刃文化に属する遺物集中部平面分布図・垂直分布図

別添第８図　尖頭器文化に属する礫全点分布図
別添第９図　尖頭器文化に属する礫接合関係図
別添第10図　尖頭器文化に属する石器全点分布図
別添第11図　尖頭器文化に属する二次加工のある石器全点分布図
別添第12図　尖頭器文化に属するＵＦ分布図
別添第13図　尖頭器文化に属する個体別資料分布範囲図
別添第14図　中央区第2b層ナイフ形石器文化に属する礫全点分布図
別添第15図　中央区第2b層ナイフ形石器文化に属する礫接合関係図
別添第16図　中央区第2b層ナイフ形石器文化に属する石器全点分布図
別添第17図　中央区第2b層ナイフ形石器文化に属する尖頭器・
　　スクレイパー・彫器・ＲＦ・敲石類・打器・台石分布図
別添第18図　中央区第2b層ナイフ形石器文化に属するナイフ形石器破損分類別分布図
別添第19図　中央区第2b層ナイフ形石器文化に属するナイフ形石器形態別分布図
別添第20図　中央区第2b層ナイフ形石器文化に属するＵＦ分布図
別添第21図　中央区第2b層ナイフ形石器文化に属する剥片分布図
別添第22図　中央区第2b層ナイフ形石器文化に属する砕片・石核分布図
別添第23図　中央区第2b層受熱石器分布図
別添第24図　中央区第2b層ナイフ形石器文化に属する個体別資料分布範囲図
別添第25図　中央区第３層礫全点分布図
別添第26図　中央区第３層礫接合関係図
別添第27図　中央区第３層石器全点分布図
別添第28図　中央区第３層ナイフ形石器形態別分布図
別添第29図　中央区第３層ナイフ形石器破損分類別分布図
別添第30図　中央区第３層彫器・ＲＦ・敲石類・石斧・台石分布図
別添第31図　中央区第３層ＵＦ分布図
別添第32図　中央区第３層剥片・石核分布図
別添第33図　中央区第３層砕片分布図
別添第34図　中央区第３層個体別資料分布範囲図

はじめに

広野北遺跡の位置する磐田原台地は，私たちにとって印象深い所である。私たちが最初にこの地を訪れたのは，昭和52年の事であった。広野北遺跡のある豊田町の東隣，磐田市から寺谷遺跡(鈴木忠他1980)の発掘調査を依頼された時である。寺谷遺跡は調査範囲の狭さに比して大量の遺物の出土を見た。調査に当っては，地元の方々に多大な御助力をいただき台地上の他の遺跡の研究も含めて大きな成果を上げることができた。特に長い間暖めて来た集落復原への試みのいくつかを実践できたことは，その後の指針を限定する上で大いに有効であった。

このような訳で，常日頃からこの地域の動向には注意を傾けてはいたが，5年間に渡って足を向けることにはならなかった。その間に，太平洋に洗われる磐田とは正反対の，日本海は富山県で調査を行った。寺谷遺跡の延長として，ここでも集落構成，景観の復原が主たるテーマとなっていた。それらの研究結果から，両者は環境的にも大きな差があったであろうように，集落の成り立ちにも著しい差があるらしいという見通しを得るに至った(鈴木忠他1982)。しかし，富山・磐田いずれの場合にも，みずから調査し内容を熟知する遺跡は一例に過ぎず，これまでの成果がどれくらい一般化し得るものであるかについては，今後に負う所が大であった。

そうした折に持ち込まれたのが，今回の広野北遺跡の発掘調査の話であった。寺谷遺跡と同じ台地上の同一遺跡群内に含まれるということで，この調査はかつての成果を再検討し新たな課題へと結びつける，恰好の機会と考えられた。

しかしながら実際に発掘してみると，当初の予想と異なり遺物・遺構の量は膨大なものになり，調査そのものも必ずしも満足のゆくものとはならなかった。さらに整理に至っても私たちの弱小チームではとても限られた時間内に完全な報告を作成することは不可能となった。次善の策としたのが，本報告の中心となる中央区約6,000㎡に限って集落構成に至るまでの可能な限りの分析を行うというものである。中央区が地形的に最もバリエーションに富むという事と先土器時代の全時期を含んでいるという2点が主たる選択の理由である。中央区の分析結果は，基本的

には北区・南区にも共通する可能性が高いと考えている。北区・南区に関しては，定型的な石器類を呈示するに留めざるを得なかった。

質・量ともに充実した資料であるだけに，逆に今だに未消化の部分も多々あるように思う。ここに一応の成果を公表するとともに，及ばざる所については，今後機会を改めて稿を起こしたいと考えている。

（山下）

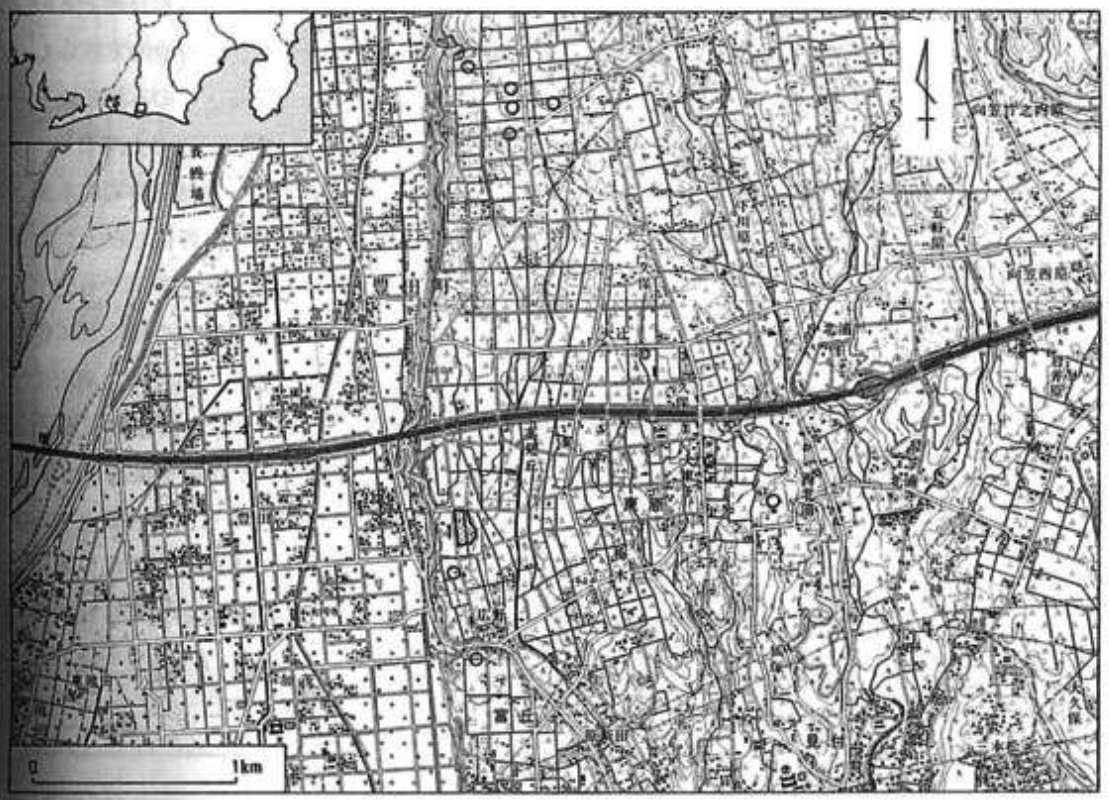
第Ⅰ章　遺跡の位置と環境

第1節　地理的環境

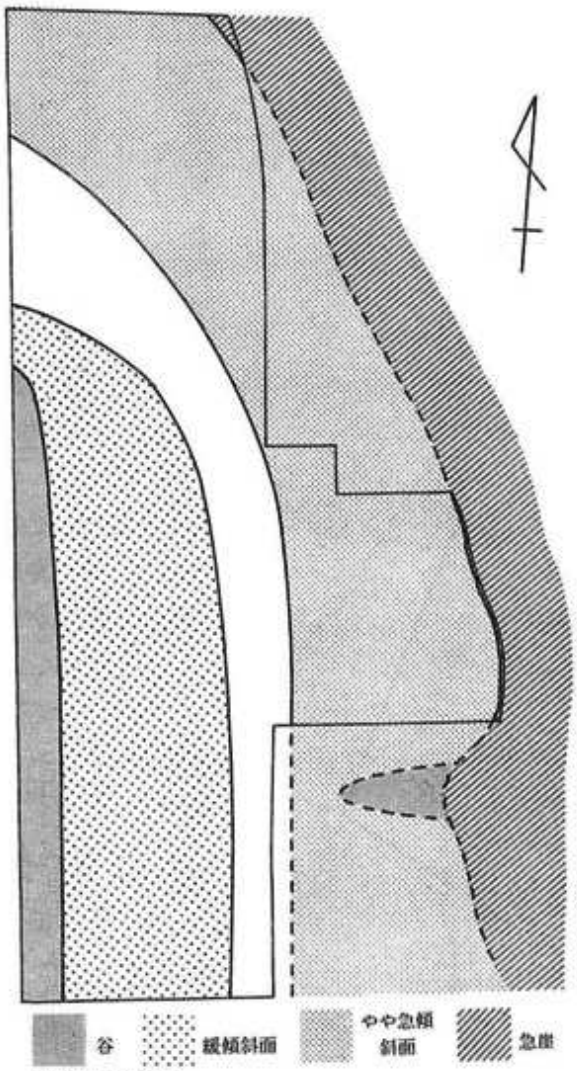
広野北遺跡は，静岡県磐田郡豊田町大字高見丘にある(第1図)。

脊稜山脈に源を発し中央構造線を横切り峡谷を刻んで来た天竜川は，山間を抜けるとともに運んで来た大量の土砂を堆積していった。10万年以上にわたるこうした営みと，地殻変動・環境の変化が相互に作用し，川の東岸には磐田原台地，西岸には三方原台地と呼ばれる典型的な扇状地性段丘地形を作り出した。磐田原台地が，本遺跡の立地する河岸段丘である。

磐田原台地は，南北約12Km，東西約4Kmの，南にやや開いた撥形の広がりを持つ。北端の海抜高度は約120m，南端は約3mで国鉄磐田駅の南方約500mで沖積面下に没しており，南に向って，約1.1%の勾配を持っている(加藤1979)。台地の周縁を見ると，東縁は開析が進行し深い谷が樹枝状に入り込んでいる。南縁も開析が進行しているが，東・西縁のように，沖積面との比高がないため谷は浅い。西縁のみは，東・南縁と異なり全く開析されておらず，急



第1図　広野北遺跡(1)と周辺の先土器時代の遺跡（○印）



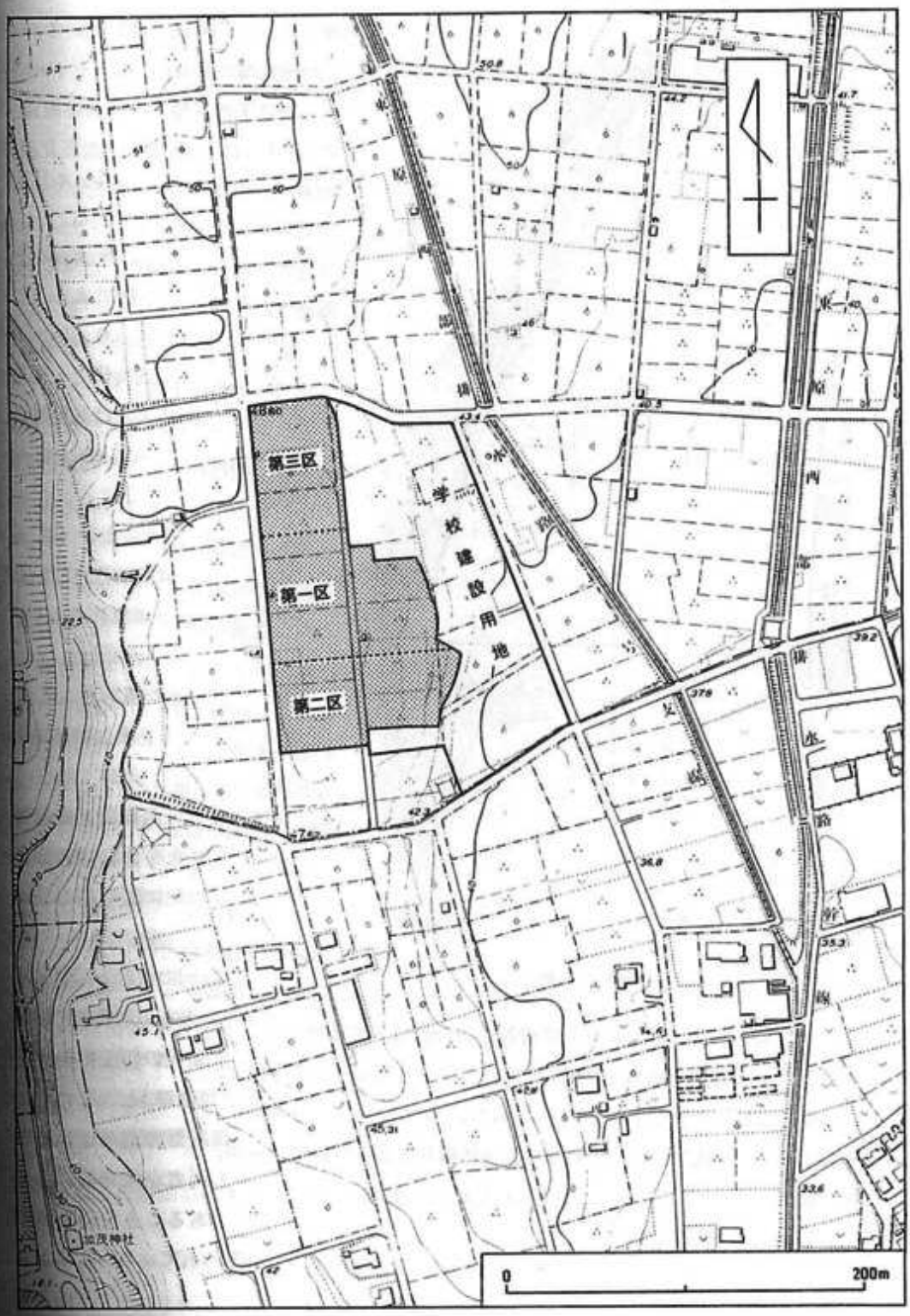
第2図　地形区分概念図

崖をもって沖積面と接している。比高は台地北端で約100m，およそ4km南に下った銚子塚古墳・寺谷遺跡周辺で約70m，さらに4km程南の広野北遺跡で約30mと非常に高い。段丘崖の急さと比高の著しさのために，あたかも磐田原台地上が一つの独立した単位として隔絶されているかのようである。

台地上は，一見平坦そうであるが，小縮尺の地形図上にも現れてこないような比高1～3mの浅谷が樹枝状に発達する。開析がそれほど顕著でないためか，台地上は大きくうねるようなゆるやかな起伏を持っている。このような浅谷が合流して，台地中央を南北に貫く今之浦川になる。今之浦川の本流と数本の大きな支流のみが台地上との比高が10m以上あり，台地内で谷らしい谷を形成している。この本流によって台地は大きく東西に二分されており，両者には地形景観・堆積条件等にも差が認められている(市野他1980)。

広野北遺跡は，台地西半部でも先土器時代の遺跡分布が少ない南半部に位置する。概観すると，東に今之浦川に合する幅300m，比高10m余りの開析谷を望む台地上に立地する。これをさらに詳細に見ると(第2・3・4図)台地上は平坦ではなく，大グリッドF列以南では2・3列境を稜線とし，西に緩く東にやや急に下っている。西には，大グリッドの0列にそって，0E区を谷頭とする比高1～2mの浅谷が入っている。すでに撹乱によって詳細は不明だが，I列にも東から短い浅谷が入っていたようである。後述するように遺物の分布はこのような微地形と緊密な相関を示している。

(山下)



第3図　広野北遺跡周辺の地形

第2節　歴 史 的 環 境

磐田原台地上では，先土器時代から古墳時代まで実に多くの遺跡が発見されている。わけても先土器時代と古墳時代の遺跡の密集度は顕著で，全国的にもその存在が知られている。

先土器時代の遺跡は，寺谷遺跡で報告した56ヶ所(市野他1980)に加えて，その後少なくとも6ヶ所以上が確認されている(中嶋他1981，山村他1982，伊藤他1984，他は私信による)。これらの80%以上が台地西縁部の北端から南へ6km，幅1kmの範囲で発見されており，極めて高い密集度を示している。ここから発見された遺物は，全て2万年以降の先土器時代でも新しい段階に属すると考えられる。この地域の層序・編年等が未確立であるため確実とは言えないが，2万年前後の最も古い可能性のある一群は，いずれも遺跡密集部外にある京見塚(山村他1982)と今回報告する広野北である。

続く縄文時代の遺跡は，1979年の段階で42ヶ所が知られている(鈴木久1979)。このうち所属時期がわかっているのはわずかに18遺跡で，9遺跡が中期に当っている。遺跡の分布は先土器時代とほぼ重なるが，後期に入ると台地南縁部で貝塚を伴う例が発見されるようになる(平野1974)。

弥生時代の遺跡は30ヶ所知られている(鈴木久1980)。台地北半部には分布が見られなくなり，南半部の台地縁にほとんどが占地する。中期初頭からあるが，後期になると増加の傾向を示す。

古墳時代の遺跡は，古墳を1つと数えると500ヶ所を上回る。台地東縁部・西縁部・南縁部それぞれに古墳の密集地があることが指摘されている(中嶋他1980)。広野北を含む西縁部は200基以上の古墳から成り立っており，4世紀後半から築造が始まり，5世紀に最盛期を迎えさらに7世紀頃まで続いている。

広野北遺跡は，ここに記した全ての時期の遺物を含んでいる。まさに今回の発掘と同じ地点で遺物が採集され遺跡の存在が報じられたのは，おそらく鈴木久雄氏によるものが嚆矢であろう(鈴木久1978)。当地で先土器時代の遺物が採集されたが，そこから150m程の距離に先土器時代～古墳時代の複合遺跡として知られる広野遺跡があるため「広野2号遺跡」とされたものである。しかし，すでに概報で述べたように(山下1983)，広野遺跡が細石器の遺跡として著名であるのに対し，「広野2号遺跡」はナイフ形石器を主体とし，しかも両者が地形的にも浅谷によって分けられると考えたため，「広野北遺跡」とし，異なる遺跡であることをより鮮明に示そうとした。この隣接する広野遺跡は昭和5年にはすでに存在が知られており，古くより著名な遺跡である(大橋他1981)。

(山下)

第Ⅱ章　発掘調査の経過

第１節　発掘調査に至る経過

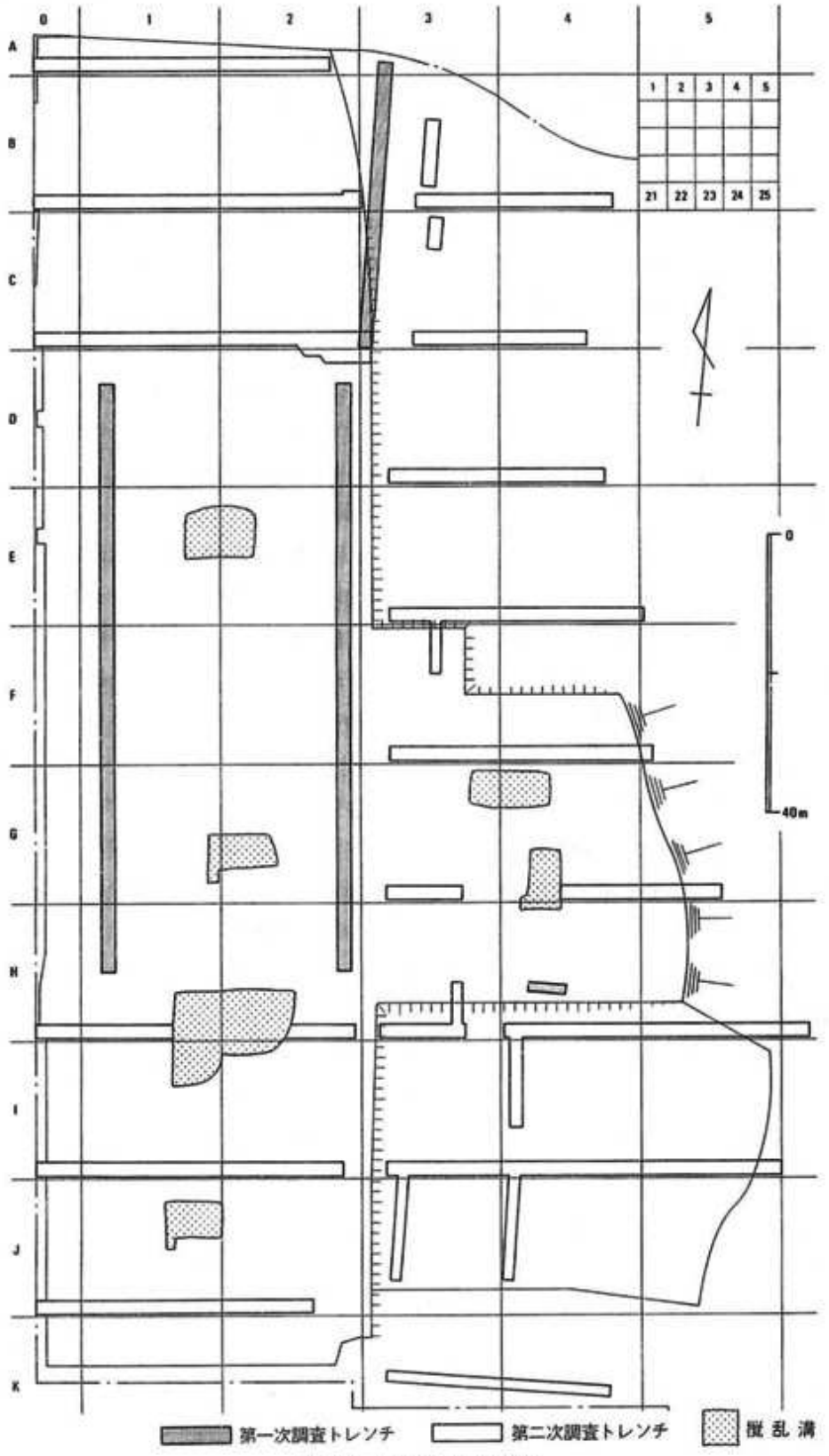
発掘調査中に50万都市になった浜松市に隣接する豊田町は，数年来の人口増加率が全国一である。これに伴って，教育・文化行政の充実が急務となり，その一環としての学校新設も急がれていた。これを受けて昭和56年には磐田原台地上の豊田町高見丘に小学校建設の決定が下された。

台地上は古くから耕地として利用されて来たが，特に近年は農作業の機械化によって深耕が行われるようになった。遺跡周辺も圃場整備事業による大規模な耕地の改変が行われ，埋蔵文化財がもし存在したとしても良好な状態では残り得ないと考えられていた。しかし昭和53年には，かつて圃場整備事業に際して採集された資料をもとに，すでに先土器時代の遺跡として発表されており(鈴木久1978)，少なくともその遺存状態を確認しておく必要があった。

第一次発掘調査は昭和56年９月28・29日の２日間実施された(第４図)。これによって，少なくとも未撹乱の遺物包含層が遺存することが確認された。学校建設用地は２万㎡を上回るため，次には遺跡の広がりと所属時期に関するさらに詳細な情報が必要となった。このため第二次発掘調査が昭和57年２月２日～26日まで，25日間に亘って実施された。その結果，当地が古墳・弥生・縄文・先土器時代の複合遺跡であり，しかもその広がりが台地上のほぼ全面を覆うことが判明した。学校建設・開校の予定時期と遺跡の規模を勘案する時，発掘調査を緊急に行う必要が生じ，豊田町は急拠静岡県との協議に入った。県と調査方法の検討を行う中で，遺跡の中心が先土器時代に当ることから，磐田原台地での調査にすでに前例を持つ財團法人古代學協會・平安博物館に協力を依頼することになった。古代學協會では，かつての調査及びその後の経緯を検討し，この依頼を受諾するとともに考古学第一研究室をその任に充てることを決定した。その結果，静岡県文化課を調査主体とし，先土器については古代學協會が協力・助言し，調査後の整理まで一貫して実施することになった。調査担当者として静岡県側は堀田良雄・栗野克己・山田元広・飯塚晴夫が，古代學協會からは山下秀樹・鈴木忠司がその任に当った。事務局は豊田町教育委員会が担当し，飯田正が窓口となった。　　(山下)

第２節　発掘調査の方法と経過

本調査に当る第三次発掘調査は，昭和57年５月11日に開始された。調査予定面積は約13,000㎡(第３・４図)，期間は同年12月までの７ケ月間ということになった。また，学校建設工事



第4図　調査区配置関係図

との関係から調査区を大きく三分し，第一区(中央区)から順番に発掘を進めることになった。第一区は調査区中央の約6,000㎡で，校舎の建設が予定されていた。調査期間は８月末日までとなった。第二区(南区)は調査区南側の約4,000㎡で，体育館建設のため10月末日までに，第三区(北区)は北側の約3,000㎡で，幼稚園他の付属施設の建設のため12月末日までに完了しなければならなかった。

発掘区画は，調査範囲が広大であるため，大きな区画を20m四方，小さな区画を４m四方とした。基準線を区画整理で造られた調査区中央を南北に貫く農道の中央線に合わせた。この線は学校建設のための測量用の基準ともなっている。これから東西20m毎に，また南北は任意に20m毎に区画を割り付けた。大区画は，西から東へ順に０から番号を付し，北から南へＡ～Ｋとし，１Ａ区とか２Ｂ区といった呼び方をした。また大区画内を４m四方の小区画に細分し，北西隅から北東隅へ１から５，１の南に６が来るようにし，南東隅が25で終わるように番号を付した(第４図)。小区画はこのため１Ａ15区とか２Ｂ21区という呼称になった。

遺物の取り上げは，縄文時代以降については大区画単位で通し番号を付した。先土器時代については小区画単位とし石器(A)・礫(B)・炭化物(C)・土砂(D)別に出土地点を記録し通し番号を付した。完全に原位置を遊離していると思われる撹乱中出土の資料には「表」を冠して通し番号を付けた。撹乱された状態で出土しても原位置をあまり動いていないことが明瞭な場合には，小区画単位で通常の番号で取り上げるとともに４m四方の小区画を四つに分割し，各２m四方に北西：ａ，北東：ｂ，南西：ｃ，南東：ｄの記号を付け，出土位置をこの小単位ａ・ｂ・ｃ・ｄで記録した。

第一区(Ｅ列中央からＨ列南縁まで)の発掘と重機による全体の表土剥ぎが並行して行われた５月中は，栗野が一人で調査を担当していた。この段階で，調査区北半に縄文・弥生時代の遺跡が広がっていることや，大規模な撹乱の位置の概要が把握された。第一区では中央以東で撹乱が多く，表土剥ぎ後のジョレンによる清掃ですでに先土器時代の遺物の出土が認められた。一方西半部では全体的に層が厚いため，耕作土を削平した後も縄文時代の遺物を含む黒色土の堆積が認められた。

６月に入ると山下・鈴木が調査に加わり，先土器時代の発掘が本格化した。基本的にはジョレンで薄く削り下げながら深さ５cm位を一単位として，全体を均等に掘り下げていった。土層断面の観察は，ほぼ20m間隔で行うこととし，できるだけ地形の傾きをよく表現できるような方向を選んだ(別添第１図)。また１Ｈ24区に基盤礫層にまで達する土層観察面を設けた。ここからは分析用の土砂も採取した。

調査の目的の一つを，「集落の全体を一度に俯瞰できるような掘り方」に置いたため，遺構の検出には特に注意した。石器類は位置が動かないように，検出後できるだけ速やかに取り上げることに努めたが，特に礫群・配石については遺構として遺跡の広がりをより視覚的に訴えるものと考え，全体写真の撮影まで全てを取り上げずに保存した(図版５・６)。先土器時代の土坑は検出の困難さから，本来の掘り込み面である第2b層を調査する間にはわずかに３基が

発見されたのみであった。土坑については，発見例の稀少性と推測される機能的な重要性に鑑み，全ての覆土を採取し1mm目のフルイで水洗選別することとした(第Ⅵ章第1節4)。

また，発掘調査で常に問題となるサンプリングエラーに対処し，一方では火処の問題にせまる意図も含めて，約1,500㎡程の範囲を選び水洗選別用の資料を採取した(第Ⅴ章第6節，第Ⅵ章第6節)。

このような調査と並行して，古墳時代の遺構1基(第Ⅹ章第1節)，方形周溝墓1基(第Ⅸ章第1節)，縄文時代の住居址1基(第Ⅷ章第1節)，土坑数十基(第Ⅷ章第1節)の発掘を行った。　このようにして，第2b層に属する先土器時代の遺構をほぼ検出し，全体写真を撮る事ができた時にはすでに8月8日になっていた。全体写真の終了と同時に礫群を主とする遺構群の取り上げを行い，一方では下層への掘り下げを開始した。

すでにこの時点で調査の遅れは明白になり，県・町・建設業者・調査担当者協議の上で，9月15日を目標に第一区の発掘を完了させることになった。このために，県は新たに堀田，飯塚の両名を派遣し，町は新しく建設される学校に通うことになる児童の父兄に，動員という形で協力を依頼する所となった。まさに背水の陣で，8月中は調査員4名に対し作業に携わる人は100名を超える日が続いた。

第3層の発掘は，このような状況のためにある程度の荒掘りもやむなきに至った。それまでのジョレン主体の発掘をスコップに持ち換え，厚さ3～5cm位で一気に25cmほど掘り下げるという方法を採った。遺物が出土した場合には，従来通りジョレンや移植ゴテで掘り広げた。

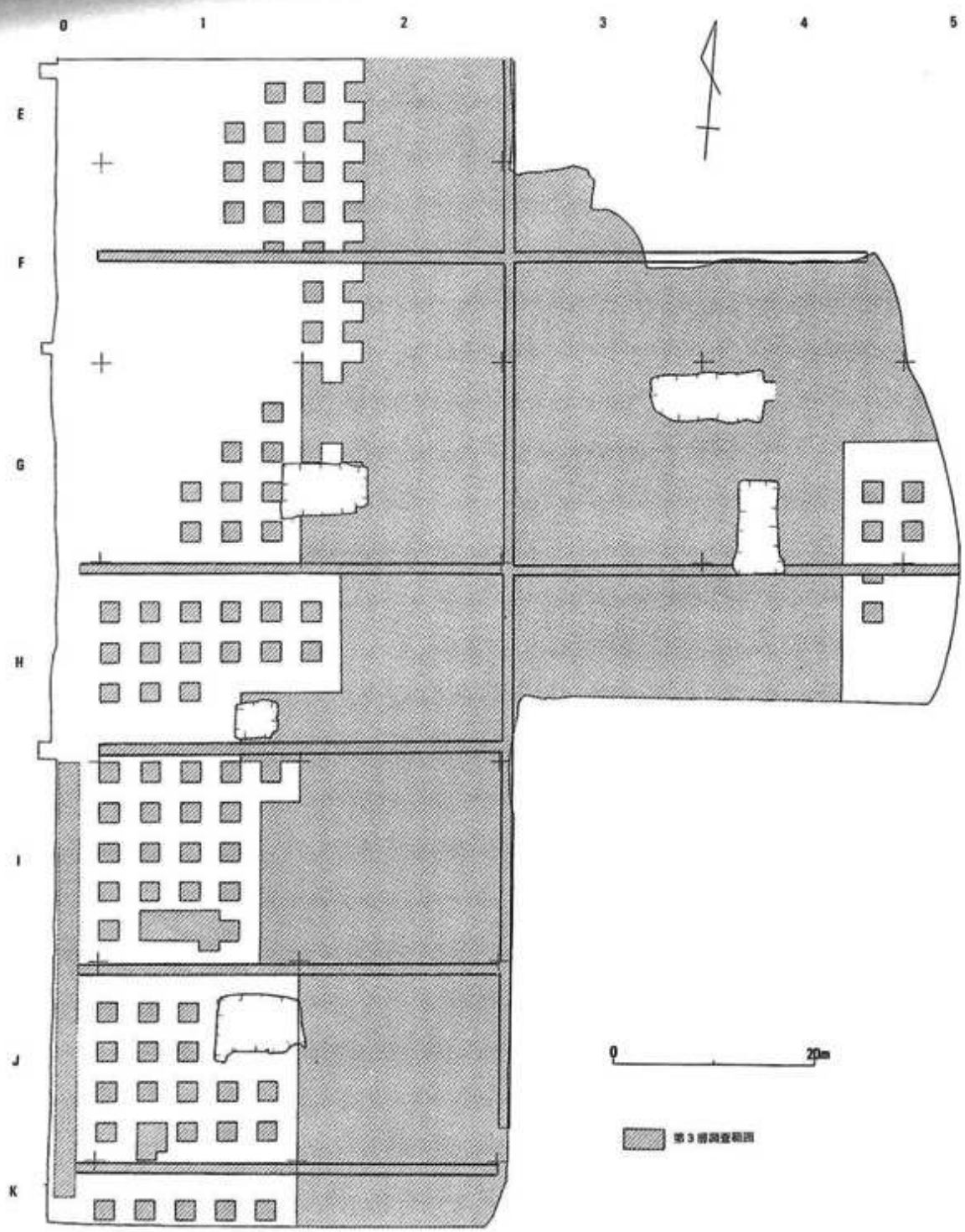
さらに全面調査を実施するのは大区画の3・4列に限り，他は2m四方の区画を市松に第4層まで掘り下げ，遺物の出土がある場合にのみ周辺区画も掘ることにした。その結果，全面調査の範囲は2列西半部まで広がった(第5図)。

第3層の発掘で，第2b層の段階で発見できなかった土坑が相次いで見つかり，第一区での合計が9基に上った。また，日程があまりに緊迫した状態にあったため，ここでは礫群全てを最後まで残すという方法は採れなかった。次善の策として，調査の進行を待ち数礫群が集中的に出土するか否かについて確認した後に，できる限りまとまった状態の写真を撮ることに努めた(図版15・16)。8・9月は荒天にたたられたが急ぎに急いで，ようやく第一区の調査を終えたのは9月13日であった。

第一区の調査終了とともに県側の体制にも変化があり，栗野・飯塚に代わって山田が調査担当者となった。

9月に入ると第一区の調査に並行して，すでに一部が第二区に着手していた。第二区の東半部は，大部分が天地返しで撹乱されていた。遺物包含層がほとんど残されていなかったため，約2,000㎡を半月後の9月16日には完掘した。

西半部にも撹乱が多い上に，大区画の2列東半部は削平によって第2b層のほとんどがなくなっていた。一方で，0列・1列西半部では南方から入る比高1～2mの浅谷のため黒色土の堆積も認められた。第二区の発掘当初に，この浅谷に沿って排水用の溝を深さ2m位に切った。ま



第5図　第3層調査範囲図

た，浅谷の底に近い位置で土層観察用断面から分析用土砂を採取した。第2b層は尖頭器関係の遺物が中心であったが，出土量は多くなかった。土坑が1基検出された。第3層も比較的遺物の出土が乏しく，当初の予定より早く10月22日に全て終了した。

第三区は，10月半ばには一部の調査を開始した。第三区では中央以南に弥生・縄文時代の遺構・遺物が多かったため，北半の先土器時代部分に主力を投入し調査を先行させた。北半では，第2b・3層とも遺物の分布密度が高く，第一区同様第3層についてはスコップによる発掘を行った。土坑は，新たに6基発見された。このうち1基で花粉分析用の資料を採取した。南半では方形周溝墓4基，縄文時代の住居址1基が黒色土中から掘り込まれていた。方形周溝墓は，非常に規模の大きいものであった。南半は北半に較べると遺物量こそ少なかったが，第1b層から未撹乱の土層が残されていたため，搬出土量は大量であった。第2b層では，さらに2基の土坑が発見された。また，第一区との境にできた切通し面から分析用土砂を採取した。こうして，第三区の調査終了をもって12月23日に全ての発掘を完了した。（山下）

第Ⅲ章　層序と遺構・遺物の遺存状態

第1節　層　　序

基本層序は従来観察・記録されてきた磐田原台地のそれとほぼ共通する(加藤1979・1980a，山崎他1984，磐田南高校地学部1984，他)。

以下，基本的な層相の説明を行い(第6図)，後に調査地内における局地的な層相の変異に触れる(第7図)。なお，土壌学的分層との混乱を避けるために，本稿では概報作成時(山下1983)とは土層の呼称が変わっている。

第1a層：黒褐色土層　重機を使った農地改良や削平作業による撹乱土。20～30cm。

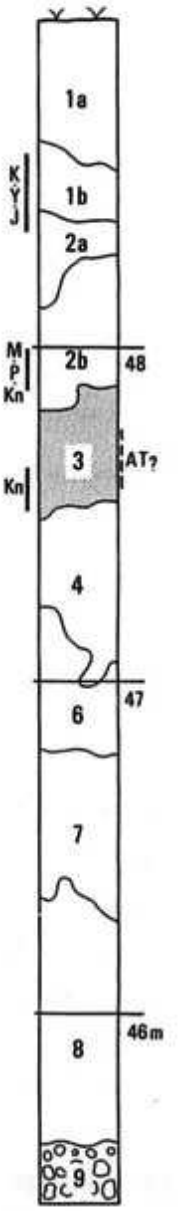
第1b層：黒色土層　通称黒ボク土。0～20cm。

第2a層：暗褐色土層　粘性弱。黄褐色土の中に根の痕跡と思われる径5～10mm位の円形あるいは楕円形の黒褐色土粒を含むため暗褐色に見える。白色の0.5～1mm程度の微粒を多く含む。本層は，本来は第2b層として堆積したものが根等による汚染によって後に黒味を帯びたと思われる。10～20cm。

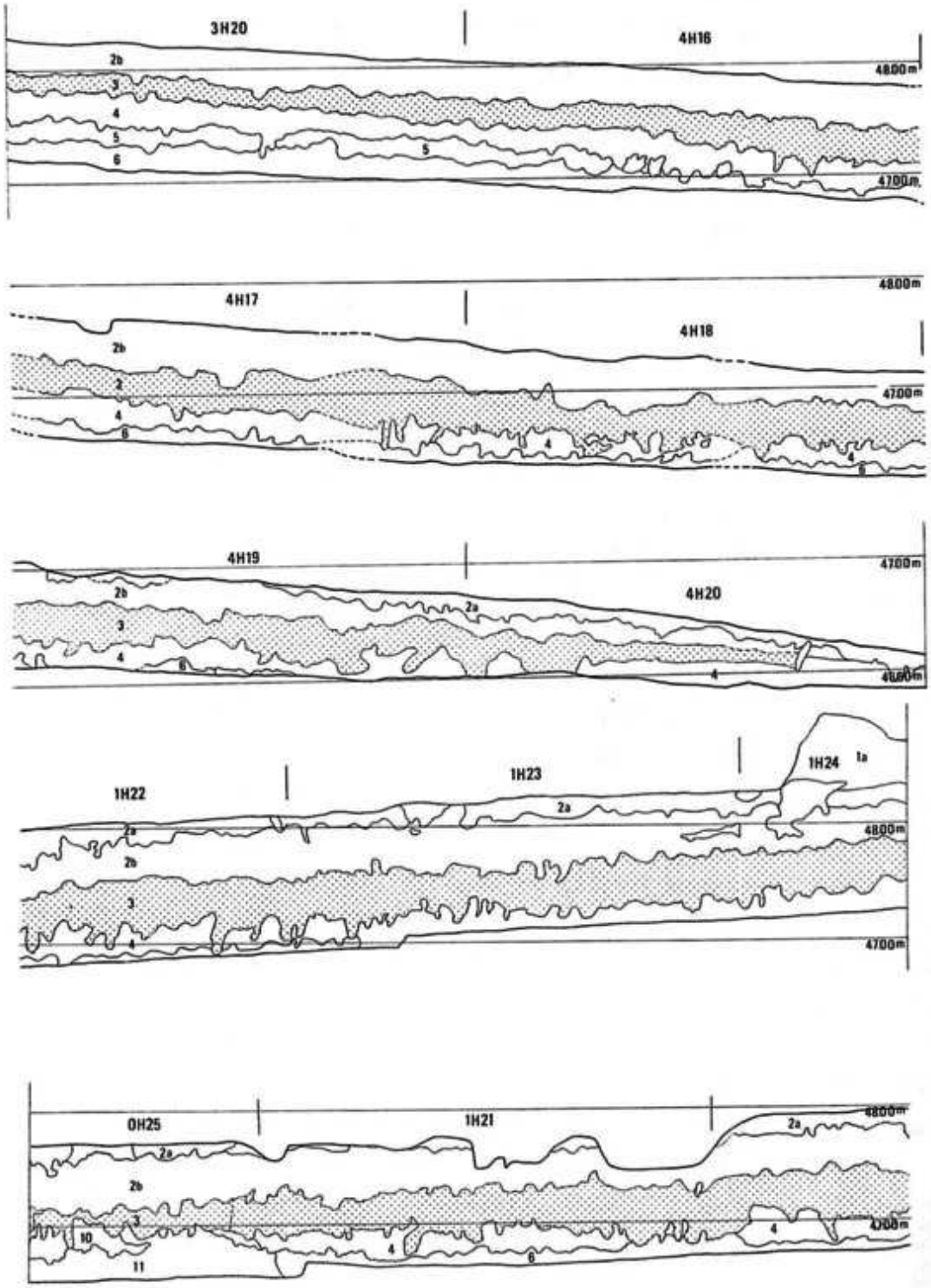
第2b層：黄褐色土層　粘性中。調査区中央の南北に延びる尾根筋を境に，東と西で若干層相を異にする。西半では粘性が強くなる。東半部では下半部でやや黒味を帯びるが，西半部では地下水の影響からか黄色あるいは青味を帯びる。また，西半部では鉄分が沈着するためか褐色の土が網目状に入る。上層部に径1～3mmの白色微粒子を多く含む。20～50cm。

第3層：暗褐色土層　粘性中。中央部以西では滞水性が高い。暗褐色土を基調に，黒褐色土のブロックを多量に混じえる。中央部以西では，下底部に近く，やや白色味を帯びる所がある。この部分では径5～10mmの小礫が増加する。西半部では，わずかに鉄分の沈殿が認められる。径10mm以下の小礫を少量含む。全体に径1～3mmの白色微粒子を含むが，局所的に多量に含む。本層中に火山ガラスのピークがある(本章第2節参照)。20～30cm。

第4層：黄褐色粘質土層　粘性強。黄色土と褐色土が混じる。下層部では径5mmほどのマンガン粒を団塊状に多量に含む。本層以下では，径



第6図　土層柱状図



第7図　第1セクション東半部(上)，西端部(下)

2 cm位の小礫を多量に含むようになる。30～40cm。

第5層：淡赤褐色粘質土層　粘性強。本層は，東半部緩傾斜面にのみ発達する。白色粘土を霜降状に含む。径5～10mmの小礫を多量に含む。20cm。

第6層：黄色粘土層　粘性強。層相は第4層に似るが，黄色味が増しマンガン粒・小礫ともに増加する。30～40cm。

第7層：鬼盤　灰白色の粘土が鹿の子斑に入り，その空隙をくすんだオレンジ色のシルトが埋める。粘土は強粘性であるが，シルトの部分は脆い。小礫の量は第6層と変わらないが，腐れ礫を含むようになる。マンガンの微粒子が霞状に入る。30～40cm。

第8層：黄褐色土層　粘性中。粘土分が減少しシルト分が増加する。灰白色粘土がわずかに混じる。マンガン粒は第7層と同じ。礫の量が急増し，大きいものが多くなる。礫には砂岩・石英・チャートが多い。70～80cm。

第9層：基盤礫層　2 cmから幼児の頭位の大きさの礫で構成される。腐れ礫が多い。礫の間隙には砂が充填されるが，表層では粘質シルトになる。構成礫は砂岩が圧倒的に多く，石器の材料となる頁岩は稀である。

第10層：暗灰色粘質土層　粘性強。径1 cm以下の小礫を少量含む。第3層に含まれている黒褐色土のブロックがそのまま灰色になったような産状を呈する。調査区西縁に沿う浅谷沿いに局部的に分布する。

第11層：暗灰黄色粘質土層　粘性強。径1 cm以下の小礫を含む。水性植物の根によると思われる，上下方向に伸びる線状の褐色鉄分の沈着が多く認められる。還元状態にあるためか，層全体が白色を帯びる。第10層と関連があるようで，分布範囲も重なる。

さて，堆積は基本層序の中でも何度か触れたように，大きく見て平面的に調査区中央の稜線を境に東半部と西半部で違いが認められる。この差の原因は必ずしも判然としないが，一つには東半部と西半部のそれぞれが対面する谷の差によるものと考えられる。東半部は，大きな開析谷に面するために土砂の流失が多く乾燥し，西半部は浅谷に面するために常に地下水の影響下にあり湿った状況にあったことに起因すると推察される。こうした推定を補強すると思われる土層の局所的な変化を観察してみよう。

第7図には第1セクション(別添第1図)の東半部(上半)と西端部(下半)を示してある。両者を比較すると，東半部の傾斜が西側に勝っていることがよくわかる。また，東半部では東斜面にのみ観察される第5層が4 H16区で消失する。にもかかわらず，全体の層厚は減じることなく第4・6層が厚さを増すことで均衡を保っている。続いて，第2b・3層が4 H20区で消失している。そして東端近くでは第2a層と第4層が接するような状態になっている。第2a層は，その成因を考えると，本来の土層はどうであれ地表面に近く植物の根の及ぶ所であれば容易にできあがるものである。したがって，この東半部の堆積を見る時，本来の土層の堆積・流失がくり返される中で，特に台地縁近くでは流失が激しく第2b・3・5層などが流失した後に再堆積した土層が第2a層としての性格を帯びたと考えるべきであろう。また，東端近くの第4層も

直接基盤礫層上に乗っており，台地中央部の第4層とは幾分生成過程を異にしたものと考えた方が妥当であるかもしれない。このように，東半部の堆積は傾斜面に由来する土砂の流れを考慮することで，層厚の減少・消失等を理解することができる。

一方，西端部ではむしろ層厚が増大したり，他の層に取って換られたりといった現象が生じている。層厚が増すのは第2b・3層であるが，0 H25区まで来ると第3層もほとんど消失する。さらに，同区では第4・6層も消失し，第10・11層へと連続する。全体では1 H21区から0 H25区にかけて，層相に大きな変化を認めることができる。この変化を持たらしたものは，0 H25区のさらに西方5～10m位を最底部とする浅谷と考えることができる。すなわち，非常に緩やかな傾斜で形成される谷であるため，両岸での大きな土砂の移動はなく，徐々に流れ込む土砂の堆積により，他に較べ厚い土層が形成される。また，浅谷の底に水流があったかどうかはわからないが，少なくとも伏流水による地下水位の高い時期があったと考えられる。このため本来の土層第3・4・6層が酸化・還元作用を受け，第10・11層として識別されたと推察される。もとより自然科学的方法を利用せず，土層の色調，粒度等のみによる判断ではあるが，第3・4・6層が0 H25区に近くなるに従って水分を含むようになり，徐々に第10・11層に漸移していることからも窺うことができよう(加藤1980ａ)。

このように，調査区全体を通じて必ずしも均等な堆積が広がっている訳ではないが，台地中央部を基本とし，台地縁に近づくに従って徐々に層相に変化を来していると言うことができる。

自然堆積は垂直的にも大きく上下の二部層に分けることができる。上層は第1～3層，下層は第4～8層である。両者の大きな違いは，径1～2cm位の小礫と径1～3mmの白色微粒及びマンガン粒の有無である。第4層以深では，小礫・マンガン粒が急増するとともに白色微粒は消失するのである。白色微粒の由来はわからないが，一方でマンガン粒と小礫の増加は，水の作用との関連を彷彿とさせるものである。すなわち，第4層以深の土層が主として水成のものであるのに対し，第3層以浅は風成堆積によるものと考えられるのである。

この推定は，かつて加藤の指摘した上・下部層(加藤1980ａ)とは第3層の認識に違いがあるように思える。加藤は，土壌層位学的単位の識別を基本として，第3層を下部層に含めているのである。しかし加藤の立場から見ても，土壌層位学的単位の実態たる「堆積―堆積の鈍化または中断―土壌化」という過程の中で第3層は後半～最終の段階に位置づけられており，層相としては過程の前半とは大いに異なる可能性がある。事実，加藤は第3層については第4層以下とは違い，水の影響から解き放たれたとの解釈をしている(加藤1980ａ,P345)。このように考えてくると，両者の違いは土壌学者として土壌の生成過程を単位として把握しようとしたのか，単に記載として層相の差を捉えようとしたのかに拠っており，内容的には同じであることがわかる。すなわち，層相では第3層と第4層の間に大きな違いが認められるが，「土層の堆積→土壌化」というサイクルの把握という視点に立つならば，第3層は第4層を含むサイクルの一部として捉えられるということであろう。　　(山下)

第2節　火山ガラスの検索

1. ま え が き

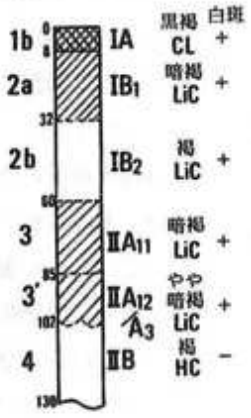
磐田原台地の最表層を構成する最大約3～4mの土層(磐田原土層と暫定的に呼ぶ，加藤1980a)の上部には，数ケ所から旧石器が出土し注目を浴びてきた(池端前，匂坂上，寺谷，京見塚の各遺跡)。この土層中に火山ガラスの弱い集中帯(極大)が発見されている(加藤1980a)。最初の発見地である寺谷遺跡では磐田原土層中の第1暗色帯(上位)の直下に集中帯が検出された。これは旧石器包含層よりは下位である。第1，第2暗色帯より抽出した腐植酸の ^{14}C 年代が9,540±190年B.P.(Gak－8169)，18,090±550年B.P.(Gak－8170)，旧石器包含層の第1土坑中の木炭の ^{14}C 年代が16,300±1,000年B.P.(KSU334)と出た(山田1980)。これらの年代には矛盾があるため，火山ガラスをAT(姶良火山灰，約2.1～2.2万年前，町田他1976)とするのは尚早であると指摘した(加藤1980a)。

その後磐田原台地の南部の京見塚遺跡の調査によって，磐田原土層中の2枚の暗色帯のうち，火山ガラスの集中帯(極大)は下位暗色帯の下半にあることがわかり，寺谷遺跡での結果とくい違いを生じた。

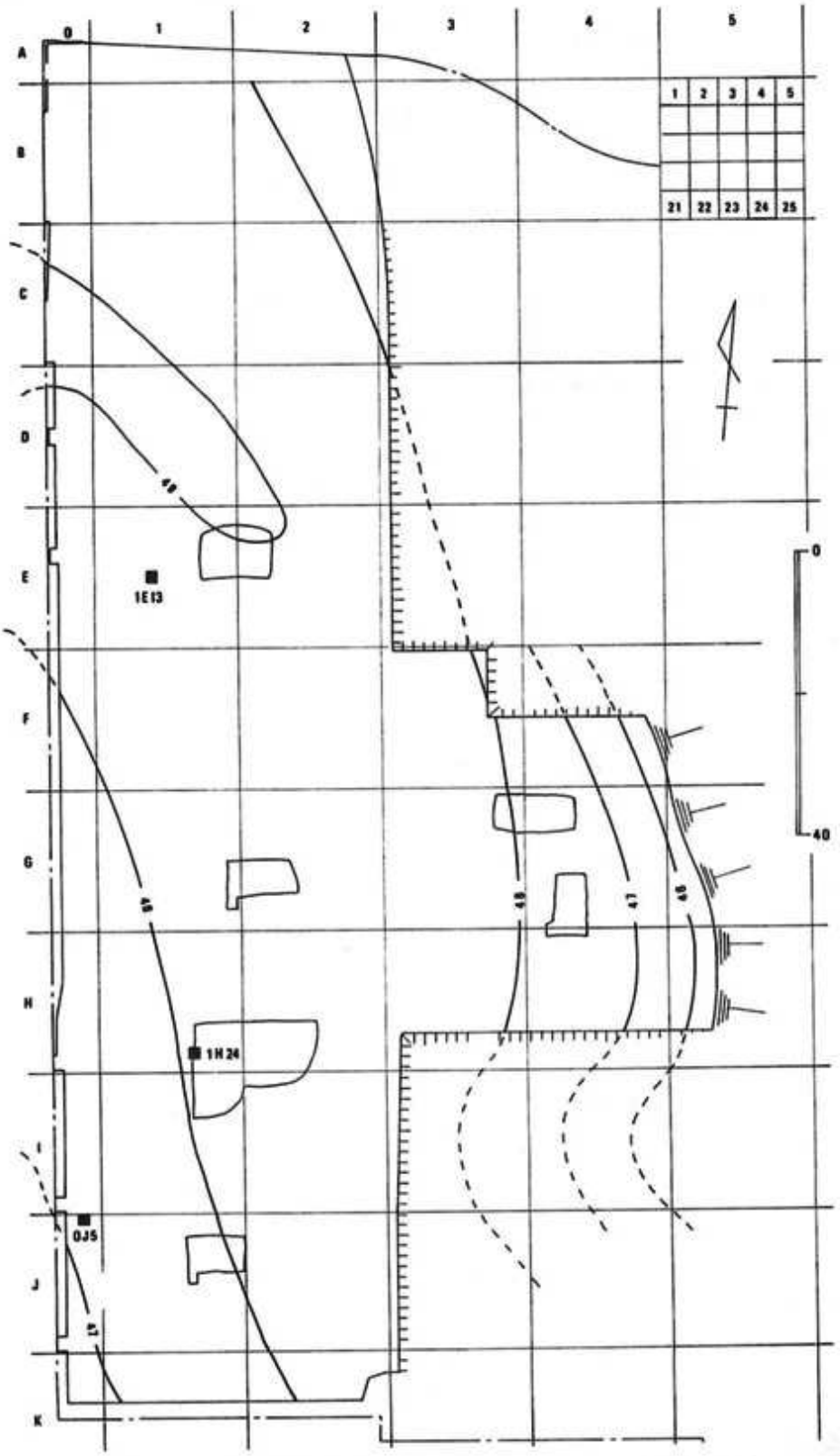
この解決のためには，両遺跡の中間に位置する本遺跡がヒントを与えてくれるものと期待された。以下，この調査の結果を報告する。

2. 土 層 断 面

筆者の調査した第4セクション2 E17区の土層のスケッチは第8図のとおりである。柱状図の左側に記した数字は発掘担当者の土層区分である。右側は土壌学での土層区分方式に従って筆者が行った区分である。Aは腐植集積層で通常は黒～暗色を帯び，土壌の最表層部を占め，かつ地表面の指示者である。腐植は地表に生えていた植物の落葉枝が分解してできたものである。Bはその下位の土層で，腐植集積を伴わない土壌化層(風化，粘土化層)である。Ⅰ，Ⅱ，Ⅲは土壌構成物の差違や異種土壌を区別するためのもので，通常は上位から番号をつける。図のⅠ，Ⅱは互に異なった独立土壌で，ⅡAはかつての地表付近をあらわす。ⅠはⅡ土壌を被覆した堆積物からできた土壌であり，当然，Ⅱよりも新しい。なお，ⅡB層は礫を含み粘質かつちみつで硬く，ⅡA層とは異質な土壌の可能性もあるが，寺谷遺跡のときの区分に従って，一応そのまま残すこととした(加藤1980a)。本遺跡の他の部分の土層もこれと同様である。より深い部分には鬼盤層も認められる(山下1983，p.7，第6図)。



第8図　2 E17区セクション図



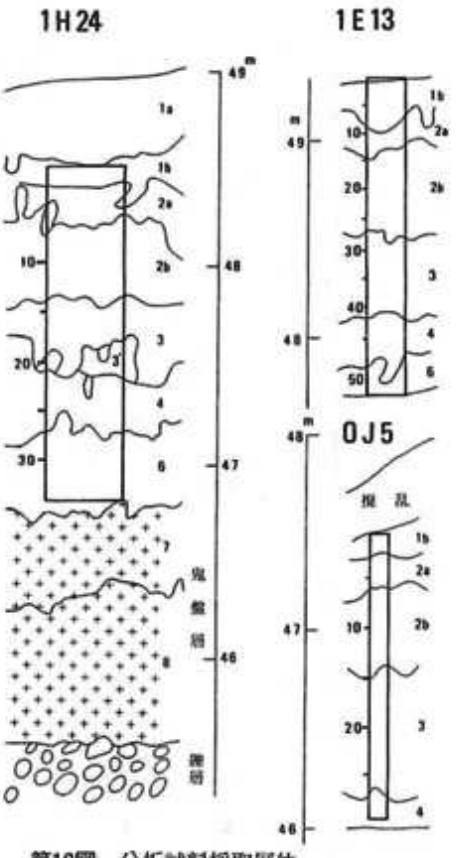
第9図　分析試料採取地点（等高線は第2b層上面における一部推定の線）

本遺跡の土層構成の特色は暗色帯が1つしかないことである。この点が寺谷，京見塚両遺跡の土層と異なる。上位土層の特色である白斑粒子はこの暗色帯まで含まれる。

3．試料と方法

（1）試料　1H24，1E13，0J5の3地点から各層にまたがり，1H24，0J5では約5cm刻みで1E13では約3cm刻みで採取した。その概略は第9・10図のごとくである。

（2）方法　採取した試料は暗所で風乾し2mmのふるいを通過させた(風乾細土)。風乾細土10gをとり音波処理，湿式ふるい分けで径0.05mm以上の砂を分離し，乾燥後さらに乾式ふるいわけで，0.05−0.2mm(細砂)と0.2−2mm(粗砂)の2画分に分離しそれぞれを秤量する(後述6.参照)。細砂画分の一部をとってカナダバルサムと共にスライドガラス上にのせ加熱後カバーガラスをかぶせて放冷する。これを偏光顕微鏡下で観察し，火山ガラス粒子を同定しその粒数%を求めた。計数の総粒数は500〜600粒，計測は2回行い，各回の火山ガラス粒数が2個以内の差に留まったときは可とし，3個以上の差の場合はさらにもう1回計測を行った。いずれの場合も平均値を求めた。また，接眼マイクロメーターを用いて火山ガラスの長，短径(a，b)を測定した。



4．結　　果

（1）火山ガラス%計測の精度　スライドガラス上にマウントされた粒子数は膨大なので，一部を無作為抽出することとした。その方法は，メカニカルステージにスライドガラスをのせ，一定の間隔でスライドをずらせ，各回の視野に現れる粒子のうち，十字線の左右線にかかるもの(粒子が多い場合)か十字で仕切られる視野の4分の1に入るもの(粒子が少ない場合)を計測の対象とした。総粒子数Nが500〜600粒になるまで行った。同定された火山ガラスの数をnとし火山ガラス粒数%をxとすると，i回目の計測で

$$x_i = 100 \times n_i / N_i \quad (\%) \quad \cdots\cdots(1)$$

となる。a回計測をくり返した後のx_iの平均値を$\bar{x}$とすると，標準偏差σは

$$\sigma = \sqrt{\Sigma(x_i - \bar{x}) / (a-1)} \quad \cdots\cdots(2)$$

で与えられる。

3，(2)でのべたような，$i=2$，$Ni=500\sim600$，$n_1 \sim n_2 \leqq 2$の場合は，$x_i - \bar{x} < 0.2$となり，2式から$\sigma < 0.3$を得る。$n_1 \sim n_2 > 2$のときは，$i=3$とする。これらの計算例を第1表に示す。

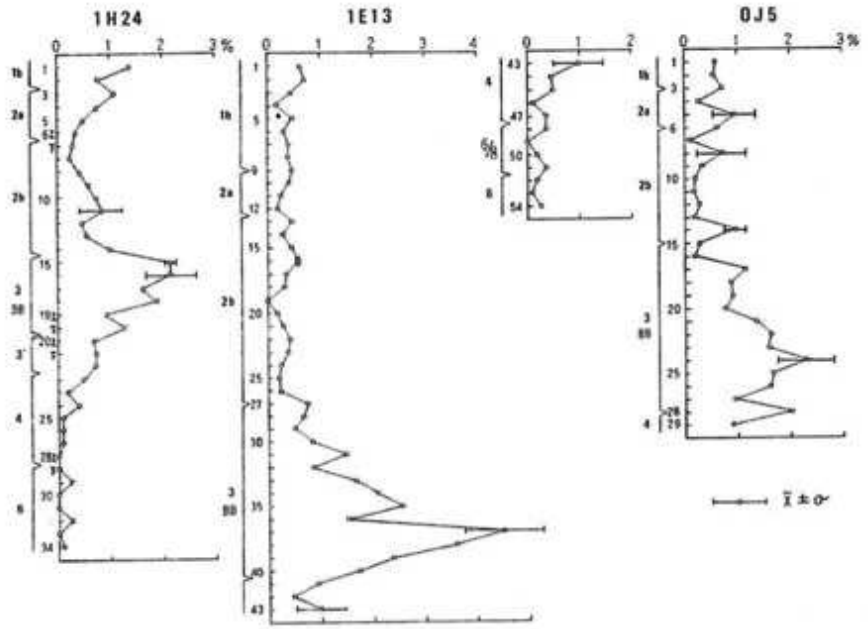
第1表　火山ガラス%の計測例

試料	i	各回 N	各回 n	各回 x	通算 N	通算 n	通算 x	$\bar{x}$	σ
1 H24 11	1	562	4	0.71	562	4	0.71	0.86	0.20
	2	605	6	0.99	1,167	10	0.86		
1 E13 18	1	568	1	0.18	568	1	0.18	0.37	0.29
	2	507	3	0.59	1,075	4	0.37		
1 H24 10	1	475	6	1.26	475	6	1.26		
	2	541	3	0.55	1,016	9	0.89	0.75	0.42
	3	587	3	0.51	1,603	12	0.75		
1 E13 34	1	614	15	2.44	614	15	2.44		
	2	622	10	1.61	1,236	25	2.02	2.05	0.42
	3	566	12	2.12	1,802	37	2.05		
0 J 5 25	1	479	7	1.46	479	7	1.46		
	2	520	12	2,31	999	19	1.90	1.73	0.51
	3	501	7	1.40	1,500	26	1.73		

今回の各試料の火山ガラス%の$\bar{x}$は4.5%以下，σはおおむね<0.5であった。測定値が$\bar{x} \pm \sigma$の範囲に入る確率は68.3%である。$\bar{x} \pm 2\sigma$の範囲では確率が95.4%となる。

（2）火山ガラス%の垂直分布　各試料とも火山ガラスの形態を扁平，多孔，センイ型に分けて調べたがほとんどが扁平型(またはbubble wall一気泡壁一型)であった。その他の型も含めた火山ガラス%の垂直分布は第11図のごとくである。めぼしい極大に標準偏差の巾($\pm\sigma$)をつけてある。どの地点でも，はっきりした極大は第3層(暗色帯)の中に出現する。

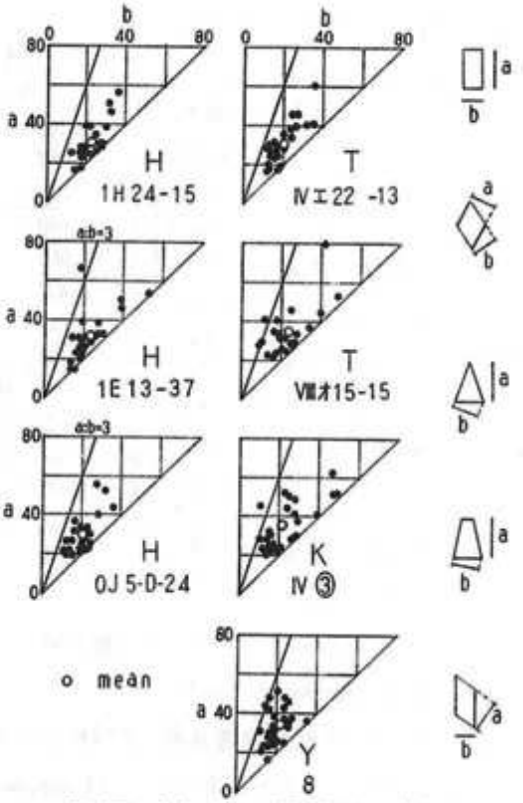
（3）火山ガラス片の大きさ　これら極大を示す試料中の火山ガラスはいずれも扁平型が大



第11図　火山ガラス%の垂直変化（BB：暗色帯　σ：標準偏差）

部分であるが，その大きさは揃っているだろうか，また，磐田原の他の遺跡のそれと違うであろうか。長短径の選び方は第12図に示した。その方針は，粒子がふるいの目を通るか否かを決めるｂを最小となるようにすることである。各粒子のａ，ｂの値は接眼マイクロメーターの目盛で示した。標準スケールと比較した結果，その１目盛は4.17μｍであった。各試料につき火山ガラス粒子20～30粒の計測結果を第12図に出してある。

本遺跡の３地点だけでなく，同時に掲げてある他の遺跡からのものも，互によく似た点の散らばりと平均値(白丸)を示す。少なくとも大きさに関する限りかなり一様である。ｂ値は10～30(42～125μｍ)に集中し，平均値は20～24である。ｂの10以下がないのはふるい(45～50μｍ)によってカットされたためである。また，ａ：ｂ＞３の場合がほとんどないのは細長い粒子の少ないことであり，火山ガラスの形態(扁平型)の特徴を反映している。ａは15～50(63～210μｍ)に大部分が入る。平均値は30～40である。ここには示していないが，本遺跡各地点の火山ガラス%の第２の極大をもつ試料の火山ガラスについても計測したが，上記とほとんど差違がなかった(１Ｈ24－16，１Ｅ13－35，０Ｊ５－22，同28)。



第12図　火山ガラス(扁平型)の大きさ
数字はマイクロメーターの目盛数。１目盛＝4.17μｍ。
H:広野北，T:寺谷，K:京見塚，Y:山田原

以上のことから，磐田原台地の各遺跡の土層中で極大を示す火山ガラスは質的にかなり一様であり，同一起源である可能性が高い。しかし屈折率や元素分析などを行ってないので断言はできない。

5．磐田原台地上の他の遺跡土層との対比

既述のように，本遺跡の土層中には暗色帯が１枚しかなく，かつ火山ガラスの集中帯(極大)が包含される。一方，寺谷遺跡では暗色帯が２枚あり，火山ガラス%の極大は上位暗色帯の下位にある(加藤1980a)。このことから，両遺跡の土層(とくに暗色帯)の対比に二つの解釈が生じてくる。

(１)ひとつの解釈は，本遺跡の暗色帯が寺谷の下位暗色帯に相当すると見る立場である。この場合，暗色帯の白斑，下位の黄褐色粘質土層，鬼盤に対する関係は両遺跡ともよく似てい

る。京見塚遺跡でも2枚の暗色帯の下位の方に火山ガラスの極大が含まれ，白斑等との関係も寺谷とよく似る。もしそうだとすると，上述のように，互によく似た火山ガラスが二つの層準にあることとなる。本遺跡の第2b層中に火山ガラス%の小さい極大があり(第11図)，寺谷遺跡でもV層中に同じく小さい極大がある(加藤1980a，p.348，第168図A)ので，これらがそれぞれ他の遺跡の主極大と対応するとみなすこともできる。京見塚遺跡でも主極大の上位(II層直下)に小さい極大がある(加藤，未発表データ)。

(2)もうひとつの解釈は，本遺跡の暗色帯は寺谷の上位暗色帯に対応する(多少のずれはあるが)との考え方である。これだと，火山ガラス%の極大は一つの層準でよいこととなる。しかし，寺谷での上位暗色帯直下から下位暗色帯までの土層が欠けることとなり，それをうまく説明しなければならない。なお，寺谷遺跡では上位暗色帯と火山ガラス%極大とが他遺跡と違って少しずれるが，このような例は異常なことではない(加藤1980b)。

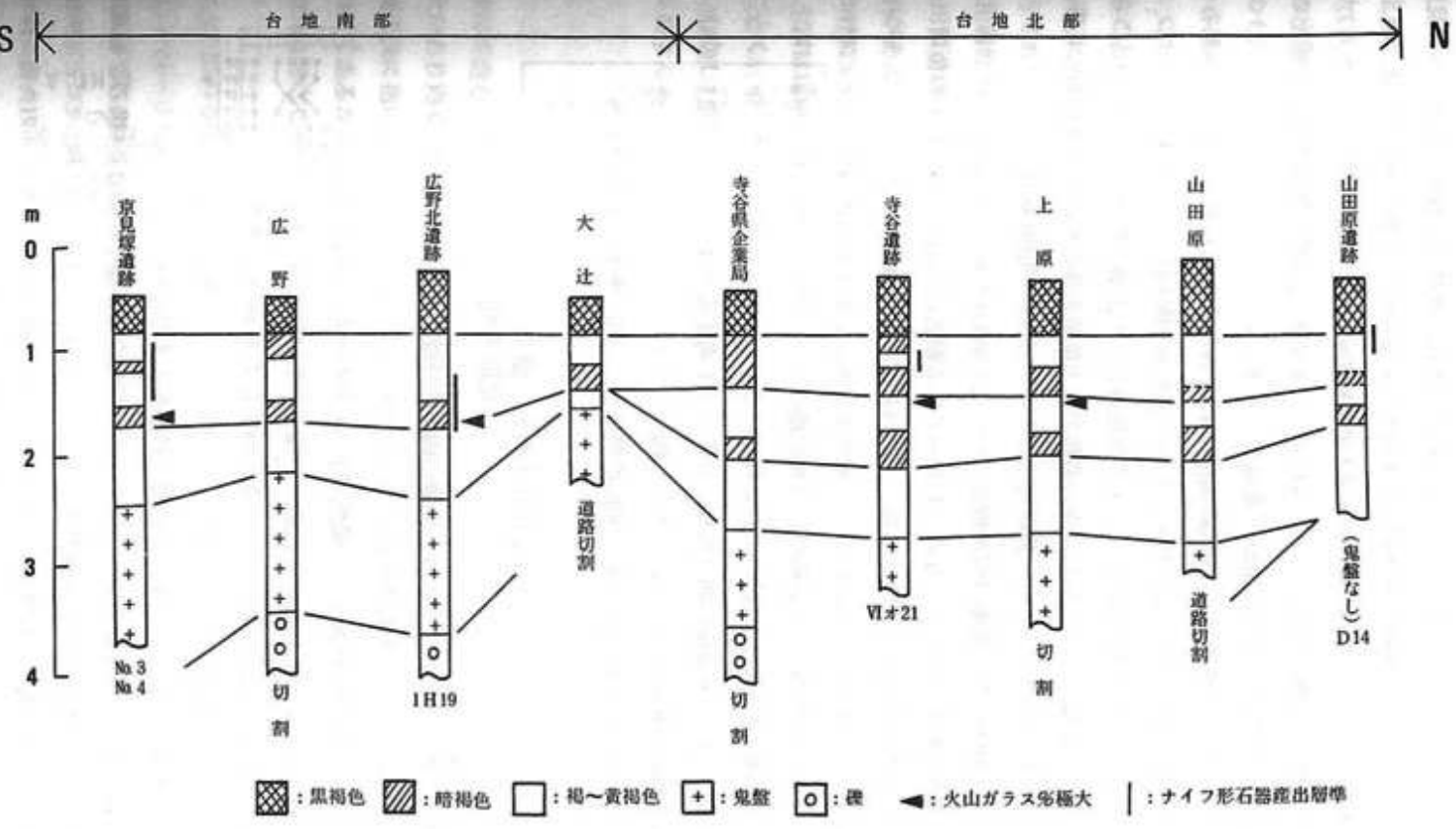
第13図は，前回の寺谷遺跡の調査報告にのせた土層断面(加藤1980a，p.343，第163図)に，その後の調査で判明したものを加え，わかっている範囲の火山ガラス%極大の位置，ナイフ形石器の産出層準を記入したものである。土層の対比は本項の解釈に従っている。ナイフ形石器群と火山ガラス%の極大との関係は，台地北部と南部であまり差違がない。この図から注目されることは，台地北部の，暗色帯を2枚挟む地点での，黒ボク層直下から鬼盤層直上までの土層が，台地南部(暗色帯は1枚)のそれより厚いことである。一因として，上述のように，台地南部で欠けている土層が北部で追加されることも考えられよう。なお，京見塚遺跡の下位暗色帯が本遺跡の暗色帯に対比されるとして図示してある。

さらに，次にのべる砂画分の粒径組成の特徴もこの項の解釈に好都合である。

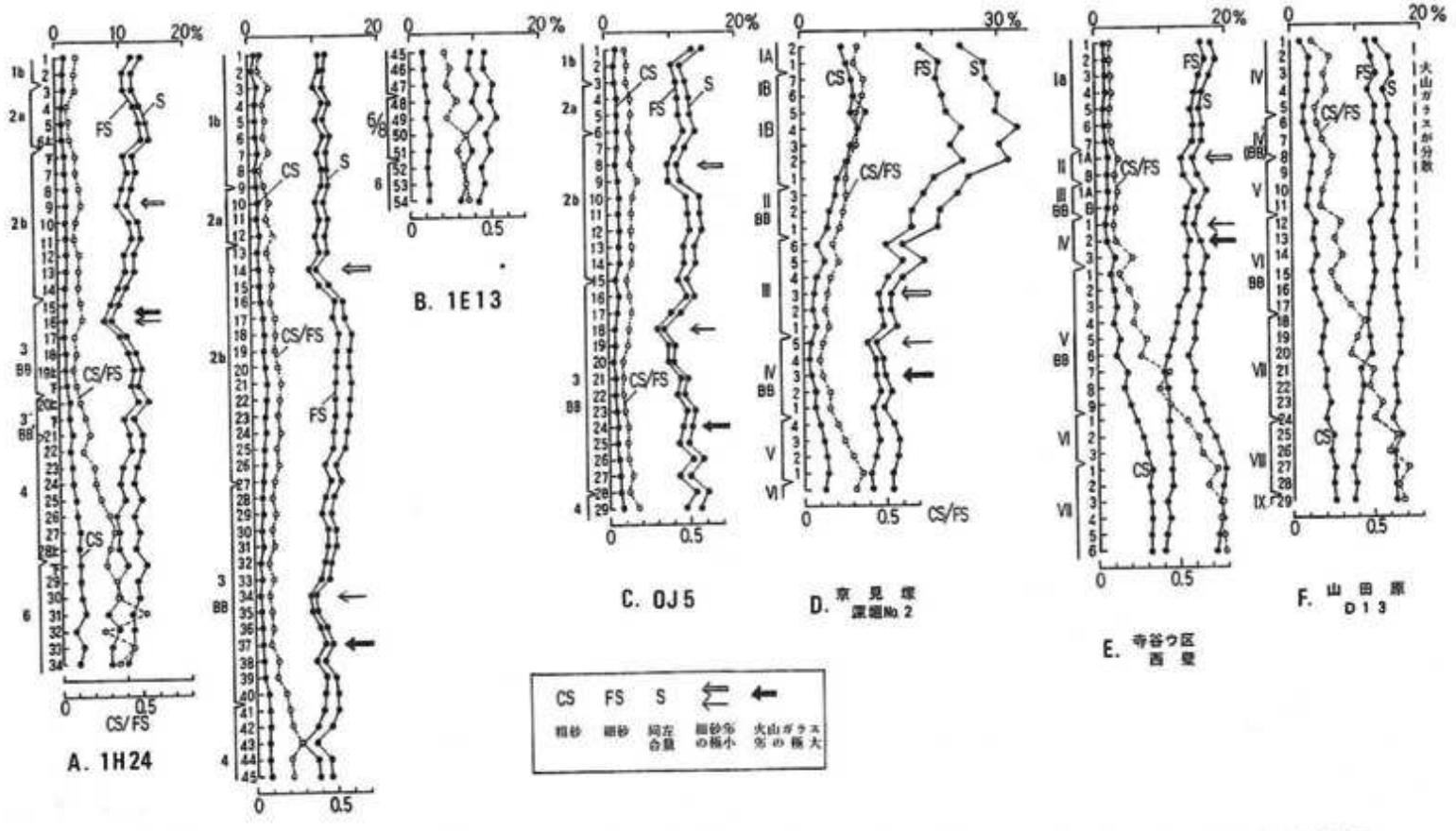
6．土層中の砂画分含量の垂直変化

各遺跡の土層の対比を行うには，土層の肉眼的特徴や火山ガラスだけでなく，より多面的に展開する必要がある。これはその試みの1つである。3(1)でのべた，0.05－0.2mm(細砂)と0.2－2mm(粗砂)の秤量値から風乾細土当たりのそれらの含量%を求めることができる。他遺跡の例も含めて，その値の垂直変化の様子を第14図に示した。同時に細砂(FS)と粗砂(CS)の含量%(S)およびCS／FS比の変化もかかげてある。

(1)本遺跡(第14図A～C)を見ると3地点とも，上層から第3層(暗色帯)までCSは2%以下で変化に乏しくわずかに暗色帯で最小を示すのに対して，FSは5～15%の間で変化し，第2層の上部と第3層の中～上部で，それぞれ含量の極小が現れる(図の2種類の矢印)。Sの変化は，CSがほとんど一定なので，FSのそれと平行している。CS／FSは0.1～0.2の間で小変動があるだけである。しかるに，第4層に入るとCSが下方へ漸増する。FSは一定または下方へ漸減するのでCS／FSは下方へ急激に増大する。1H24，1E13では第4層下部以下でこの値が0.3以上に達する。第14図に示した火山ガラスの極大の位置は細砂の



第13図　磐田原土層の対比（第２の解釈に従う）



第14図　砂画分の含量%の垂直変化　A～C広野北遺跡，各図の左端の大数字は土層番号（遺跡ごとにちがう），小数字は資料番号

下位の極小とほとんど一致するか，少し下方にくる。

（2）京見塚遺跡(第14図Ｄ)では，Ⅰ，Ⅱ層で砂含量が高い点が広野北遺跡と違うが，Ⅲ層とⅣ層上部に細砂%の極小が見られる。また，ＣＳはⅣ層(暗色帯)で最小である。火山ガラスの極大(Ⅳ層中部)との位置関係から図の矢印が広野北の極小と対応するものと思われる。この極小の出現する範囲のＣＳ／ＦＳも広野北と同様に小さい値である。Ⅴ層以下でこれらが増大するのも広野北とよく似ている。

（3）寺谷遺跡(第14図Ｅ)では，ⅠからⅣ層までに，浅いながら二つの細砂の極小が出現すること，ＣＳとＣＳ／ＦＳ比が小さく変動が少ないこと，火山ガラス%の極大が下位の極小の下にくることなど，広野北遺跡とよく似ている。特筆すべきことに，Ⅳ層最下部からⅤ層(下位暗色帯)にかけて，ＣＳとＣＳ／ＦＳが増加傾向をとり，Ⅵ層以下でさらにそれが顕著になることである。これらのことから広野北第３層，京見塚Ⅳ層の暗色帯は寺谷の上位暗色帯(Ⅲ層)と共通性が大きいと見られる。

（4）山田原遺跡(第14図Ｆ)ではＣＳが他より多めである。わずかにⅣ層中部に不鮮明なＦＳの極小があるだけである。また，火山ガラス%の極大がない。これらのことから他遺跡との対応がつけにくい。ただ，Ⅵ層(下位暗色帯)に入るとＣＳ，ＣＳ／ＦＳが増大しはじめることから，これは寺谷のⅤ層に対応するようである。

以上のごとく，砂画分の含量%の消長が各遺跡間の土層の対比に有力な示唆を与えることがわかった。しかし，例えばＣＳの増加やＦＳの極小が土層の原材料(風化を受ける前の)の堆積の何を反映するのかという点に対しては今のところ回答が見出せない。今後の検討にまちたい。

7．お　わ　り　に

広野北遺跡を含む台地南部と寺谷遺跡を含め台地北部との土層(とくに暗色帯)の対比に二通りの解釈があり得ることを示した。火山ガラス%の極大が２層準あるという第１の解釈は京見塚遺跡調査後に抱いたものである(加藤，未発表)。今回はそれに加えて第２の解釈を検討してみたわけであるが，旧石器の産状，砂画分の含量%の特性などこちらに有利な点が多いようにも思われる。^{14}Ｃ年代資料や旧石器の研究の進展をまって，今後の課題として残すこととしたい。

（加藤）

参考文献

加藤芳朗1980a「寺谷遺跡をめぐる地形・地質・測定年代」(『寺谷遺跡』所収，磐田)。

加藤芳朗1980b「テフラと斜交する黒土層」(「軽石学雑誌」第６号所収，東京)。

町田　洋・新井房夫1976「広域に分布する火山灰―姶良 火山灰の発見とその意義―」(「科学」第46巻第６号所収，東京)。

山下秀樹1983「静岡県豊田町広野北遺跡発掘調査概報」(磐田)。
山田　治1980「第1土壙検出木炭の ^{14}C 年代」(「寺谷遺跡」所収，磐田)。

第3節　撹　　乱

調査区一帯は，かつて茶畑であったり果樹園であったりしたために，各種の開削が行われており，耕作の深さや撹乱溝の入り方もまちまちである。これらに関する情報を詳細に知っておくことは，遺物の分布を検討することによって集落構造を探ろうとする上で不可欠である。以下，調査区全体を俯見した後さらに詳細な説明を加える(別添第2図)。

まず，大きく見て中央区以外の，大区画で3列以東の範囲はほとんど礫層直上まで深耕が及んでおり，4H・I区を除き遺物の検出は皆無である。4H・I区は第I章第1節で触れたように，3I区を谷頭とする東から入る浅谷の底部に該当すると考えられ，埋積土の厚さ，換言するならば同地表面の低さ故に深耕による撹乱を免れたと言えよう。しかし，ここで発見された遺物も，土層の観察，接合状況等から，第3層に属すると考えられる一群が主体であり，第2b層以浅の遺物は撹乱されほとんど遺存しない。

0～2D区の北縁に沿っては，第2b層下半から第3層上面の深さにまで達する幅2.5mほどの道路があった。この北側の地域は，全体に第2b層の中位まで耕作が及んでおり，東に向って徐々に深くなるようである。このため，1B区では，原位置から若干浮き上がっている可能性のある第2b層の石器群の一部が削られていると考えられる。2C区では，耕作土を除いた段階で，すでに第2b層に属する礫群の一部が頭を覗かせていた。また2B区の大部分では，第3層下底面からさらに第4層までも露出しており，仮にかつて遺構があったとしても，そのほとんどは失われている。さらに，A・B列に，由来はわからないが径2～6mほどの不整円形の穴が10ケ所近く穿たれている。いずれも底面が第4層に及んでおり，周辺の遺物分布に大きな影響を及ぼしている。

0～2Dから0～2G，0・1H区までは，調査区の中で最も堆積の遺存状態の良好な所である。ほとんどの範囲で，弥生・縄文時代の遺物包含層である第1b層：黒色土層の遺存が認められる。近，現代の撹乱は，1・2E区境と1・2G区境，1H南東隅にある茶の木を投棄した方形の穴と，1・2F区北縁と1・2G区中央にあり東西に伸びる旧地境の溝，0E～0I区に南北に伸びる農道と用水跡である。方形の穴は，共に第4層以深まで達しており，全ての遺物包含層を完全に破壊している。東西の溝は最深部でも第3層上半部で止まっており，第3層下半部の遺物群には大きく影響はしていない。道路は第2b層下半，用水跡は第3層上部まで達している。この他，純粋な撹乱とはいささか性格を違えるが，C～E列にかけては方形周溝墓が少なからず築かれており，周溝の多くは第4層上半にまで及んでいる。また1・2F区では縄文時代の小土坑が多数発見されているが，そのほとんどは第2b層上部で止まっており，わ

ずかに第３層に及ぶ例があるのみである。

２H，３・４Ｆ～３・４Ｈ区は，全体として第2b層上半まで削平されているが，その上さらに様々な撹乱溝が錯綜している。しかし遺物分布に決定的な影響を及ぼすものは，３・４Ｇ区にかかる東西に細長い穴と，４Ｇ・Ｈ区にかかる南北に長い穴の二つのみである。これらは共に茶の木の投棄用に掘られたもので，第４層以深にまで達する。他は，一部第３層に達するものがあるが，大多数が第2b層下底部で止まる。したがって，第2b層の遺物分布のみについては少なからず影響を及ぼしていると見なければなるまい。さらに，特別の撹乱溝と意識しない所でも，特に３Ｈ東半部から４Ｈ西半にかけてと４Ｇ区では全面的に第2b層下半まで削平が及んでおり，一部の礫群では上半部が天地返しになって本来の礫群に並んで検出された様な例もある。したがって，特にこの範囲の石器の分布を検討する際には注意を要する。

０～２Ｉから０～２Ｋ区にも多くの撹乱溝が分布する。第３層から第４層に達するものも多い。また，東西の比高が他の地区より大きいためか，２列西縁以西では黒色土の堆積が認められるにもかかわらず，２列東半では削平によって全面的に第３層の露出が認められる。このため，２列東半には第2b層の遺物分布はほとんど見られない。

撹乱・耕作による削平の大枠を述べて来たが，実際の遺物分布の検討に当ってはさらに詳細な情報を必要とする。別添第２図は，先土器時代の土層に影響を及ぼす撹乱の位置・深度図である。第2b層の２・３Ｈ区にまたがって分布するＫ２－17ブロックを代表として，特に第2b層に撹乱溝と石器分布が重なる例が多い。（山下）

第４節　遺構・遺物の検出層準と分布

11に分けられた自然堆積層中，文化遺物の含まれているのは第１・２・３層である。

第１層は２つに細分したが，主たる包含層は第1b層である。第1b層中には，少なくとも古墳・弥生・縄文時代の遺物・遺構が残されている。古墳時代の遺物は少なく，わずかに３Ｈ区で，土壙墓と思われる掘り込みが検出されたのみである。弥生時代の遺物は０～２，Ｃ～Ｆ列の第1b層上半部から多く出土した。土器に較べ石片の量が顕著であった。この遺物分布域に重なって６基の方形周溝墓が発見されている。大小あるが，周溝の深さは第６層にまで及ぶものもある。このため周溝の壁や底に先土器時代の遺構・遺物が露出している例もある。縄文時代の遺物は第1b層下半部に多く，Ｃ～Ｇ列の稜線部以西と２Ｋ区でまとまって出土している。Ｃ～Ｆ列では住居址２基と土坑が，２Ｋ区では土坑が検出されている。２Ｋ区の土坑からは黒曜石の砕片が大量に出土しており，石鏃の製作と関連がありそうである。第2a層にまで沈んで発見される遺物はほとんどない。この他，一部には先土器時代の遺物も混入している。

第2b層中の遺物は全て先土器時代に属するが，時期的には大きく三つに分けることができる。新しい順に，それぞれ細石刃文化段階，尖頭器文化段階，ナイフ形石器文化段階である。これ

らは，平面的には分布位置を若干違える(別添第3図)。細石刃は1F区，尖頭器は1F東半・2F西半・1G・0H・1H・1I・1J区を中心にそれぞれ分布する。ナイフ形石器は，これら2者の分布域を除くほぼ全域に広がっている。これら三者に第3層のナイフ形石器群も含めて垂直分布を検討するために，全遺物を幅4mで東西方向の断面に投影してみた。その結果第2b層に含まれる三つの文化段階の遺物は，ほとんど全てが同層下半部の同じ層準に位置しており，文化層を区分することは困難であることがわかった。すなわち，通常の編年観からすると，これら三つの文化期の間，少なくとも2000年前後にわたってほとんど土層の堆積が進まなかったと考えることができる。このような堆積条件にあるため，第2b層中に含まれる全遺物をそれぞれどの文化期に属せしめるかの決定は，特に平面分布の境界周辺では困難であった。これらの詳細については，次節で述べる。

第3層から出土した遺物群は，全てナイフ形石器の時期に属する。平面分布は，第2b層のナイフ形石器群と全く軌を一にする(別添第4図)。垂直分布では第2b層の一群とは明瞭な間層を狭んで分離されるものである。遺物の垂直分布を単純に見る時には，その量は漸移しており必ずしも判然と分離し得ない場合も生じてくる。しかし，これは「ビーナス曲線」に代表される遺物の自然の移動に起因するものと解される。数多く発見することができた礫群の中心標高で垂直分布を検討すると，第2b層下半と第3層下半に各々分布の中心が来ることが一目瞭然である。このため，一応ここでは第3層下底面近くにこの遺跡が集中的に利用された一時期があると判断した。

概報の段階では，第2b層から第3層にかけてナイフ形石器を指標とする三つの異なる時期があると判断していたが，これは第3層上半部に中心標高を持つ礫群の存在が知られていたためである。しかし分布を検討した結果，これらの礫群は確かに他に較べて若干異なるレベルに位置してはいるが，間層が明瞭に認められるとか，石器群が全く異なるというように，異なる時期として把握する必要があるほどの違いとは判断できなかった。また礫群全体の中で，こうした傾向にあるものはあまりに少なく，これのみを異なる文化段階にあるものとして分離することの意義にも疑問が持たれた。このため，一応現段階では周辺の礫群と同じく第2b層下半を中心とする一群の一部として処理することにした。したがって本報告では，ナイフ形石器を中心とする文化段階は二つとしている。ただし，後述するように文化段階より細かな単位としては，第2b層のナイフ形石器群に異なる三つの居住時期を推定している。　(山下)

第5節　第2b層出土遺物の所属時期

第2b層出土の遺物が，大きく細石刃文化・尖頭器文化・ナイフ形石器文化に分けられ，基本的には，それぞれが異なる分布域を持っている事はすでに述べた。しかし一方では，部分的に分布の重なりが認められるのも事実であり，遺物と文化期の対応をどのように認定するかが大

きな問題となる。各文化期の遺物分布が接触あるいは重なる部分に限って，その処置法を述べておきたい。

1．細石刃群と尖頭器群

細石刃群と尖頭器群は，１Ｆ・２Ｆ21・１Ｇ北縁・２Ｇ１区で大きく重なって分布している(別添第５図)。一見すると両群の遺物が同時存在で，１Ｆ23・24区を中心とする石器ブロック(西ブロックと仮称)と２Ｆ21区を中心とする石器ブロック(東ブロックと仮称)の二つを形成しているかにみえる。しかし両石器群は基本的には編年的に出現する時期を異にすると考えられている。この編年観に従う限り，一応両石器群の遺物を分離して処理しなければならないことになる。二つの石器ブロックと見えたのは偶然の結果がもたらした見せかけに過ぎないことになる。

そこで，この二つの石器ブロック中の遺物を細石刃群と尖頭器群に分離できるか否かの検討を行った。その結果が，別添第５図である。方法としては，まず各々の石器群に属することが明瞭な遺物を抽出し，それぞれの分布傾向を見た。細石刃群に属する遺物としては，細石刃・細石核・細石核調整剥片・それらと同一個体に含まれる資料155点を選んだ(同図赤)。尖頭器群では，尖頭器・ポイントフレイク・それらと同一個体に含まれる資料255点を選んだ(同図青)。それらの分布図を作成してみると，西ブロックでは１Ｆ24区北西から同23区南東を通り１Ｇ３区中央を南北に抜ける線(Ｍ／Ｐライン)を境に，東では尖頭器，西では細石刃関係の遺物が他を圧倒していることがわかる。

西ブロックの方は，この分布結果から先のＭ／Ｐラインに従ってブロック内を二つの異なる領域に分離した。そして確実な細石刃群・尖頭器群に含まれない遺物群(同図黒)についても，どちらの領域に分布するかに従って，いずれかの石器群に含めて分析することにした。領域によって区分された遺物は細石刃関係125点，尖頭器関係440点である(第２表)。

一方東ブロックの方は，細石刃群と尖頭器群が完全に重なって分布しており，西ブロックの様に領域で分離することができなかった。このため，細石刃群・尖頭器群に属することが明瞭な遺物のみをまず抽出し，他については周辺に分布する他の石器・遺構(礫)との関係で，尖頭器群・細石刃群のいずれかで取り扱うこととした。

東・西のブロックには，石器の他，大量の礫が伴っている。これらは必ずしもその性格が明

第２表　西ブロック構成石器群の帰属

	形ナイフ石器	尖頭器	細石刃	Sc	ＲＦ	石斧	敲石類	台石	ＵＦ	剥片	砕片	石核	計
尖頭器群	0	24	0	0	3	0	0	0	4	167	50	7	255
細石刃群	0	0	103	0	0	0	0	0	8	36	2	6	155
尖頭器群*	2	0	0	0	1	0	3	2	32	218	180	2	440
細石刃群*	1	0	0	1	2	1	4	0	7	67	38	4	125
計	3	24	103	1	6	1	7	2	51	488	270	19	975

＊領域で区分された石器

かでないだけに細石刃群・尖頭器群のいずれに帰属させるかは，石器群以上に決定的要素に欠ける。

礫は，礫群・配石といった遺構やその他の散布礫として発見されている。それぞれについて南関東地方の事例をもとに歴史的変遷を追ってみると，ナイフ形石器文化段階には極めて普遍的であった礫群は，その終末期から尖頭器文化段階にかけて急速に衰退し，細石刃文化段階にはほとんど例を見ない。細石刃文化段階の礫群は，たとえ発見されたとしても構成礫数が20～30未満の小型で密集度の低いものである。配石は，ナイフ形石器盛行期にはほとんど認められず，礫群の衰退に伴って顕著になると言われている(金山1977)。しかし配石についてはその認定に個人差が大きいと考えられるので，この指摘がどれほどの普遍性を持つものかの追認はいまだに行われていないと理解される。地域差の可能性もあるが，たとえば我々の調査した寺谷遺跡の例などは，まさにナイフ形石器の盛行する段階にあるが，まとまった数の配石が認定されている(保坂1980)。そういった意味では不確定要素を多分に含んではいるが，当座問題になっている尖頭器・細石刃文化についてはいずれも配石は伴出し得るといえよう。散布礫はどうであろうか。「散布礫」という呼称で取り上げられた例はないが，極めて散漫に礫が分布する例であれば，ナイフ形石器文化段階・尖頭器文化段階・細石刃文化段階のいずれにも指摘し得る現象であろう。

このように，歴史的に見ると尖頭器文化段階と細石刃文化段階で違いが顕現し得るのは，礫群だけに留まるようである。そこで西ブロックに含まれる礫群を見てみると，密集度はかなり高く構成礫数も133点に達しており，細石刃文化段階に属するものと考えることは難しいと思われる。さらに，先に石器群の領域を区分した線を礫の分布図と重ねてみると，礫群は線上に重なりながらもわずかに尖頭器の領域に入っている。以上の結果から，西ブロックの礫群については尖頭器群に属するものとして本文中でも積極的に言及する。東ブロックの礫群も，西ブロックの例ほど顕著な集積度は見せないが，やはり細石刃群に認められる礫群とは分布・構成・礫の様相などに違いがあると考えられるので尖頭器群の中で扱うことにする。

配石・散布礫については，文化的にも分布状態の検討からも所属時期は決し難い。西ブロックに含まれるこれらについては，第Ⅴ章第1節で詳述するように，あたかも前述の礫群の占める場を意識するかのように，分布域を異にしている。この分布の事実に対する解釈を最大限評価すれば，礫群を尖頭器段階に含めた関係から，配石・散布礫も同時期と考えた方が妥当なように思える。しかし一方で，それらの主たる分布域は同ブロック中央から北半にあり，細石刃群の分布と大きく重なってくるのである。このため，配石・散布礫が細石刃群に伴う可能性もまた強いと言える。

このような関係から，西ブロックの配石・散布礫については，積極的な根拠は欠くが細石刃群でも折に触れて言及しつつ一般的に見て礫の伴出は尖頭器段階により普遍的であるという理由のみで，主として尖頭器群の中で分析・検討することとした。

東ブロックの配石も同様にそれのみではいずれともつかない。しかしながら，東ブロック周

第3表　東ブロック構成石器群の帰属

	ナイフ形石器	尖頭器	細石刃	Sc	RF	敲石類	UF	剥片	砕片	石核	計
尖頭器群	0	7			0	0	1	12	3	0	23
細石刃群	0		16		0	0	0	1	0	3	20
不明→尖頭器群	1			1	3	3	7	32	13	1	61
計	1	7	16	1	3	3	8	45	16	4	104

辺の石器群が尖頭器を主体とすること，尖頭器北群に伴う散漫な礫群と配石のセット関係に見る強い共通性などから，東ブロック北東部に位置する礫群との組み合わせをこれらの配石とし，尖頭器群に属するものと考えたい。

また，課題として保留してきた東ブロックで細石刃群にも尖頭器群にも積極的には組み込まれなかった石器群61点(第3表)も，配石の判断同様周囲の状況から一応尖頭器群に含めて説明することにする。

第Ⅳ・Ⅴ章で所属に問題のある遺物の取り扱いは，このようにして決定された。

ところで，我々の立場は従来の編年的枠組の中で，当然おこり得る細石刃と尖頭器の同時並存を，可能性としては認めつつも，実資料としてどれだけ把握し得るかという点で疑念を持つものである。そのために，本遺跡のような例でもことさらに二つに分離しようと努めているが，逆にあるがままの状態を積極的に評価し，これらのブロックに認められる事実を細石刃群と尖頭器群共存の証拠と捉えようとする立場があろうかと考える。後者の立場で見るならば，西ブロックの細石刃群の分布上の排他性と，それにもかかわらず両者を一つと見た場合のブロックとしてのまとまりの良さに，相互の存在の認識や石器の機能的使い分けを読み取ろうとすることもできる。後章ではこうした立場に立っての分析は行われていないので，本節で東西両ブロックの基本的な組成・礫との関わりについて触れておきたい。

第2・3表・別添第6図に東・西ブロックの石器・遺構の組成・分布を示しておいた。規模において，西ブロックの方が東の10倍ほどもあるが，内容的には相似形を示している。主だった石器である細石刃・尖頭器・使用痕ある剥片(以下ＵＦと略記)を見ると，細石刃でこそ6倍余りにしかならないが，他の二器種はまさに10倍近い値を示している。構成要素でも，西ブロックに分布する石斧が東ブロックでは欠落するものの，他の全器種を両者共に備えている。特に両ブロックともに，ナイフ形石器を含むことは注目される。いずれもナイフ形石器としての形態はあまり整っていない。

このような共通性に対し，すでに指摘したように分布では両者に著しい差が認められる。西ブロックでは細石刃群は西半に尖頭器群は東半にと，あたかも領域を分割し合ったように截然とした分布が認められる。一方東ブロックでは両者がほぼ完全に重なり，一体となって分布している。

これらに関連する遺構には，西ブロックでは第4・5・6配石(第49図)，第41礫群(第49図)，東ブロックでは第11(第50図)・16配石(第56図)，第5礫群(第50図)がある。第4・

5・6配石は，それぞれ1・2・6点の礫で構成されており細石刃群の分布が濃いブロック北西域に位置する。同じ区域には台石も分布する。第41礫群は，ブロック中央の南寄りに位置しており，尖頭器群と重なり一部が細石刃群の分布域にまで広がっている。東ブロックの第11配石は中央に，第16配石は南東のはずれに位置する。前者は単独礫・後者は2点で構成されている。第5礫群は，第11配石と重なりながら東北方向に伸びている。

この他，西ブロックには遺構として処理できない数多くの割れ礫が分布している。それらは非赤化のものも多く，また比較的離れての接合例も多い。他のナイフ形石器群に伴う礫にも，このように分散して発見される例はあるが，赤化礫が多く接合もこれほど頻繁にまた距離を持っては生じていない。一部第41礫群とも接合しており，あるいは礫群の一部が周辺に散った可能性もあるが礫群との接合関係はブロック南半で収束し，非赤化礫の接合は北半で収束する。他に本例のような接合状態が認められないだけに，特異性のみが強調される。

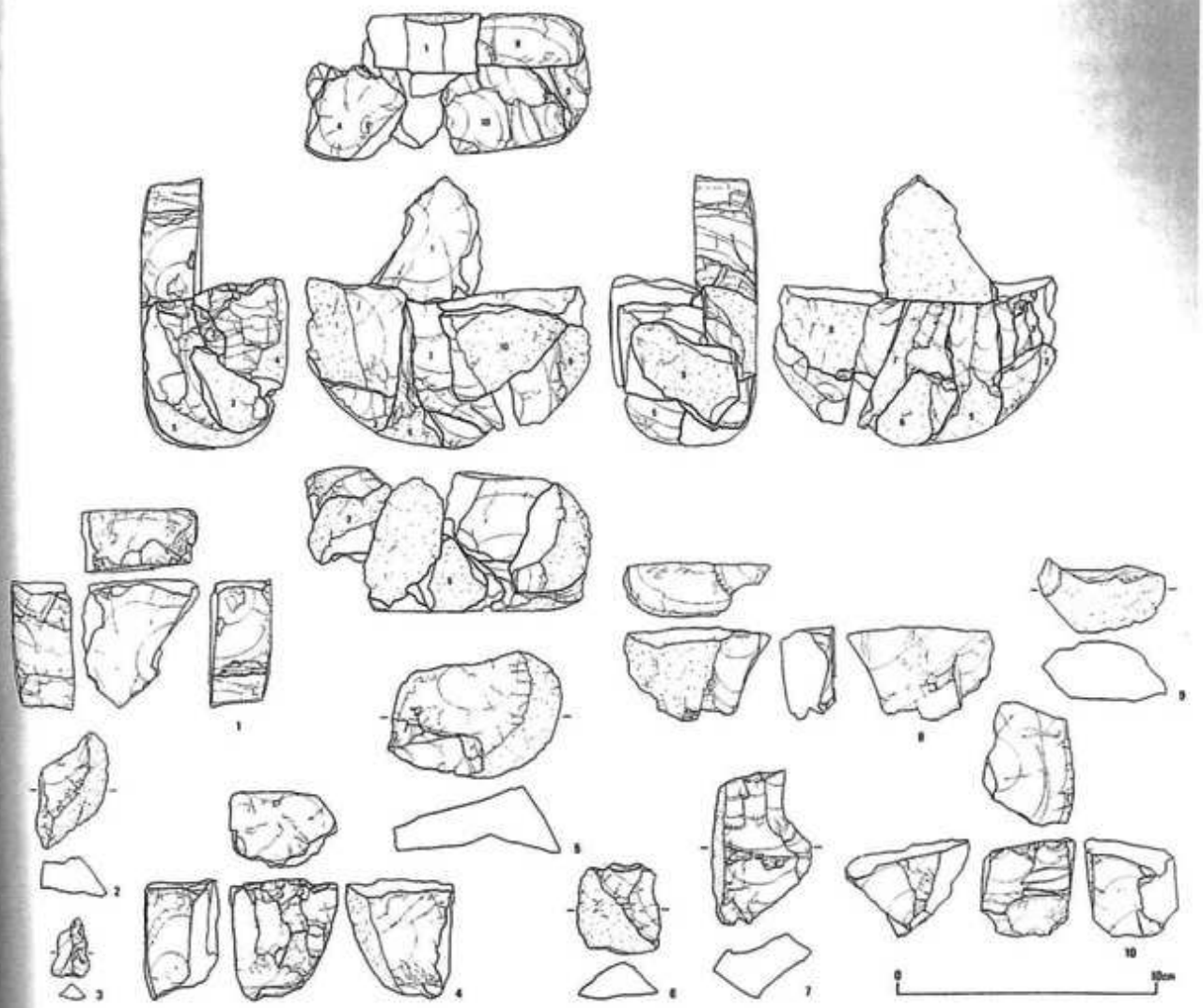
2．尖頭器群とナイフ形石器群

尖頭器群は遺跡の西半に，ナイフ形石器群は中央から東半に主たる分布域を持つ(別添第3図)。しかしナイフ形石器の出土をしてナイフ形石器群の分布域と見なすとすれば，極めて散漫にではあるが調査区西端近くにまでナイフ形石器群は広がっていることになる。その結果1・2F，1G，1H，1I区で尖頭器群の分布と一部交錯・重複することになった。厳密な意味ではそれらを二群に識別することは難しいが，尖頭器群と細石刃群の例に習い，尖頭器群は尖頭器とポイントフレイク及びそれらと同一個体別資料，ナイフ形石器群はナイフ形石器とそれらの主に分布する地域の個体別資料の広がりを指標にそれぞれの領域を区分した。

礫群・配石・散布礫もこの区分に従って分けた。その結果，第1礫群はナイフ形石器群に，第3・4礫群・第10配石は尖頭器群に帰属する所となった。1H区の第27礫群・第47配石は尖頭器群の石器ブロックに囲まれており，それらに属する可能性も高い。しかしながら，尖頭器群の特にH列以南ではほとんど礫群は伴わず，稀に配石が分布するのみである。一方で隣接するナイフ形石器群には礫群・配石が普遍的に伴っており，問題の礫群・配石の周囲にも数点ながらナイフ形石器の分布も認められる。これによって，第27礫群・第47配石は分布上は尖頭器群に近いが，ナイフ形石器群に含めて考えることにした。第V・VI章で分布上問題のある分析資料はこのようにして決定された。

この他，1F21・1G1区を中心に，所属時期のわからないブロックが広がっている。以下にその概要を説明する。

このブロックには定型的な石器が全く含まれず，また個体でも特徴的なチャートを中心に他とは孤立した状態にある。チャートは第15図に示すように接合にも恵まれ，個体を分割してそこから縦長の剥片を得る技術的特徴が明瞭に現れている。しかしこうした技術的特徴は，第V・VI章に示すようにナイフ形石器群にも尖頭器群にも認められるものであり，帰属を判断する材料とはならない。



第158図 チャート製石器接合図

石器組成は剥片14，石核３の合計17点である。14点を先のチャートが占めている。また，石核が３点と多いが，これもチャートが分割されたものである。剥片は縦長のものを取ろうとしているが，遺存しているものはいずれも不定形である。

礫は周辺に６点分布しているが，いずれも小さくあまり赤化もしていない。ブロック周辺は調査区西縁に沿う浅谷の底に近いためか，自然層中にも多くの小礫を含んでいる。非赤化礫の一部は，こうした自然礫との関わりが問われるであろう。（山下）

第Ⅳ章　細　石　刃　文　化

第1節　資　料　の　由　来

細石刃文化に属する石器は，合計338点ある。遺構や石器以外の遺物，たとえば礫・炭化物は検出あるいは識別をすることができなかった。その理由は，細石刃文化の遺物群の分布域や層準が，尖頭器文化のそれと近接して位置しているために，空間的に識別することができなかったこと，また礫自身が，時期区分の指標となるような特徴を有していないことの2点が主なものである。

この辺の事情をF・G列にある細石刃文化期の遺物群集中部の例で説明しておこう。ここには，細石刃や細石核等から構成されるブロック内や周辺部に，礫が分布している。この中には，熱を受けたもの，台石・配石として取り扱いうるものが存在している。しかしながら，ここには，尖頭器文化に属する石器群が重複して分布しているために，その帰属を決することができない。このような訳で，礫は基本的に本章の取り扱いの対象とはなっていない。第5章の尖頭器文化で一括して触れられる。

上記のような経緯によって，細石刃文化に帰属すると判断された石器群は，合計338点ある。これらは，遺跡の北・中央・南区の全域から出土している。すなわち，北は1C区から，南は1I区までの長さ約140mの範囲である。さらに，当該期の遺物は，遺跡の中央から西寄りの区域に分布していることも付け加えておかねばならない。

このように石器群は広範囲に分布するが，これらは集中部を形成する一群とこれをとりまいて，散漫に広く分布する一群とに分けて捉えることができる。前者を「**集中部**」，後者を「**周辺部**」として区別し以後の記述を行っていく。集中部の一群は明らかに一時期に一括して残されたものとして理解しうる。他方，「周辺部」の一群は，「集中部」とどのような関係にあるのか，あるいは「集中部」と有機的関連があるのかどうかは定かでない。ここでは，「周辺部」の一群を別個のものとして次節の末尾で取り扱うことにする。　（鈴木）

第2節　石　　器

1．集中部の遺物分布範囲と出土層準

集中部としたのは，北端の1F19区，南端の2G22区，東端の2G13区，西端の1G2区によって囲まれる東西約26m南北約28mの区域である。この中でも，とくに1F23・24・25区あたりに，きわだって遺物の密集する区域が認められる。これらの集中域を1a・1b・2の三つの

ブロックにくくり，その周辺の遺物をブロック外として取り扱うことにする(別添第7図)。

遺物の出土層準はどうか。発掘中の所見では，第2b層中部に石器出土レベルのピークがあると理解された。この点を遺物の垂直分布図との関係で確認しておこう。1a・1b・2ブロック出土遺物を断面図に投影したのが別添第7図である。これによると，第2b層上部～下部，一部は第3層上部に含包されていることになる。土層断面図は第3セクション(別添第1図)を用いたが，これは1F区中央を東西に走るもので，集中部の区画の北端よりさらに北2mのところに位置している。

地形図でも分かるように，遺跡は北から南方向にゆるく，そして東から西方向にもう少し急に傾斜している。発掘中に確認したところでは，第2b層下底線は1F区の幅20mの間で，南北方向に15cmほど傾斜している。そして，遺物の垂直分布図は，東西方向の地形の傾き具合をよく現している。

図中に投影された遺物出土地点の範囲は，南北幅12m分のものが含まれている。範囲内の地形傾斜を勘案すると，第2b層中部に出土層準の中心が位置していることが，頷かれる。念のため，第3セクションに一番近い，1F18・19区出土遺物に限って投影図を作成して検討した(図未掲載)。これによっても，第2b層中部から上部にかけて，集中的に検出されていることをはっきり読み取ることができた。

2. 集中部出土の石器

石器総数は311点である。細石刃・削器・使用痕ある剥片(以下UFと略記)・加工痕ある剥片(以下RFと略記)・敲石・磨石・ナイフ形石器？・石斧等からなる。トゥールの中でもっとも多いのは細石刃の127点，これにつぐのがUFの16点である。この他は，資料数そのものが少ないせいかわずかである(第4表)。なお，水洗選別によって得られた資料については第Ⅴ章第6節で述べる。

第4表　集中部出土石器集計表

(個)

A								B	C	D	計
細石刃	削器	UF	RF	敲石	磨石	ナイフ?	石斧	剥片	砕片	石核	
127	1	16	2	3	1	1	1	105	40	14(5)	311

水洗選別資料は含まない。( )内は細石核

1) 細 石 刃

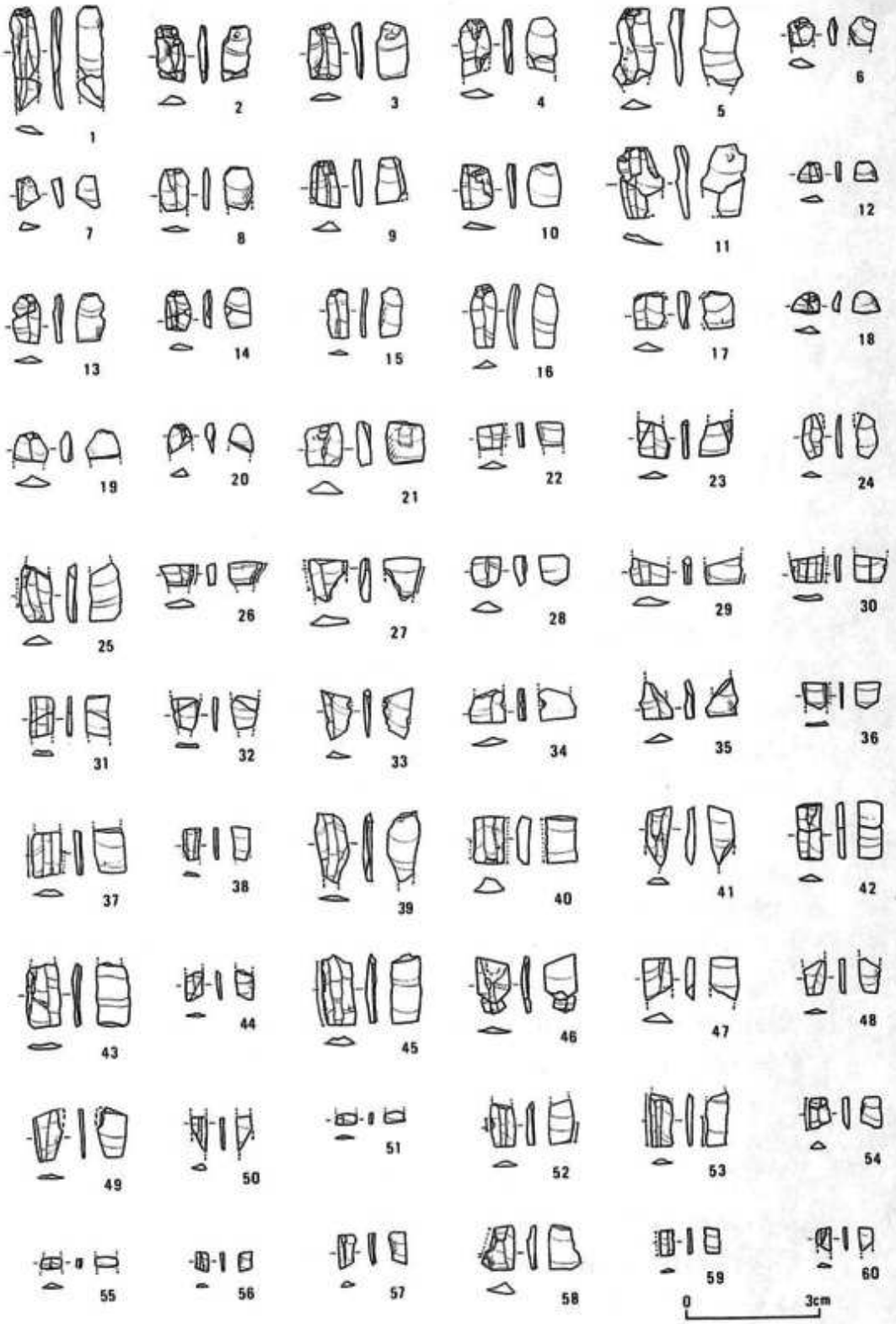
a) 部位別構成　細石刃は，127点ある。部位別の内訳は，完形14(第16図1～14)，頭部55(同図15～48，第17図1～21)，中間部46(同図22～60，第18図1～7)，尾部12点(同図8～19)である(第5表)。頭部がもっとも多く，中間部がこれにつぐ。完形・尾部はほぼ等量で他の部位に較べてかなり少ない。

第5表　細石刃部位別構成表

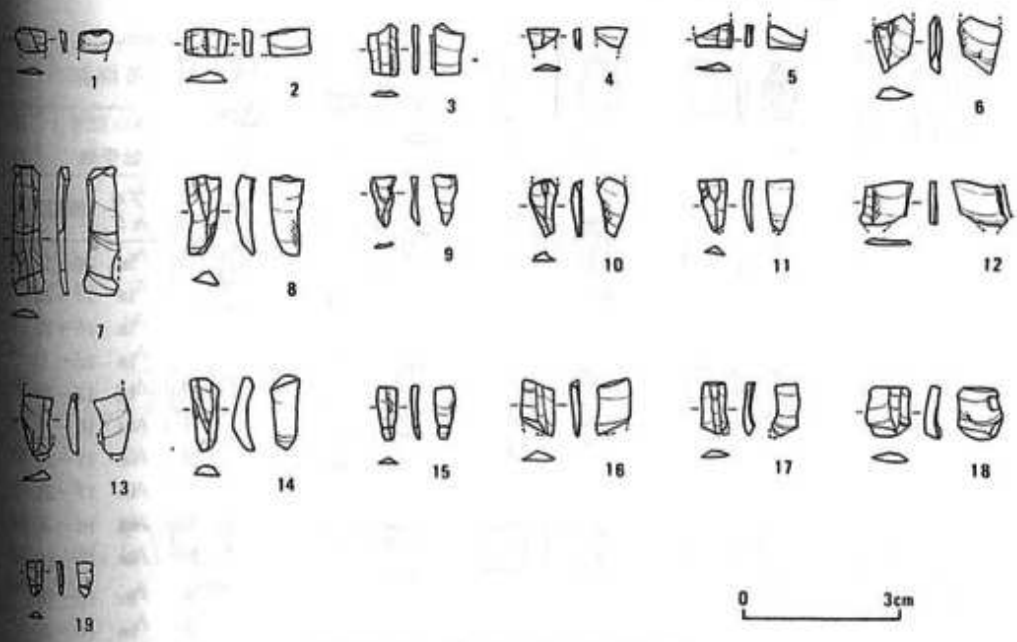
	完形	頭部	中間部	尾部	計
個数	14	55	46	12	127
%	11	43	36	9	99

部位区分について記しておく。「頭部」は打面を有

第16図 細 石 刃 実 測 図 (1)



第17図　細石刃実測図(2)



第18図 細 石 刃 実 測 図 (3)

するもの，「中間部」は打面と末端部を欠くもの，「尾部」とは末端部を留め打面部を欠くものを言う。細石刃の中にはジョレンを用いる発掘方法の為に，多数の欠損資料を含んでいる。したがって，厳密に部位判定をしえないものが当然含まれる。この場合，これらの資料を判定から外すことも可能だが，ここでは，現存状態でそのまま判定をすることにした。

末端部に欠損のある場合には，それが本来のものであれ，発掘作業中のものであれ，欠失部分の長さが3mm以下と考えられるものは完存状態と認定してある。一覧表では，完形例で発掘作業中に生じた欠損の認められる資料には，判定そのものに疑義なしとしないという意味で？を付し，数値にはカッコを付してある。

b）**計測値** 細石刃の大きさについて見ておこう(第6・7表)。大きさに関する数値については，新しい欠損のない例にもとづいて述べる。全例の中で最長の例は26mm，平均は12.5mmである。幅は最大10mm，平均6.6mmである。部位別の数値については第6表にゆずるとして，長さの平均値に関しては，完形例が他の部位に比して大きく，他の3部位はほぼ均等であること，幅の平均値に関しては，末端部に近づくにつれて少しづつ狭くなるという傾向を指摘しておく。

次に，長さと幅の全体的な出現傾向について触れておこう(第19図)。長さは，9mm以上12mmまでの階級が全体の40%を占め，これと前後する4mmの階級幅が，それぞれ16・18%を占める。すなわち，5mm～16mmの間に全資料の76%が集中する。ついでな

第6表 細石刃の計測値集計表 (mm)

		完形	頭部	中間部	尾部	全部位
長さ	最大	26.0	23.5	16.0	15.5	26.0
	最小	12.0	5.0	4.0	6.5	4.0
	平均	18.1	12.2	10.5	12.1	12.5
巾	最大	9.0	10.0	8.5	8.5	10.0
	最小	4.0	5.0	3.0	3.5	3.0
	平均	6.9	7.1	6.1	5.9	6.6

資料数：長さ71例，幅122例

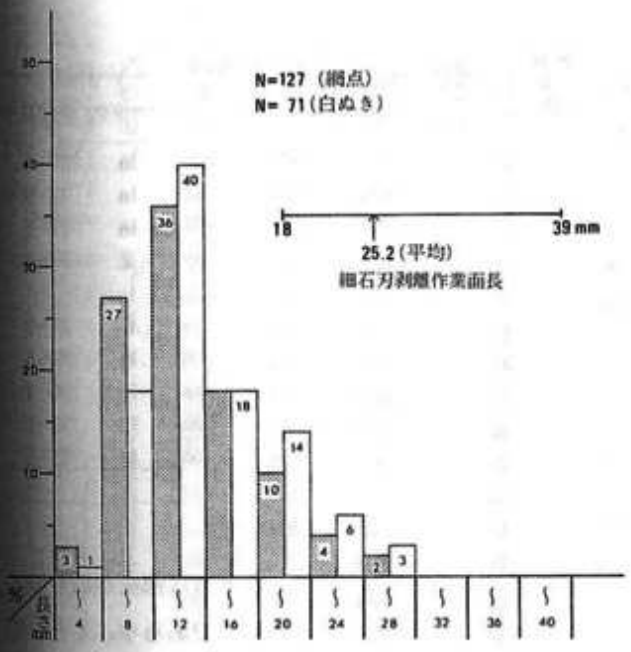
第7表 細石刃一覧表

※はM1・3・5・7，No.ゴチックは受熱

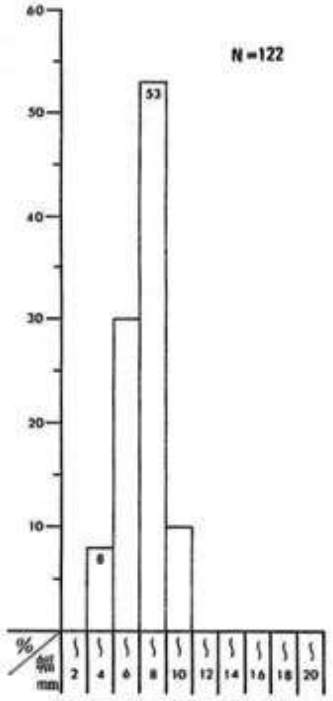
No.	遺物番号	長さ(mm)	幅(mm)	部位	微細剥離痕	石材	個体番号	標高(cm)	出土位置(cm) N	W	ブロック	挿図番号
1	1 F18	A 6 (16)	8	完	○	凝		848	236	232	Ia	16－2
2		A10 (6)	6	中	○	頁		—	318	160	Ia	17－22
3		A11 (9)	6.2	頭	○	頁		—	280	384	Ia	16－19
4		A12 26	9	完		頁		838	395	318	Ia	16－1
5		A13 (9)	7	中		頁	※	836	286	203	Ia	17－23
6	1 F19	A10 (17.5)	6.5	頭	○	頁	M 2	857	378	11	Ia	16－17
7		A11 10	5	中		頁		856	375	60	Ia	17－24
8		A13 (13)	7	中	○	頁		859	360	108	Ia	17－25
9		A16 16.5	7	完		頁		—	279	176	Ia	16－3
10		A19 (9.2)	8	頭		頁		846	350	39	Ia	16－16
11		A20 17.5	6	頭	○	頁	※	847	279	128	Ia	16－18
12		A26 19	5.5	完		頁	※	845	400	92	Ia	16－4
13		A29 12	7	完		頁	M 4	841	382	54	Ia	16－5
14		A32 10.5	8	頭		頁		840	27	77	Ia	16－20
15	1 F23	A10 11	7	頭		頁		858	230	352	Ia	16－21
16		A15 15.5	6.5	尾		頁	M 2	855	4	116	Ia	18－8
17		A17 (9)	8.5	中	○	凝		853	255	210	Ia	17－27
18		A21 (7.5)	7	頭		頁	※	862	104	329	Ia	16－22
19		A23 21.5	9	頭	○	頁		863	8	382	Ia	16－15
20		A30 (11)	7	頭		頁		851	104	280	Ia	16－23
21		A31 (11.5)	7.5	頭	○	頁	※	852	154	287	Ia	16－24
22		A33 (9)	7	頭		頁	※	852	205	372	Ia	16－26
23		A39 (18)	7	完		頁	M 2	848	124	22	Ia	16－6
24		A40 (14)	8	完		頁	M14	849	178	112	Ia	16－7
25		A43 (11)	8	頭		頁	M 5	846	82	163	Ia	16－27
26		A44 (6)	6	中	○	凝		846	102	302	Ia	17－26
27		A45 (14)	8	頭		頁		851	158	290	Ia	16－28
28		A47 9.5	4.5	尾		頁		845	123	373	Ia	18－9
29		A48 6	7	頭		頁		848	78	358	Ia	16－29
30		A52 6.5	7.5	頭	○	頁	M 2	840	8	209	Ia	16－30
31		A53 8	7	頭		頁	※	841	49	311	Ia	16－25
32		A55 12	6	頭	○	頁	※	843	138	380	Ia	16－34
33		A56 11	6	頭		頁		843	133	362	Ia	16－33
34		A57 (13)	9	頭		凝		838	93	176	Ia	16－32
35		A58 17	7.5	完		凝		840	126	247	Ia	16－8
36		A60 17.5	7	完		頁	M 4	839	224	277	Ia	16－9
37		A62 15	7	頭		頁	M 2	838	251	282	Ia	16－35
38		A63 8	6	頭		凝		839	240	222	Ia	16－36
39		A69 6.5	6.5	中		頁		835	169	80	Ia	17－28
40		A73 (11)	5	尾		頁	※	835	123	78	Ia	18－10
41		A76 (6)	7.5	中	○	凝		835	286	146	Ia	17－30

図	遺物番号		長さ(mm)	幅(mm)	部位	微細剥離	石材	個体番号	標高(m)	出土位置(cm) N	W	ブロック	挿図番号
42	1 F23	A 80	10	5.5	尾		頁		834	120	152	Ia	18－11
43		A 83	10	6	頭		頁	※	839	68	380	Ia	16－38
44		A 85	(5.5)	7	頭		頁		834	189	212	Ia	16－39
45		A 90	14	6.5	頭	○	頁	M 2	834	203	253	Ia	16－40
46		A 100	(6)	8	中	○	凝		827	193	134	Ia	17－29
47		A 101	(8)	10	尾	○	凝		828	244	211	Ia	18－12
48		A 102	(9)	5.5	中		頁		830	254	230	Ia	17－31
49		A 115	(12.5)	7.5	頭		頁		822	335	127	Ia	16－41
50		A 118	20.5	7	頭	○	頁	M14	831	64	310	Ia	16－31
51		A 122	17	9	頭	○	凝		822	185	284	Ia	16－37
52		A 125	(7.5)	6.5	中		凝		822	230	286	Ia	17－32
53		A 133	(7)	(4.5)	頭		凝		816	160	241	Ia	16－42
54		A 153	11	6.5	中		頁	M 4	851	104	280	Ia	17－33
55	1 F24	A 11	(7.5)	8	中		頁		866	200	147	Ia	17－34
56		A 13	12	7	頭		頁	M 1	866	126	102	Ia	16－44
57		A 14	20	7	完		頁		866	116	117	Ia	16－10
58		A 17	11	7.5	頭		頁	M14	865	85	18	Ia	16－45
59		A 20	22	8	頭		頁	M 1	854	17	72.5	Ia	16－43
60		A 39	(9)	7	中		頁	※	858	102	114	Ia	17－35
61		A 42	16	8	完		頁	※	857	72	193	Ia	16－12
62		A 48	13	9	頭		頁	M 1	863	293	192	Ia	16－46
63		A 66	17.5	6	頭		黒	単独	859	107	237	Ia	16－47
64		A 93	19.5	7	頭		頁	M 4	856	253	359	Ib	16－48
65		A 102	(6)	5.5	中		頁		846	0	39	Ia	17－36
66		A 103	12	7.5	頭		頁	※	845	3	55	Ia	17－2
67		A 105	13	7	頭		頁	※	845	197	84	Ia	17－3
68		A 107	(23.5)	6	頭		凝		—	7	38	Ia	17－1
69		A 121	13	7	頭		頁		—	117	246	Ia	17－4
70		A 123	(6.5)	4	中		頁		851	74	251	Ia	17－38
71		A 132	(10)	7	中	○	頁	単独	844	61	145	Ia	17－37
72		A 133	(18)	9.5	頭		頁	M 5	844	164	90	Ia	17－5
73		A 134	(16)	8	中		頁		845	122	67	Ia	17－39
74		A 138	11	7.5	中	○	頁		842	59	113	Ia	17－40
75		A 157	(6.5)	6	頭		頁		840	106	52	Ia	17－6
76		A 158	23	6	完		頁		843	189	149	Ia	16－13
77		A 178	13	6	中		頁		837	259	77	Ia	17－41
78		A 182	7	5	頭		頁		850	154	386	Ib	17－7
79		A 217	(9.5)	7	頭		頁		838	101	88	Ia	17－8
80		A 219	13	6	中		頁	※	838	34	18	Ia	17－42
81		A 238	(15)	8	中		頁		834	96	2	Ia	17－43
82		A 240	16	7.5	中	○	頁	M 4	838	4	143	Ia	17－45
83		A 290	(6.5)	4	中		頁		826	283	103	Ia	17－44
84		A 304	11	7	頭		頁		832	163	110	Ia	17－9
85		A 305	13	7	中		頁	※	830	145	85	Ia	17－46
86		A 306	16.5	10	頭		頁		824	170	30	Ia	17－11

No.	遺物番号	長さ(mm)	幅(mm)	部位	敲打剥離細密	石材	個体番号	標高(cm)	出土位置(cm) N	W	ブロック	挿図番号
87	A 310	(10)	6.5	中		頁	M4	832	53	81	1a	17−47
88	1 F24 A 341	(8)	5	中		頁		826	308	128	1a	17−48
89	A 342	10	7.5	頭		頁		826	151	91	1a	17−10
90	A 362	10	4	尾		頁		820	73	137	1a	18−15
91	A 381	(12)	(7)	尾		頁		812	306	72	1a	18−13
92	A 387	5	5.5	頭		頁		812	243	162	1a	17−12
93	A 397	(7.5)	3.5	中		頁		865	85	18	1a	17−50
94	1 F25 A 8	11	6	頭		凝		874	394	309	2	17−13
95	A 9	9	5.5	頭		凝		869	299	256	2	17−14
96	A 12	11.5	(6.5)	中		凝		872	301	289	2	17−49
97	A 30	(3)	5	中		頁		862	109	99	1b	17−51
98	A 37	(10)	5.5	中	○	凝		866	343	224	2	17−52
99	A 42	(12)	5	中	○	凝		863	399	373	2	17−53
100	A 43	11	5	頭		凝		868	316	340	2	17−15
101	A 44	7	5	中	○	頁		864	286	393	2	17−54
102	A 52	(2.5)	5	中		頁		851	395	49	1b	17−55
103	A 63	10	7.5	中	○	頁		850	108	60	1b	17−58
104	A 72	4	3	中		頁		851	217	86	1b	17−56
105	A 81	7.5	4	中		凝		850	370	100	1b	17−57
106	A 188	6	3	中	○	凝		847	276	353	2	17−59
107	A 215	14	5.5	尾		凝		843	220	241	2	18−14
108	2 F16 A 25	14.5	5.5	頭		頁		886	208	301	外	17−16
109	A 75	5	6.5	頭		凝		—	—	—	外	17−18
110	2 F21 A 11	10	8.5	尾		頁		864	353	15	2	18−18
111	A 25	(5)	3.5	中		凝		869	281	46	2	17−60
112	A 30	(4.5)	7	中		頁		864	348	28	2	18− 1
113	A 36	(14.5)	6	完		凝		856	364	88	2	16−11
114	1 G 3 A 36	8.5	(7)	頭		頁		835	15	162	1a	17−17
115	A 51	5	(8)	中		頁		831	94	255	1a	18−12
116	A 78	11	6.5	尾		頁		823	143	285	1a	18−16
117	1 G 4 A 32	10	6.5	中	○	頁		851	57	304	1b	18− 3
118	A 108	10	9	頭		頁		825	224	33	1a	17−21
119	1 G 5 A 13	(6.5)	5.5	頭		凝		854	117	206	2	17−20
120	A 15	10	5	尾	○	凝		856	55	275	2	18−17
121	2 G 1 A 6	(14)	4	完	○	凝		867	72	114	2	16−14
122	2 G13 A 290	(4)	6	中		頁		870	335	172	外	18− 4
123	2 G18 A 202	6.5	3.5	尾		頁		879	36	187	外	18−19
124	2 G21 A 3	(4.5)	7	中		頁		862	389	376	外	18− 5
125	2 G22 A 3	(7)	8	頭		凝		860	259	48	外	17−19
126	A 4	(11)	8	中		頁		865	234	190	外	18− 6
127	A 6	25	7	中		頁		867	388	244	外	18− 7



第19図 細石刃長計測値出現頻度図



第20図 細石刃幅計測値出現頻度図

から，欠損資料を含めた127例（同図網点部）に関する集計では，当然ながらより小さい値に傾斜している。

幅では7～8 mmの間に53%，5～6 mmの間に30%が収まる。5～8 mmの間に80%が集中することになる（以上は，幅に欠損のない資料122例の集計結果。第20図）。

c）**細石刃の截断** 先に記した細石刃の部位別構成数から，細石刃の截断について見ておこう。完形11：頭部43：中間部36：尾部9%という構成比は，西日本の細石刃文化の諸例と共通する（織笠1983・栗島他1982・堤1984・鈴木次1979）。これに細石刃の長さに関する数値の実情を考慮してみると，截断の実態がわかる。

このためにはまず一度，細石刃の剥離される細石核5例および細石刃剥離作業面を留める調整剥片4例を加えた資料から，最大どれくらいの長さの細石刃が剥離されているかを見ておこう（集中部出土例に限る）。合計9例中，最長は39mm，最小は18mm，平均25.2mmである（第8表）。

この平均長は細石刃の全部位平均長12.5mmのほぼ2倍であり，頭部と中間部の平均長の合計22.7mmより，2.5mm長い値ということになる。これから，細石刃の截断は，一言で言えば，一本の細石刃を均等な3部分に分割するというよりも，頭・中間・尾部の平均長10.5～12.2mmほどの細石刃を得ることを目的としていると考えるのが妥当であろう。

もう少し数値を詳しくみると，全部位の最大長26～15.5mmという値を上限とし，全部位の最小値4～12mmを下限とするような範囲に，目的とする細石刃の大きさが求められていたと考え

第8表　細石核作業面表・打面角計測値一覧表

No.	遺物番号	分　類	打面角	剥離作業面長(mm)	個体番号	標高(cm)	位置(cm) N	位置(cm) W	ブロック	挿図番号
1	1 F19　A 8	細石核	91°	29	(M 2)	865	214	121	Ia	27−1
2	1 F23　A 3	〃	84°	24	M 5	857	359	114	Ia	27−3
3	1 F24　A383	〃	105°	25	M 1	808	109	69	Ia	27−5
4	1 F25　A45	〃	a84°，b85° c84°，d81°	20	—	866	358	330	2	27−4
5	2 F21　A32	〃	88°	21	—	863	290	45	2	27−2
6	1 F19　A17	調整剥片	97°	28	M 1	859	371	8	Ia	32−3
7	1 F23　A51	〃	a91°，b94°	23	(M 5)	845	123	313	Ia	26−7
8	1 F24　A110	〃	95°	18	M 1	843	117	380	Ib	32−1
9	1 F24　A150	〃	87°	39	M 3	841	273	28	Ia	33−5
平均			89°	25.2						

た方がより実情に近いかもしれない。

したがって，実際の作業では，末端などを主として，部厚く湾曲したような部分が取り除かれ，残余の部分は長さに応じて分割されたり，そのまま用いられたりしたであろう。また，完形14例が26〜12mmの値に収まることは，26mm以下の長さであり，かつとくに形態上にいびつな部分がなければ，截断されることなく用いられ得たであろうし，逆にこれ以上の長さの場合，たとえばフルーティング面長39mmの例などは，截断されることが多かったこと示唆しているように思われる。

d）微細剥離痕　細石刃の中には，刃部に微細な剥離痕を留める例が29点ある。全体の23%である。使用痕を有する例の部位別の出現状況は以下のとおりである。完形は，14例中2例(14%)，頭部は55例中10例(18%)，中間部は46例中15例(33%)，尾部12例中2例(17%)である。中間部が一番多く，33%を占める。

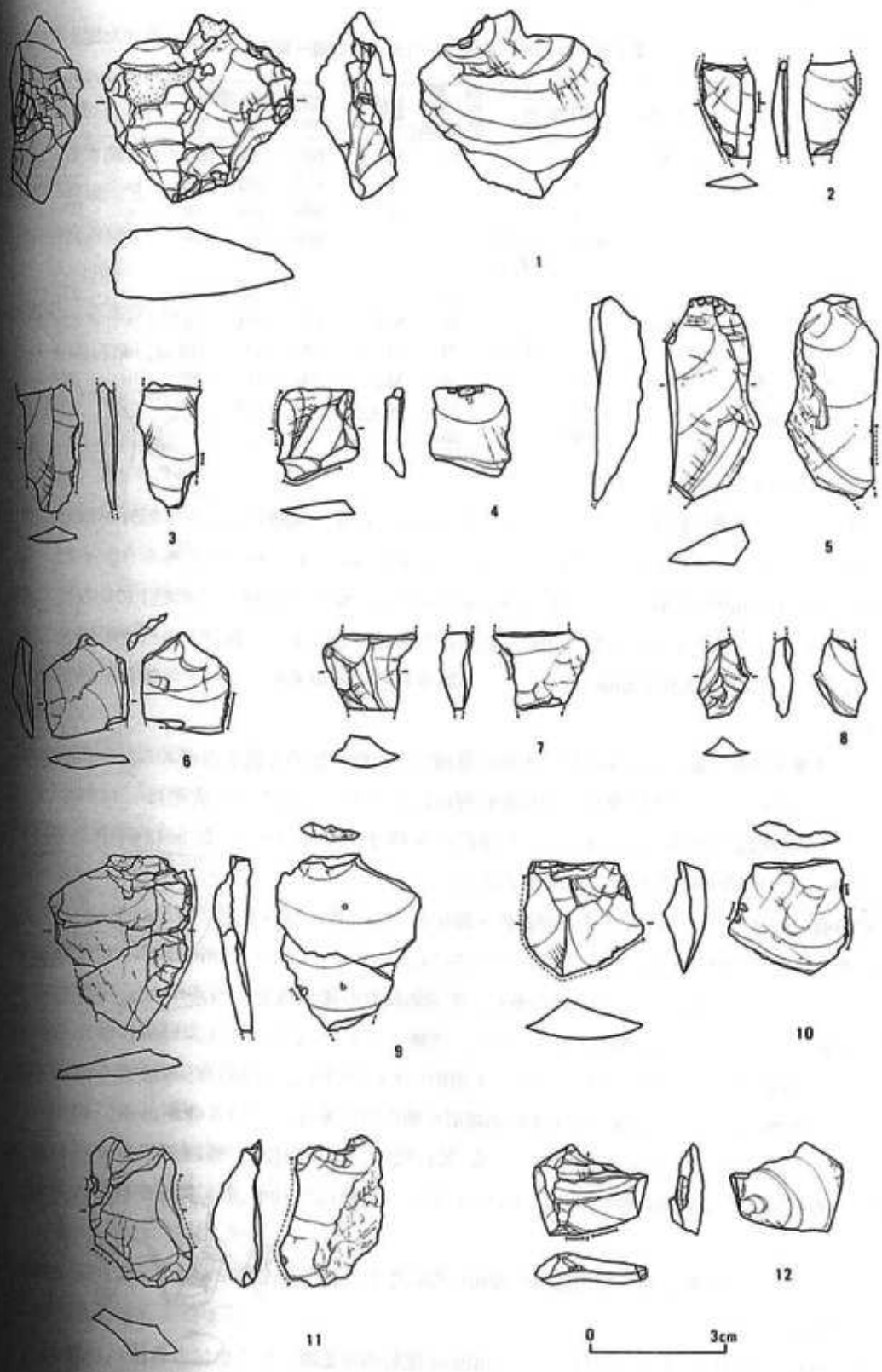
剥離痕の性状について，大きさ・連続性・部位との関連等について記しておこう。

剥離痕はマイクロフレイキングと呼ぶにふさわしいもので，0.3〜3 mmほどの大きさである。0.5〜1 mmくらいの大きさの例が多い。微細剥離痕の連続性という点では，刃部数37例中，連続するもの22例，不連続のもの16例で，連続するものの方が多い。しかしながら，これらは剥離痕の大きさ，並び方などの点で不規則なものが多い。連続した剥離痕を留める例のうち，2例に，0.5〜1 mmの大きさの剥離痕が規則的に連なっている例がある。細かなリタッチとも呼び得るような状態を留めている(第17図26，第18図12)。微細剥離痕の現れる場所が，腹面側であるか背面側であるかは別にして，二側縁にこれが認められるものは9例ある。

このような刃部に現れた微細剥離痕は使用の際に生じた使用痕と見ておきたい。

2）削　　器

出土例は1点だけである(第21図1)。小型の不定形剥片を取った円盤状の石核が残核となった後，削器に転用されたものである。左側縁には急峻な加工が，右側縁には平坦な剥離が施さ



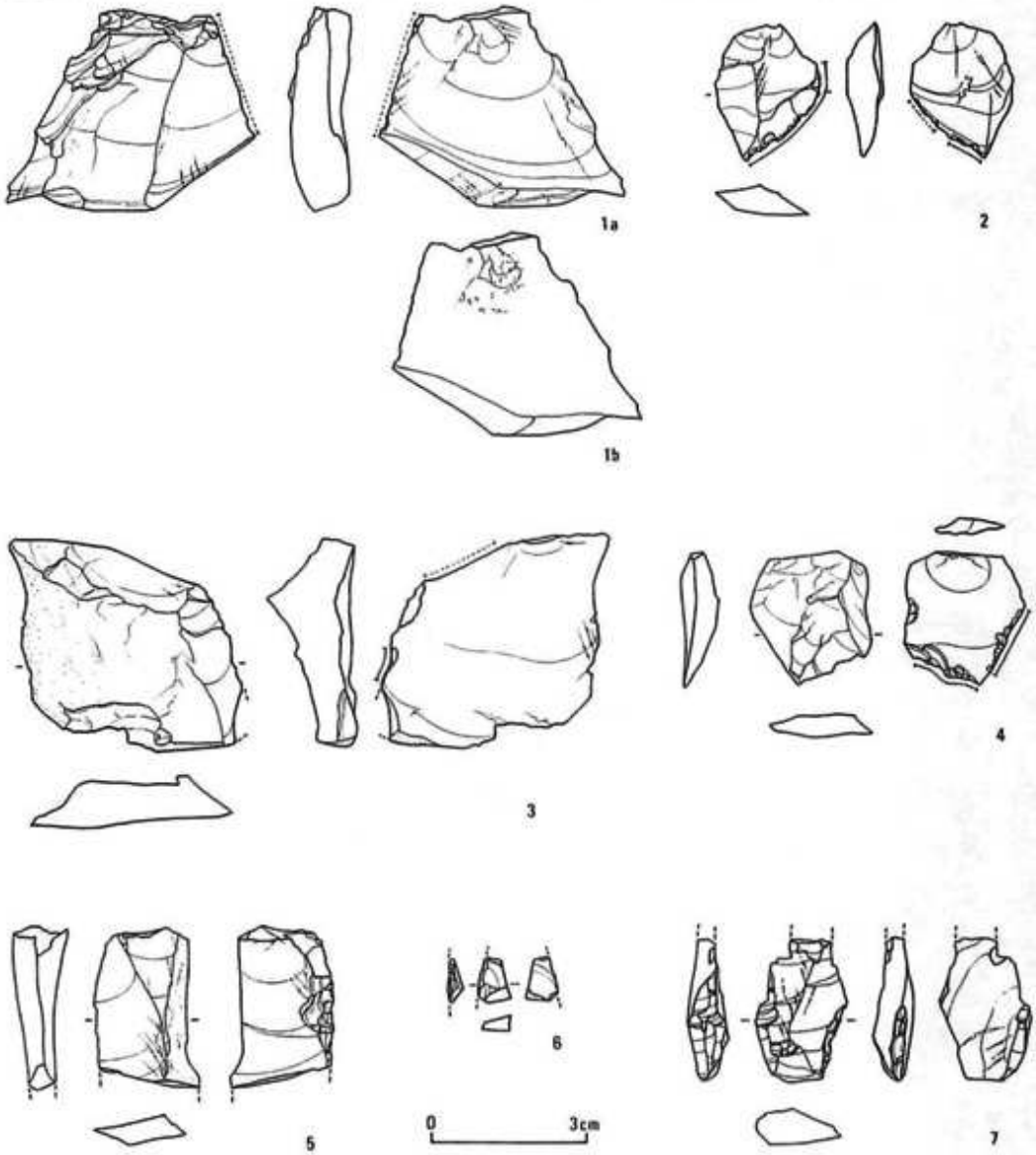
第21図 削器・使用痕ある剥片実測図

れている。フラットな素材の縁辺に，規則正しいスクレイピングエッジを設けた定形的な削器ではない。チャート製。個体別資料M13所属。

3）使用痕ある剥片（ＵＦ）

ＵＦの抽出は，以下のような基準によっている。微細な剥離痕が数面以上連続すること。非連続の場合には近接して幾つか認められ，その範囲が一定の長さを有すること。単独の微細剥離痕を有する例は，とりあげないことである。なお，この判定の目安は，以下の各章についても同様である。

ＵＦは計16点ある。このうち接合資料が１例あるので，実質的な数量は15である。使用痕の位置と連続・不連続については，破線と実線で図中に示した（第21図２～12，第22図１～４）。



第22図　使用痕ある剥片・加工痕ある剥片・ナイフ形石器？実測図

素材は縦長というよりも幅広のずんぐりしたものが多い。本遺跡では縦長剥片を規則的に取る剥離作業は認められない。したがって，これらの素材は細石核の調整過程(第21図10・12，第22図1・2・4)や，細石核の素材の剥出過程で生じたと思われる，鋭利な縁辺を有する剥片が用いられることになる。

UFの中に明瞭な擦痕を有する例が1点ある(第22図1b)。腹面の打点部付近にあって，打瘤がもっとも顕著に突出する部分の右側⅔ほどの区域にある。同時にバルバスカーの内部のいわば凹んだ部分にもある。長径0.5cmほどの楕円形で，えくぼのように明瞭にくぼんでいる。列点状に直線的に並んだ擦痕列は，たがいに平行している。

1×1cmほどの範囲に観察される列点状擦痕は，剥片の縁辺にまで伸びず，縁辺にそった使用痕との連続性は窺えない。

4) 加工痕ある剥片（RF）

RFは　例ある。縁辺に加えられた二次加工は明瞭であるが，加工が不規則であったり，欠損のため本来の形が推定できなかったりする例を一括した。石刃状の縦長剥片の主剥離面側に大きさの不揃いな加工のあるもの(第22図5)と細片(同図6)とである。

5) ナイフ形石器？（Kn？）

横長不定形剥片の一端にきれいな調整加工が施されている。ナイフ形石器であろうか(第22図7)。調整加工そのものの性状や素材の用い方など，ナイフ形石器とするには，いささかの躊躇がある。

素材は細石核の右側面を正面側から剥ぎ取った調整剥片であろう。剥片の左側面には，数条のフルーティングの痕跡を留めていると見られる。個体別資料M4の一員で，この中には6点の細石刃が含まれる。（鈴木）

6) 敲　石

掌にすっぽりおさまるほどの手頃の大きさの円礫を用いた例2点と，これよりやや大きめの円礫を利用したものとがある。

1．長さ9.1cm，幅6cm，厚さ4.4cmである。卵形に近い自然礫を用い，両先端部にごく軽微なあばた状の敲打痕を留めている(第23図1)。使用頻度は軽度ながら，敲打されている範囲は広い。砂岩製で重量は310gである。敲石類分類1a類(黒坪1982・83・84)。[1)]

2．長さ8.3cm，幅6.9cm，厚さ2.9cmである。扁平な円礫を素材に，周縁部に軽微な敲打痕を有するものである(同図2)。全周のほぼ4分の3ほどに敲打痕は及ぶが，帯状の面取りを生じるほど使用頻度は高くない。硬質の砂岩製で重量は220gである。Ⅲ類。

3．長さ12.6cm，幅10,4cm，厚さ3.7cmである。やや不定形で扁平な円礫で，側縁部に部分的な敲打痕を残している(同図3)。ほぼ半周に及ぶ敲打痕は，明確ながら軽微なものと言える。砂岩製で重量は600gである。Ⅲ類。

7) 磨　石

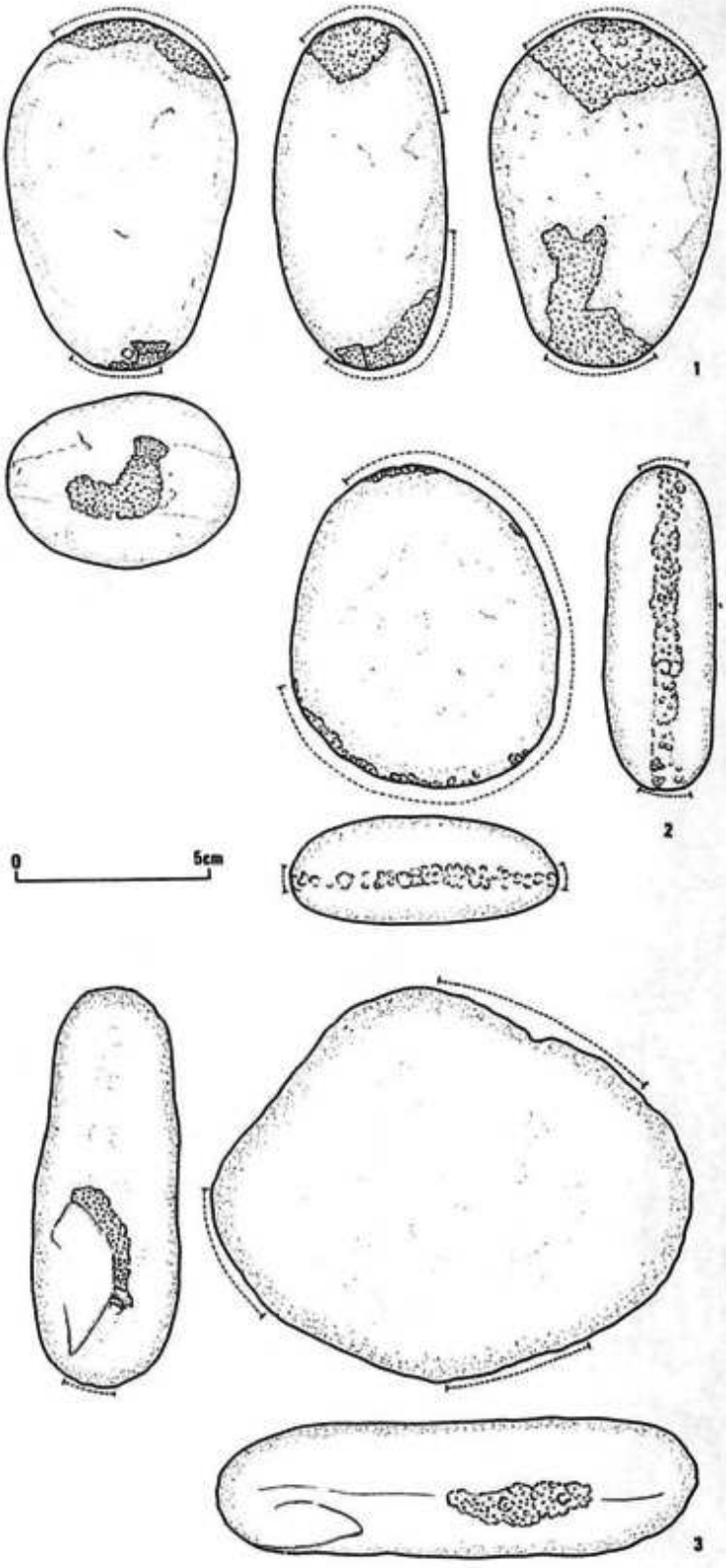
長さ9.2cm，幅7cm，厚さ4.6cmである。やや扁平な楕円形の礫を使い，片方の先端部にの

み，打撃による剥離痕をとどめている(第24図)。割れの程度は軽度のもので，使用頻度は高くない。硬い砂岩製で重量は390g。Ⅶa類。　　(黒坪)

8) 石　斧

磨製石斧である(第25図)。全体の体形を，粗い打剥によって楕円形の握槌状に調整した後，少なくとも片側の中央部全面を丁寧に研磨している。研磨が上端から下端まで満遍なく行き届いていることから考えて，おそらく両刃の石斧であったであろう。裏面側の下端にも明瞭なステップフラクチャーを呈する剥離痕があって，作業時の欠損を示している。裏側全体が，使用時等の欠損によって，本来の加工状態を失っていると思われる。

表側右下にも，階段状の剥離痕があり，この剥離面の刃部寄りはきちんと研磨されている。このステップフラクチャーが，当初の調整加工時のものでなく使用時に生じたものであるならば，これは作業中に欠損した刃を研ぎ直したことを示してい



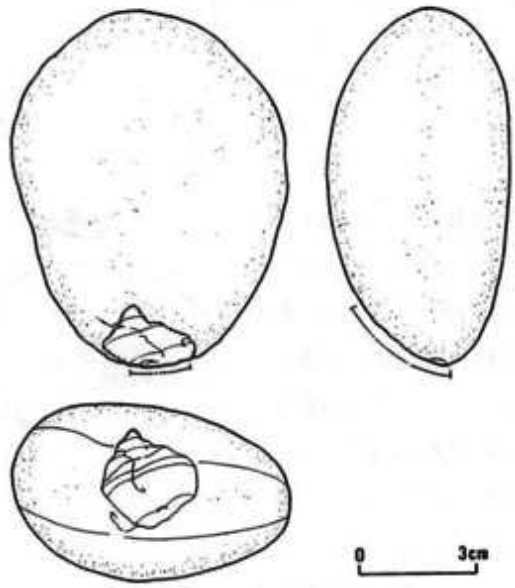
第23図　礫 石 実 測 図

る。砂岩製。1 F24区出土。

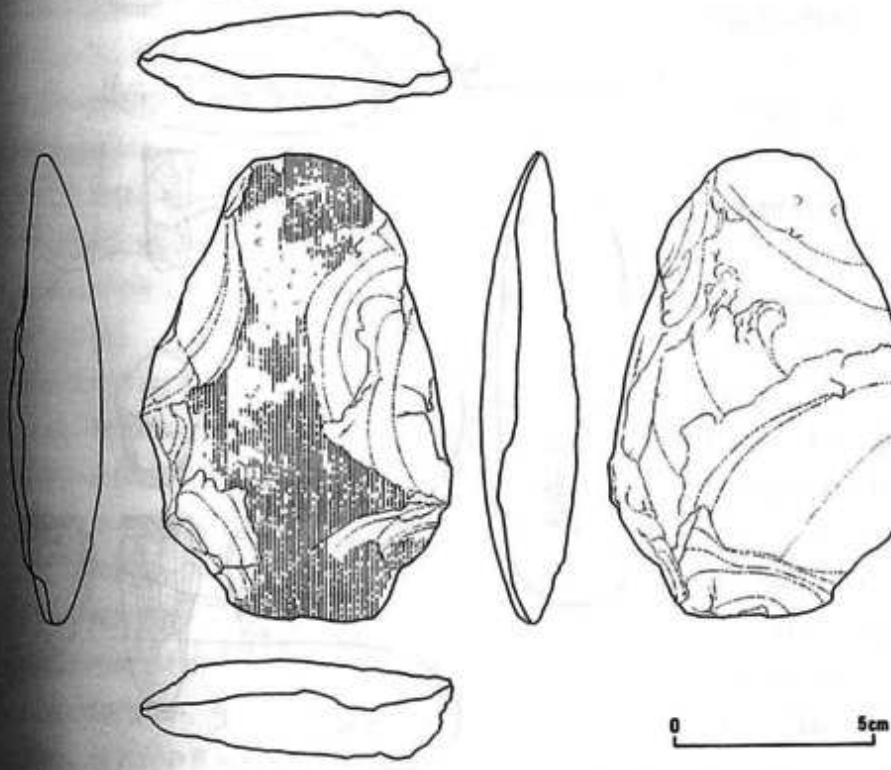
9）剥　　片

剥片は105点ある。この剥片の抽出基準は単に資料の大きさにもとづいている。トゥール（石器分類A）・砕片(C)・石核(D)以外の資料を剥片(B)としている。当然のことながら，ある種のトゥールとして用いられた剥片は集計上含まれていない。

剥片はおおむね3種類の作業に伴って生じたものであると考えられる。第1は，細石核の様々な調整作業の中で生じたもの，第2は，細石核の素材を割りとる過程で生じたもの，第3は，砂岩製の円礫を粗割りした際に生じた。大型で部厚い剥片（個体別資料M 9，第36図）を主とするものである。この他に，石刃に似た例も若干あるが，上記3種以外には剥片剥離作業のまとまった資料を欠くので，本遺跡では，こうした素材が生じ得るような



第24図　槍石実測図



第25図　磨 製 石 斧 実 測 図

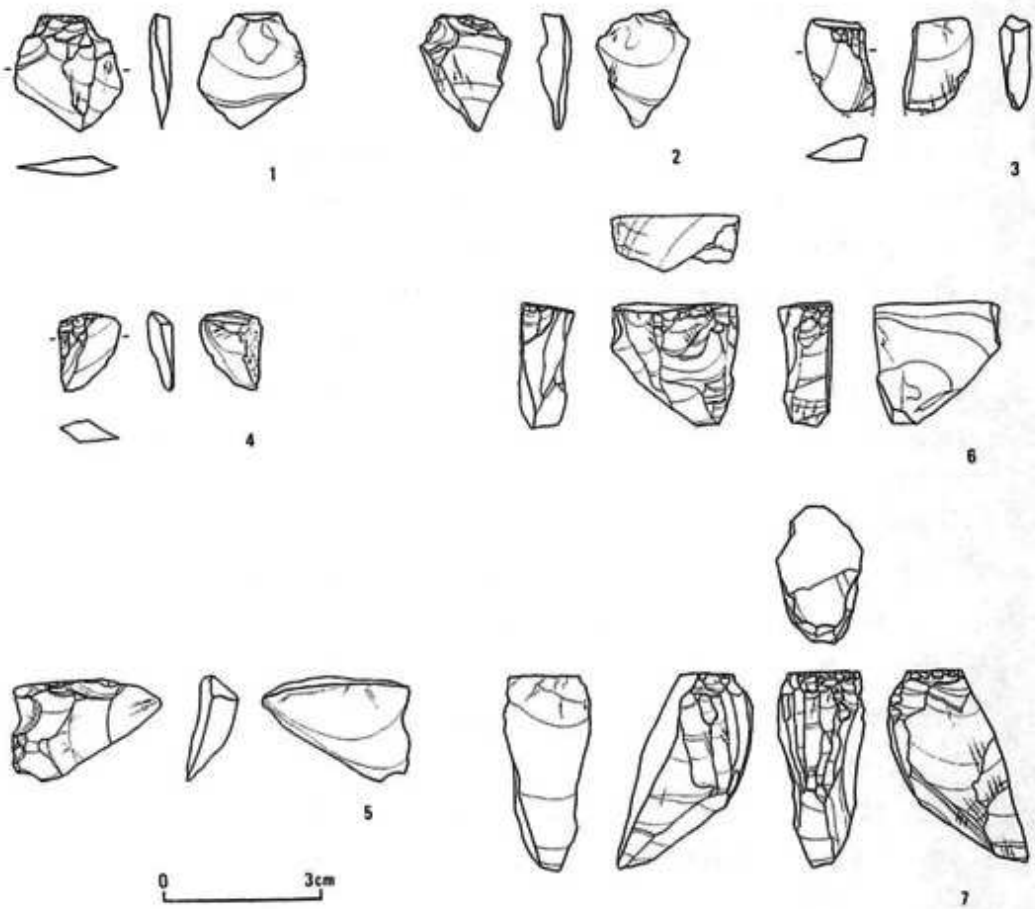
作業があったとは，積極的には言えない。したがって，石刃状の資料も，上記3種のうちのいずれかの作業で生じ得たものであると考えておく。

第1の細石核の調整作業の結果として生じた剥片は，接合(個体別)資料の検討の中で主として明らかになってきたものである。個体別資料M1・3の中で多く摘出されている(第32・33図)。

これらは，剥片の中でとくに目立った特徴をもっている。その特徴を簡単に記しておくと次下のようになる。側面調整によって生まれたものは，長くて部厚い打面を留め，幅広の逆三角形状の剥片となることが多い(第26図1～5)。背面側の剥離痕は，細石核体側部の剥離面の特徴をよく留めている。細石刃剥離作業面に接した部位から取られたものは，一部にフルーティングの痕跡を有している(同図6)。作業面再生によって生じた剥片は，背面の主要部をフルーティングが占めており，「し」の字状を呈する側面観と大きな打面に特徴がある(同図7)。

細石核調整剥片は基本的に個体別資料の呈示の中で行うので，ここでは他のいずれの項目でも扱われない資料のみ図示しておく。

以上のような特徴を有する調整剥片は，砕片分類の2例を含め合計28点ある。この他に，U



第26図　細石核調整剥片実測図

F(分類A)として用いられた例が5点，ナイフ形石器？(分類A)が1点ある。調整剥片としたものは，非個体別資料においても，そして個体別資料の非接合資料においても，上記の特徴を明瞭に具えているものに限定して，台帳にその旨記してある。本遺跡の多くの作業が，細石刃の剥離作業に結び付いているので，細石刃以外の剥片は，何等かの意味で石核の調整に関連した剥片であるというのが実情である。

第2の作業で生じた剥片類は，細石核の素材剥取作業を主に反映したと考えられる，個体別資料M7・8の中におけるものが主体を占める(第34・35図他)。

10) 砕　片

砕片は40点ある。砕片は1cm四方の桝目に入る小型の剥片を一括している。当然のことながら，目的的な製作物ではなく，細石刃や石核素材の剥取過程において付随的に生じたものであろう。

11) 石　核

ここでは，a)細石核，b)細石核ブランク，c)細石核素材，d)細石核以外の石核を扱う。

a) **細石核**　はじめに5例の資料を概観しておこう。

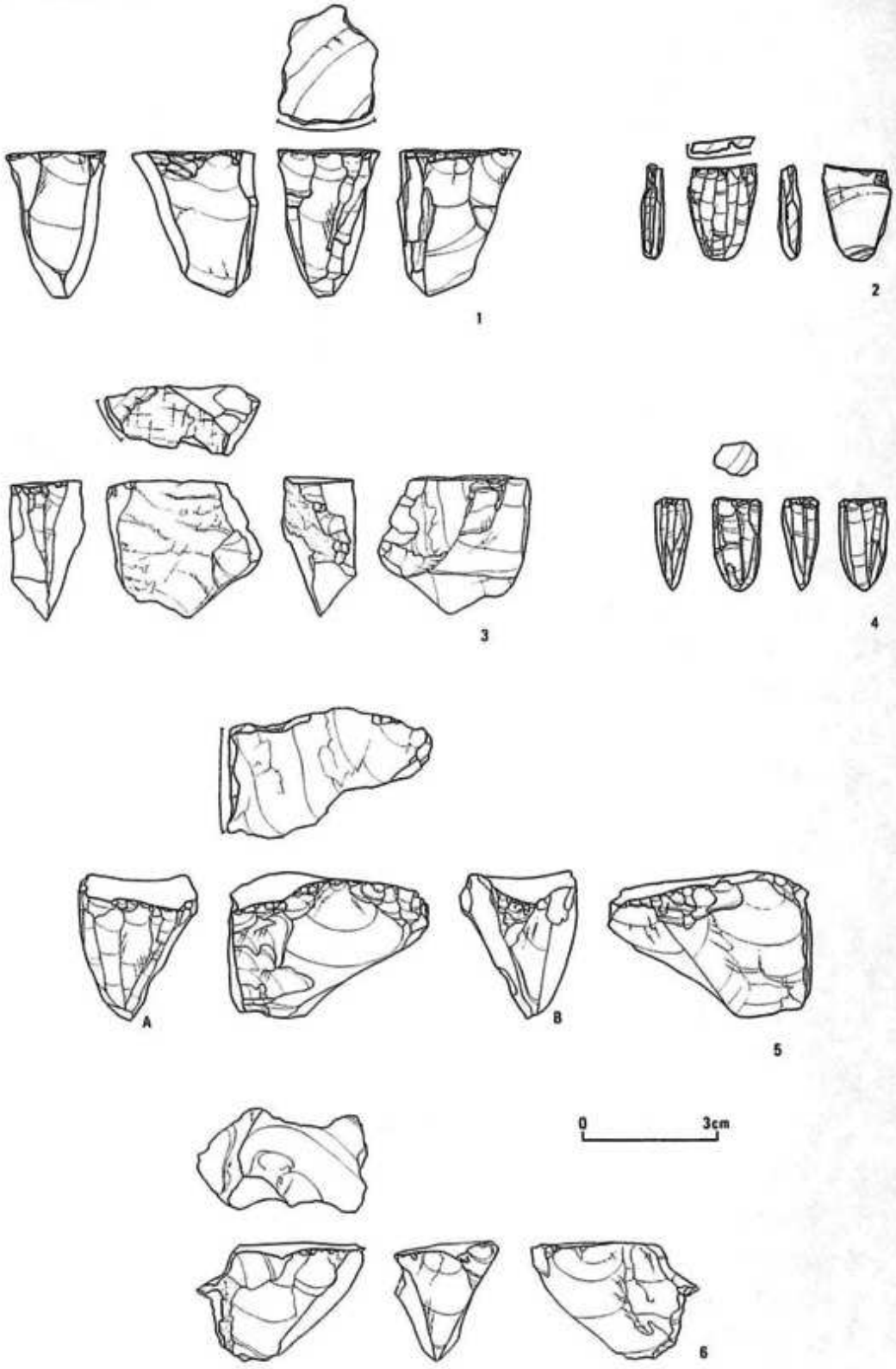
1. 角柱状の細石核である(第27図1)。正面の一端においてフルーティングが認められる。両側面には，打面方向から加えられた，石核の体形を整えるために為された粗い剥離と打面に接した細かな調整痕とが見られる。右側面には，正面方向から水平に加えられた側面調整の痕跡が認められる。背面の剥離面は石核の体形を整える当初の剥離痕というよりは，5のB面やブランク中の例(同図6)と同じような，細石刃剥離作業面の再生によって生じた作業面再生痕である可能性がある。頭部調整あり。打面は水平。打面角は91°。砂岩製。

2. 扁平な将棋の駒状の細石核である(同図2)。正面から左側面，一部背面にまでフルーティングが及ぶ。背面には，平坦な剥離面を留める。ただし，石核素材分割当初の分割面ではなく，作業過程で生じた剥離面である可能性もあり得る。頭部調整あり。打面は水平。打面角は88°。凝灰岩製。

3. 板状素材の木口の部分にフルーティングを加えた細石核である(同図3)。右側面は剥落している。背面には自然面を留める。打面は層理面がそのまま用いられている。頭部調整の痕跡をわずかに留める。打面は水平。打面角は84°。頁岩製。

4. 全周にフルーティングが巡り，砲弾状の体形を有する細石核である(同図4)。頭部調整あり。打面は水平。正背・両側面4ケ所の打面角計測値は，それぞれ，84°・84°・85°・84°である。頁岩製。

5. 舟底形の体形を有する細石核である(同図5)。図上ではフルーティングは一面にしか認められない(A面)が，接合資料によると背(B)面においても細石刃を取っていたことがわかる(第32図)。現資料の背面には打面から打ち取られた縦に細長い大きな剥離痕を留めている。これはフルーティング面を調整再生したその最後の痕跡と考えられる。1.の背面の剥離痕も同



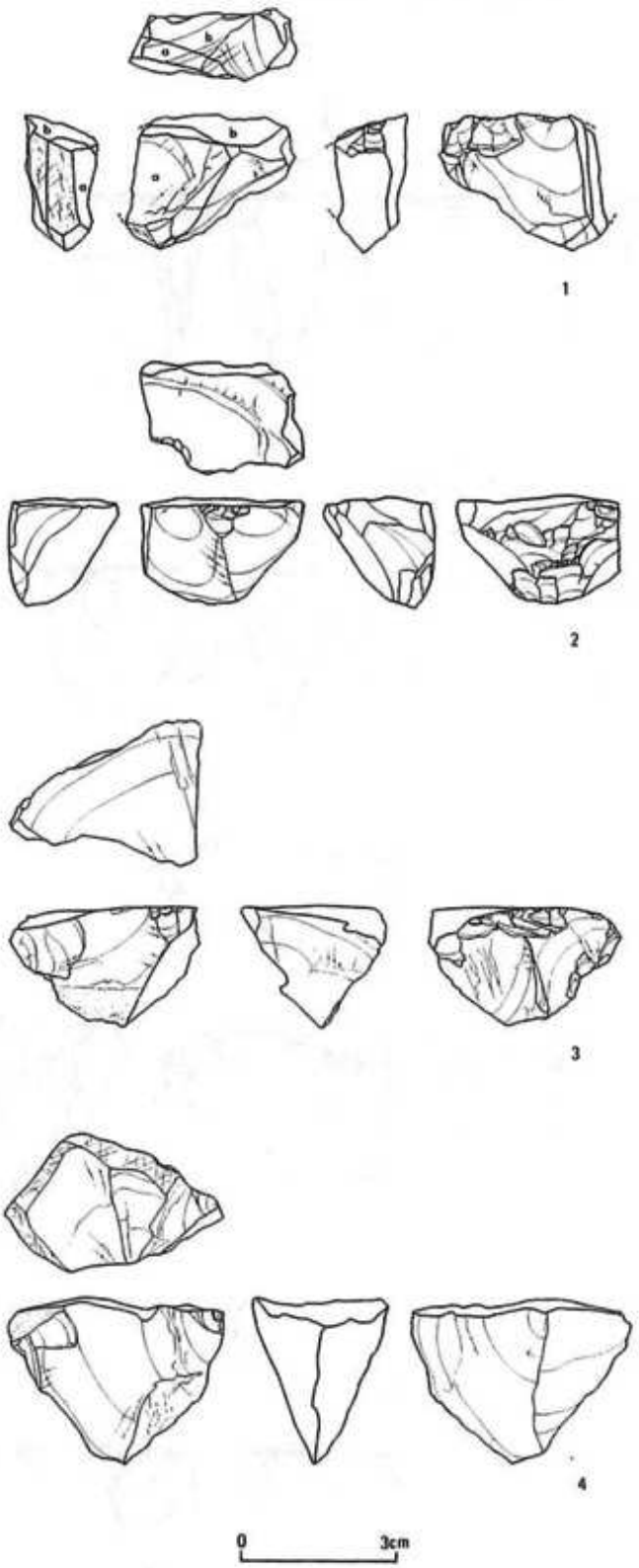
第27図　細石核・ブランク実測図

様のものである可能性がある。側面には，打面方向からの大きな剥離面と打面にそった細かな調整痕とが見られる。左側面には正面方向から水平に加えられた調整痕が残っている。頭部調整もり。打面は水平。打面角は105°。頁岩製。

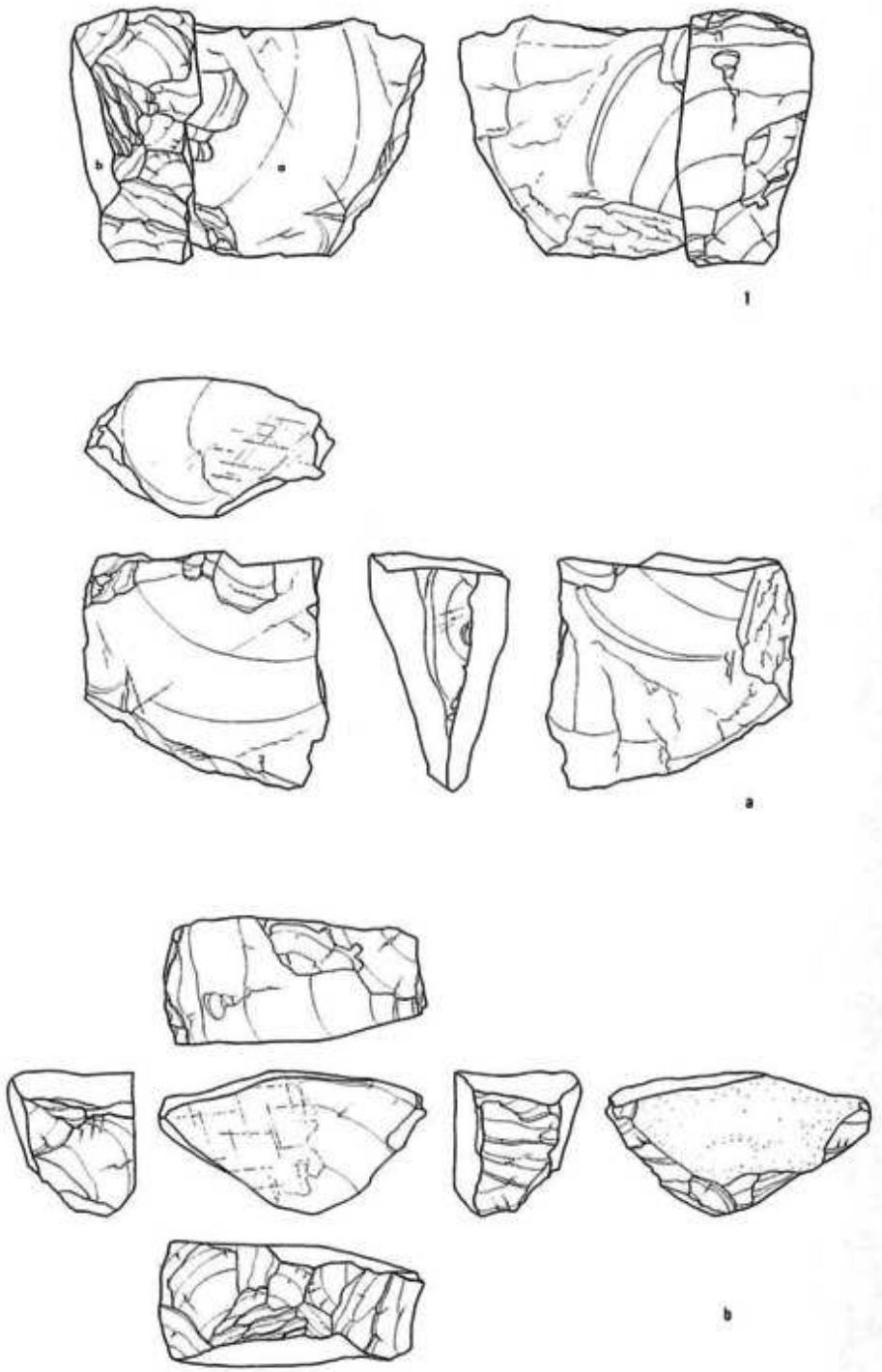
以上5例の細石核を外観から扁平なＡⅠ類(第27図２)，角柱状のＡⅡ類(同図１)，板状のＡⅢ類(同図３)，舟底状のＢ類(同図５)，砲弾・円錐形のＣ類(同図４)の大別３，細別5類型に分けておきたい。外観上の差あるいは類型間の関連については，接合資料をもとに細石刃の剥離作業過程を述べる際に論ずることにする。

b）細石核ブランク　４例ある(第27図６，第28図１～３)。いずれも板状ないしは舟底状の体形を有し，石核体側に粗い整形と打面部に接した細かな調整とが施されている。この中には，実際に細石核として機能していたものが，作業面の再生作業や欠損によって，フルーティング面が失われたために，結果的に細石核と限定し得ないとも考えられる資料が３例ある(第27図６，第28図１・３)。

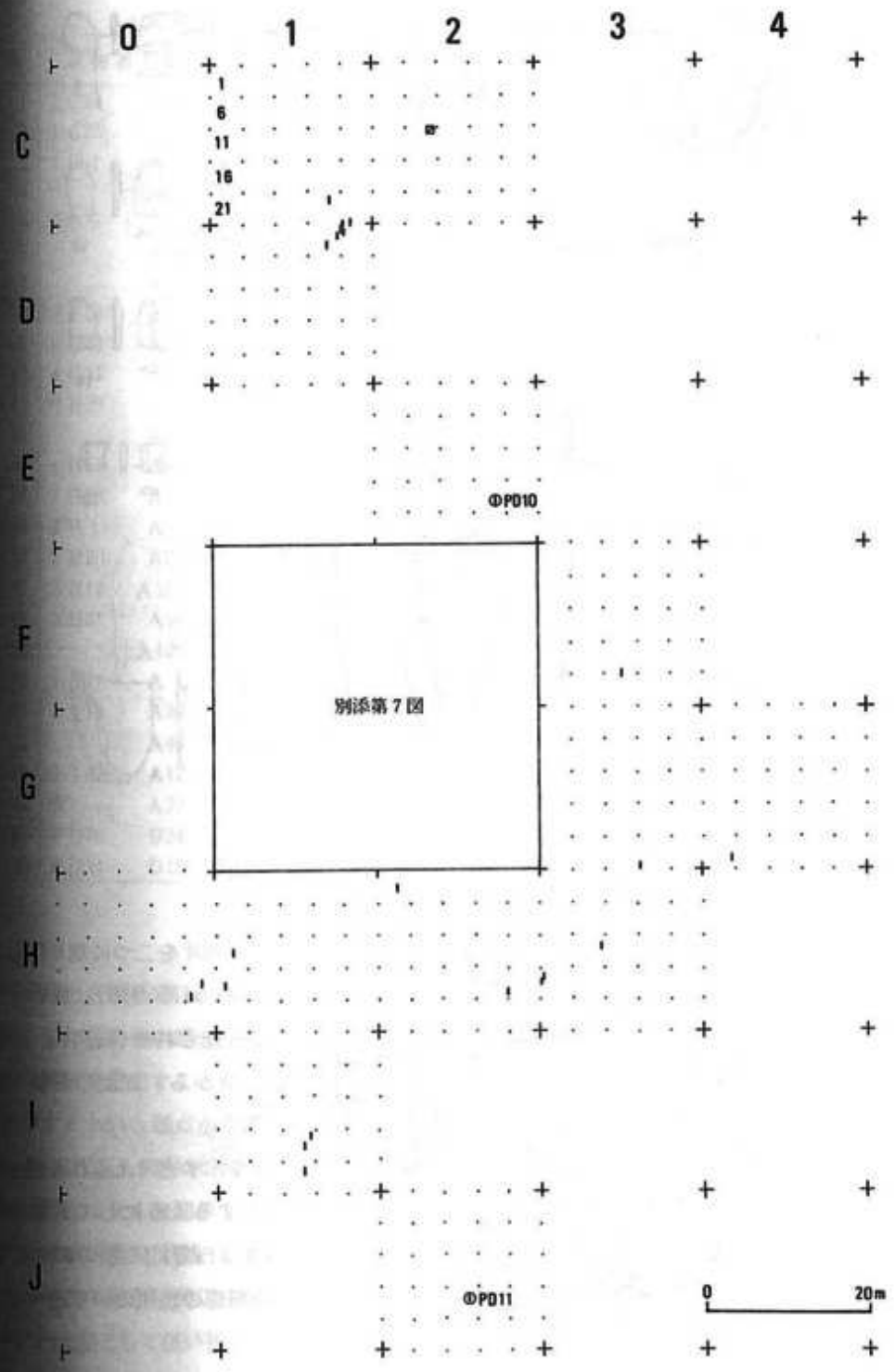
c）細石核素材　３例ある。三角錐・板状・舟底状を呈する。前述資料Ｍ７の細石核素材の



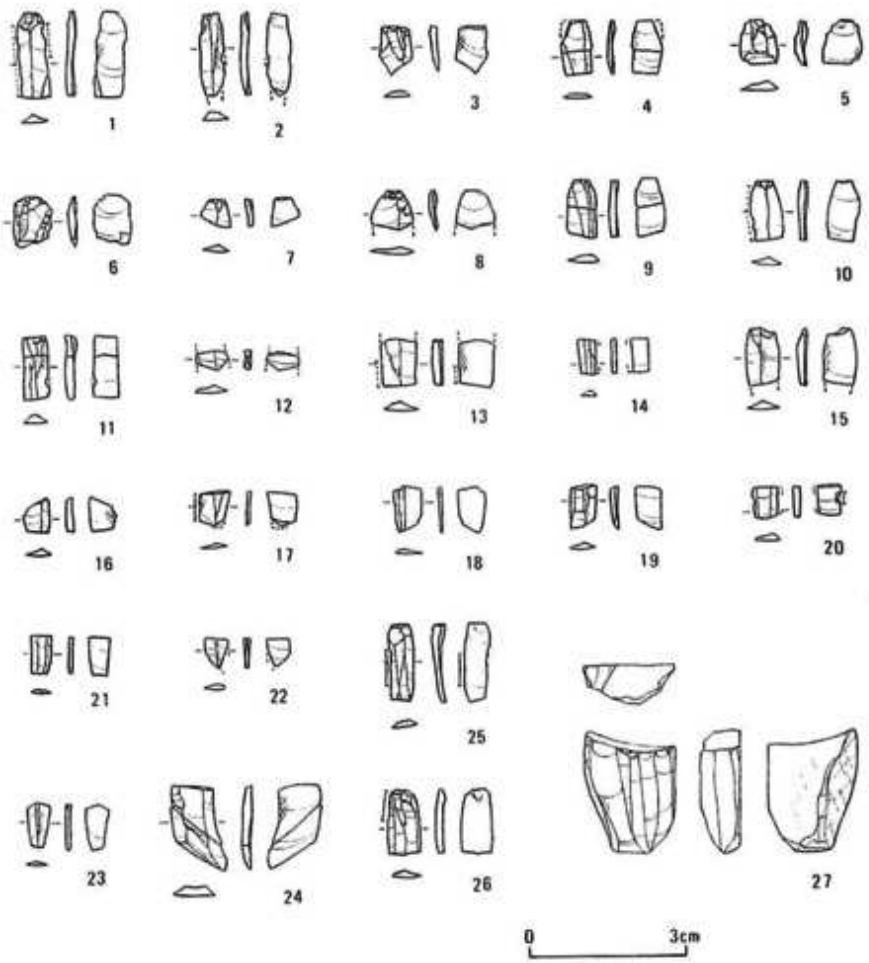
第28図　細石核ブランク・素材実測図



第29図　細石核素材実測図



第30図 周辺部出土細石刃・細石核（⊡）分布図
（PDは先土器時代の土坑）



第31図　周辺部出土細石刃・細石核実測図

作出過程の中から生まれた例(第28図4，分類はB：「剥片」)と部厚い剥片を二つに割り取り，双方とも細石核の素材として用いようとしたと考えられる例とがある(第29図)。後者の内の1例は，素材の左右両端を若干截ち落していることが接合状態から知られる(同図1a，分類はB：「剥片」)。他の1例は，底面において自然面側と打面側右方向とから，底面の形状を整形するように調整剥離が加えられている(同図1b)。

d）その他の石核　ここに一括した石核は，細石核素材の剥離作業を示すと考えられる個体別資料M7・8中に含まれる例(第34図7，第35図7)，円礫を粗割りするようにして大型の剥片を取った際の言わば石核相当部(第36図4)の3例である。前者は「剥片」の項でのべた第2・第3の剥片剥離作業と対応する。石核の特徴については，接合資料群の説明の中で述べる。

12）受　熱　剥　片

熱を受けた際に生ずるサーマルフラクチャー(いわゆる「火はね」)の認められるものが9点ある。細石刃・UFなどが含まれている。

第9表 周辺部出土の細石刃一覧表

No.ゴチックは受熱

No.	遺物番号		長さ(mm)	幅(mm)	部位	微細剥離痕	石材	標高(m)	出土位置(cm) N	W	挿図番号
1	1 C24	A 7	7	4	中		頁	887	107	258	31－21
2	1 C25	A12	6.5	5	中		頁	882	383	122	31－16
3	1 D 4	A 5	9.5	6.5	頭		頁	896	127	360	31－ 3
4		A11	(4)	6	中		頁	889	260	225	31－12
5	1 D 5	A 3	8.5	4.5	尾		頁	885	12	25	31－23
6		A 4	(5.5)	4.5	中		頁	880	27	24	31－22
7		A17	7	(3.2)	中		凝	880	27	24	31－14
8	3 F18	A11	16.5	6.5	頭	○	頁	870	385	204	31－ 1
9	3 G24	A 4	10.5	6	頭		頁	858	118	397	31－ 4
10	4 G21	A 1	8.5	7	頭		頁	778	248	345	31－ 5
11	0 H20	A28	16	10.5	尾		頁	740	182	193	31－24
12		A31	15.5	4.5	頭		頁	734	316	130	31－ 2
13	1 H11	A62	(11.2)	6.8	中		頁	730	204	204	31－15
14	1 H16	A13	12.5	5	頭		頁	748	331	113	31－11
15	2 H 1	A 9	(9)	7	中	○	頁	858	207	334	31－13
16	2 H20	A65	8.5	5.5	中		頁	872	308	10	31－18
17	3 H12	A161	6.5	6	中	○	頁	868	121	341	31－17
18	3 H21	A16	9.5	7.5	頭		黒	884	159	33	31－ 6
19		A120	5.5	5.5	頭		凝	876	366	14	31－ 7
20	1 I 11	A 1	8	5	中		凝	725	50	82	31－19
21	1 I 18	A30	11	6	頭		頁	789	99	341	31－ 9
22		A49	(7.5)	8	頭		頁	780	215	277	31－ 8
23	1 I 23	A12	6	(5)	中	○	頁	782	140	261	31－20
24	表	A23	11.5	6	頭	○	頁	—	—	—	31－10
25	P D10	D24	15	5.5	頭	○	頁	—	第10土壙		31－25
26	P D11	D18	8	5.5	頭	○	頁	—	第11土壙		31－26

3. 周辺部出土の石器

周辺部出土の石器は，土坑出土の細石刃2点を含め，細石刃26点，細石核1点の合計27点である。これらと集中部出土の石器群との間で，個体識別・接合作業を実施した結果，相互に積極的な関係を見出すことができなかった。したがって，一つの集落の営為の結果として石器群を把握するという観点からは，一応両者を別個に取り扱った訳である。

しかしながら，逆にこれがどのようにして遺跡に残されたのかという点を考えると，集中部の石器群とは全く無関係であるとするのもまた不自然な面があろう。集中部に設営された集落内における活動の反映として周辺部にも同期の遺物が分布する結果になったとも考え得るからである。この場合，周辺部の石器群は，集中部のブロック内に存する石器群に対して，ブロック外の出土品として扱い得るかしれない。いずれを執るべきであろうか。分布状態は第30図参照。

1）細 石 刃

26例の部位別構成は，頭部13(第31図1～11・25・26)，中間部11(同図12～22)，尾部2(同図23・24)の割合である。大きさに関する値は，集中部の出土例と変らない。微細剥離痕

を有する例が，頭部に4例(同図1・10・25・26)，中間部に2例(同図13・20)ある。詳しくは第9表参照。

2）細　石　核

扁平な将棋の駒形をした細石核である。正面と左右両側面にまでフルーティングが及ぶ。背面には層理面から成る石核素材分割面を留める。頭部調整あり。打面は水平(同図27)。計測2ケ所の打面角は，それぞれ83°・97°である。頁岩製。2C12区出土。　(鈴木)

第3節　接合資料と剥片剥離技法

個体別資料15例のうち，ここではM1・3・7・8・9の接合例について作業経過を記しておく。ここには，A～Cの3種類のそれぞれ異なった目的剥片を得るための作業経過がある。その目的剥片とは，Aが細石刃(M1・3)，Bが細石核素材(M7・8)，Cが大型不定形剥片(M9)である。これをそれぞれ剥片剥離作業A・B・Cとする。

剥片剥離作業Bは，最終的には細石刃を目的とする作業過程であるという意味で，本来Aと一連のもので，その前半部分とすべきものである。事実，M7の個体別資料の中には，石核素材・ブランク(第34図5・b)および細石核調整剥片(同図a)が含まれているし，M8にも石核調整剥片(35図a・c)が含まれている。したがって概念的には，BはAを包括すると考えた方がよい。しかし，A・Bの一連の経過を同一の個体別(接合)資料で示す例がないのと，実例としての剥片剥離作業A(M1・3)とB(M7・8)との間には，また別の作業経過も想定し得る可能性があることなどの理由でここでは別個に扱っておく。

Cは，大型の不定形剥片を目的としているようにみえる。しかしながら，ここで得られた目的剥片がどのように用いられたかを示す例はない。また，個体別資料M13は，削器（石器)と小型の剥片から構成されるが，これも細石刃を目的物とする剥片剥離作業以外という意味では，ここに含まれるべきであろう。

1．剥片剥離作業A（細石刃剥離過程）

接合(個体別)資料M1　4点の細石核調整剥片と1点の残核から成る。5点から成る接合資料群は，二つの細石刃剥離作業群からなる[2)](第32図)。

イ┬ロ→①1 F24A110(B)→ハ　｝石核I
　└ニ→②1 F24A43(B)→ホ→③1 F19A17(B)→④1 F23A108(A UF)　｝A面
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　└ヘ→ト→⑤1 F24A383(D MC)｝B面　｝石核II

イ)母岩が用意される。礫が分割され二つの細石核が作られる。二つの細石核はこれ以後それぞれ別個の独立した石核としてスタートする。素材の割り取り方を厳密に復原することはできないが，一応，一番素直な見方を以後の作業過程を詳述する前に記しておこう。

を有する例が，頭部に4例(同図1・10・25・26)，中間部に2例(同図13・20)ある。詳しくは第9表参照。

2）細　石　核

扁平な将棋の駒形をした細石核である。正面と左右両側面にまでフルーティングが及ぶ。背面には層理面から成る石核素材分割面を留める。頭部調整あり。打面は水平(同図27)。計測2ヶ所の打面角は，それぞれ83°・97°である。頁岩製。2C12区出土。　(鈴木)

第3節　接合資料と剥片剥離技法

個体別資料15例のうち，ここではM1・3・7・8・9の接合例について作業経過を記しておく。ここには，A～Cの3種類のそれぞれ異なった目的剥片を得るための作業経過がある。その目的剥片とは，Aが細石刃(M1・3)，Bが細石核素材(M7・8)，Cが大型不定形剥片(M9)である。これをそれぞれ剥片剥離作業A・B・Cとする。

剥片剥離作業Bは，最終的には細石刃を目的とする作業過程であるという意味で，本来Aと一連のもので，その前半部分とすべきものである。事実，M7の個体別資料の中には，石核素材・ブランク(第34図5・b)および細石核調整剥片(同図a)が含まれているし，M8にも石核調整剥片(35図a・c)が含まれている。したがって概念的には，BはAを包括すると考えた方がよい。しかし，A・Bの一連の経過を同一の個体別(接合)資料で示す例がないのと，実例としての剥片剥離作業A(M1・3)とB(M7・8)との間には，また別の作業経過も想定し得る可能性があることなどの理由でここでは別個に扱っておく。

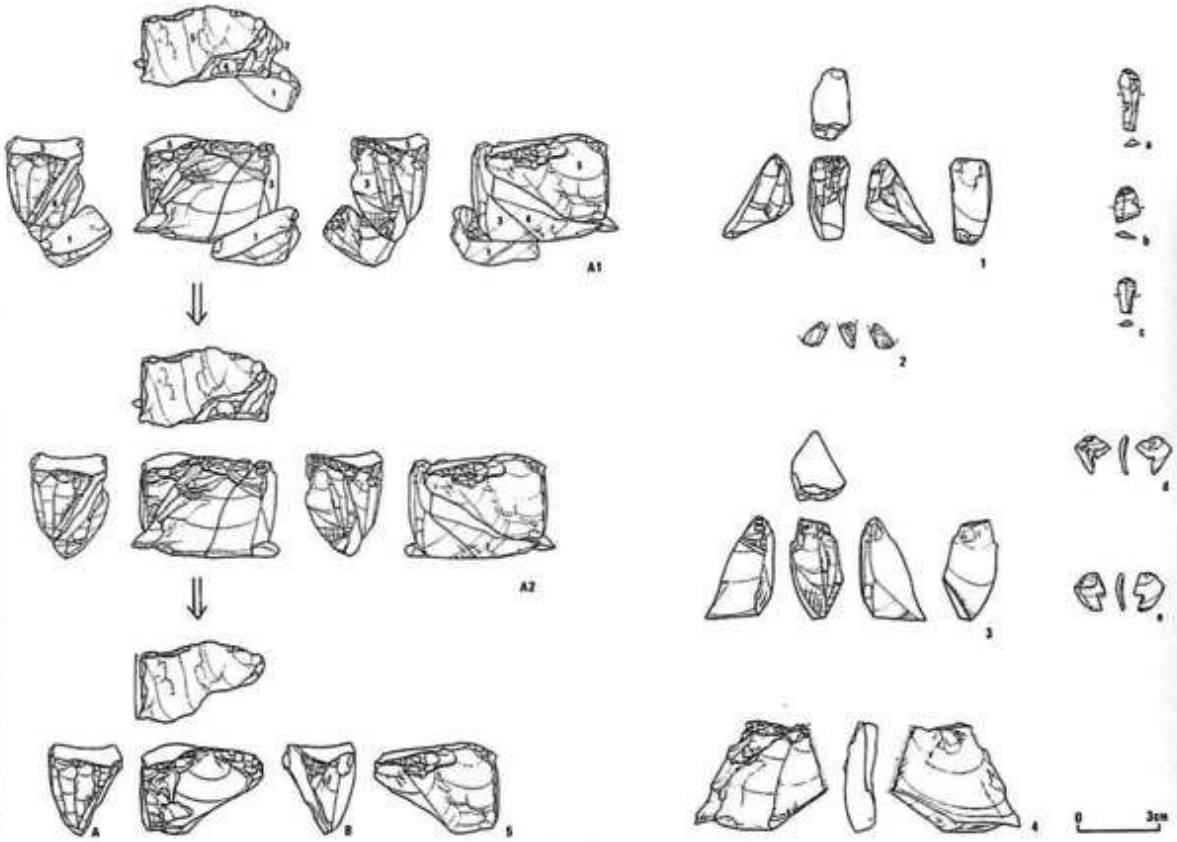
Cは，大型の不定形剥片を目的としているようにみえる。しかしながら，ここで得られた目的剥片がどのように用いられたかを示す例はない。また，個体別資料M13は，削器（石器）と小型の剥片から構成されるが，これも細石刃を目的物とする剥片剥離作業以外という意味では，ここに含まれるべきであろう。

1.　剥片剥離作業A（細石刃剥離過程）

接合(個体別)資料M1　4点の細石核調整剥片と1点の残核から成る。5点から成る接合資料群は，二つの細石刃剥離作業群からなる[2)](第32図)。

イ┬→ロ→①1 F24A110(B)→ハ　）石核Ⅰ
　└→ニ→②1 F24A43(B)→ホ→③1 F19A17(B)→④1 F23A108(A UF)　）A面　｝石核Ⅱ
　　　　　　　　　　　　　　　　　┈┈└→ヘ→ト→⑤1 F24A383(D MC)）B面　｝

イ)母岩が用意される。礫が分割され二つの細石核が作られる。二つの細石核はこれ以後それぞれ別個の独立した石核としてスタートする。素材の割り取り方を厳密に復原することはできないが，一応，一番素直な見方を以後の作業過程を詳述する前に記しておこう。



第32図　接合資料実測図（個体別資料M1）
（番号は接合資料。アルファベット小文字は非接合資料。以下同じ）

石核Ⅱの打面を形成する剥離によって，礫が分割される。この打面に再度打撃を加え，石核Ⅰ・Ⅱの素材を用意する。石核Ⅰの側は，この素材にさらに水平方向の打撃を加えて，現在の打面部が形成されたのであろう。

ロ)石核Ⅰのブランクが用意され，細石刃が取られる。①次の細石刃の剥離にそなえて剥離面再生が実施される。ハ)これ以降細石刃剥離の作業がくりかえされたのであろうが，本資料中にその形跡を留めない。多分遺跡以外に持ち出されたのであろう。

ニ)石核Ⅱのブランクが用意される。その後②の調整剥片が取られるまでの間に細石刃が取られたかどうかはわからない。とにかく，接合資料は②の調整剥片からスタートする。ホ)細石刃が剥離される。次に，石核調整作業が少なくともつづけて3度行われる。③1度目は作業面再生として，④2度目は石核体側部の側面調整として，3度目は細石刃剥離作業面Bの正面に縦長幅広の剥離痕としてその形跡を留めている。しかしながら，ここでは，肝腎の細石刃剥離作業を行っていない。調整作業に失敗したのであろうか。ヘ)作業をA面側に移す。この段階以前に，A面側で細石刃が剥離されていたかどうかはわからないが，少なくとも現資料は剥片④との間に空隙を生じていて，ト)A作業面右側面で水平方向の調整剥離が加えられていたことが知られる。この後に，A面で細石刃の剥取を7点以上行っている。⑤残核が残る。

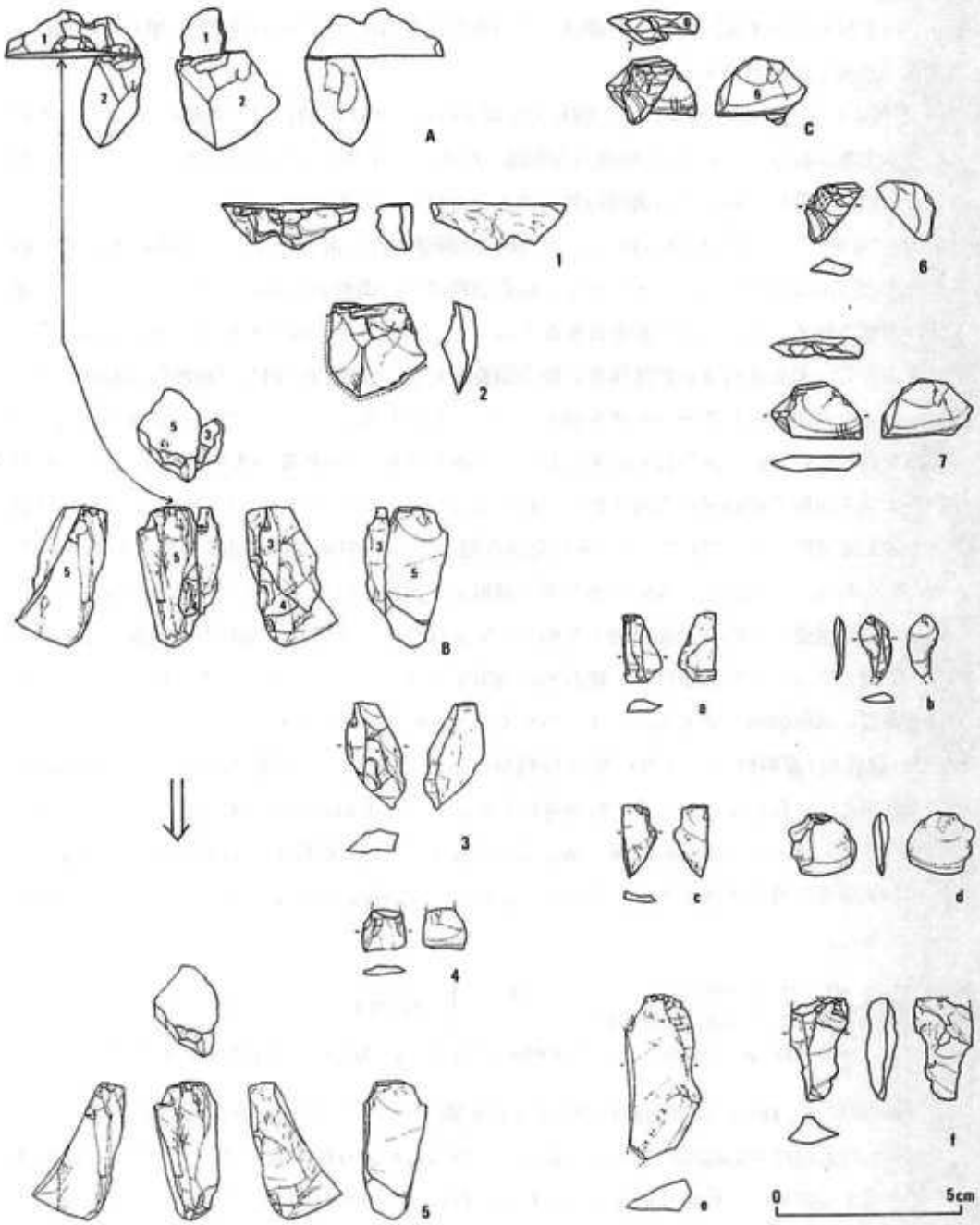
石核素材を用意してのち，調整加工を加えて完全なブランクとし，細石刃を剥取するという手順になるわけだが，石核調整作業＋細石刃の剥取を1サイクルとすると，本資料のうち石核Ⅱは，細石刃の剥取個所を変えるが，3回のサイクルを経ていることになる。

接合(個体別)資料M3 3群の接合資料がある。この内，A(第33図A)，B(同図B)の2群は相互に接合しないが一連の作業過程を示しているものと考えられる。すなわち，A2の打面とB3・4・5との打面は同一面であり，A1の下面(石核Ⅰの打面に相当)とは，本来図中の矢印の位置で接合するはずである。しかし，接合位置を確定できなかったので，図は別々に示した。

イ→①1 F22A2(B)→ロ　　石核Ⅰ
イ→ハ→②1 F24A188(A UF)　　石核Ⅰ　} 接合群A
ニ→ホ→③1 F23A81(B)→④1 F23A20(B)→⑤1 F24A150(B)→ヘ　} 接合群B } 石核Ⅱ

イ)母岩が用意される。層理面から礫が上下に分割され，二つの細石核が用意されることになる。①この資料は主剥離面に相当する部分が，剥落したような状態を呈している。一応，調整剥片と考えておくが，石核の破片であるかもしれない。ロ)石核Ⅰの本体は失われている。

ヘ)石核Ⅱとしてスタートする。現資料は，一定量細石刃が剥離された状態から始まる。②は石核Ⅱの側面調整として取られる。ただし，A・B両群の接合位置を前後方向にも右左方向にも厳密に特定できないので，これが③・④の調整作業直前の一連の作業として位置づけられるべきであるのか，これに先立って実施された細石刃の剥離作業をニ)として想定し，ニ)の作業のための準備工程として位置づけるべきなのかは，はっきりしない。後者の場合だと接合資料B群に明らかに細石刃を剥離した痕跡が認められるので，この作業過程をホ)として想定



第33図　接合資料実測図（個体別資料M３）

しなければならない。

ついで③・④と石核右側面から調整剥片が取られる。ただし，この２点は一度の打撃によって生じた２点の剥片と見た方がよい。最後に細石刃剥離作業面調整として⑤が取られる。石核本体は残されていない。

2. 剥片剥離作業B（細石核素材剥離過程）

接合（個体別）資料M 7（第34図）

イ→①1 F23A147(B)→②1 F23A25(A UF)→③1 F23A38(B)→④1 F23A91(B)→
⑤1 F23A79(B)
⑥1 F23A109(A UF) →⑦1 F23A114(D)

イ)石核各面に多方向からの打撃が加えられている。層理が多くいわゆる石刃状の剥片の取られた形跡はない。石核の調整作業を含め，以下につづく接合資料に類似した粗割り風に剥片が取られたであろう。非接合資料中には，1点のブランクがある(同図b)。これはこの段階で生じた剥片に由来している。①石核背面側で部厚くて小型の表皮剥片と，②薄い四角形の剥片が取られる。③ついで，石核右側面で断面三角形の表皮剥片が取られる。④石核上部から表皮剥片が取られる。⑤最後に背面側からの一撃で，同時に三角錐状の石核の素材と考えられる石塊と，⑥部厚い剥片が取られる。⑦残核が残る。

結局，ここには石核素材の剥ぎ取りとここに至る一連の作業とが示されていると見てよい。さらに，非接合資料中にブランクと細石核の側面調整剥片が含まれていることを考慮すると，石核素材の獲得後，細石刃の剥離までの作業が，本来本資料の中には含まれていたと見ておくべきである。

接合（個体別）資料M 8（第35図）

イ ①1 F18A15(B)
②1 G 3 A70(B)→③1 F23A111＋1 F23A144(B)→④1 F23A150(B)→
→⑤1 F23A112(B)→⑥1 F23A137(B)
→ ロ→⑦1 F24A108(D)

イ)石核上部における打面の設定または礫の分割，石核正面の上→下方向への一連の剥離作業が実施される。①右側面上部における上→下方向への連続的な剥離作業から現存接合資料は始まる。この作業によって残されたのが，②〜⑥までの一連の不定形剥片である。これと併行する過程で，あるいはこれに先立つ正面側の上→下方向への作業の一環として取られたのが，①の剥片である。⑥までの作業の後，ロ)右側面において背面側からの水平方向の打撃が加えられる。⑦最後に残核が残る。

現存接合資料で見るかぎり，不定形剥片とはいえ薄い剥片を剥ぎ取っていて，こうした剥片を目的とする作業が実施されたようにも見える。一方，母岩の旧状を推定すると，現存資料までにかなりの量と大きさの剥片が取られたと考えられる。また，非接合資料中に細石核側面調整剥片と考えられる資料も存している。さらに，個体別資料M 8を構成する剥片の中に1例もトゥールが含まれていない。こうした理由から，これら一群の資料をM 7におけると同様に，石核素材を生み出すことを主眼とした一連の作業によって残されたものと考えておきたい。

3．剥片剥離作業C(大型不定形剥片剥離過程)

接合(個体別)資料M 9(第36図)

①1 F23A157(B)→②1 F23A95(B)→③表A29(B)→④2 G12A26(D)

本例は，母岩から順次剥片を剥ぎ取っていく作業過程というよりも，礫を大きく分割したような作業群から成るという印象が強い。しかし，③非接合資料の1点の剥片を見るかぎり，①・②・④の接合資料の空隙において，これは取られたものであり，こうした剥離作業が幾度かくり返された可能性はある。したがって④は一応石核ということになる(同図4)。

4．細石刃剥離過程

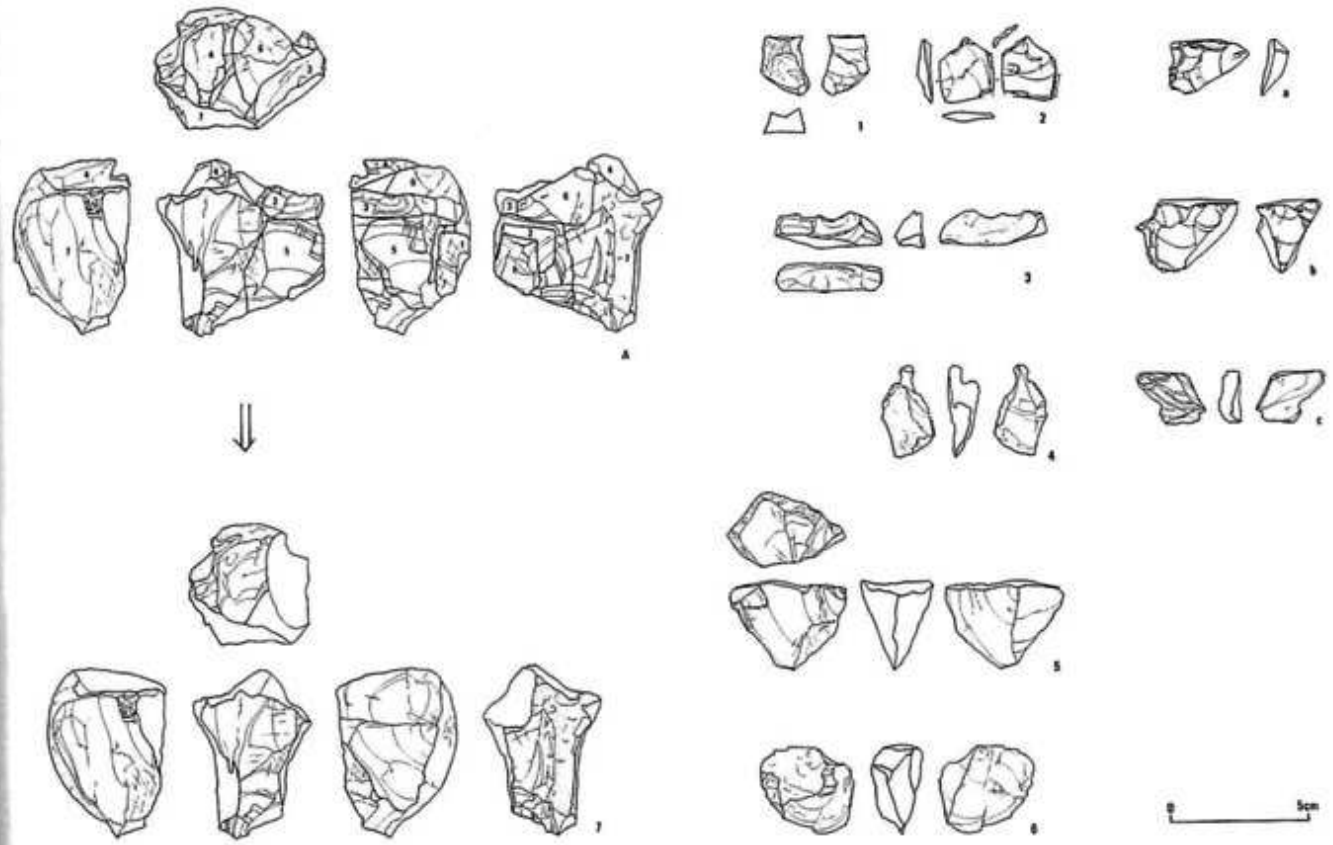
上記の接合資料M 1・3・7・8の作業過程をかいつまんで要約し，広野北遺跡における細石刃技法の全体像を探ってみよう。

接合資料M 1の第1の特徴は，一言で言って，石核調整作業を頻繁に行い，主として前後方向に大きく体長を減じ，体形を変えながら作業が進行して行くことである。一段階で行われる石核調整剥離の回数の多さと，この時に取られる剥片の大きさには率直に言って予想以上のものがある。調整というより再生と呼ぶにふさわしい。この点は，M 3においても同様であり，M 5に含まれる作業面再生剥片とあわせて，これらが，本遺跡における作業の特徴をある意味で最もよく表わしている資料だと言える。

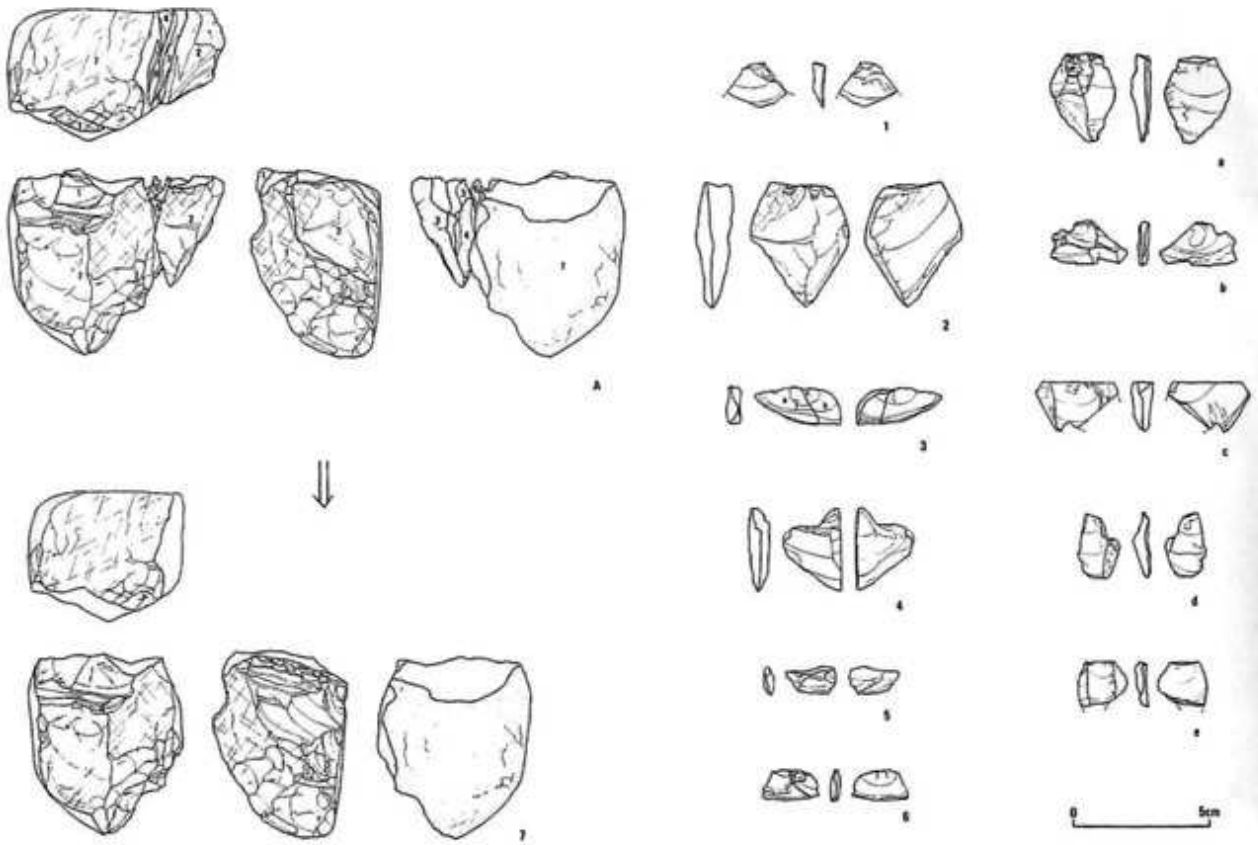
これを西南日本の当該期の細石刃剥離技法の主要なものの一つである，野岳・休場型細石刃技法と対比的に述べると，その特徴が一層はっきりする。つまり，これが，打面再生作業を繰り返し，上下方向に大きく体高を減じながら作業が進行するのに対し，本遺跡の例は，打面再生作業を一切行わず，もっぱら細石刃剥離作業面再生を繰り返し実施して作業を進めるために，前後方向に体長を減じさせて行くということである。

第二は，一つの母岩から複数の細石核が得られていることである。これは，M 1・3においても同様であり，M 7にも少なくとも二つのブランクが存在している。M 6の接合例も一つの部厚い剥片が二つのブランクになっている。M 1・3の例のように一つの母岩を粗割りして複数の石核素材を作り出していくか，塊状の部厚い剥片を取って素材とするか，さらに厚い板状の剥片を分割していくかといった細部の差異は別にしても，ここには一つの大きな共通性がある。つまり，いずれの方法にしろ，一つの母岩から複数の石核素材を割り取っていることである。ブランクまたは石核素材として扱った7点(第27図6～第29図)が，すべて舟底状または板状とでも言うべき形状を留めていることは，素材製作の特徴とよく合致する。

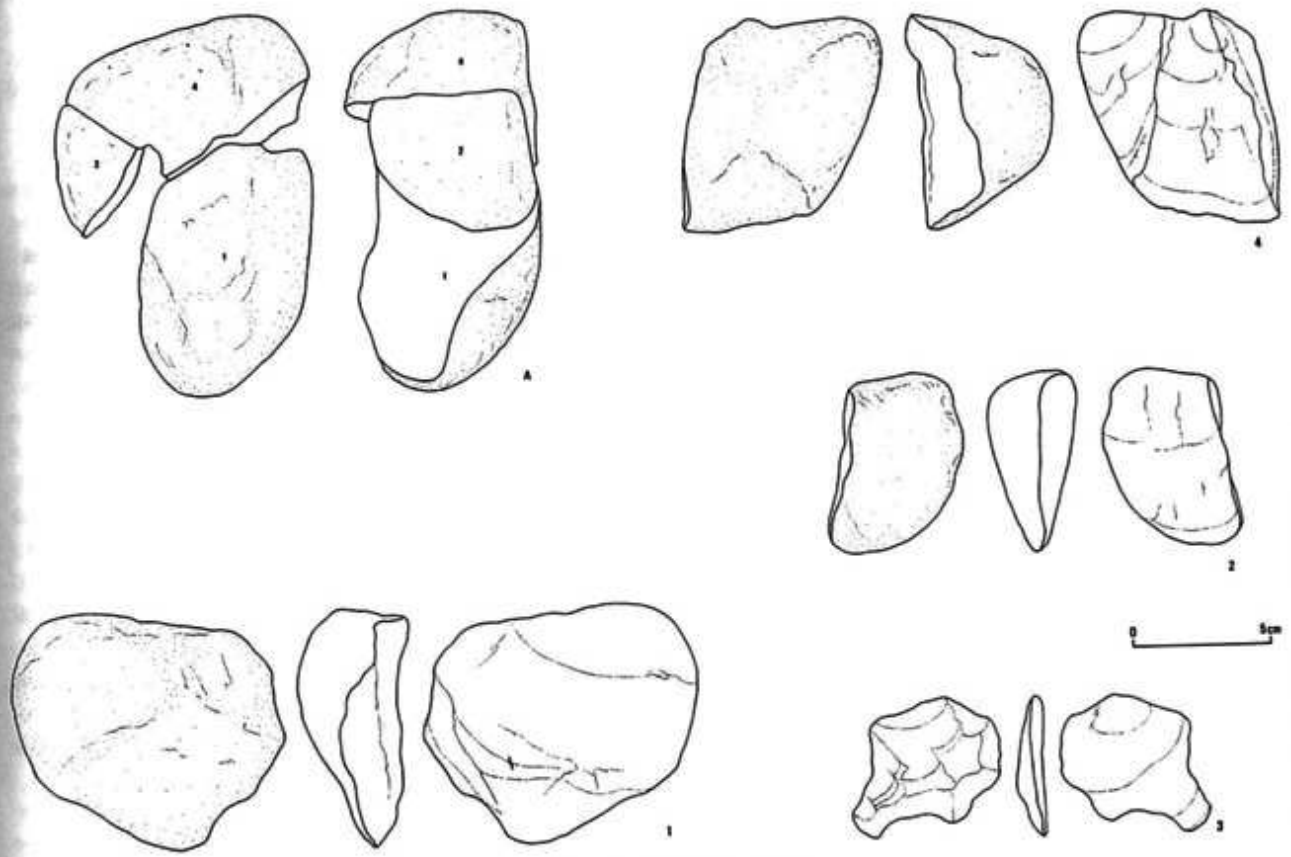
以上の2点が素材の作出から細石刃の剥離作業に到る主要な特徴であり，これによって，本遺跡の細石刃剥離技法の重要な特徴は言い尽されていると思う。最後に一連の作業過程を順次記してしめくくりとしよう。



第34図　接合資料実測図（個体別資料M７）



第35図　接合資料実測図（個体別資料M８）



第36図　接合資料実測図（個体別資料M９）

1．母岩(円礫)を割り取り，石核素材を用意する。

2．石核素材に粗い調整加工を施し，ブランクとする。この場合，打面は素材分割面であったり，層理面であったりすることが多い。石核側面や正面への調整を加えて，多くは体形を舟形に整えたであろう。特に正面側を中心とした打面の縁辺にそって，細かな細部調整が施される(いわゆる頭部調整に相当)。同様の細部調整が，打面側にも実施される。これを剥離作業面を中心に行われる頭部調整の延長とみるか，側面調整の最後の段階が，打面部ぞいに細かく行われたものと見るかはわからない。多分いずれの意味も含むのであろう。

3．細石刃が剥ぎ取られる。第32図2・3との関係で推測するかぎり，細石刃の取られた量は意外に少ない。これにひきかえ，次の調整作業によって失われる石片のボリュームは実に大きい。

細石刃の剥離は打面の一端だけで実施されるのではなく，正・背面の両端で実施される。この点は接合資料においてはじめて判明したことであるが，残核における細石刃剥離作業面を一端に限っている例でも，途中過程において，両端で実施していた可能性も考えねばならないであろう。

4．石核の再生作業が実施される。正面側の作業再生では，「し」の字または「ノ」の字状の剥片が取られる。作業面に接した側面からも側面調整剥片が取られる。これは打面から下方に打撃を加えるのが普通だが，水平方向から(第21図12：A・UF，第22図7：ナイフ形石器?)加撃されることも，下方からのこともある(第26図6)。調整作業の仕上げとして頭部調整が実施される。

作業面再生は，かなり大胆に打撃を加えているのが印象的である。その結果，打面の側面観(打面角に相当)は，鋭角なものとなる。第27図6でブランクとして扱った例は，このような段階にある石核と見ることもできる。

5．この間，打面の細部調整(細石刃剥離作業面にそった打面上における細調整)，打面の再生(打面を水平に輪切りにするような再生作業)は一切行われない。

6．石核およびフルーティングのある調整剥片の打面角は平均90°であり，フルーティングの最終段階でははっきりした水平打面となっている(第8表)。

しかし，このデータは検討を要する。つまり，接合資料M1における調整作業や第27図6のブランク，この他のフルーティングのある調整剥片との関係である。石核やブランクに残された調整作業の結果や調整剥片の形状から知られる石核の状態は，調整作業の終結後これから細石刃の剥離にとりかかるという時点では，打面角は鋭角になっているからである。

この調整作業を失敗とみなさないかぎり，当初鋭角であった打面角は，作業の進行に従って漸々に鈍くなり，最終的に直角となると考えなければならない。こう考えるのが正しければ，打面角90°前後の水平打面となった時には，すでに細石刃の剥離に適さなくなっており，それ故，再生作業が実施されたと考えることができる。

かつて筆者が東海地方の細石核を論じた際，ここに問題にされているような「し」の字状の

調整剥片を，細石刃剥取作業の失敗によると考えた(鈴木忠1979)。その理由は，こうした剥片が取られることにより，著しく体形に変化を受け，それまで直角に保たれていた打面角が一気に鋭角になってしまうからであった。ここでは，東海地方の細石核における細石刃の剥離作業のための好適な打面の状態を，水平打面にあると考えていたためである。

従来の筆者の考え方の中でも，押圧剥離による細石刃の剥離作業を繰り返す中で，フルーティングのある調整剥片だけは，思いきってパンチを用いた大型の剥片として取られていることを説明できないというわだかまりがあった。しかし，水平打面の状態をもうこれ以上細石刃をとりえない状態と解すれば，大幅に体形と打面に変化を与えるような調整作業の意味も氷解する。

「し」の字状の調整剥片については，すでに吉田英敏・橋昌信両氏は，はっきり調整剥片として捉えておられることもつけ加えておきたい(吉田1980，橋1975)。

7．以下，石核が棄てられるまで，調整と細石刃剥離作業とが数回繰り返される。

5．細石核の類型と細石刃剥離過程との関係

剥片剥離技法を復原する際，残核からこれをなすのに対して，接合資料がいかに効果的なものであるかは，近年の先土器時代考古学が強く教えるところである。従来，東海地方における細石刃技法を接合例から観察することはできなかった訳であるが，前項のような記載をなしうることは，少数ながらも接合例を得ることができたおかげである。

ここでは，接合例が本遺跡における細石刃剥離技法の全体とどう関わっているかを検討する意味で，石核の類型との対比を行っておきたい。

接合例と細石核との関係で問題になるのは次の諸点である。

1．接合資料ＭＩでは，残核(Ｂ類)で見るかぎり，細石刃の剥離作業が石核の一端においてのみ実施されていること。したがって，残核におけるフルーティング面が１ケ所か２ケ所かの区分はあまり意味がない。

2．石核ＡⅡ類(第27図１)は，フルーティング面は１ケ所にしかないが，背面側の縦に長い剥離面は，旧いフルーティング面の再生痕である可能性があること。さらに，石核右側面にある水平方向の剥離痕は，ＭＩのフルーティング面Ａの右側面のものと同じ性格のものであって，ここからは，水平方向の加撃によって取られた調整剥片(第22図７：Kn？，第21図12：ＵＦ)のような剥片が取られていた可能性が高いこと。したがって，ＡⅡ類とＭＩ所属のＢ類の石核(第27図５)とは技法的に同一と考え得る。

3．ＡⅢ類に分類された例(第27図３)は，板状の素材の木口の一端にフルーティングを加えたものであるが，これを含むＭ５の個体別資料の中には，ＭＩの作業中に生じたと同じ調整剥片(第26図７)が含まれていること。したがって，ＡⅢ類もＢ類と技法的には同一と考えられる。

4．ＡＩ類の扁平で将棋の駒形をした例(第27図２)と砲弾型をしたＣ類(第27図４)とは，残核の形状という点で，ＭＩの作業過程を踏まえた一群と大きく相違している。ＭＩの接合例

を見るかぎり，両者には大きな隔たりがあるとも見える。しかし共通点も多い。打面角の大きさ，打面の細部調整を実施していないことなどである。さらにＡⅡ類とＡⅠ類との差は残核の縮小度だけであるし，Ｃ類はＢ類におけるように，両端における細石刃の剥離作業が極度に接近した例と考えることもできる。

このように考えていくと，ＡⅠ・Ｃ類とＡⅡ・ＡⅢ・Ｂ類とを，別個の技法を踏まえたものと見る必要は必ずしもない。作業開始時点の素材の形状の差が，最終的な残核の形状の差を生んだり，石核調整作業の介在の仕方に差があったりしたことはあったであろう。Ｂ類を含むＭ１のような作業過程が，必ず両端におけるフルーティングを伴わなければならないと考える必要がない点も含めて，残核にみる類型上の差異を本遺跡における技法上の差，つまり複数の細石刃剥離技法として想定する必要はないのではないだろうか。

Ｍ１の接合例を典型とするような技法に，素材・調整作業といった若干の差が加わって，残核上に見かけ上の差を生じたものであろう。すなわち，これが海老山型細石核の類型の変異であり，こういう残核を生むような，Ｍ１の接合例にみられるような作業過程こそが海老山技法の一つの実体であろう。

残核の形状に見えるばらつきと細石刃剥離技法との関係に関連して，もう３点ほど言及しておく。一つは石核素材またはブランクとの関係である。本遺跡から検出された石核素材・ブランクは，７点ある。この内，舟底形を呈するものが５，板状の例が２点（第28図１，第29図a）と見ることができる。こうした素材あるいはブランクの時点での形状の差は，技法的レベルと位別の次元で影響を与え，最終的な残核の形状にヴァリエイションを生んだものであろう。

二つ目として，神奈川県上和田城山遺跡の資料にふれたい（中村他1979）。この資料で注目されることは，１つの母岩からいくつかの細石核が作り出されていることである。そして，これには残核の形状がさまざまな変化をみせている。ここにおいても残核の形状の差異の意味とはいったい何なのかについて示唆深いものがある。

最後に，船野型細石核との関連についてふれておく。接合資料Ｍ１は，船野型細石核と多くの共通点がある。一方，船野遺跡では，船野型細石核とは技法の点でも石材の点でも異質な一群が伴出している。上下田遺跡でも技法に関して同じことが言えよう（橘1981）。

一遺跡全体における技法の変異の幅とこの組み合わせのあり方まで考慮した上で広野北遺跡と比較すると，基本的な相違点があることに気づく。船野と広野北とでは，形状等に基づく残核のヴァリエイションは異なる。この残核における変異が，広野北では一つの技法に由来する結果的な異相なのであり，船野では二つの技法が存していると解されるという点でも相違する。

いささか饒舌に過ぎたきらいがあったかもしれないが，打面再生作業を全く行うことなく，細石刃剥離作業面の再生作業によって，上下方向にではなく，水平方向に作業を進捗させていくという一貫した作業と，ここから生まれる様々の形状をもつ残核を生じさせることになる細石刃技法として，広野北遺跡の細石刃技法を捉えておきたい。（鈴木）

第4節　石　器　の　分　布

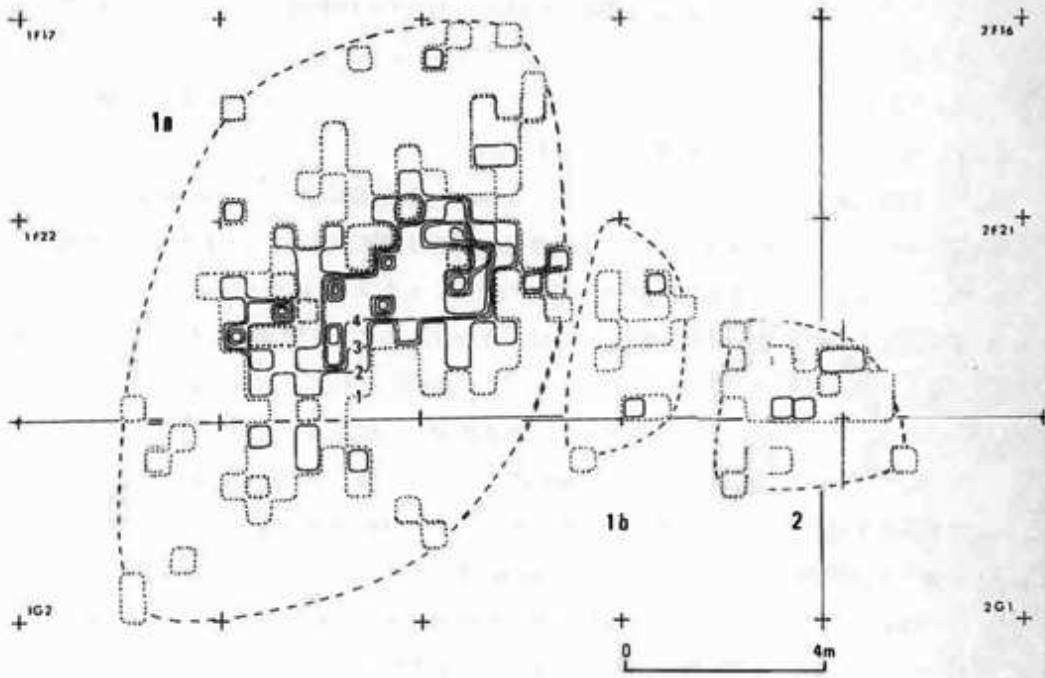
細石刃文化期の石器群は1F23・24区を中心に，北は1F18・19，南は1G2～2G1区までの南北約12m，東西16mの範囲にほとんどの資料が集中する。2F16区，2F23区に1点ずつ，南東方向にずっと隔った位置すなわち2G12・13・18区に計3点，2G21・22区に計4点が分布する。この部分までを含めると分布範囲は南北約28m，東西約26mの範囲となる。

なお，はじめにも述べたように，この区域には，尖頭器文化の資料が混在している部分がある。所属時期のふり分け方法については，第Ⅲ章第5節を参照されたい。

1．ブロックの区分

上記の範囲を50cmの桝目にくぎり，それぞれの桝目の中に含まれる資料数を集計し，等量線図を作成しブロックを区分した(第37図)。もっとも密度が高いのは50cm四方あたり8点という値で1F24区に1ケ所ある。これにつぐのが7点で，1F24区に2ケ所，1F23区に2ケ所ある。遺物分布桝として連続する区域を核として，これに隣接する周囲の区域も統合しながら，1a・1b・2の三つのブロックを設定した。

第1b・2ブロックは第1aブロックに対して小さく，したがって資料点数も少ない。ただ，これは細石刃文化期の資料の抽出過程に関連するかもしれない。というのは第1b・2ブロック周



第37図　石　器　分　布　等　量　線　図

の遺物は，細石刃文化の遺物とはっきりわかる型式学的特徴を具えた例のみ抜き出したため，欠落した資料が多い。この中に細石刃文化の資料がいくばくか含まれていることは想像に難くない。この場合には，第1b・2ブロックの構成点数が増加するし，またブロック区分自体も1ブロックに吸収されるというようなこともないとは言えない。この点については，次節で詳しく述べる。

2. ブロックの石器組成

第1aブロック　13.5×8m(80㎡)の広がりを持つ。構成資料数は267点である。トゥールの中では細石刃が主体を占める(第10表)。削器・UF・RF・敲石・槌石・ナイフ形石器？・石斧の7種類で構成される。量は少ないがひととおりの器種は揃っていると見ることができる。この他に，剥片99点，砕片39点，細石核3点，石核素材およびブランク7点がある。

第10表　ブロック別石器組成表　(個)

ブロック	A								B	C	D	合計
	細石刃	削器	UF	RF	敲石	槌石	ナイフ？	石斧	剥片	砕片	石　核	
1a	95	1	15	2	3	1	1	1	99	39	10(3)	267
1b	8								4	1		13
2	16								1		3(2)	20
外	8		1						1		1	11
合計	127	1	16	2	3	1	1	1	105	40	14(5)	311

(　　)内は細石核

第1bブロック　4.5×2m(8㎡)の広がりを持つ。構成資料数は13点である。細石刃8点，剥片4点，砕片1点の内訳となる。

第2ブロック　3.5×3m(9㎡)の広がりを持つ。構成資料数は20点である。細石刃16点，剥片1点，細石核2点，石核素材またはコアブランクが1点である。

ブロック外　構成資料数は，計11点である。内訳は細石刃8点，UF1点，剥片1点，石核1点である。

以上の石器構成の内，第1b・2ブロックおよびブロック外は，細石刃以外の時期的特徴の不明瞭な資料が欠落している。これは，先にも若干ふれた資料抽出方法に関連があるかもしれないが，いずれも時期の異なる石器群の分布域と重複しており，特徴の明確なものだけを抜き出したかたちになっているからである。

3. 器種別の分布とブロックの性格(別添第7図)

a) 細石刃　細石刃は第1a～2，ブロック外の全域に満遍なく分布する。そして，全石器の分布でみた遺物集中のピークの位置に，細石刃も集中度のピークを持つ。全遺物中の約41%が細石刃によって占められている石器群の構成から見ても当然かもしれない。ただし，第1aブロックでは西南部の遺物分布のまばらな区域およそ5m四方には，細石刃が全く分布していないこと

が注意される。第1aブロックで見るかぎり，細石刃の分布域はブロック内の特定の区域に集中すると見ることができる訳である。

b）削器・UF・RF・ナイフ形石器？　これらは，第1aブロックに全てが分布する。RFは，第1aブロック西南部の遺物のまばらな部分に位置している。

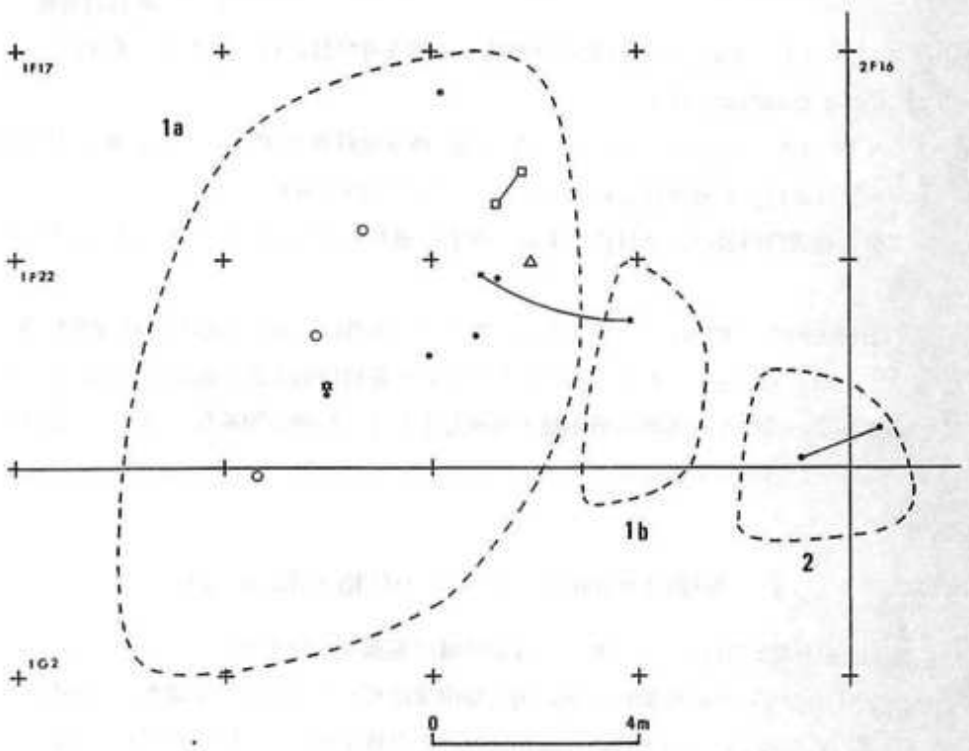
c）敲石・槌石・台石・石斧　いずれも第1aブロックに分布する(第38図)。敲石・槌石はブロック内の西側外縁部よりに位置する。槌石の方がより密集域に近い。台石は東北外縁部，石斧もこれに近い東北外縁部に位置する。

敲石・槌石・台石・石斧の分布ゾーンを記しておくと以下のようになる。

敲石は第Ⅲ(外縁部)・第Ⅱ(中間部)・第Ⅰ(中央部)ゾーンに各1点ずつ位置する。槌石は第Ⅱゾーン，台石・石斧もともに第Ⅱゾーンに位置する。結果的に第Ⅱゾーンにこれらは一番多く，第Ⅰゾーンに敲石1点が入りこんでいる。長楕円形のブロックの場合には，見かけ上の位置関係とゾーン区分の結果とがくいちがった印象をうけることが多い。ブロックは楕円形であっても，密集部中の一点から同心円状に区分していく為に，楕円の短辺の外縁部に位置するものも，中央部に入ってしまうことになるからである。

分布位置の実情からすれば，敲石1・3は，外縁部にあり，敲石2(第23図)と槌石は中間部，台石・石斧は外縁部にあるとみられる。このうち槌石が一番密集部に寄っている。

d）石核・剥片・砕片　細石核・ブランク・調整剥片・砕片などの剥片製作に伴う石器群を



第38図　敲石(白丸)・槌石(星印)・台石(四角)・石斧(三角)・受熱剥片(黒丸)分布図

見ておこう。

細石核は第1a・2ブロックに，それぞれ3・2点ずつある。ブランクも同様に第1a・2ブロックにある。調整剥片は全ブロックに分布する。これによって，第2ブロックの性格はやや弱いとはいえ，第1a・2ブロックとも剥片製作から細石刃の作出までを一貫して行ったと見てよい。

第2ブロックは，細石刃・尖頭器両石器文化の石器群を合わせた分布図(別添第5・6図)での東ブロックの中心に位置する。東ブロック中の石器群を二つの文化期の石器群に分離した後，時期判定不能とした資料が61点ある。トゥール15，剥片32，砕片13，石核1が含まれている。ここには細石刃文化に属するものも当然含まれているとみるべきであって，この構成内容は，第2ブロックで剥片製作が行われたとの判断をより強めるものであろう。

これらのブロック群の性格については，次節において接合関係を検討する際に再度ふれる。

e）**受熱剥片**　受熱剥片は9点ある。第1aブロック6，第1bブロック1，第2ブロック2点である(第38図)。第1aブロックは1例を除いて1F23・24区から出土している。これらの資料が受熱後位置を変えていなければ，火処の存在を示唆していることになる。

第1a・1bブロックの受熱剥片の分布域は，個体別資料群の分布域と重なる。　（鈴木）

第5節　個体別資料の検討

1．個体別資料の認定

個体別資料の認定は，遺跡および遺物群の構造を分析・解釈するに際して，最も基本的で重要な作業である。なぜならば，遺物の集中部であるブロックの形成過程・同時性の検討から，石器製作法・集落構造の解明に到るまで，個体別資料の認定を経て初めて到達できるからである。

個体別資料の評価やブロックの分析を通してユニットの抽出を図り，集落の景観構造の理解を進めるという基本的な方法は，寺谷遺跡・野沢遺跡でその一例を示した。寺谷遺跡では，12ケ所のブロックから，接合・個体識別作業によって，二つの世帯ユニットが抽出された。野沢遺跡では，6ケ所のブロックから三つの世帯ユニットが抽出され，寺谷遺跡とは異なる集落構成原理の存在も推測された。

個体別資料認定作業の精度は本報告の分析精度にも通じる重要な作業なので，ここに認定方法と個体別資料の外観的特徴を記しておきたい。

石材は頁岩(シルト岩)を主体にし，この他に砂岩・凝灰岩・チャート(珪岩)などがある。寺谷遺跡同様，大変識別の困難な黄灰色を呈した頁岩が主体を占めているので，目視・ルーペによる識別のほか石器を水にひたし，見えにくい微細線を浮き出させ，個体の共通性を正確に抽出するという作業も行った。また，混入鉱物の色，粒子の大きさ，混入状態，気泡等の状態，縞・斑状の模様の状態，層理に伴う亀裂の大小，層理面に残存する膠着物の状態，全体的な光

沢感，脂感，手ざわりによる滑感，ザラツキ感，石質の緻密さ，硬軟質度等の諸特徴を正確に把握することに努めた。

以上の諸特徴に留意しながら認定作業を進めた結果，集中部出土の細石刃文化関係の資料311点のうち95点を個体識別できた。接合によるもの42点，非接合のもの53点である。この他に単独個体が3点ある。接合率13.5%，個体識別率30.5%である。なお，事実上，接合・個体識別作業の不可能な砕片を除いた資料261点での接合率は16.1%，識別率は36%となる。

上記の認定方法で識別された15の個体別資料は，接合資料と非接合資料とから成っているが，構成資料数2点以上のものに個体番号を付した。（徳永）

2．個体別資料の分布

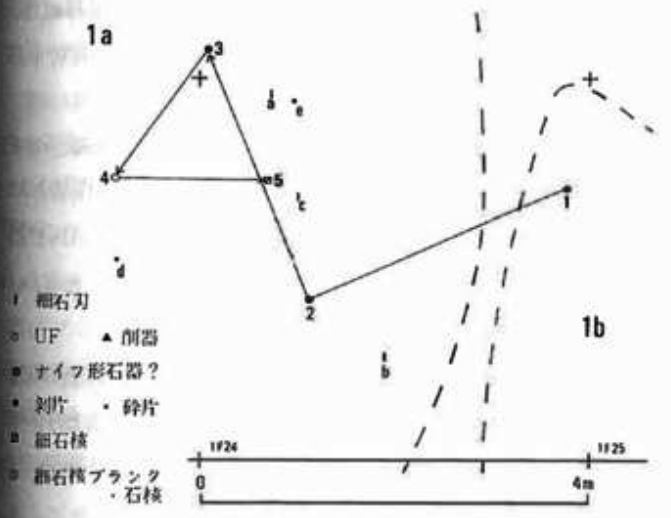
以下に，15例ある個体別資料について，石材の特徴，資料構成，剥離作業類型，分布状態について記す（第11表）。あわせて単独資料や搬入品に関しても補記する。

個体別資料M1　石材は灰黄色の頁岩である。うすい白黄色のシミ状模様および帯状模様が

第11表　個体別資料のブロック別・器種別分類表

個体別資料No.	ブロック	A				B	C	D	合計
		細石刃	削器	UF	ナイフ？	剥片	砕片	石核	
M1	1a	3		1		2	2	1(1)	9
	1b					1			1
	小計	3		1		3	2	1(1)	10
M2	1a	6				3		1(1)	10
	1b					1			1
	小計	6				4		1(1)	11
M3	1a			2		13			15
M4	1a	5			1				6
	1b	1							1
	小計	6			1				7
M5	1a	2				1		1(1)	4
M6	2					1		1	2
M7	1a			1		8		2	11
M8	1a					16		1	17
	1b					1			1
	小計					17		1	18
M9	1a					2			2
	外					1		1	2
	小計					3		1	4
M10	1a							2	2
M11	1a			2					2
M12	1a			2					2
M13	1a		1			1			2
M14	1a	3							3
M15	1a			2					2
合計		20	1	10	1	51	2	10(3)	95

D欄（　）内は細石核



第39図　個体別資料Ｍ１分布図（凡例は第43図まで同様）

部分的にある。うすい灰色を呈した微細線がわずかにある。全体的に光沢感があり石質もかなり堅硬である。

接合資料５点（第32図１～５），非接合資料５点（同図a～e），計10点の資料から成る。内訳は，細石刃３，ＵＦ１，剥片３，砕片２，細石核１である。細石刃以外はすべて細石核の調整作業に由来する調整剥片である。

本資料は，二つの細石核から成っている。細石核Ⅱでは，石核素材の獲得後，調整作業と細石刃の剥取という１サイクルを少なくとも３回経ている。この３回のサイクルを，前期作業段階（Ａ），中期作業段階（Ｂ），後期作業段階（Ｃ）と認めると，前期から後期までの全過程を示すＡＢＣ類ということになる。事実，本例は作業のスタート時点から，石核を捨て去るまでの全作業経過を示していると見なして差しつかえないものである。

石核Ⅰは，石核Ⅱとの接合の事実から前期段階（Ａ），フルーティングのある調整剥片から中期段階（Ｂ）の存在が推測される。ＡＢ類。

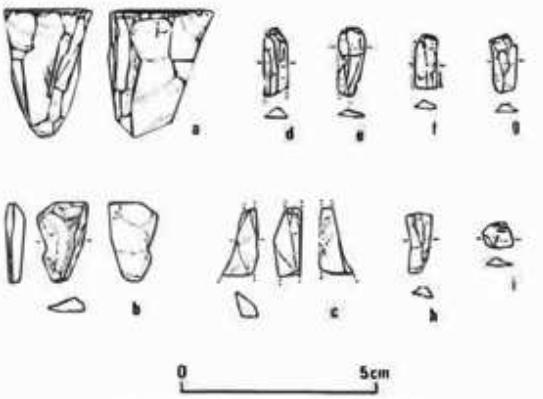
同一母岩から作られた二つの石核のうち石核Ⅰに相当するフルーティングのある調整剥片（同図１）が1bブロック内に位置する他は，すべて第1aブロック中央部の2.5×3.5mほどの範囲に分布する。石核Ⅰに属する資料だけが第1bブロックに離れて出土していることが注意される（第39図）。

個体別資料Ｍ２　石材は，淡い黄灰色の頁岩である。うすい灰色の線が帯状に連なる。黒色の微細な鉱物粒子が散在する。

非接合資料11点から成る。内訳は細石刃５，剥片４，細石核１である。剥片２点は細石核の調整剥片である（第40図）。

調整剥片・細石刃・残核の存在からみて，少なくとも後期作業段階（Ｃ）を含んでいると見られる。Ｃ類としておこう。

11点中10点が第1aブロック中央部の約６×4.5mの範囲に分布する。残る小剥片１点が第２ブロックに位置する。



第40図　個体別資料Ｍ２実測図

個体別資料M3　石材は灰黄色の頁岩である。うすい黄白色の縞模様がある。縞模様は幅1～2mmほどで，等間隔に数条あるいは1条のみ現れたり，極端に幅広くなったりしている。M5に似ているが，光沢感があり，縞模様もM5に比して鮮明である。

接合資料A群2点，B群3点，C群2点の計7点，非接合資料8点，合計15点から成る。内訳は，UF2，剥片15である。剥片の主体を調整剥片が占める。この内の1例(第33図b)は，むしろ細石刃と分類した方が適切かもしれない。なお，構成資料の中に細石刃を欠くのは，個体別資料M1・5・7の母岩とよく似ているために，これと区分抽出することができなかったことによる。

本来二つの細石核から成っていたと考えられる。石核Iについては，石核が持ち出されていること以外にはわからない。石核IIは，石核調整作業の存在が顕著であり，少なくとも中期作業段階(B)を含むことははっきりしている。石核I・IIの接合は初期段階(A)の証拠でもある。石核を欠くのは，後期作業段階(C)の欠如を示すと見なしておく。AB類。

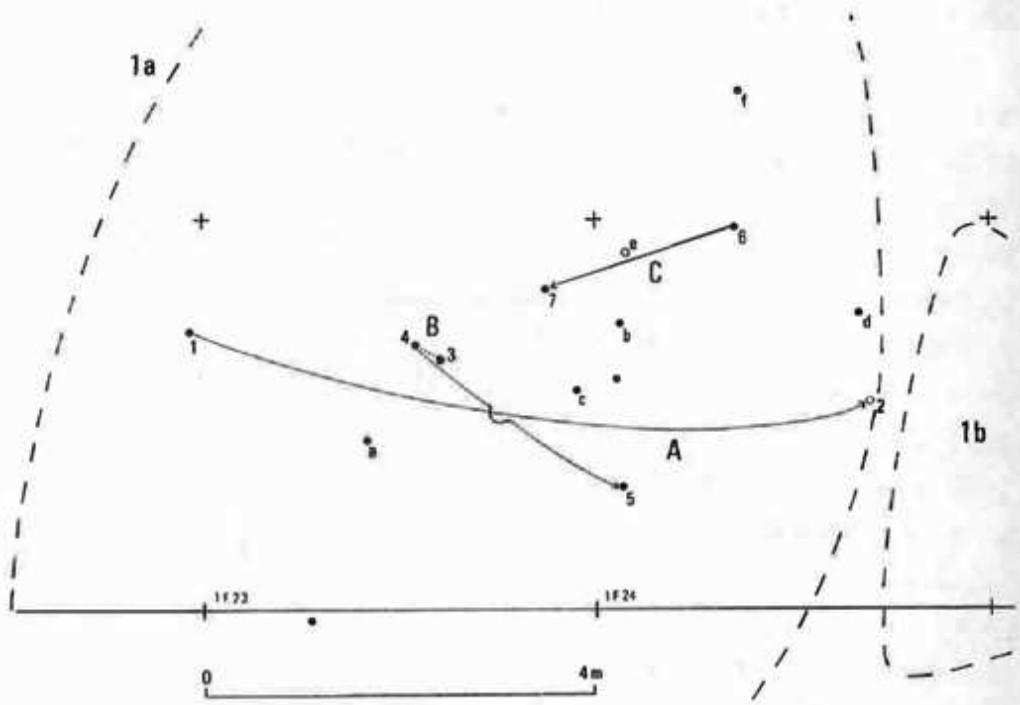
第1aブロック内ですべて収束し，約6.5×3mほどの分布域を持っている。接合資料も非接合資料も分布域の広さはさほど変わらない(第41図)。

個体別資料M4　石材は灰白色の頁岩である。

非接合資料7点から成る。内訳は，細石核の側面調整剥片に加工を加えたナイフ形石器？と細石刃6点である。

調整剥片・細石刃の存在，石核の欠如から，作業段階を中期のB類と見なしておく。

第1aブロック中央部に分布の中心域があるが，細石刃1点が第1bブロックに離れて位置して



第41図　個体別資料M3分布図

いる。5×3.5mの広さがある。

個体別資料M5　石材はうすい灰黄色の頁岩である。うすい白黄色の直線的な縞模様がある。この細い縞模様が連続する。M3に比して手ざわりが砂っぽい。

非接合資料4点から成る。内訳は，細石刃2，フルーティングを留める調整剥片1，細石核1である。

調整剥片・細石刃・細石核の資料構成は，少なくとも後期作業段階の存在を示す。C類と分類しておく。

第1aブロック中央部に分布する。約2×4mの広さがある。

個体別資料M6　石材は灰黄色の頁岩である。

接合資料2点から構成される。内訳は，ブランク1，剥片1となるが，剥片の方も石核素材またはブランクと考えられる資料である(第29図)。

第2ブロックの中央部に分布する。Ⅱ種接合で，約1.6mの距離がある。

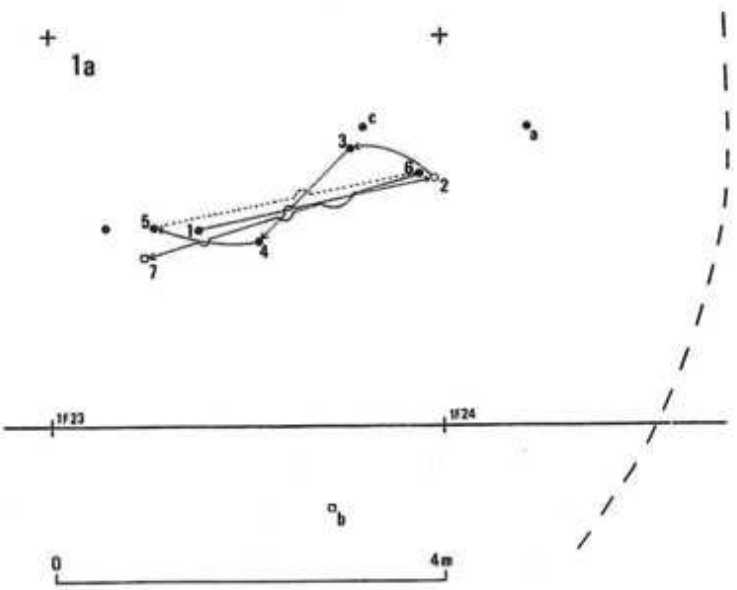
個体別資料M7　石材は灰黄色の頁岩である。複数の灰色を呈した線模様を帯状に配している。部分的に，黄色が著しく濃くなった部分と灰色とが交互に現れ，それが縞模様となっている。層理面の凹凸面においては泥状の膠着物が付着している。

接合資料7点，非接合資料4点，合計11点から成る。内訳は，UF1，剥片8，細石核素材・細石核ブランク2である。剥片の中には，細石核調整剥片2点(第34図a・c)が含まれている。

本例は，M8とともに石核素材作出過程と細石刃の剥離過程との両方を含んでいる。後者を示す資料中に接合資料のない点が気がかりだが，双方の作業段階の遺存状況を別々に推測しておく。

石核素材作出過程は，母岩の旧状から考えて，終末期段階と考えられる。したがって遺存する作業段階はC類となる。

細石刃剥離作業はどうであろうか。残核ないしブランクの解釈が問題となる(同図b)。ここでは残核と見なしたい。理由は石核の項で述べた通りである。したがって，終末段階の作業が含まれることになる。石核素材



第42図　個体別資料M7分布図

作出過程の存在と後期細石刃剥離作業から，当然，前期・中期段階の存在も予測される。ＡＢＣ類と考えておく。

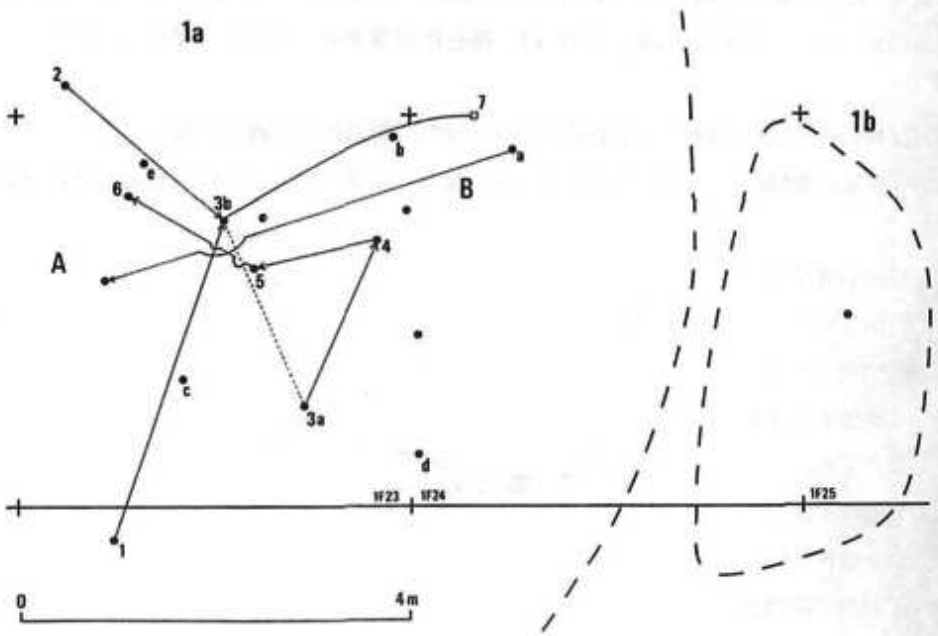
第1aブロックの中央部に分布する。非接合資料は，4.5×４mの広さがある。接合資料は北端に集中し，東西方向に細長い分布を示している。３×0.6mの広さがある(第42図)。

個体別資料Ｍ８　石材はうすい灰黄色の頁岩である。全体的に灰色の地に黄色がシミ状に混り合った感じである。大きな層理面において，ねずみ色を呈した泥状の膠着物が残存する。石質は全体が泥っぽく軟質である。

接合資料Ａ群８点，Ｂ群２点，非接合資料８点，合計18点からなる。内訳は，剥片17，石核１である。剥片は，大部分が細石核素材剥取の過程で生じた剥片で，一部に細石核の調整剥片(第35図a・c)と考えられるものがある。

石核素材の作出作業は，後期のＣ類としておく。細石刃の剥離作業ははっきりしないが，細石核を欠くこと，調整剥片が存在することなどから，少なくとも前期段階を含んでいると考えたい。Ａ類としておく。

接合資料はすべて第1aブロック中にあって，5.5×４mの範囲に分布する。非接合資料中の小剥片１点が第1bブロック中に位置する。8.5×５mの広さがある(第43図)。



第43図　個体別資料Ｍ８分布図

個体別資料Ｍ９　石材は灰黒色の砂岩である。

接合資料３点，非接合資料１点から成る。石核１，剥片４から構成される。非接合資料の１例を除いて，他の２例は，塊状の剥片である(第36図)。

円礫を粗割りしたのが主たる作業で，接合状態や構成資料から見て，作業段階の欠落はないとしておきたい。ＡＢＣ類。

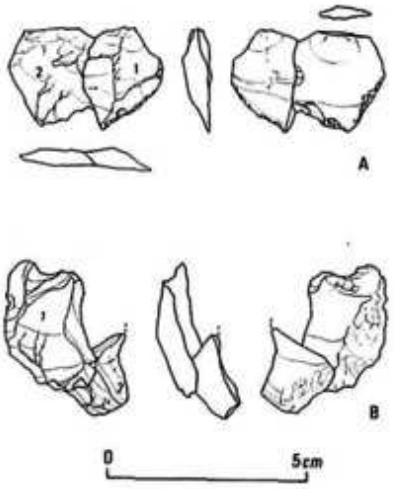
剥片２点(同図１・２)が第1aブロック中央部に，石核(同図４)がブロック外の２Ｇ12区に位置する。剥片１点(同図３)は表採で位置不明。第1aブロックとブロック外の資料とは約11mの距離がある。

個体別資料M10　石材は淡褐色の頁岩である。

Ⅱ種接合２点からなる。接合して細石核ブランクとなるものである(第28図１)。第1aブロック中央部にあって，60cmの距離を隔てて位置する(第45図)。

個体別資料M11　石材は黄色凝灰岩である。

接合資料２点からなる。ともにＵＦだが，剥片自体は，細石核の調整剥片として取られたものと考えられる(第44図Ａ)。第1aブロックの中心部に位置し，約１mを隔てて接合する(第45図)。



第44図　個体別資料M11・12実測図

個体別資料M12　石材は灰黄色頁岩である。

接合資料２点から成る。ともにＵＦである(第44図Ｂ)。第1aブロック中央部にあって，相互に約3.5mの距離を置いている(第45図)。

個体別資料M13　石材は赤褐色チャートである。

非接合資料２点からなる。石核から転用された削器(第21図１)と小剥片１点とがその内訳である。第1aブロックの東端に分布し，相互の距離は約１mである(第45図)。

個体別資料M14　石材は灰黒色頁岩である。

非接合資料３点から成る。細石刃３点より構成される(第16図７・31・45)。第1aブロック中央部に分布する。３×0.6mの広さがある(第45図)。

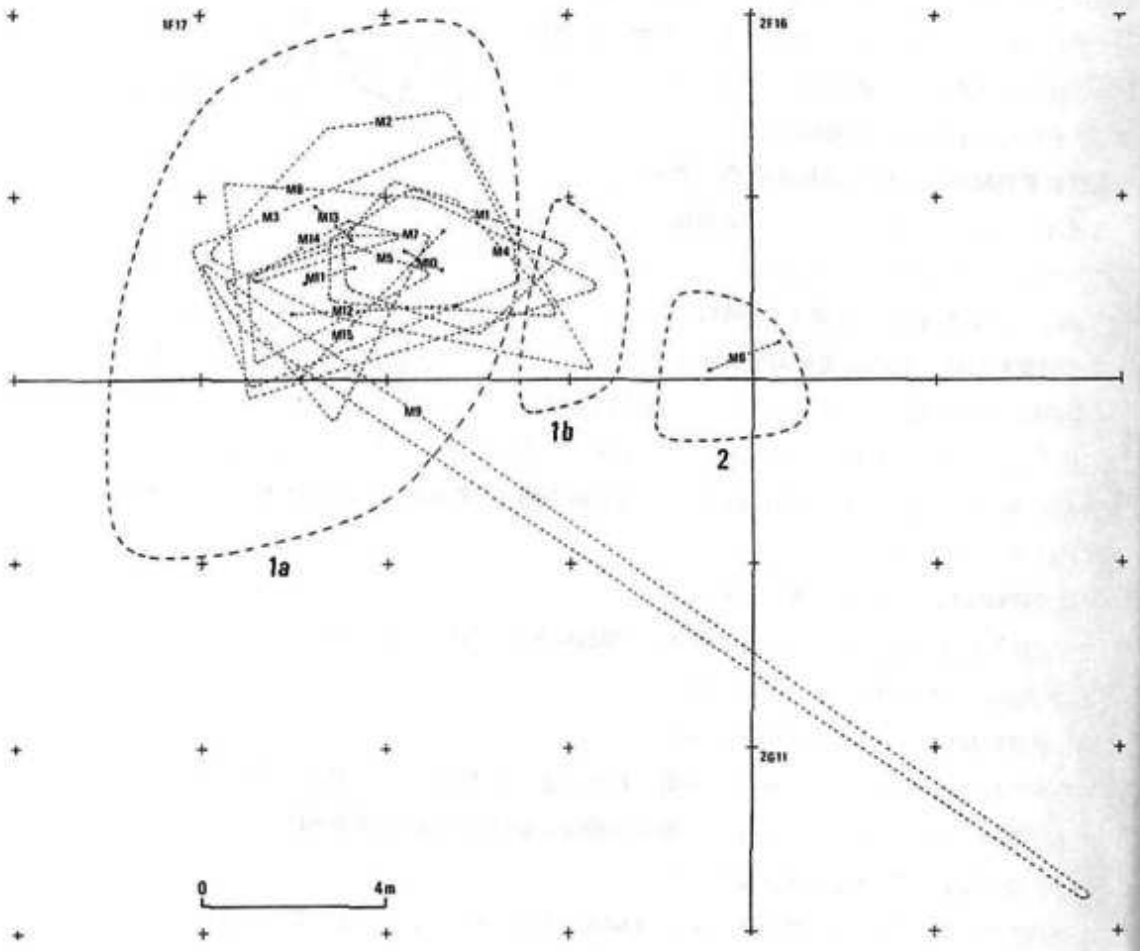
本資料は細石刃３点から成るが，石材の質感にきわだった特徴がある。暗灰色の地色に白色の細い縞文様が数本横走する。石核・調整剥片等の中に類例がないことが明白であるので，搬入品の可能性もある。

個体別資料M15　石材は灰黄色頁岩である。

Ⅱ種接合をして１点のＵＦとなる(第21図９)。第1aブロック中央部に分布する。約4.5mの距離を隔てて接合する(第45図)。

単独資料　上記諸例の他に，単独資料の個体別資料がある。頁岩製の資料はこの判断が難しいが，特殊な色調・文様を有する例と黒曜石の例を若干指摘することができる。細石刃２例(第７表)と細石核の素材ともなり得るかと思われる黒曜石製剥片１点(１Ｆ23Ａ９)の計３点である。搬入品であろうか。

逆に，複数の個体のいずれかに属することははっきりしているが，特定の個体にしぼりきれない例としと，細石刃18点がある(第７表)。Ｍ１・３・５・７のいずれかと判断されるが，細石刃自体が小さいために，あえて無理な識別をしなかった。上記の４個体の構成資料中細石



第45図　個体別資料分布範囲図

刃については，この点を留意されたい。

最後に凝灰岩製の資料について触れておく。凝灰岩は，きれいな黄白色を呈し，緻密で均質な例がほとんどである。縄文様が入らないことや色調が均一なため非接合資料の場合個体識別が難しい。

細石刃・細石核・調整剥片のうち，凝灰岩製のものに関する分布を検討してみると，第1a・2の二つのブロックにほとんど集中する傾向がはっきりする。第1aブロックでは，ブロック中心部の狭い範囲に集中し，ブロック中の細石刃全体の分布とは明らかに異なった在り方を示す。一方，第2ブロックでは，細石刃16例中13例が凝灰岩であって，凝灰岩の占有率がきわめて高い。そしてここには，凝灰岩製の細石核1点がある。分布を確認した上で，第1a・2ブロックの資料を検討すると，第1aブロックの凝灰岩の方はやや黄色味が強く粒子もやや粗く，第2ブロックの方は白味が強く粒子もより緻密であるというかすかな差を認めることができる。あるいは，凝灰岩は二つの個体に区分されるかもしれない。少なくとも，第2ブロックにおける細石刃は細石核を含めて同一個体に属する可能性が十分にあるように思われる。（鈴木・徳永）

3. 個体別資料群の分布とブロック区分の検討

個体別資料15例について，非接合資料を含む個体別資料の分布について見てみよう(第45図)。

個体別資料は，どの例をとってみても，第1aブロックの中央部をその分布の主領域とすることは共通している。第1aブロックが南北13.5m，東西8mほどの領域を有しているのに対して，個体別資料M9を除いた13例が8.5×7mほどの範囲に集中していることは，ブロックの南半を主とするブロックの外縁部は，個体別資料の分布範囲に含まれないことを意味するものとして注意しておきたい。

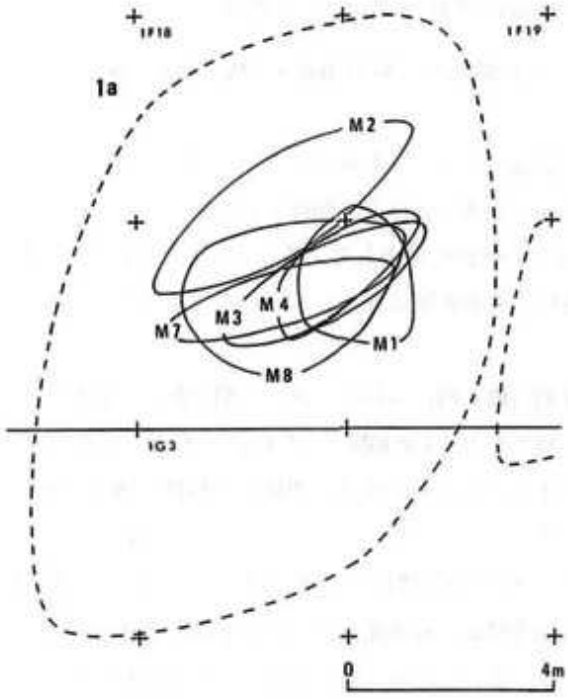
ついでながら，資料構成点数の多い個体別資料6例について，遠くに飛び離れた資料を除外した各個体別資料の中心分布域の在り方を見ておこう(第46図)。これによると，その主要分布域は，第1aブロック中央やや北寄りに集中することがわかる。個体別資料群全体の分布範囲よりもさらに限定された分布域となっている。

この点から推測されることは，第1ブロック内の石器製作の場が主としてこの一定の区域でなされたであろうということである。個体別資料群の分布範囲は，先にも述べたように第1aブロックの範囲に対して相当収縮したものとなっている一方，第1aブロックから第1bブロックの中心部にまで伸び出した分布傾向を示していることも注目される。第1aブロックに分布する14例の個体別資料の内，資料数が2点からなるM10・11・12・13・15の個体別資料を除外した残りの9例中4例までが第1bブロック中に分布域を広げていることも見過すことはできない。接合資料だけについてみると，3点以上の接合資料がある4例のうち，M1の1点が第1bブロックへ伸びている。このように，個体別資料の分布から，第1aブロックと第1bブロックの間に強い結びつきを窺うことができる。

この点に関して，別の角度から補足しておこう。ここで，細石刃文化期と尖頭器文化期の遺物群を分離しない以前の，東・西ブロックの分布図にたちもどってみよう(別添第6図)。ここでは，細石刃文化期のブロック1a・1bの境界相当部分に空隙がなく，西ブロックという一つのブロックの中に包括されている。これに対して，東・西ブロックの区分ラインは，細石刃文化期のブロック1b・2の区分域としても生きつづけている。

このことから考えて，第1a・1bブロックは本来一つのブロックに属していた可能性が強くなる。本来一つのブロックであったものが二つに分離されたのは，混在する二つの文化期の遺物群の判別処理方法によっていよう。すなわち，型式学的特徴の明確でない遺物については，1本の区分ラインを設けて(M／Pラインと呼ぶ)，その出土地点がM／Pラインのどちら側に位置するかによって時期判定をしたわけである。このM／Pラインの東側(尖頭器文化期の領域)に分布する遺物の中にも，本来細石刃文化に属しながらその特徴の不明瞭さ故に，尖頭器文化に帰属させられることになった遺物群が存在する可能性を否定し得ない。

石器の等量線図は，こうした背景のもとに作成されている。等量線図には，第1a・1bブロック



第46図　個体別資料分布中心域図

間に幅50cmの1本の溝がある。幅は狭いが南北に貫かれたこの間隙が，二つのブロックを分離する根拠であった。ここは，元来資料数の少ない区域であったがために，数点の資料が上記のような経過で脱落し得たことを考慮すると，第1a・1bブロックが本来同一のブロックであったと考えることの方がむしろ自然であろう。

第1aブロックの個体別資料中の分布でもう1点注意をひくのは，M9の資料である。これは，ブロック外2G12区に位置する石核と接合関係を有している。この間の距離はおよそ23mある。

第2ブロックへ目を転じてみよう。本ブロックを構成する資料の主体が凝灰岩製の細石刃と細石核で，同一個体の可能性があることは先に記したが，識別された個体別資料は接合例1例に留まる。第1a・1bブロックとの間に共有資料は無い。また，第1b・2ブロック間の分離状態は，第1a・1bブロック間におけるよりはいっそう明瞭である。

このように，個体識別の結果や石器群の性格から，第2ブロックは他ブロックに対して独立性の高いものであると考えられる。

したがって，ここに**第1**(1a+1b)，**2ブロック**の二つのブロックを，本来の遺物分布のあり方として想定し，その周辺部に若干のブロック外資料を有する一つの遺物分布空間を認めることができよう。

4．ブロックの石器組成と性格

最終的に導かれた二つのブロックとブロック外資料について，その石器組成と性格について触れておこう(第12表)。

第1ブロック(1a+1b)　細石刃103点に本遺跡出土のトゥールの全器種を加えた127点と剥片剥離作業に伴う各種の剥片・石核157点，合計280点を有している。石器の製作から使用までの一貫した作業と当該文化期に予想される石器装備のほぼすべてを有しているという意味で，量的にも内容的にも単位的・自立的で，本遺跡の根幹を成すブロックである。

第2ブロック　細石刃16点のトゥールと剥片・石核4点，合計20点から成る。剥片は石核素材であり，実際の構成は，細石刃と細石核2点，細石核ブランク・素材2点ということになる。

第12表 再編ブロック別石器組成表

		細石刃	削器	UF	RF	敲石	磨石	ナイフ?	石斧	小計	剥片	砕片	石核ブランク	合計
1 (a+b)	点数	103	1	15	2	3	1	1	1	127	103	40	10(3)	280
	%	81.1	0.8	11.8	1.6	2.3	0.8	0.8	0.8	100	—	—	—	—
2	点数	16	—	—	—	—	—	—	—	16	1	—	3(2)	20
	%	100	—	—	—	—	—	—	—	100	—	—	—	—
外	点数	8	—	1	—	—	—	—	—	9	1	—	1	11
	%	88.9	—	11.1	—	—	—	—	—	100	—	—	—	—
合計	点数	127	1	16	2	3	1	1	1	152	105	40	14(5)	311
	%	83.5	0.7	10.5	1.3	1.9	0.7	0.7	0.7	100	—	—	—	—

( )内は細石核

石器製作と基幹のトゥールである細石刃は有するが，細石刃以外のトゥールをすべて欠くという点に留意しておく必要があろう。数量の点でもいちじるしく劣る。

ブロック外 ブロック外には，細石刃8，UF1点のトゥールと大型剥片を取った石核1点，剥片1点の合計11点がある。トゥールが多い。

したがって，遺跡全体でみれば，1ブロックが主体的な役割を担っていたものであり，性格の上でも規模の点でも付随的な2ブロックとブロック外要素が取りまいているとみておきたい。

（鈴木）

第6節 ユニットの設定

主従二つのブロックとこれを取り巻くブロック外資料とによって構成される，およそ30m四方の遺物分布空間を，集落という観点で見直しておくことにしょう。このためには，集落を構成する世帯ユニットと機能空間の抽出という作業が必要になってくる。これは言葉を置き換えれば石器群の構成(石製道具組成)と施設を吟味するということになろう。

道具組成 大小二つのブロックとブロック外資料のトゥールの構成は先に記したとおりである。主要な道具組成が，種類の点でも数量の点においても，十分な単位性と独立性を具えているのは，第1ブロックにおいてのみ認めることができる。他の構成資料は断片的で，第1ブロックとの対比においては，副次的あるいは従属・付随的である。このような意味において，ここには道具構成上，複数の単位的なまとまりがあるとは認め難く，ただ一つの単位を捉え得るにすぎない。

火処 炉などの火を焚いた場所の手掛りとなしうる可能性のあるものに受熱剥片がある。受熱剥片は，第1・2ブロックの両方から検出されている(第38図)。第1ブロックでは，ブロックの中央からやや東寄りの部分，5×2mほどの楕円形の範囲に分布している。火処があれば，第1にこのあたりが候補地となる。同じ理屈で，第2ブロック中にも同様の想定が可能になる。しかし，これには若干の留保条件がある。まず想起されるのは，受熱剥片が火熱を受けた本来の場所から，後に移動した可能性はないかという点である。この可能性をすべての剥片につ

いて否定することはできないが，受熱剥片が一定区域に限定されている点は，これに対して否定的である。ちなみに，石器ブロック中に受熱剥片が出土する例は，多聞寺前(鶴丸他1983)や野沢遺跡(鈴木忠他1982)でも知られている。とくに後者の例は，原位置を動いたとは考えにくい砕片の中にいくつかの受熱資料を認めている。

他方では，同じ区域に多数の受熱の痕跡を欠く資料が存在する。この一点は，受熱剥片と火処との対応関係に対して懐疑的な要素となる。同一区域に受熱剥片と受熱の形跡のない石器群との混在状況を理由づけようとしてできないことはない。しかし，これは解釈のための解釈に落ち入りかねない。

また，火処がブロック外に存した場合，これをどういう風に検証し得るかという問題もある。主要な火処が石器ブロック外に存した可能性は十分にある。受熱剥片を手がかりにして火処を推測する方法では，石器の分布しないブロック外でこれを探ることはできない。

火処を求めるために，赤化砂岩の等量線図を作成した(第95図)。当時の生活面付近と推定されるレベルから採集した土砂中より，水洗選別によりもともと土層中に含まれていた微細な砂岩を取り出し，ここから受熱して赤化したと思われるものを集計したものである。この方法やデータの意味については第Ⅴ章で詳しく触れるが，赤化砂岩のピークが，第1ブロックの中央やや東寄りにあって，受熱剥片の分布域とぴったり重なる点に留意しておきたい。

ただ，遺物の垂直分布図(1F21～25区までの北半2m幅)と第6配石，土砂サンプリングのレベルの三者を対比してみると，土砂サンプリングのレベルは，石器出土レベルのピークの下底ラインや配石の下底ラインよりも，10cmほど高いように見受けられる(第47図)。土砂採取の後，礫群の下底ラインを検出したという発掘経過もあり，本来の生活面と土砂採集取のレベルとの間に多少なりとも差のあることは否めない。資料のこのような採取条件を念頭に置いておく必要があろう。

赤化砂岩においては，このほかに受熱剥片と同様に，同一区域内に存する非赤化砂岩の解釈の問題があるが，上記の経過を踏まえて，ここでは少なくとも第1ブロック付近に火処が存し得た可能性だけを指摘しておこう。

調理空間　敲石が石器ブロック内で特殊な出土位置を常に占めていること，そしてそれが植物質食料の調理用具である可能性が高いことは，既に黒坪一樹氏によって詳しく論じられている(黒坪1982，1983・84)。そしてそれが発見される場所が，調理空間として捉え得るとすると，世帯の単位の抽出と居住空間の再構成にとって，当面きわめて有力な材料たり得ることも述べた(鈴木忠他1982，鈴木1983a)。

本例にたちもどってみよう。敲石は，第1aブロック外縁部に主として分布する(第38図，別添第7図)。そしてこの位置は，ちょうど受熱剥片の分布域の西側をとりまくような位置に相当していることにも気づく。あえてこれに確定的な意義を持たせようとは当面考えないが，留意しておきたい。ついでながら，台石(第73図，図版2・3)も石斧も受熱剥片の分布域の外側で，石器ブロックの外縁部に位置していることを付け加えておく。

敲石は，集落内の調理空間を探るうえで，このように大きな手懸りとなし得るものであるが，ここでも尖頭器文化の資料との関係を補記しておかなければならない。というのは，敲石自身による時期区分ができないため，M／Pラインを基準とした分布域によって所属時期を決めているからである。

尖頭器文化に属すると判断され，細石刃のブロックに近接して分布する敲石は6点ある(別添第6・11図)。この内2点は石器密集域内に入るが他の4点は，明らかに遺物分布のもっとも希薄な所に位置している。ここでも敲石の分布の在り方は，原則通りの出土状態を示している。

したがって，たとえ敲石の所属判定に上記のような不確定要素が介在し得たとしても，大勢として，先に記した分布上の位置関係を考え直す必要はないであろう。

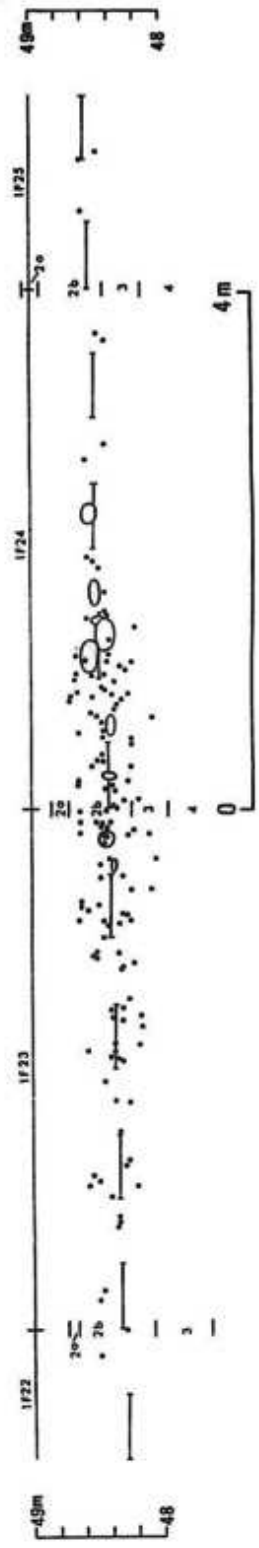
敲石・台石といった調理活動に関係深い遺物が，受熱剥片の分布域から予想される火処の外を取り巻くように位置していることをもって，この付近に調理空間の存し得た可能性を考慮しておきたい。

住居　積極的な論議の材料を欠く。石器ブロック外に考えておきたい。なおかつ石器ブロック内に推定した火処が，唯一で主要な火処であるならば，これからさほど遠からぬ位置，第1ブロックの東北方向を一つの可能性として考慮しうるのではないだろうか。

配石　本来ならば施設側のもっとも有力な証拠となるべき資料だが，遺憾ながら十分な発言ができない状況にある。細石刃文化期の遺跡に礫群を伴った例は知られていないので，礫群(第49図，図版3－2)は除外するとしても，配石(第49図，図版2－下・3－3)については1ブロックを中心とする石器群に共伴するものとして，本集落の構成要素たり得る可能性はある。

石器全体の垂直分布図と配石・台石のそれとを比較しても(別添第7図)，特定の区域に限定してこれを検討しても(第47図)，両者の位置関係は自然な状態にある。

第Ⅴ章第1節でものべたような，第1aブロックの区域内の礫群と配石との間の接合関係に，一種の排他関係とでも呼ぶべき状況があるのに対して，配石群周辺の礫の接合関係が，東方第



第47図　石器(1F22～25区北半2m幅)・第6配石垂直分布図　(図中の水平線は，土砂採取位置)

第13表　集中部・周辺部出土の石器一覧表

但し，第7・8・9表掲載分は省略，
遺物番号ゴチックは受熱。

遺物番号		類別		石質	出土層	標高(cm)	位置(cm) N	W	ブロック	個体番号	調整剥片	挿図番号
集中部												
1F18	A 1	B		頁	Ⅳ中	865	73	261	(1a)		○	
	A 3	C		頁	Ⅳ中	852	386	41	(1a)			
	A 5	B		頁	Ⅳ中	855	397	320	(1a)		○	26−2
	A 7	B		頁	Ⅳ中	845	353	270	1a	(M2)	○	40−c
	A 8	B		頁	Ⅳ中	846	338	382	1a	(M2)	○	40−b
	A 9	B		頁	Ⅳ中	848	348	398	(1a)			
	A14	C		凝	Ⅳ中	837	—	—	(1a)			
	A15	B		頁	Ⅳ中	834	370	47	(1a)	M8		35−1
	A16	C		頁	Ⅳ中	833	178	37	(1a)			
	A18	A	敲石	砂	Ⅳ	836	344	265	(1a)			23−3
1F19	A 1	B		頁	Ⅳ中	876	32	167	(1a)			
	A 2	A	UF	頁	Ⅳ中	872	77	12	(1a)			21−2
	A 3	B		頁	Ⅳ中	865	379	86	(1a)		○	26−1
	A 5	B		頁	Ⅳ中	871	270	145	1a	(M3)	○	33−b
	A 6	B		頁	Ⅳ中	863	148	237	(1a)			
	A14	B		頁	Ⅳ中	858	325	175	(1a)			
	A15	B		凝	Ⅳ中	849	190	125	(1a)			
	A18	C		頁	Ⅳ中	845	375	38	(1a)			
	A21	C		頁	Ⅳ中	856	166	245	(1a)			
	A27	C		頁	Ⅳ中	845	360	83	(1a)			
	A33	A	台石	砂	Ⅳ	848	228	172				
	A34	A	台石	砂	Ⅳ	847	293	124				
	A35	B		頁	Ⅳ中	872	77	12	(1a)			
1F22	A 1	B		頁	Ⅳ上	856	393	225	(1a)			
	A 2	B		頁	Ⅳ中	847	115	382	1a	M3	○	33−1
1F23	A 1	B		頁	Ⅳ中	852	212	32	(1a)			
	A 2	B		凝	Ⅳ中	851	280	107	(1a)			
	A 4	B		頁	Ⅳ中	858	187	150	1a		○	26−3
	A 5	A	UF	頁	Ⅳ中	860	256	194	1a	M12		21−11
	A 6	B		頁	Ⅳ中	855	290	205	(1a)			
	A 7	B		頁	Ⅳ中	860	241	229	(1a)		○	
	A 8	C		頁	Ⅳ中	863	191	314	1a	(M1)	○	32−d
	A 9	B		黒	Ⅳ中	861	178	326	(1a)			
	A12	B		頁	Ⅳ中	852	242	375	(1a)			
	A13	B		頁	Ⅳ中	852	208	20	(1a)			
	A14	C		頁	Ⅳ中	848	306	76	(1a)			
	A20	B		頁	Ⅳ中	859	129	214	1a	M3	○	33−4
	A25	A	UF	頁	Ⅳ中	863	146	392	1a	M7		21−6
	A26	B		凝	Ⅳ中	862	181	398	(1a)			
	A28	C		頁	Ⅳ中	851	30	391	(1a)			
	A29	B		頁	Ⅳ中	857	57	323	(1a)			
	A32	A	UF	凝	Ⅳ中	849	156	325	1a	M11	○	22−2

遺物番号	類別		石質	出土層	標高(cm)	位置(cm) N	W	ブロック	個体番号	調整剥片		挿図番号
UF23 A34	C		頁	Ⅳ中	848	267	234	(1a)				
A35	B		頁	Ⅳ中	848	297	228	(1a)				
A36	B		頁	Ⅳ中	848	338	270	(1a)				
A38	B		頁	Ⅳ中	847	116	30	1a	M7			34-3
A46	C		頁	Ⅳ中	841	186	100	(1a)				
A49	B		頁	Ⅳ中	848	72	348	1a	M3			33-7
A50	B		頁	Ⅳ中	847	23	383	(1a)	(M8)			35-b
A59	B		頁	Ⅳ中	843	175	399	(1a)				
A61	B		頁	Ⅳ中	838	242	242	(1a)				
A64	C		頁	Ⅳ中	837	268	153	(1a)				
A65	B		頁	Ⅳ中	834	267	88	(1a)				
A66	A	UF	頁	Ⅳ中	836	396	208	(1a)	M15	1F24A196と接合		21-9b
A70	B		頁	Ⅳ中	835	168	87	(1a)	M8			
A71	A	UF	凝	Ⅳ中	837	187	220	(1a)	M11	○		22-4
A72	C		頁	Ⅳ中	837	320	191	(1a)				
A77	B		頁	Ⅳ中	835	270	164	(1a)	(M8)	○		35-c
A78	B		頁	Ⅳ中	838	235	316	(1a)				
A79	B		頁	Ⅳ中	833	196	103	1a	M7			28-4
A81	B		頁	Ⅳ中	836	144	240	1a	M3	○		33-3
A82	C		頁	Ⅳ中	839	159	390	(1a)				
A84	A	UF	頁	Ⅳ中	844	33	384	(1a)				21-8
A87	C		頁	Ⅳ中	835	63	213	(1a)				
A91	B		頁	Ⅳ中	834	210	210	1a	M7			34-4
A92	B		頁	Ⅳ中	830	225	165	(1a)	(M3)	○		33-a
A93	A	UF	頁	Ⅳ中	825	254	93	1a				22-3
A94	B		頁	Ⅳ中	826	205	13	(1a)				
A95	B		砂	Ⅳ中	829	155	0	(1a)	(M9)			36-3
A98	B		凝	Ⅳ中	823	342	75	(1a)				
A99	C		凝	Ⅳ中	827	226	126	(1a)				
A 104	C		頁	Ⅳ中	823	332	167	(1a)				
A 105	C		頁	Ⅳ中	833	184	291	(1a)				
A 106	B		頁	Ⅳ中	829	48	128	(1a)	(M8)			35-e
A 107	B		頁	Ⅳ中	830	94	320	1a	(M7)	○		34-c
A 108	A	UF	頁	Ⅳ中	833	106	311	1a	M1	○		22-1
A 109	B		頁	Ⅳ中	832	140	276	1a	M7			34-6
A 110	B		頁	Ⅳ中	831	105	248	(1a)	(M8)			
A 111	B		頁	Ⅳ中	829	107	208	(1a)	M8	1F23A144と接合		35-3b
A 112	B		頁	Ⅳ中	831	156	237	(1a)	M8			35-5
A 113	B		頁	Ⅳ中	820	197	54	1a	(M7)			
A 114	D		頁	Ⅳ中	817	228	92	1a	M7			34-7
A 116	A	Sc-D	頁	Ⅳ中	828	19	238	(1a)	(M13)			21-1
A 117	B		珪	Ⅳ中	827	55	324	(1a)	(M13)			
A 119	B		頁	Ⅳ中	824	175	380	1a	(M3)	○		33-c
A 120	C		頁	Ⅳ中	824	192	337	(1a)				
A 121	C		頁	Ⅳ中	824	164	306	(1a)				
A 123	C		頁	Ⅳ中	825	144	255	(1a)				

遺物番号		類別		石質	出土層	標高 cm	位置 cm N	位置 cm W	ブロック	個体番号	調整剥片	挿図番号
1F23	A 129	A	UF	頁	IV中	820	338	244	(1a)			21-4
	A 132	B		頁	IV中	822	98	386	(1a)	(M8)		
	A 134	C		凝	IV中	816	120	234	(1a)			
	A 135	B		頁	IV中	819	116	220	(1a)			
	A 137	B		頁	IV中	—	82	110	(1a)	M8		35-6
	A 140	A	Kn?	頁	IV中	811	59	381	(1a)	(M4)	○	22-7
	A 141	C		頁	IV中	809	153	337	(1a)			
	A 144	B		頁	IV中	810	294	290	(1a)	M8	1F23A111と接合	35-3a
	A 147	B		頁	IV中	805	200	148	1a	M7		34-1
	A 148	B		頁	IV中	806	203	38	(1a)			
	A 150	B		頁	IV中	804	127	364	(1a)	M8		35-4
	A 155	C		頁	IV	732	211	34	(1a)			
	A 157	B		砂	IV	827	263	63	(1a)	M9		36-1
	A 158	A	敲石	砂	IV	826	141	175	(1a)			23-2
	A 159	A	磨石	砂	IV	821	245	198	(1a)			24
1F24	A 1	B		頁	IV中	872	6	86	(1a)			
	A 3	D		頁	IV中	868	146	46	1a			28-3
	A10	C		頁	IV中	866	205	54	(1a)			
	A12	B		頁	IV中	864	174	56	(1a)			
	A16	B		頁	IV中	865	84	89	1a			
	A18	C		頁	IV中	863	16	38	(1b)			
	A19	A	UF	頁	IV中	855	35	31	1a	(M3)		21-5
	A21	C		頁	IV中	858	36	108	(1a)			
	A40	B		頁	IV中	858	99	146	(1a)			
	A43	B		頁	IV中	863	233	114	1a	M1	○	32-2
	A44	A	UF	頁	IV中	859	240	151	1a	M12		21-7
	A51	B		頁	IV中	851	346	8	1a	(M8)		35-d
	A56	B		頁	IV中	858	96	268	1a	(M3)	○	33-d
	A61	B		頁	IV中	853	93	87	1a	(M7)	○	26-5
	A62	B		頁	IV中	854	101	103	(1a)			
	A63	D		頁	IV中	850	121	70	(1a)	M10	1F24A74と接合	28-1a
	A64	D		頁	IV中	848	172	33	(1a)			28-2
	A68	C		頁	IV中	845	64	43	(1a)			
	A69	B		頁	IV中	848	101	101	(1a)			
	A74	D		頁	IV中	847	158	113	(1a)	M10	1F24A63と接合	28-1b
	A 104	C		頁	IV中	843	153	16	(1a)			
	A 108	D		頁	IV中	842	3	65	(1a)	M8		35-7
	A 135	C		頁	IV中	842	111	58	(1a)			
	A 136	A	UF	頁	IV中	844	79	161	(1a)			21-3
	A 137	C		頁	IV中	842	78	106	(1a)			
	A 139	B		頁	IV中	844	8	152	1a	M3		33-6
	A 152	C		頁	IV中	839	—	126	(1a)			
	A 188	A	UF	頁	IV中	844	187	279	1a	M3	○	21-10
	A 196	A	UF	頁	IV中	840	79	118	(1a)	M15	1F23A66と接合	21-9a
	A 218	B		頁	IV中	840	35	128	(1a)	M8	○	35-a
	A 231	B		頁	IV中	831	226	7	(1a)	(M8)		

遺物番号		類別		石質	出土層	標高(cm)	位置(cm) N	W	ブロック	個体番号	調整剥片	挿図番号
1F24	A 234	B		頁	IV中	835	166	76	(1a)			
	A 236	B		頁	IV中	837	164	20	1a	(M3)	○	32-e
	A 237	C		頁	IV中	836	138	14	(1a)			
	A 239	C		頁	IV中	837	26	95	1a	(M1)		
	A 307	B		頁	IV中	829	142	7	(1a)			
	A 336	B		頁	IV中	828	67	109	(1a)			
	A 338	B		頁	IV中	824	44	52	1a		○	26-6
	A 339	B		頁	IV中	826	107	23	1a	(M3)	○	33-b
	A 363	B		頁	IV中	822	160	113	(1a)			
	A 395	C		頁	IV中	865	217	80	(1a)			
	A 396	B		頁	IV中	866	126	102	(1a)			
	A 398	B		頁	IV中	846	52	184	1a	(M2)		
	A 399	C		頁	IV中	824	44	52	(1a)			
	A 404	A	石斧	泥	IV	852	6	190	(1a)			25
1F25	A 3	D		頁	IV中	885	381	306	2	M6		29-1b
	A32	B		頁	IV中	859	205	59	1b	(M8)		
	A108	B		頁	IV中	844	361	40	1b	(M2)		
	A140	B		頁	IV中	849	173	110	1b		○	26-4
2F21	A35	B		頁	IV中	854	320	59	2	M6		29-1a
2F23	A 2	A	UF	凝	IV中	886	338	331	外		○	21-12
1G2	A 2	A	RF	頁	IV中	810	266	329	(1a)			22-5
	A 3	B		頁	IV中	851	304	236	(1a)			
	A 4	B		頁	IV中	837	35	313	(1a)			
	A 5	C		頁	IV中	818	352	225	(1a)			
	A 6	B		頁	IV中	822	61	295	(1a)			
1G3	A 7	B		凝	IV中	842	118	30	(1a)			
	A 9	B		頁	IV中	845	9	105	1a	(M3)		
	A12	B		頁	IV中	851	143	119	(1a)			
	A13	D		頁	IV中	853	86	285	1a	(M7)		27-6
	A23	A	RF	頁	IV中	835	52	146	(1a)			22-6
	A24	C		頁	IV中	834	99	162	(1a)			
	A57	C		頁	IV中	833	30	180	(1a)			
	A58	B		頁	IV中	828	65	170	(1a)			
	A60	C		頁	IV中	826	161	88	(1a)			
	A65	B		頁	IV中	831	185	353	1a			
	A70	B		頁	IV中	824	33	94	(1a)	M8		35-2
	A81	B		頁	IV中	817	98	144	(1a)			
	A90	B		頁	IV中	797	84	58	(1a)			
	A91	B		頁	IV中	812	24	212	(1a)			
	A103	A	敲石	砂	IV中	821	14	64	(1a)			23-2
2G12	A26	D		砂	IV中	892	325	320	外	M9		36-4
2G12	A 2	D	MC	頁	IV下	844	25	329	—			31-27
[illegible]	A29	B		砂	—	—	—	—	—	M9		36-2

1bブロック方向に強く伸び出していて(第59図)，石器における接合関係の在り方に共通していること，また，配石・礫群それぞれを構成する礫の重量や焼け礫の占める比率の違いなどはこうした立場に肯定的な要素である。

さらに，細石刃文化期の遺物集中域は，配石の南半とこの南西方向に続く礫分布域にすっぽり重なり，礫群は外れる。反対に，尖頭器側の集中分布域には礫群がすっぽり重なり，配石は外れる(別添第5・6図)。このような状況を踏まえて，配石が第1ブロック内に存した可能性を考慮しておきたい。

配石の北端，石器分布のまばらな外縁部に台石がある。台石は配石と同様大型の礫を用いており，石皿のような明確な遺物として，配石とははっきり用途上区別し得るかどうかといった問題がある。ここでは，礫一般を配石・礫群などの集落施設の構成要素すなわち施設として理解してきているので，台石も石器組成などを問題にする際には除外して記述してきた。

しかし，配石として用いられた礫との共通性や分布位置が細石刃側にあることなどからみて，配石とともに台石も細石刃文化の所産たる可能性を考慮しておかなくてはならない。

その他の要素　受熱剥片の分布域や配石の南半部の位置は，ちょうど第1aブロック中の石器群集中部である。このことは，個体別資料の中心分布域がここに重なることにもよく現れている(第38・46図，別添第6・8図)。ここでは，石器製作に伴う剥片剥離・細石刃剥取作業が明らかに実施されている。槌石もこの領域で発見されている。

細石刃の剥取作業は第2ブロックでも行われている。凝灰岩製で同一個体である可能性の高い細石刃・細石核の出土がこれを物語っている。

以上のように，十分な道具構成を有し，石器製作を行い，火処と調理空間を備え，当然住居も備え，さらには配石・台石をも設けた可能性のある，一つの単位が浮び上ってくる。道具(遺物)と施設(遺構)の両要素を加味した上で，ここに一つの世帯ユニットを想定することが可能になったように思う。

なお，第13表に石器一覧表を掲げておく。　(鈴木)

第Ⅴ章　尖頭器文化

第1節　遺　　構

1．礫　　群

1）礫群構成礫の平面分布・垂直分布及び規模

ここで扱う礫群は，第2・3・4・5・41礫群（R2・3・4・5・41）の5基である（第48~50図）。いずれも尖頭器を主体とするブロックと重なり，あるいは近接している（別添第3図）。なお，尖頭器文化の礫総数は，礫群・配石構成礫も含め866点である。

まず平面分布であるが，その状況は三つに分類できる。

密集型：礫が密集していて，その部分の輪郭が明瞭であり，周辺に礫が分布しないもの。R4。

集中型：礫が集中する部分があり，その周辺に礫が散在するもの。R41。

分散型：礫の集中する部分が不明瞭で，礫が分散して分布しているもの。R2・3・5。

R41についてはかなり密集しているように見えるが，周辺には多量の礫が分布している。これらは，第6配石（H6）を中心とする礫の分布と表面的には区分が難しく，その所属について別項で検討する（本節配石の項）。こうした経緯から，礫群の集中部のみを区分している。

次に密度であるが，1㎡当りの分布個数は，R2：4.4個，R3：8.5個，R4：25個，R5：14.6個，R41：41.6個である。

面積は次の通りである。R2：12.12㎡，R3：3.16㎡，R4：0.36㎡，R5：2.8㎡，R41：3.2㎡である。

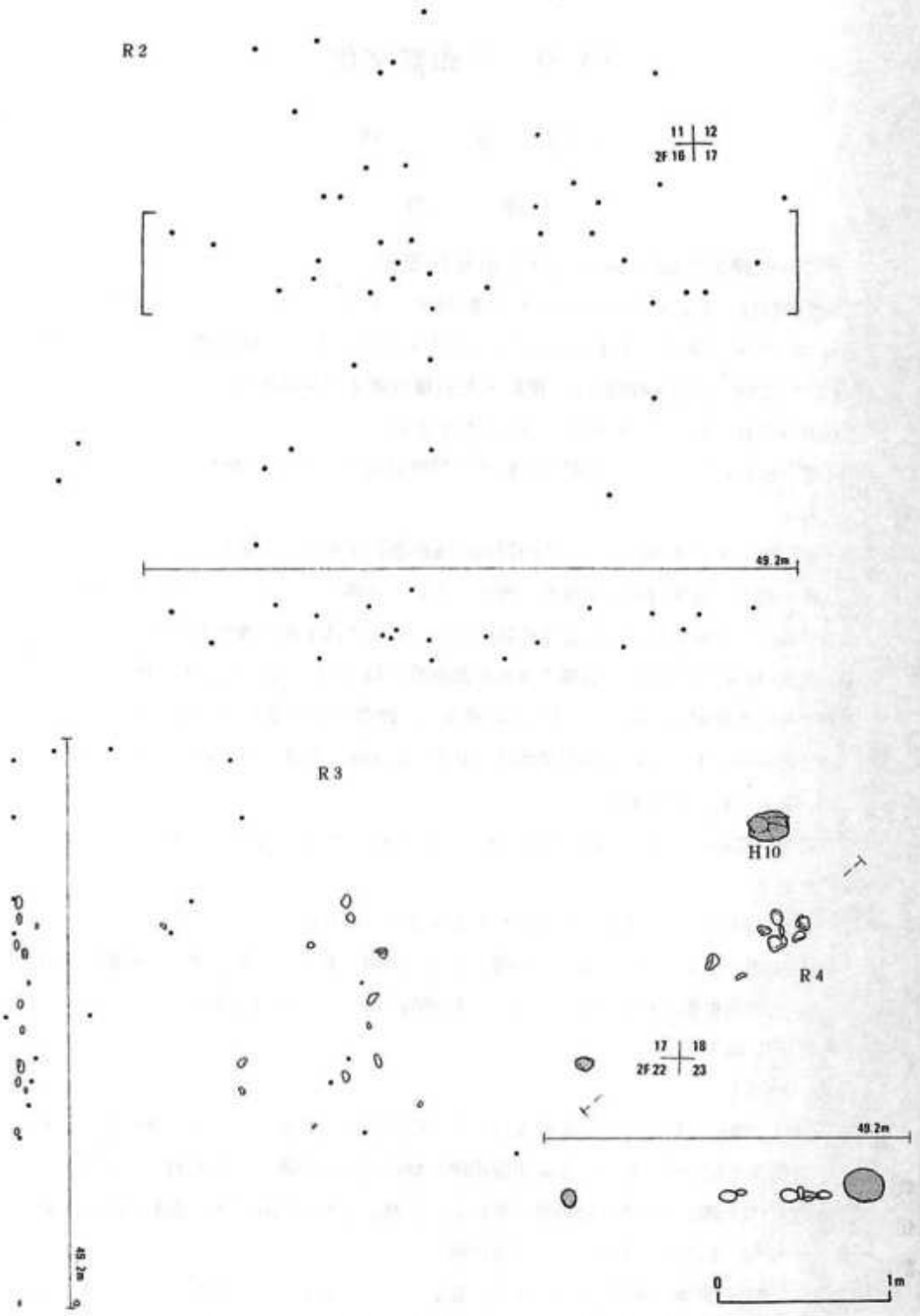
垂直分布では，掘り込みの存在が予想されるようなものはない。

礫群の規模を礫数で見てみたい。R2：53個，R3：23個，R4：9個，R5：41個，R41：139個である。次に総重量で見てみよう。R2：1,364g，R3：1,442g，R4：2,546g，R5：6,539g，R41：12,869gである。

2）礫の分類

礫群構成礫は，焼けと割れの二つの要素から五つに分類することができる。非赤化完形礫―焼けていない礫のうち完形のもの。非赤化破損礫―焼けていない礫のうち割れているもの。赤化完形礫―焼けた完形礫。全面赤化破損礫―割れ面，自然面ともに焼けた礫。割れ面非赤化礫―割れ面の一部あるいは全部が焼けていない焼け礫。

以上の順で各礫群の個数の内訳を見てみよう。R2は，0・24・0・3・26である。R3は，2・2・0・1・22である。R4は，0・0・1・0・8である。R5は，4・7・0・1・29である。R41は，16・39・18・5・55である。



第48図　尖頭器群に伴う礫群（R 2・3・4），配石（H10）

非焼け礫は，R４以外の礫群全てにある。焼けの観察の確実な砂岩・泥岩だけで見てみると，R２は非赤化破損礫が４個，R３は両者が１個ずつ，R５は非赤化完形礫１個，非赤化破損礫が４個，R41は非赤化完形礫が10個，非赤化破損礫が31個である。R４を除いて，全ての礫群が非焼け礫を保有し，R41のように全体の３割も非焼け礫を持つものもある。さらに，非焼け礫には割れているものがかなりある。このうちR41で３個体の非焼け砂岩・泥岩の接合関係があり，一部の非焼け礫の割れは加撃による可能性もある。

各礫群とも最も多いのが割れ面非赤化礫である。R41は41％，R２は49％であるが，R３：53％，R４：89％，R５：71％と過半数を占める。これに反して，全面が焼けた赤化完形礫や全面赤化破損礫は非常に少ない。

３） 礫の重量

各礫群の重量構成を第51図に示した。100gの階級の相対度数分布グラフである。R４以外は全て100g未満が最も多い。R４は中膨れ型で，ピークは200～299gの区間にある。上限重量は，R２：350g，R３：212g，R４：845g，R５：690g，R41：400gである。

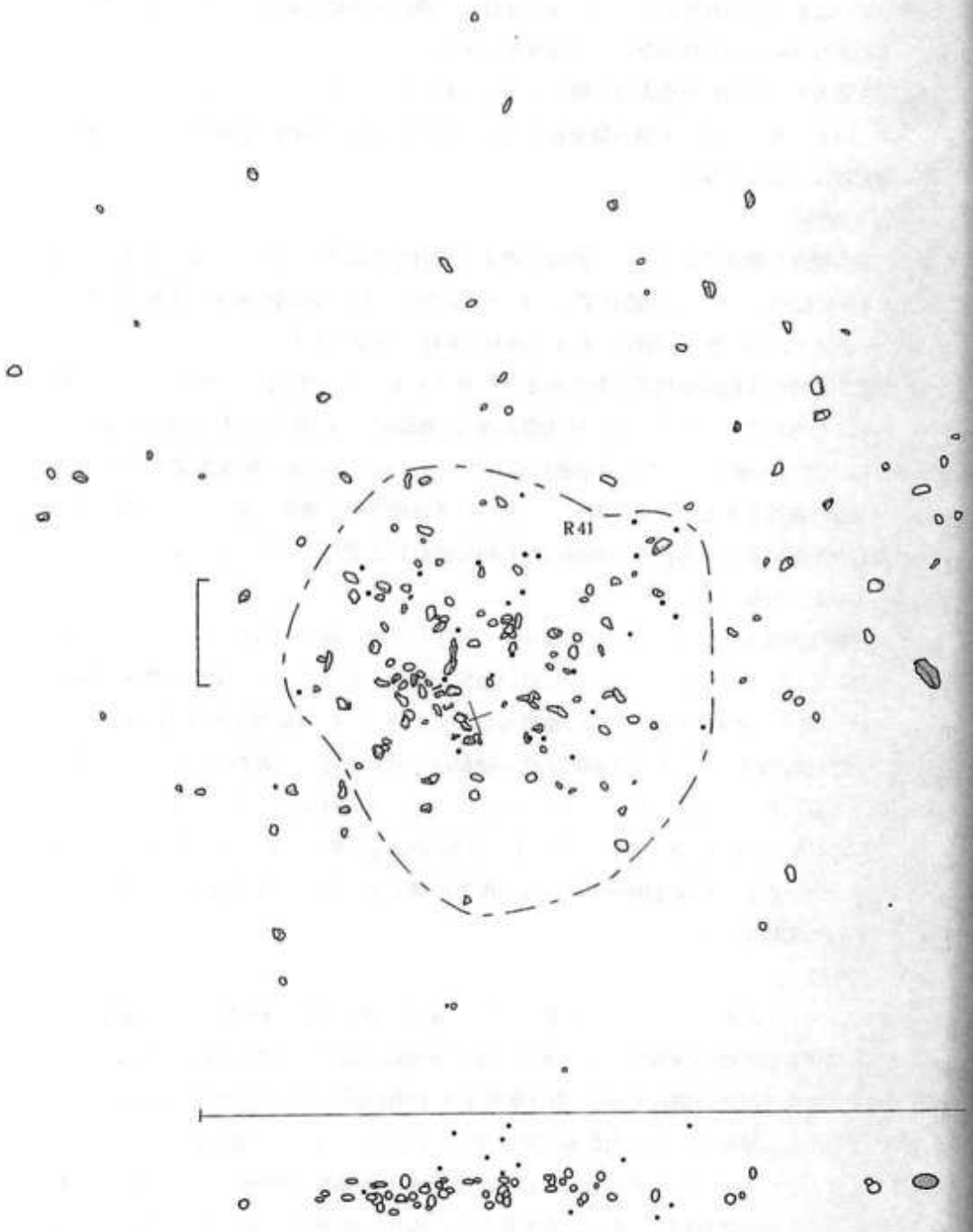
さて，重量別に礫の平面分布状況を見てみると，R２・３・４・41ではどの重量のものも混然一体となって分布しているが，R５だけ状況が違う（第52図）。礫群南半部に100g未満の礫が集中し，100～399gの礫は，やや北半部側に偏っている。400～699gの礫は北半部にのみ分布する。分離型の礫群である。これに対して，R５以外は均等型の礫群である。ちなみにR５は非焼け礫も北半部に多くある。この部分は配石的な色合いが濃い。一方，R41も北半部側に非焼け礫が多いが，分離型ではない。

次に完形礫復原重量を見てみよう。完形礫は焼こうとした礫の規準を示しているものと思われるが，残存しているものが少ない。そこで接合後完形に復旧したものや，完形の状態が推定可能なもの（完形度７・９割）についてその重量を推定したもの（第Ⅵ章第１節１項）を加え，完形礫復原重量を検討する。しかし，尖頭器文化の礫群は，R41を除いて資料が少ない。R２：１点，R３：３点，R４：４点，R５：７点である。一方，R41は56点と多い。R２・３は，200g未満に分布する。R４は，200g以上に分布し，上限が939gである。R５は，100gから700ｇ未満の階級まで分布する。R41は100gから199gの階級に最も多くあり，４割強が集まる。上限は500gから599gの階級にある。

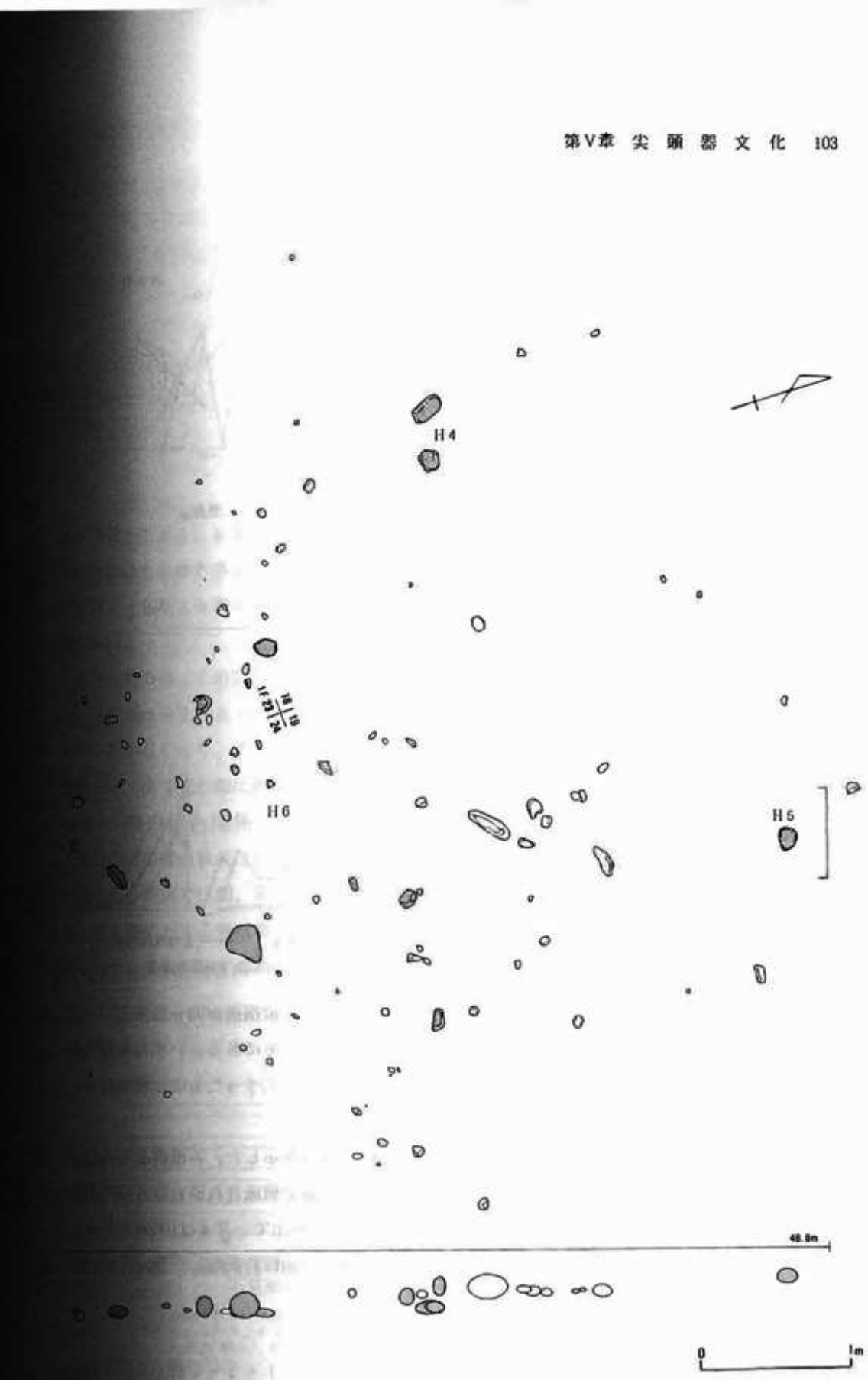
４） 礫の形

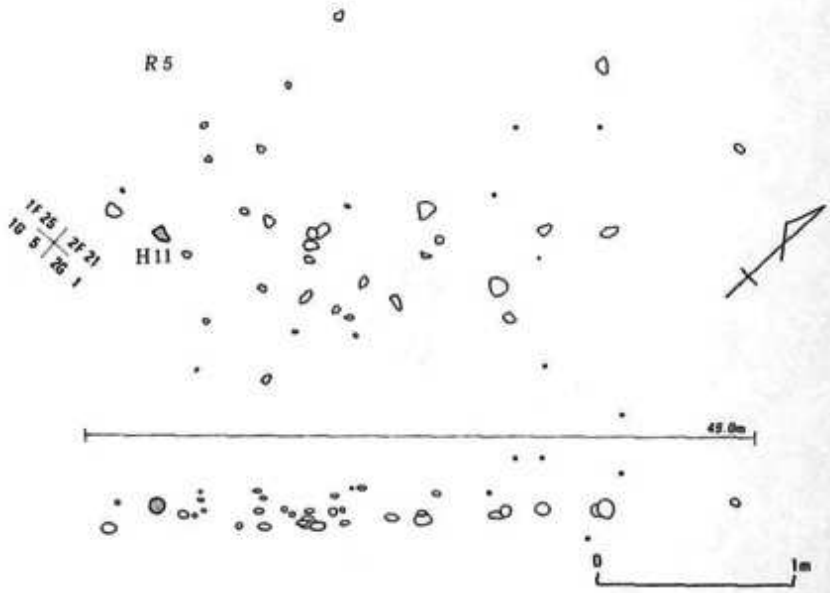
礫の形について，平面形，よこ形，たて形の三つに分け，数量化して検討する。平面形は，礫の最大長に対する最大幅の割合である。よこ形は，最大幅に対する厚さの割合である。たて形は，最大長に対する厚さの割合である（第Ⅵ章第１節１項参照）。礫群全体を対象にして，赤化完形礫，全面赤化破損礫，割れ面非赤化礫の違いを検討してみよう（第53図）。

平面形では，赤化完形礫の分布が二分している。全面赤化破損礫，割れ面非赤化礫は分布幅が広いもののピークの位置は同じである。たて形では，赤化完形礫のピークが30～39％，全面赤化破損礫が10～29％，割れ面非赤化礫が20～29％の階級にある。よこ形では，赤化完形礫の

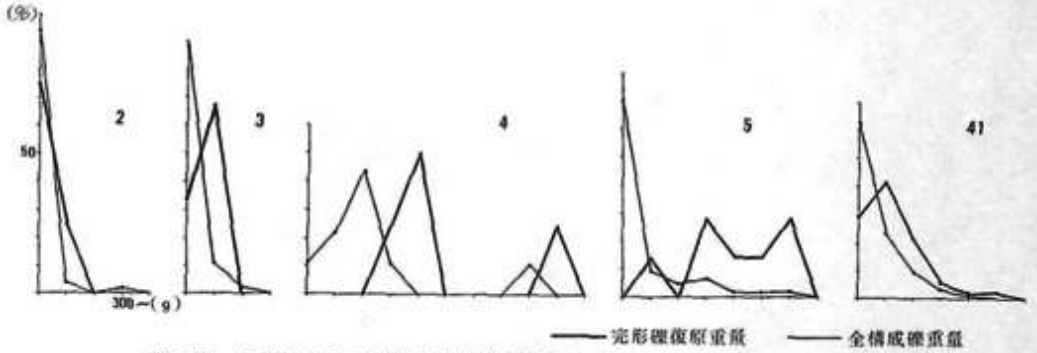


第49図　尖頭器群に伴う礫群（R41），配石（H4・5・6），散布礫

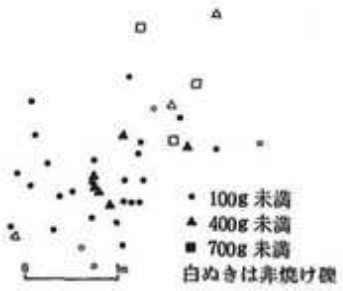

H4
H6
H5
48.8m
0
1m



第50図　尖頭器群に伴う礫群（R５），配石（H11）



第51図　尖頭器文化の礫群の構成礫重量分布グラフ　グラフ中の数字は礫群番号



第52図　尖頭器文化第５礫群の重量別礫分布図

岩，凝灰角礫岩が少量見られる。

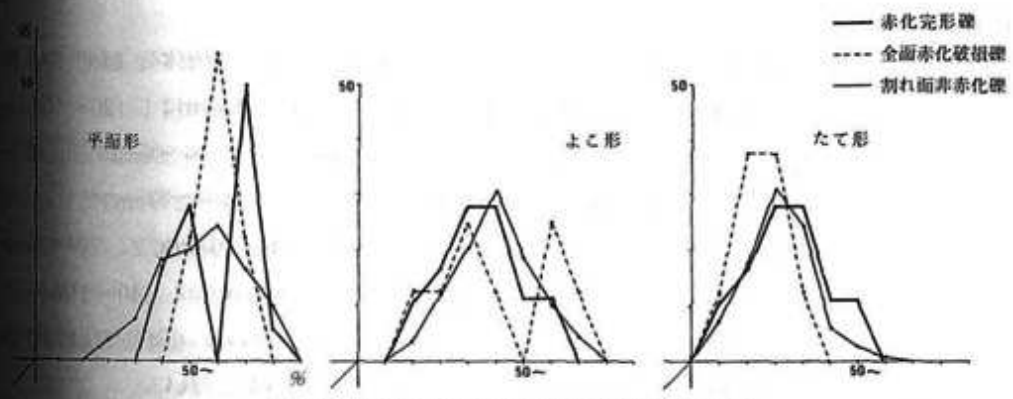
６）　礫の完形度

完形度は１割・３割・５割・７割・９割・10割の６段階で観察し，１・３・５割，７・９割，10割の３段階で集計した(第55図)。いずれも，１・３・５割の占有率が高い。Ｒ２・３・５

ピークが30～49%に，全面赤化破損礫が30～39%と60～69%に，割れ面非赤化礫が40～49%にある。いずれも資料数が少なく，かなりバラツキが出てしまったものと思われる。

５）　礫の石質

第54図に各礫群の石質構成を示した。各礫群とも砂岩が最も多い。Ｒ２は多くの種類で構成され砂岩の占有率も６割強と低いが，他は全て８割以上で，Ｒ４は100%である。この他，チャート，花崗岩が比較的多く，石英，頁岩，泥



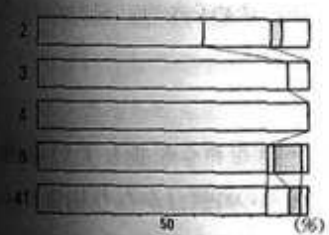
第53図 尖頭器文化の全礫群構成礫形分布グラフ

は8割以上である。R4・41はやや少ないが，半数近くを占めている。分布型では，R2のように小さいものほど多くなるもの，R3・5・41のように1・3・5割が最も多いが，次いで1割が7・9割より若干多くあるものがある。R4は1・3・5割と7・9割が同じ占有率で最も多い。

接合作業の後，この完形度構成は若干変化する。いずれも，1・3・5割の占有率が若干減じ，分布型はR2・3・41は変わらないが，R5は小さいものほど多くなる型に，R4は1・3・5割がなくなり，7・9割が最も多くなる。しかし，いずれの礫群とも完形礫が若干増えるものの，全て完形礫に復旧することはない。

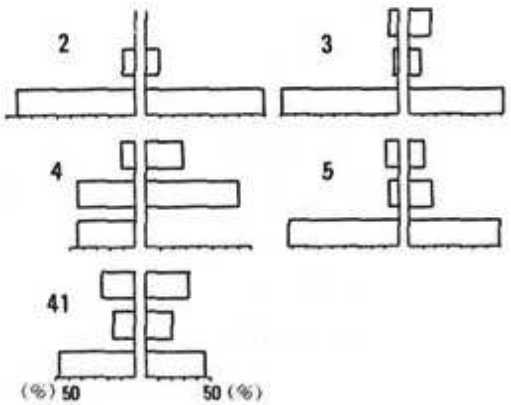
7) 礫の接合関係

礫群内での接合状況は以下のごとくである。R2が接合個体数6個体，接合礫数9個，R3が同じく6個体で15個，R4が3個体で5個，R5が7個体で19個，R41が22個体で33個である。割れ礫に対する接合礫の割合である接合率は，R2：17%，R3：60%，R4：63%，R5：61%，R41：33%である。R3・4・5はかなり高いが，それでも接合しない単独礫がか



第54図 尖頭器文化の礫群の石質組成グラフ

左端の数字は礫群番号
左から砂岩，チャート，花崗岩(網点)，その他の順で示した



第55図 尖頭器文化の礫群構成礫完形度グラフ

上から10割，7・9割，5割以下
左が接合前，右が接合後 左の数字は礫群番号

なりあることがわかる。

まず，こうした接合礫の接合距離を見てみよう(別添第9図)。各接合個体を2個ずつの接合関係に分解し，その接合距離を20cmの区間で集計した。R2は，40～59cmに1，120～139cmに2，140～159cm，150～169cmに各1ずつある。R3は0～19cmに2，20～39cmに5，40～59cmに3，100～119cmに2，160～179cmに1，180～199cmに1，220～239cmに1，240～259cmに1ある。R4は0～19cmに1，40～59cmに1ある。R5は0～19cmに2，20～39cmに4，40～59cmに5，60～79cmに1，100～119cmに3，120～139cmに2，140～159cmに2ある。R41は0～99cmの五つの区間にそれぞれ5・2・2・1・2ある。R4とR41は上限が60cm未満と100cm未満で短いが，R2・3・5はいずれも100cm以上で長い。

次に角度である(第Ⅵ章第1節1項参照)が，30°の区間で集計すると，R2は60°～89°が2，90°～119°が2，150°～179°が1である。R3は0°～29°が8，30°～59°が3，60°～89°が4である。R4は30°～59°に2ある。R5は0°～29°が5，30°～59°が6，60°～89°が3，90°～119°が4，120°～149°が1である。R41は0°～29°が3，30°～59°が2，60°～89°が6，90°～119°が1である。R3は分布幅が狭くある角度に多い傾向があるが，R2・5・41は多少の増減はあるものの全体に分布が見られる。全体に数が少ないものの，角度と距離を考え合わせると，平面分布型が分散型のR2・3・5は接合礫も分散して広く分布していることがわかる。

次に礫群間接合であるが，R3とR4の間で1個体が接合する。R5は第2b層のナイフ形石器文化(K2文化)の第17礫群と1個体の接合個体を共有する。対配石の接合関係はない。礫群外との接合関係は，R2が2個体，R4が1個体，R41が9個体である。いずれも周辺のグリッドとの接合である。この他，R2で1個体が第3層の礫と接合している。

次に接合面の焼けであるが，すべての接合関係が焼けていない割れ面同志の接合である。非焼け礫の接合関係は，R41に1個体見られる。砂岩であるが，接合距離7cmでその場で割れているものと思われる。

8）礫の付着物

やや光沢があり明瞭なタール状の付着物が，R41で2個の礫に認められた。光沢がなくうっすらとしたスス状付着物は見られなかった。

9）礫群相互およびブロックとの位置関係

尖頭器文化の礫群は，第2b層ナイフ形石器文化(K2文化)で礫群群を形成している礫群同志を隔てる距離に較べかなり離れて位置している。しかし，相互の距離はかなり均等である。

ブロックとの位置関係を見てみると，R2が第2ブロックと，R5が第4bブロックと，R41が第4aブロックと重なる。R2は完全に重なっているが，石器の分布域の東側縁部に位置する。R5は，ブロックの東北部に位置している。かなりの数の石器が重なっている。R41はブロックの西側縁部に位置する。かなりの数の石器が重なるが，ブロックの高密度域からは外れ，周辺に較べてやや分布が疎である。以上のように，石器分布と同様の広がりを持つものではな

く，ややずれて分布している。

(10) まとめ

以上の検討結果のまとめとして，使用用途の解明をめざしてまず分類を行いたい。なお，尖頭器文化の礫群は数が少ないため，K2文化の礫群とあわせて検討した。記述はK2文化の礫群の項のまとめで行っている。ここでは概略を述べたい。

分類は平均重量と構成礫数によって行った。150g未満で100個未満のものを少礫数軽重量型(小軽型)とした。R2・3・5がこれにあたる。150g未満で100個以上のものを多礫数軽重量型(多軽型)とした。R41がこれにあたる。150g以上で100個未満のものを少礫数重重量型(小重型)とした。R4がこれにあたる。150g以上で100個以上のものを多礫数重重量型(多重型)とした。該当する礫群はない。

こうした礫群類型と他の10の属性との関連をみた。平面分布類型・密度・面積・重量区域類型・重量別平面分布類型・完形礫上限重量・完形礫平均重量・完形度10割占有率・完形度5割未満占有率・接合率である。少重型や多重型では，平面分布に密集型や集中型が多く，密度も高く，完形礫重量も重く，完形度の大きいものが多く，接合率が高い。これに対して少軽型は，平面分布で分散型が多く，密度が低く，完形礫は重いものから軽いものまであるが，完形度は小さいものが多く，接合率も低い。多軽型は，集中型が多く，密度は中程度かやや低く，面積は広いものが多く，重量分布は偏在型が多く，完形礫も重いものが多いが，完形度の大きいものが多い傾向は中程度以下，接合率も中程度である。

尖頭器文化の礫群はK2文化の礫群と同様に分類することができ，大きな差を見い出すことができない。使用過程もほぼ同じ調理用の礫の群集と考えられる。

さて，礫群側からみた集落景観であるが，礫群間接合が少なく，同時存在を立証する資料に乏しい。しかし，K2文化の礫群の項のまとめでも述べた通り，次のような事実があり，一部は同時存在の可能性がある。R4は複数の構成礫からなる配石を伴い，北東方向に第5号土坑がある。同様な関係は他に2ケ所ある。R1とH1・2と第10号土坑の関係，R13とH20～22と第8号土坑の関係である。土坑との距離も6～8mと近似し，三者は16～18mほどの間隔で等間隔・直線的に配列する。さらに，R1とR4は典型的な少重型，R4と第5号土坑の間にあるR3とR13とは典型的な少軽型で，礫群の種類も同じである。少重型と少軽型は同じ礫群の2基の姿と考えられるので，三者は非常によく似た様相を示していると言える。いずれも尖頭器と関連しているので，尖頭器文化の所産と考えたい。さらに，配列していることからほぼ同時のもののように思われる。三者で一つの集落景観を考えるべきであろう。

一方，他のR2・5・41については，先述のものとは違った原理のもとにあると思われる。いずれもブロックと重なり，前述の三者のような配石や土坑との関わりはない。この両者は同じ尖頭器文化のものであるので，一つの文化の中の二つの礫群の在り方を示すものと考え得る。この両者が別の集落を構成していたものなのか，一つの集落の中の二つの部分であったのかについては礫群からは判断できない。

(保坂)

2. 配　　石

1） 配石の区分

ここで言う配石とは，1kg以上の礫のうち礫群の礫と混然一体となっているもの以外のもので構成され，単独のものまたは複数の群を指す(別添第8図)。礫群は焼け礫が主体を占める。また，重量も500g以下のものが多く，1,000gを越える構成礫を持たない。1kg以上の礫は17個あるが，そのうち焼けたものは5個にすぎない。配石は，礫群構成礫にはない重い重量の礫で，礫群から離れて分布し，主に非焼け礫であることから礫群の礫とは違った扱いを受けた礫と考えられ，用途も異なる可能性がある。以下その属性を検討するが，ここで扱う配石は，尖頭器文化の北群に含まれる第4～11・16配石(H4～11・16)(第48~50・56図)と，南群に含まれる第44配石(H44)(第56図)とである(第14表)。なお，H4～6の周辺には多量の小礫が分布している。これらの分布は連続的に見え，配石にも礫群にも区分しなかったが，配石周辺の礫の項で特にその所属について検討したい。

2） 配石の特徴

まず，構成礫数であるが，単独のものが3基(H5・9・11)，2個のもの4基(H4・7・10・44)，3個のもの1基(H16)，5個のもの1基(H6)である。

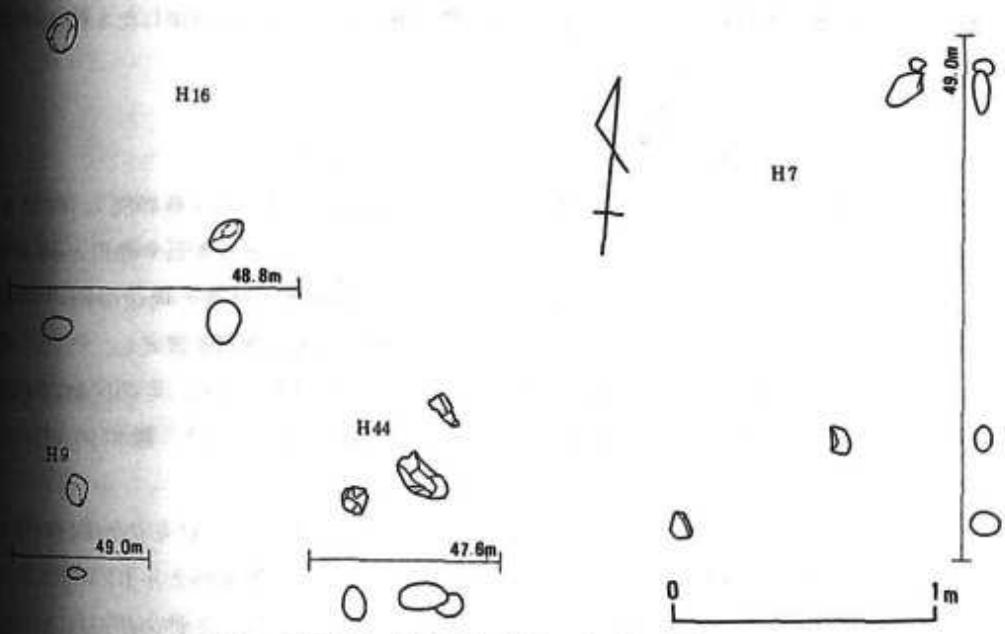
複数のものを相互に隔てる距離は，3個以上のものについてはn(構成礫数)－1例の最短距離をとった場合，0～39cmが3例，40～79cmが1，80～119cmが3，120～159cmが1，160～199cmが2である。

次に重量であるが，H4は3,000gと1,700g，H5は1,730g，H6は1,645・1,847・1,310・5,500・1,452g，H7は1,486・1,562g，H9は2,500g，H10は11,500・1,035g，H11は995g，H16は1,915・2,140・1,175g，H44は1,795・3,000gである。H11は1,000g未満であるが，ほぼ1kgなので配石に加えた。H10の11,500gは本遺跡で最も重いものである。配石構成礫19個のうち13個68%が2,000g未満である。構成個数と重量との関連性は見られない。

次に形であるが，K2文化の配石の分類に従い，平面形とよこ形とを用いて立体形を区分する。AからIの9つに区分された立体形の内訳は，Aが5個，Bが1個，Cが1個，Dが1個，Eが5個，Fが3個，Gが1個，Hが1個である。K2文化では分布していなかったG区域に1個存在する。I区域には分布しない。A・E区域が多いが，ほぼ全域に分布が見られる。立体形と個数，重量との関連は見られない。

石質は，砂岩14個，花崗岩4個，凝灰角礫岩1個である。

礫分類では，非赤化完形礫9個，非赤化破損礫5個，割れ面非赤化礫5個である。完形度を見ると，非赤化破損礫は9割2個，7割2個，5割が1個である。割れ面非赤化礫は7割1個，5割2個，3割1個，1割1個である。接合関係を見ると，5個ある焼け礫全てが接合関係をもち，非焼け礫には見られない。H6にある1,310gと1,645gの焼け礫が接合し2,955gの赤化完形礫に復旧した。1,452gの焼け礫は，約2.5m北東にある小礫2個と接合し，完形度9割で2,000g



第56図 尖頭器群に伴う配石（H7・9・16・44）

第14表 尖頭器文化の配石構成礫観察表

配石番号	出土区	位置（北からcm）	位置（西からcm）	石質	分類	完形度	重量（g）	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）
H4	1 F18	237	243	砂	A	10	3,000	22.5	12.6	6.7
	1 F18	247	276	砂	A	10	1,700	15.4	14.2	4.6
H5	1 F19	117	207	花	A	10	1,730	17.5	14.3	5.4
H6	1 F19	362	147	花	E	5	1,645	15.0	11.5	8.6
	1 F19	371	228	砂	B	7	1,847	16.6	12.4	5.8
	1 F23	50	376	花	E	5	1,310	14.6	10.7	6.6
	1 F24	75	135	凝	A	10	5,500	29.1	22.9	6.7
	1 F24	145	67	砂	E	7	1,452	18.6	11.5	5.3
H7	2 F 2	360	312	砂	B	7	1,488	20.1	10.2	5.1
	2 F 7	129	226	砂	B	5	1,562	12.5	12.0	5.8
H9	2 F16	360	227	砂	A	10	2,500	15.5	14.5	9.5
H10	2 F18	263	46	砂	B	9	11,500	30.0	22.0	18.0
	2 F22	4	346	花	A	10	1,035	10.5	10.3	7.2
H11	2 F21	360	39	砂	A	10	995	13.3	7.4	7.0
H16	2 G 1	61	224	砂	A	10	1,915	16.3	13.7	6.1
	2 G 1	139	290	砂	A	10	2,140	18.2	10.9	7.2
	2 G 1	61	210	砂	B	9	1,175	16.6	8.3	6.0
H44	0 H14	337	355	砂	E	3	1,795	14.6	10.8	7.9
	0 H14	328	380	砂	E	1	3,000	21.2	11.9	9.0

凡例 砂—砂岩，花—花崗岩，凝—凝灰角礫岩
A—非赤化完形礫，B—非赤化破損礫，C—赤化完形礫，
D—全面赤化破損礫，E—割れ面非赤化礫

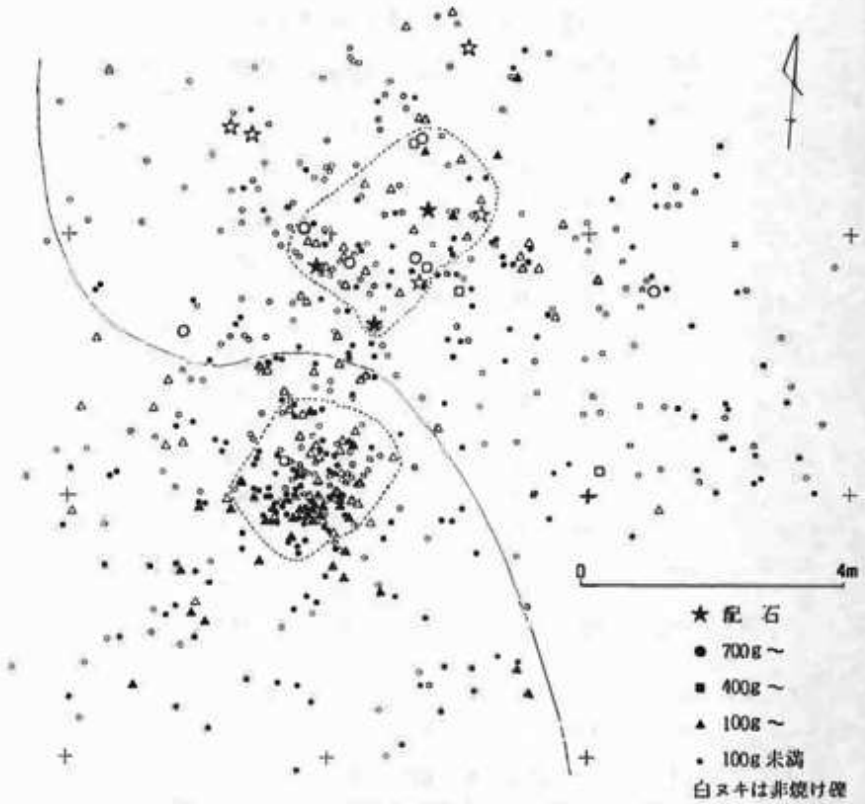
の割れ面非赤化礫に復旧した。H44では，全ての構成礫が接合，さらに近接した5個の小礫と接合して，完形度9割で6,500gの割れ面非赤化礫に復旧した。

3）　配石周辺の礫の特徴

周辺に小礫が分布する配石がある。H4・5・6・7・44である。

H4～6の周辺には特に多く，また礫群周辺の礫とも連続的に見える(第49図)。礫が多く分布する範囲は，1F18～20・22～25，1G3～5区である。この礫が配石や礫群と関連するものなのかどうかをまず検討したい。礫群(R41)と配石の構成礫の特徴と周辺の礫の特徴を対比するわけであるが，配石については特にH6の構成礫分布範囲区域を設定し，その中の礫を他と区分して取り扱う。これらは配石と関連する礫である可能性があり，この区域とその周辺，さらに礫群との対比を行う。配石区域に57個(配石構成礫を除く)，礫群内(R41)に133個，その周辺に339個の礫が分布する。

まず，分布量を見てみよう(第57図，第15表)。最も礫が多く集まっているのが礫群内である。ついで1F24区の73個であるが，礫群の½ほどである。ついで配石内と1F23区である。平面分布図を見ると，周辺の礫は配石周辺で高密度のように思われる。上述の状況はこの分布状況を反映していると思われる。次に，焼け礫，非焼け礫の分布であるが，非焼け礫の最も多



第57図　配石区域，礫群，およびその周辺の重量別礫分布図

上方の破線は配石区域　下方の破線は第41礫群
実線より右上は配石領域，左下は礫群領域

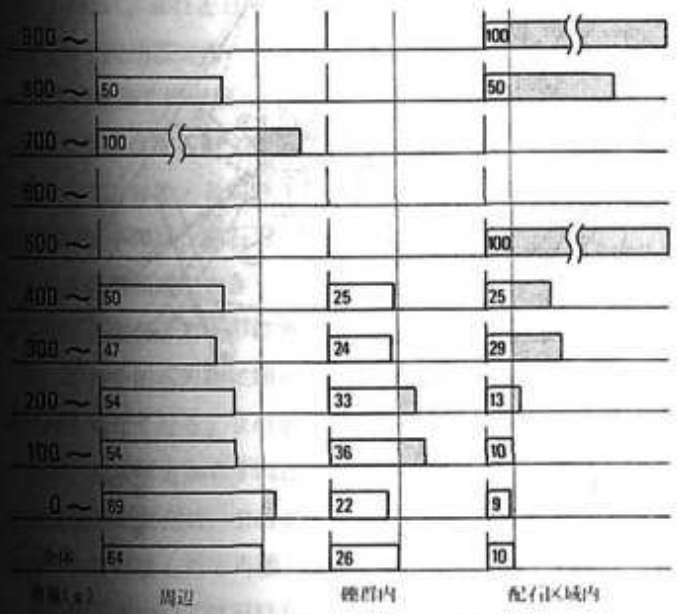
いるがやはり礫群内で55個ある。ついで１Ｆ区の37個，配石37個，１Ｆ23区34個である。礫群と配石区域とは，非焼け礫分布の極になっているようである。焼け礫は，礫群内78個，１Ｆ24区36個，１Ｇ３区32個が多い。配石区域では20個と比較的少ない。各グリットで両者の量比を見てみると，配石周辺の１Ｆ18・19・22・23・24・25区では非焼け礫が多い。礫群周辺の１Ｇ３・４・５区では焼け礫が多い。１Ｆ23・24区は礫群・配石の間にあり，やや非焼け礫が多いものの，両者とも周辺に比べて多くある。

第15表　配石区域，礫群，およびその周辺の非焼け礫と焼け礫の分布個数表

1F17 0/0	1F18 10/6	1F19 20/5 配37/20	1F20 1/10
1F22 6/4	1F23 34/23	1F24 37/36 礫55/78	1F25 27/24
1G2 0/0	1G3 14/32	1G4 8/27	1G5 5/6
1G7 0/0	1G8 2/1	1G9 0/1	1G10 0/0

凡例 1. 枠内左上隅の１Ｆ18はグリッド番号，配は配石区域(配石構成礫は個数に含まれない)礫は礫群内を示す。
2. 枠内斜線左上の数字は非焼け礫の個数，斜線右下の数字は焼け礫の個数を示す。

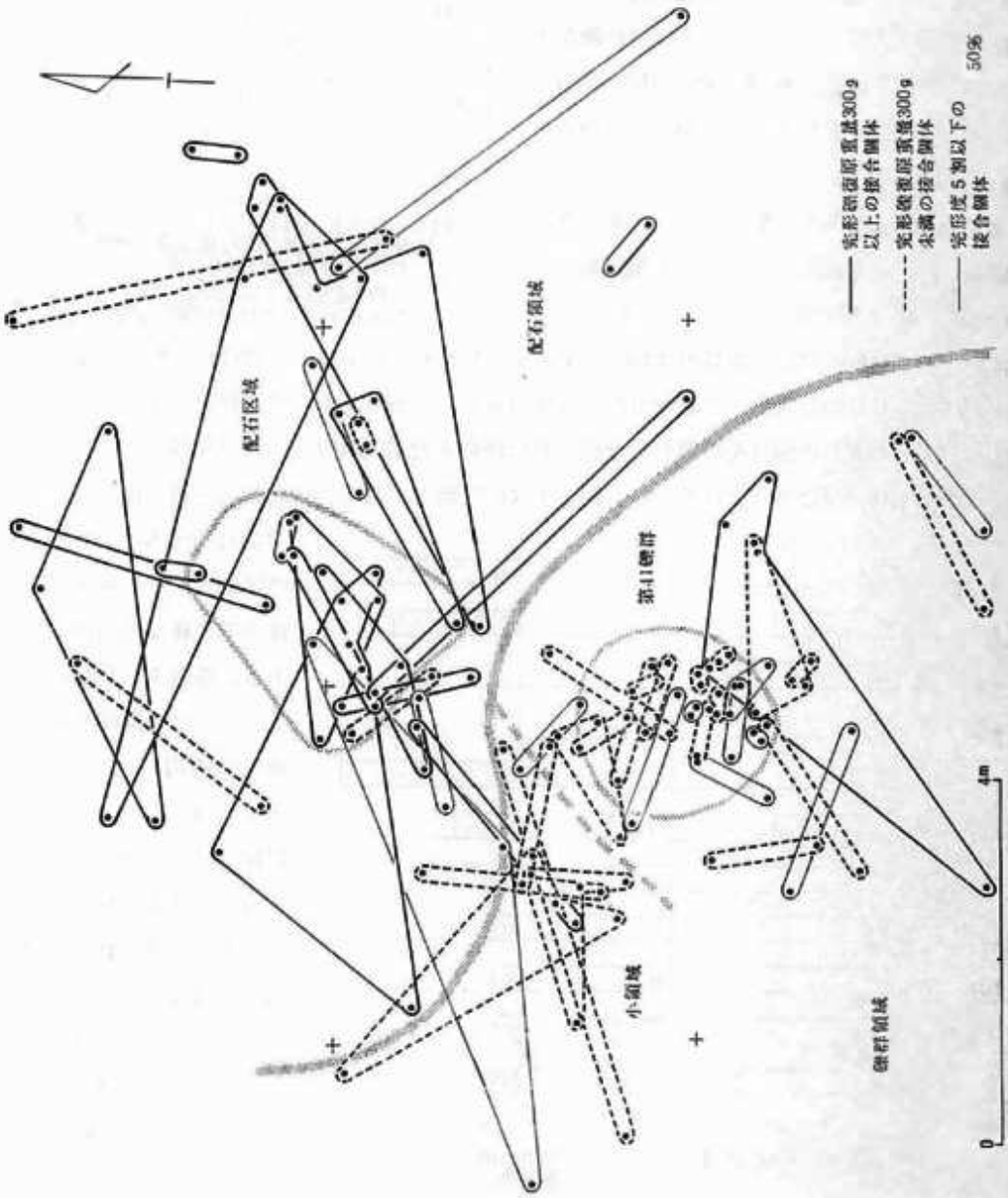
次に重量であるが，配石区域，礫群，両者の周辺の三者を比較した場合，上限重量については配石区域が900g台，両者の周辺では800g台と重いのに対し，礫群内は400g台である。しかし，最も多い重量はいずれも100g未満であり，重くなるにしたがって数が少なくなるのも同じである。そこで，見方を変えて，100gの区間別にそれぞれの割合を計算し，全体で見た場合と比較してみよう(第58図)。三者を比較すると，全体で見た場合よりも多い区間と少ない区間とが見られる。配石区域では200g以上の区間は全て多い。500～599gの区間と900～999gの区間は全ての礫が配石区域内にある。礫群では100～299 gまでの二つの区間が多い。両者の周辺では０～99gが多い。また，700～799gの区間では全ての礫がここにある。いずれの区間においても500g以上の区間以外では，ある場所に極度に集まることはないが，配石区域には200g以上の礫が，礫群では100～299gの礫が，両者の周辺では100g未満の礫が多少多めに分布している。



第58図　配石区域，礫群，およびその周辺の礫の重量別構成状況グラフ

グラフ中の数字は%
網点部は全体の割合を越えた部分

次に接合関係を見てみよう。配石の接合関係も含めて56個体ある。これらは，混然一体となって分布しているように見える。そこで，次のように接合個体を分類し，その分布の違いを見てみた。重量を検討して，配石区域と礫群とでは多少多めにある重量区間が違っていた。両者の違いは300g以上で明瞭である(第58図)。全体で見た場合，配石区域は礫群に較べ少ないが，300g以上では逆転している。そこで，接合個体について，完形度7割以上の礫で完形礫復原重量300g以上のものと300g未満のものとを区分し，それぞれの分布を見てみた(第59図)。両者はみごとに分布領域を異にしている。完形礫復原重量300g以上のものは配石を中心にして分布



第59図　配石区域，礫群，およびその周辺の接合個体分布図

300g未満のものは礫群を中心にして分布する。配石を中心とする接合関係は，直接礫群と結び付くことはない。礫群西方に300g未満の接合関係の核があり，そこと若干関係を持つ。一方，その核と礫群とは近接するものの，厳密に見ると関係は持っていない。このように，配石を中心とした完形礫復原重量300g以上の接合個体の分布領域(配石領域)と，礫群を中心とした完形礫復原重量300g未満の接合個体の分布領域(礫群領域)とが設定できる(第57・59図)。両領域は，焼け礫と非焼け礫の量でも違いがあり(第15表)，配石領域には非焼け礫が多く，礫群領域には焼け礫が多い。また，重量では，特に400g以上の礫はほとんど配石領域にある(第52図)。なお，礫群領域の中には，礫群とは別の接合関係の核が存在している。一応礫群領域の中の小領域として区分しておきたい。

さて，H7に近接して312gと941gの礫が分布している。前者は完形度3割の非赤化破損礫，後者は完形度3割の割れ面非赤化礫である。H44には完形度5割の割れ面非赤化礫で950gの礫が近接する。この礫は近接する4個の小礫とともにH44の2個の構成礫と接合している。こうした礫は，H44のように近接するものと接合するものはともかくとして，配石の機能と何等かの関連を持つのかもしれない。H6のように400g以上の礫が周辺に集まっているもの，さらにH5のように500g以上の礫が礫群の礫の主な分布域から分離しているものがある。R4内の礫を除いて，尖頭器文化の500g以上の礫は全て礫群内には存在せず配石と関連を持つように思われる。

(4) 配石相互および礫群・ブロックとの位置関係

まず，ここでは先に区分したH6周辺の礫および礫群・配石について，その所属文化について検討したい。R41とH4・5・6は第4aブロックと重なるが，第4aブロックは細石刃文化のブロックと尖頭器文化のブロックとが東西にややずれながら重なって位置しているブロックである(第III章第6節参照)。いずれに重なるものか，まず検討したい。

H8の位置は細石刃文化のブロック(M1a)側にあり，さらに細石刃の分布の最も高密度な部分である。H4・5やH6北部に近接する台石は細石刃文化のブロック北縁部に位置する。配石領域の小礫は，細石刃・尖頭器両ブロックの高密度部分と重なる。しかし，尖頭器文化の石器類は礫群領域に大きく広がるのに対し，細石刃文化の石器類はほぼ配石領域内に収まる。礫群領域に広がる若干の細石刃文化の石器類も，礫群とは別の接合関係の核のある小領域内にあり，これを細石刃側に組み入れるならば，R41を含む礫群領域には細石刃文化の石器類の分布は見られなくなる。R41および礫群領域の主要部は尖頭器文化のブロック南部と重なることになる。重なり方からすれば，H4・5・6と台石および配石領域，礫群領域西部の小領域の一部は細石刃文化に，R41および礫群領域主要部は尖頭器文化に所属するように見える。この点についてはまとめで再論したい。

他の配石についてはH11がR5の縁部に位置すること，H10がR4に近接すること，H16が第5bブロックに近接すること，H7が第1ブロックに近接すること，H44が第5bブロックと重なり，その西縁部に位置することなどの位置関係が指摘できる。なお，第5a・5bブロックには

小礫が多数分布する。両者合わせて56個ある。焼け礫が25個，非焼け礫が31個である。礫の分布するグリッド別に見ると，0H5区が焼け礫3個で非焼け礫6個，0H10区が5個：7個，0H15区が11個：4個，1H1区が1個：4個，1H6区が3個：4個，1H11区が2個：6個である。0H15区のみ焼け礫が非焼け礫より多く，しかも最も多く分布している。このグリッドの西部にH44がある。重量を見ると，ほとんど100g未満の礫であるが，100～199gの礫は0H10区に1個，0H15区に3個，200～299gは0H15区に1個，1H11区に2個，300～399gは0H15区に2個，1H6区に1個，他に520gの礫が0H15区にある。0H15区は重い礫が多く分布している。0H15区の100g以上の礫はいずれも焼け礫である。他のグリッドでも，1H11区の277gの非赤化完形礫を除いて全て焼け礫である。H44自体焼け礫であり，H44近辺で，火を用いた何等かの活動が行われ，H44や他の小礫はこれに関わっていたのかもしれない。

5）　まとめ

尖頭器文化の配石は，1kg以上の礫で構成され，基本的には礫群とは分布を異にする。単独または複数の礫であり，構成礫の大半が非焼け礫である。同一層中のK2文化の配石と全く同じ条件で区分できる。さらに，配石構成礫は10kgを越えるものがあるなど重量分布幅は広いが，大半は2,000g未満であること，重量や立体形で特定のものが単独の配石になったり，複数の構成礫の配石で組み合わさったりする傾向は見られないこと，石質は礫採集地の礫種構成を反映していると思われること，完形礫が多く割れたものも完形度の高いものが多く，接合関係が少ないこと，分布位置が礫群と関連するもの，ブロックと関連するもの，両者とは関わりを持たないものが存在することなどの特徴がある。これは，K2文化の配石の特徴と共通する。さらに，500g以上の小礫についても礫群と分離したり，配石周辺に集まり，配石の機能と関連したものの可能性がある。一方，接合関係については，全て焼け礫である点注意すべきである。焼けた礫の割れは火熱によるものであり，非焼け礫は持ち込まれた当初から割れていた可能性がある。

これらの用途についてであるが，K2文化の配石に準じて考えたい。すなわち，礫群と関連するH10・11は礫群使用過程で礫群構成礫とは違った役割をはたしたもの，ブロックと関連するH6・16・44は石器製作と関連した役割のものの可能性があるとしたい。しかし，配石の本来の姿はおそらく生活のあらゆる局面で自在に使われた道具であり，両者に関連しない配石はもちろんのこと，ブロックに関連するもの，さらには礫群に関連したものもこうした使われ方をした配石の最終的な姿かもしれないと考えられる。

次に配石側から集落景観復原の材料を探りたい。まず，北群(本章第4節2参照)であるが，礫群側から検討した際，配石・礫群・土坑がセットになる三つの群が北群東縁部に配列すること，北群西部では配石と礫群とは必ずしもセットにならず，土坑がなく，配列性がなく，ブロックと重なることなど前者と趣を異にしている点が指摘できた。両者は，はたして別の集落を構成していたのか，一つの集落の部分であったかについては判断を保留したが，配石側から見ても，この判断を下すことはできない。

一方，配石の所属についてであるが，H７は，その位置や構成礫の配列のしかたがH１・２やH10と近似することから，北群東縁部の一群に加えられるかもしれない。また，北群西部には細石刃文化のブロックが重なっているが，これらは別の集落を構成していたとすると，それに所属する遺構が問題となる。礫群については，東海・関東地方の細石刃文化では，R41のような大規模なものは見られないように思われる。また，石器群との重なり方からしても，尖頭器文化のものとしてよいであろう。H41と周辺の礫群領域とは一体のもので，一つの礫群と考えてもよいものと思われる。一方，H４・５・６については判断が分かれる。しかし，以下の検討の結果，本稿では一応尖頭器文化の所産と考えたい。

配石領域と礫群領域の区分は接合関係を根拠とした。両領域は，接合関係ばかりでなく，礫種，焼け礫・非焼け礫の分布区分とも符合する。また，石器による尖頭器領域と細石刃領域の区分線ともほぼ一致する。その結果，配石領域のほとんどが細石刃群の分布域に入ることになり，尖頭器群とはわずかに重複するに留っている。しかも配石はまさに細石刃群の分布の中心に位置しており，「分布の重複」を大きく評価する限りこれらH４・５・６は細石刃文化のものと考えざるを得ない。

しかし一方で，当然の事ながら石器群・礫群・配石群は機能的に異なる性格のものであると考えられるから，それらは分布を異にする方がむしろ自然である，という推定も成立する。そうであるとすれば配石も尖頭器群に属し，そもそも石器・礫群とは異なる場を占めていたと考えることもできる。配石と礫群があたかも領域を分かつように対峙した関係として捉え得るのも，それらが同時存在で相互に場を譲りあった結果として捉えることも可能である。

これら二つの解釈はいずれも成立し得るものであり，どちらを採るかはさらに別の判断材料が必要である。そこで一つには遺跡内における他の遺物分布例を，二つには他遺跡における細石刃群と配石の判出例を参考にした。

まず遺跡内では，細石刃文化段階の安定した遺物集中は当該区域のみであるので参考にはならない。一方尖頭器文化段階では，礫群・配石・石器群を合わせ持つ遺物集中部が複数認められる。それらによると礫群と石器群は重複する例とそうでない例が認められるが，配石の中では特に複数の礫で構成される例(H７・10・16)は，石器群に接しつつも重ならない分布を示すのが常態のようである。次に中部・関東地方の細石刃文化段階の遺跡を検索してみると，問題の配石の様に量的に安定して石器群に伴う例はほとんどないということもわかった。

以上のように，一応はこれらを尖頭器群に属するものとして取り扱うことにはなったが，非常に微妙な問題として，配石の一部が細石器群文化を残した人々によって利用された可能性も十分に考えておく必要はあろう。尖頭器文化段階の人々が残した石器・礫群が視認できる位に存在した直後に細石刃を携えた人々がここに至り，それらを避けて生活し配石を隣接した位置に構築した可能性も完全に払拭することはできない。またさらに進んで，尖頭器文化段階の人々が利用した配石を細石刃文化段階の人々が再利用した可能性さえ考えておく必要があろう。

なお，世帯ユニット設定の問題だが，尖頭器文化北群の東縁部に配列する三つの遺構群につ

いては，そのセット性からそれぞれを一つの世帯ユニットと考えておきたい。これに伴う住居址は，単数でも複数でもよい。北群西部の遺構群については，東縁部の遺構群に伴うものなのか，独自の集落を構成しているものなのか判断を保留したい。

H4・5・6と台石は尖頭器文化の所産と思われ，一つの世帯ユニットを構成すると考えられる。さらに住居址の位置を以下のように推定する。H6の北東方に礫の分布がほとんど見られない部分がある(第57図)。この部分は石器群の分布も少ない。この部分に接して台石がある。また，接合関係を見ると，この部分とH6の接するあたりから南西方向へ延びるものが多い。そして，この部分の北西方と南東方にある接合関係は，あたかもこの部分をとりまくようにしてある，人の動きがこの部分を中心に南西方向へ，また周辺ではこの部分を迂回していたものと思われる。このように，礫と石器類の分布，台石の位置，接合関係の在り方などからⅠF19区南東隅を中心として南西部に入口を持つ住居1軒を想定したい。

尖頭器文化南群では，H44とその周辺に重い焼け礫が比較的多く集まる傾向がみられた。礫と火を用いた何らかの活動がここを中心に行われたものと思われる。一つの集落の一部を構成するものと思われるが，住居の軒数・位置等についてはわからない。　　(保坂)

第2節　遺　　物

第16表　尖頭器文化所属石器の組成表

尖頭器	ナイフ形石器	スクレイパー	剥器	RP	礫石類	台石	UF	剥片	砕片	石核	計
65	3	6	1	5	9	2	183	1503	911	15	2713

遺物は全て石器で占められており，総数は2,713点に達する。内別は第16表に示す通りである。尖頭器1点を除き全て中央区に含まれる。分類規準の多くは個別の石器の説明に譲るが，使用痕ある剥片(UF)・砕片の認定については第Ⅳ章に準ずる。特に砕片については，本来であれば石器群が異なれば認定の規準も異なるはずであるが，尖頭器製作に伴う「砕片」はそのままRFやUFに利用もされており，定義上は「砕片」でありながら取り扱い上は剥片としての性格も帯びている。今回はこうした部分についての十分な検討を行えなかったため，従前の規準を踏襲することにした。

石材では，他の石器群と同様に圧倒的多数を頁岩が占めている(第17表)。他には凝灰岩・安山岩・黒曜岩などが含まれるが，非常に少ない。本文中では特記しない限り頁岩製の石器である。

1．尖　頭　器

この時期の尖頭器は合計60点発見された。このうち5例が2点の接合したものなので，資料数は計65点となる。ほとんどが破損品で，ほぼ全体の形状を知り得るのはわずかに13例に過ぎない。さらに，13例中3点は未成品と考えられる資料なので，機能と密接な関わりを持つ最終

第17表 尖頭器文化所属石器のブロック別石材構成

石質＼ブロック	P1	P2	P3	P4a	P4b	P1周	P散a	計
頁岩	13	55	47	690	64	16	17	902
安山岩				2	9			11
砂岩			1	4	3		4	12
凝灰岩	1	34	1	11	6	7	1	61
珪岩			1					2
黒曜岩							3	3
計	14	89	51	707	82	23	25	991

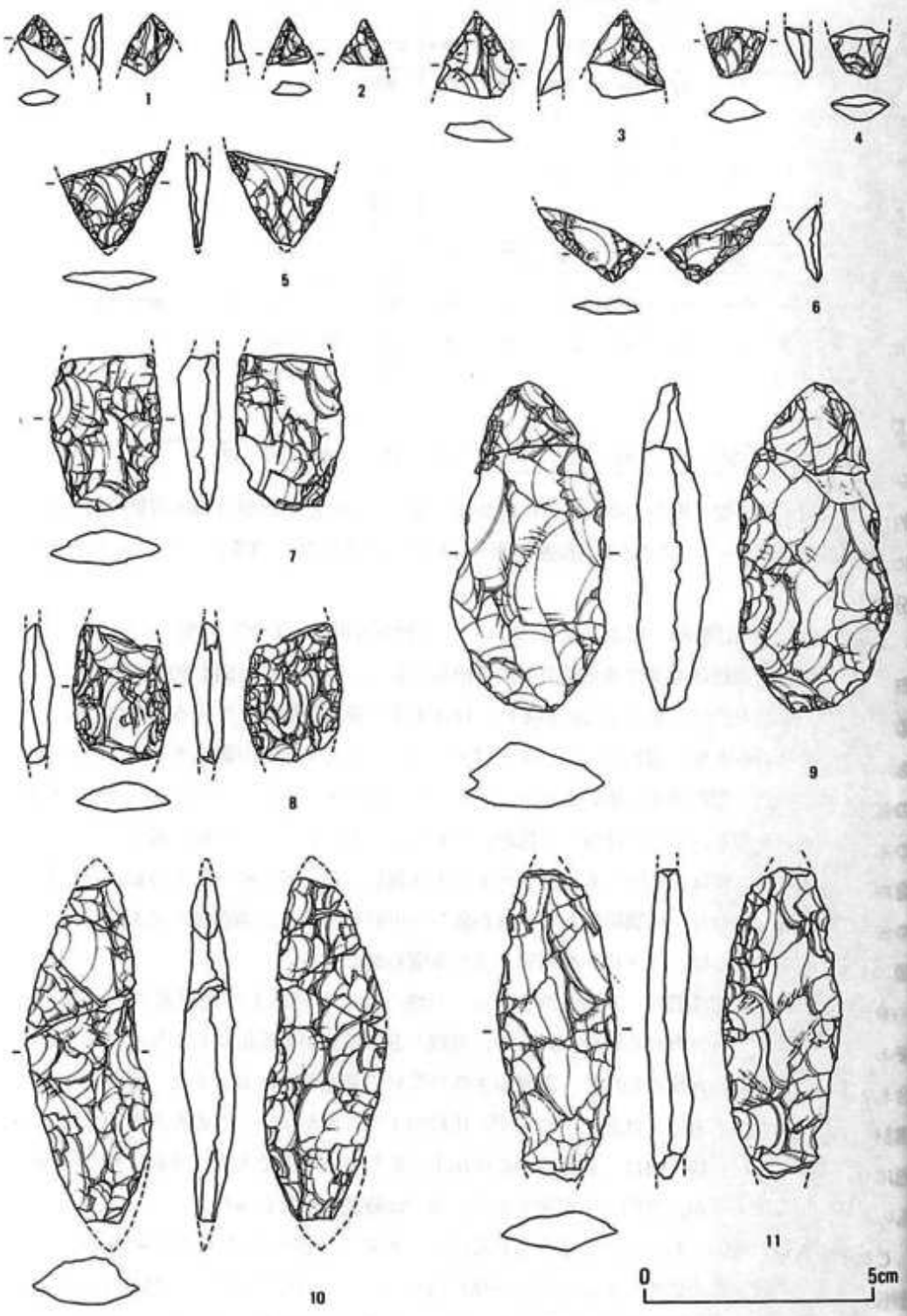
石質＼ブロック	P5a	P5b	P6	PII周	P7	P8	P9	P散b	P10	P11	P12	PIII周	P散c	計
頁岩	283	410	11	10	235	12	6	14	10	350	255	5	4	1,605
凝灰岩			1					2	2	105	1	2		113
玉髄								1						1
黒曜岩										1				1
計	283	410	12	10	235	12	6	17	12	456	256	7	4	1,720

は尖頭器の形態を知り得るものは10例にしかならない。このため形態分類は調整技術を中心に行わざるを得なかった(第20表)。形態不明のもの4点と未成品6点を除き大きく5形態に分類した。

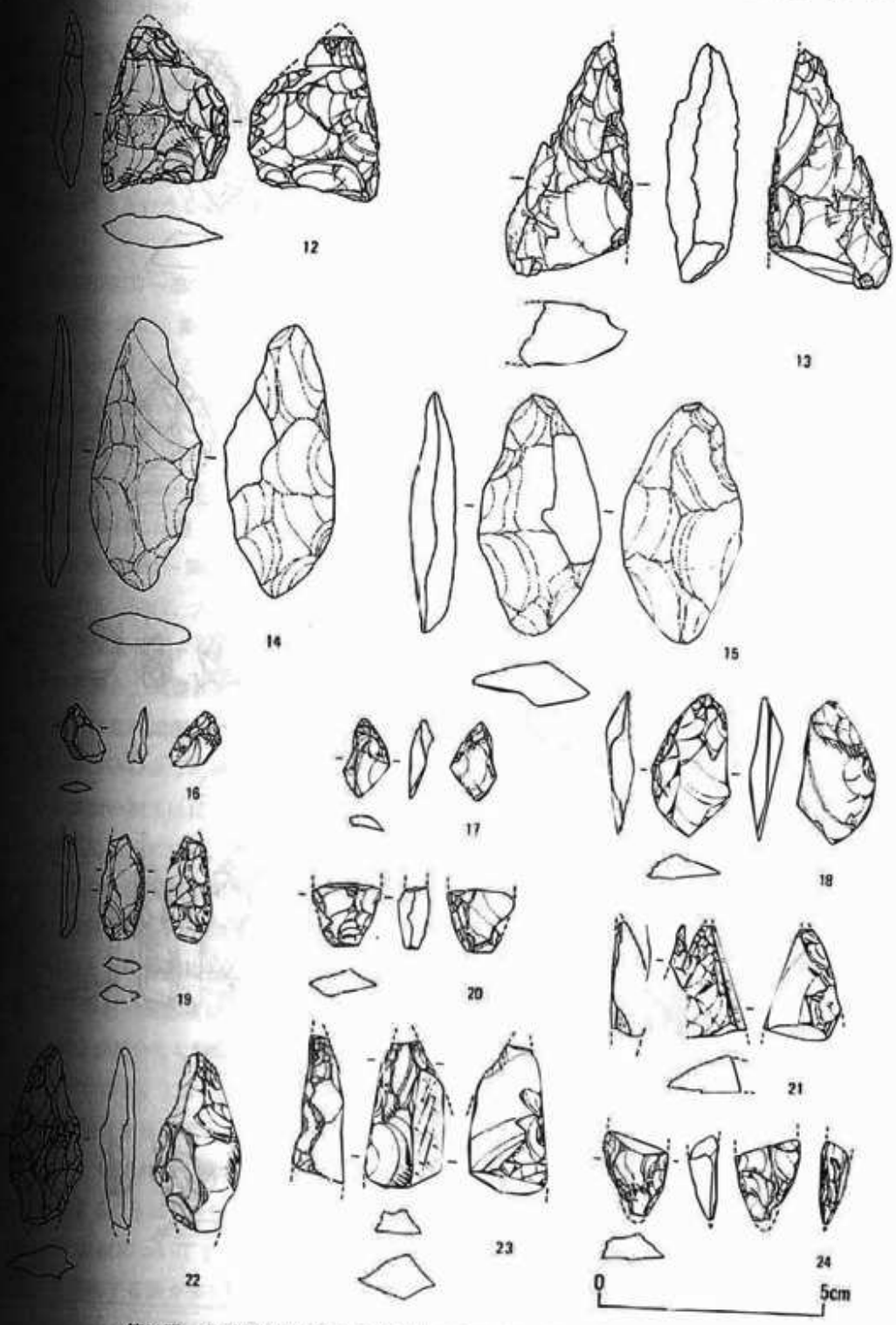
A類(第60図～第61図18) 18点発見されている。背腹両面のほぼ全てが加工されている一群である。他に較べ原形を推定できる位の大形破損品が多い。8例から平面形態を見てみると，若干幅の狭い中型木葉形を呈するものが多い。12は大きく異なる形態を呈する。9は，13とともに本遺跡では最も大型の部類に入る。16・17・18はいずれも先端部の破片であるが，破損部の観察から尖頭器の製作途中に生じたものであることがわかる。ポイントフレイクと同じ性質のものであり，破損したものではなく意図的に除去した可能性もある。本項で説明はしたが，分類は剥片になる。11は，確固たる根拠を示すことは難しいが，他に較べ加工の繊細さ・製品の美しさ等で優っており，所属時期がいささか異なる可能性がある。両面加工であるため，本来の素材の確定は難しい。11・17が凝灰岩，8が黒曜石製である。

B類(第61図19～第62図26) 8点が含まれる。背腹のほぼ半分以上が調整面で被れるものである。半両面加工と言われる範疇に入るが，背腹ともに調整が半面位にしか及んでいない場合もこれに分類した。A類と同様に，調整の主体は素材の背面側にある。また，腹面の加工は素材の形状をそれほど大きくは変えておらず，比較的平坦な例が多い。このため断面形はD字形となることが多い。19・24は，腹面を中心に加工を施している例である。A類に較べ小型のものを含むようであるが，量的に不安定である。素材は縦長の剥片が多い。

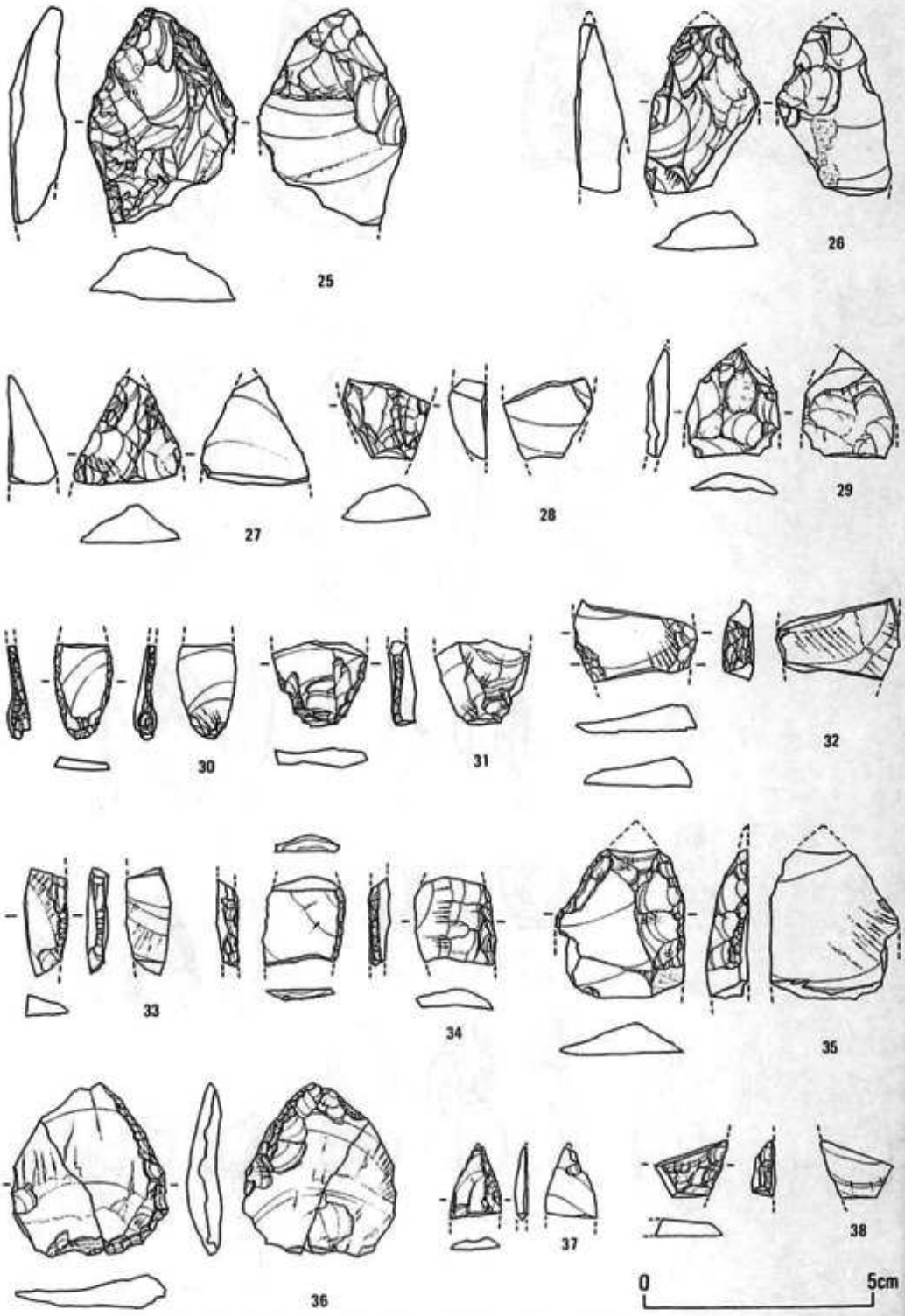
C類(第62図27～29) わずかに3点含まれるのみである。片面加工のものであるが，3点とも先端あるいは基部の破片であるため，全体が揃った時，本当にこうした分類が可能なのかどうか問題である。B類や後述するE類でも，破片として発見された場合，十分本類に分類される可能性がある。全て縦長剥片を素材とする。



第60図　尖頭器文化に属する尖頭器（A類）



第61図 尖頭器文化に属する尖頭器（A類：12～18，B類：19～24）



第62図　尖頭器文化に属する尖頭器（B類：25・26，C類：27～29，D類：30～36，E類：37・38）

D類(第62図30～36) 7点含まれる。素材の周縁部に限って，しかもナイフ形石器に見られるブランティングに似た急傾斜の加工が施されているものである。形状には30のように細身で長いものから，36のように心葉形に近いものまである。大きさを推定復原してみると，概して小型のようである。32は一見すると，二側縁加工のナイフ形石器のようにも思えるが，幅の広さを考慮して尖頭器に含めておいた。33の加工角度は他に較べると緩やかであるが，周縁部に限られるということで本類に含めた。素材には横長・縦長・不定形のいずれの剥片も用いている。

E類(第62図37～第63図50) 14点含まれる。調整技術としては，先端あるいは基部といった尖頭器の一部に，集中的に面的な伸びのある剥離を施す点に特徴がある。加工される面はほとんど片面に限られるが，48のように両面に及ぶ例もある。また，加工される面は多くの場合腹面側で，腹面のみに加工が施されるのは43・45・49の3例にすぎない。調整加工は，素材の縁に沿って施されており，急激に大きな変形を促す事はほとんどない。いずれの剥離面も「寝ている」という印象が強い。48以外は全て破損しているが，多くはA類に近い大きさを持つようである。素材には整った縦長剥片が多いようである。

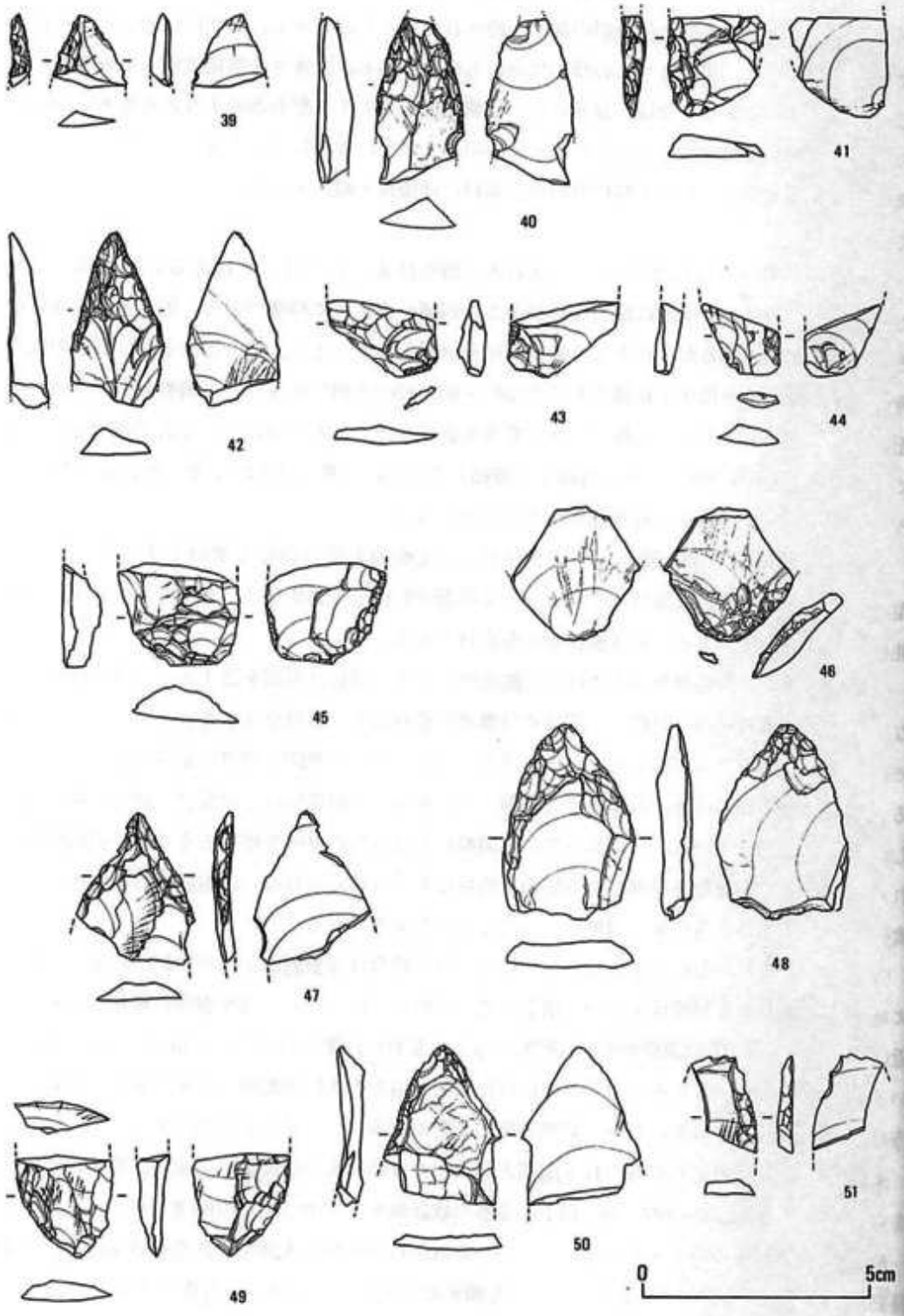
未成品(第63図51～第64図56) 6点含まれる。比較的大型の剥片を素材とするものと，小型のものがある。53は，大型の剥片である上に打面の形状から判断して，ポイントフレイクの可能性があり注意を要する。55は横長剥片を素材とする。

51・54を除き，調整剥離の主体は全て腹面側にある。調整は刃部を潰すような急角度にではなく，多くは素材端部の肥厚した部分や打瘤部を取り除き，素材全体を真直にするために平坦な面へ伸び込むように施されている。55で，特にこうした意図を明瞭に読み取ることができる。この腹面の加工はほぼ石器の半分を覆っているが，その部位は丁度素材の横長剥片の発達した打瘤部に当っている。したがってこの調整加工は打瘤の厚味を取り去ることを目的に施されたものであり，側縁部を刃部とする等の目的性はあまり感じられない。右側縁背面の加工と相まって，素材全体を薄く細く調整しようとしているようである。

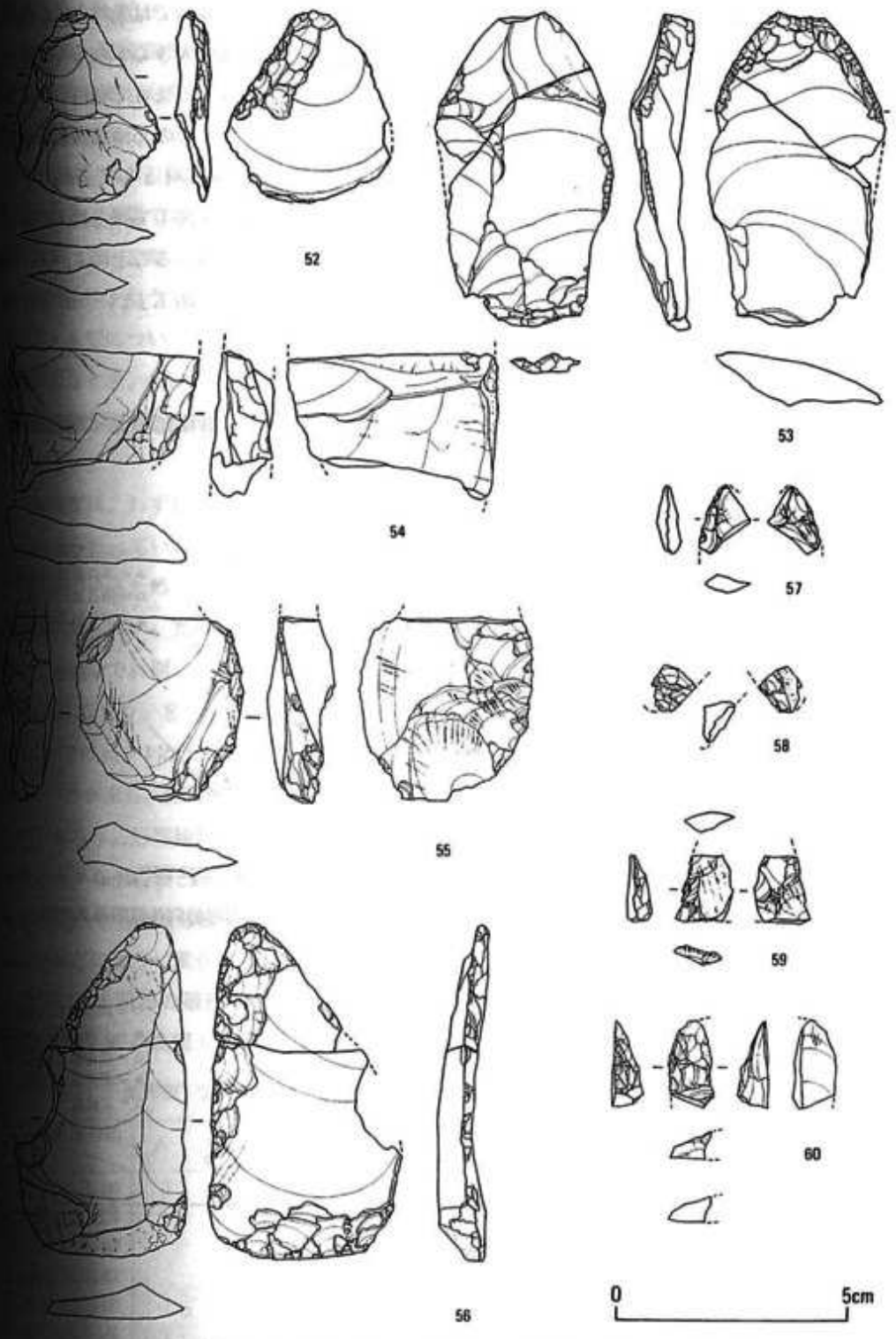
51と54はともに背面に加工が施されている。51の場合は調整剥離がほぼ素材面に沿って平坦に施され，素材の変形度は小さい。削器と考えられなくはないが，調整剥離の様相は尖頭器に近い。54は1点接合した調整剥片から判断すると，素材の段階からすでに5mm以上幅を狭めていることがわかる。しかもその加工面には比較的平坦で大きい剥離痕が並んでおり，削器のような細部調整は施されていない。調整角度も通常の削器に較べると緩やかである。

未成品は，いずれにしてもこれを削器と見るかどうかと大いに関連して来る。削器の可能性を完全に排することはできないが，以下尖頭器の統計値を示す中で相互の関連を見て行きたい。

最後に，素材についてまとめておきたい。素材がわからないA類を除き全体を通して，「縦長剥片を利用する例が多いとした。しかし厳密には素材から尖頭器への変形率がわからないため，長幅比1.5：1以上の縦長の素材を利用したかどうかわからない。不定形剥片(長幅比1.5：1～1：1.5)もかなり利用したと考える方が蓋然性が高いようである。



第63図　尖頭器文化に属する尖頭器（E類：39～50，未成品：51）



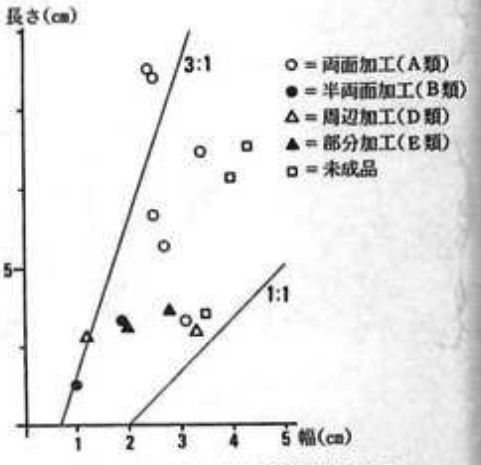
第64図 尖頭器文化に属する尖頭器（未成品：52～56，形態不明：57～60）

このような素材利用の中で一つ指摘し得ることは，素材の基部を尖頭器では先端とする場合と基部とする場合があるが，いずれにしても剥離軸と尖頭器の中心軸が大きくずれることはほとんどない。素材の剥離軸にほぼ沿うであろう最も厚味のある部分はそのままで利用し，より加工の容易な周縁部を均等に調整することで尖頭器を完成させている。このため腹面を見ると縦長の素材であり，幅は調整により狭められるために，「縦長剥片」を素材として多用しているように思われるのであろう。例外としてE類のみは素材の両側縁が未加工で残されており，縦長剥片の多用が確認し得るのである。翻って，整った縦長剥片を利用することによって，鋭利な側縁と適度な幅を加工することなく採用できることになり，「部分加工」という形態が可能になっていると考えることができよう。

計 測 値

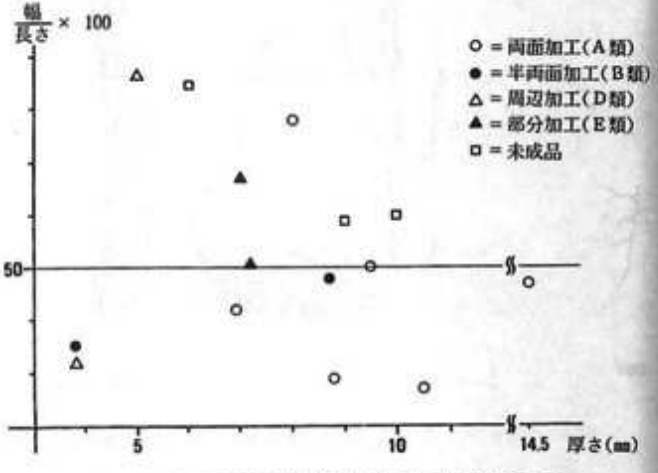
ここでは形態観察のみでは説明しきれないいくつかの項目について計測値に従って前記形態の異同を比較してみたい。

〔長さ・幅・厚さ〕 第65・66図に，それぞれ長幅関係と長幅比・厚さの関係グラフを示した。すでに指摘したように，破損品が多いために欠損部がわずかの場合には推定復原によってグラフを作成した。



第65図　尖頭器形態別長幅関係グラフ

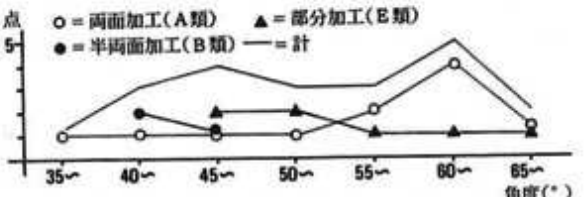
長幅関係では，A類が他に較べて大きいことが明瞭である。B・D・E類はほんの数例ながら，ほぼ似た大きさを示している。未成品はA類と同じかやや小さいが，調整による目減り分を考慮してもB・D・E類の素材としての要件は備えている。この結果に厚さを加味しても，様相はほとんど変化しない。A類は両面加工によって長さ・幅とともに厚さも減じているはずであるが，他に較べると厚い方に寄っている。未成品は，やはりA類に足りるだけの厚味はない。加工程度を考慮すると，D・E類の未成品とするのが最も相応しいようである。ちなみに，各形態別の厚さの平均値と計測資料数(( )内)を示すと，A類：9.2mm(8)，B：9.2(5),D：4.4



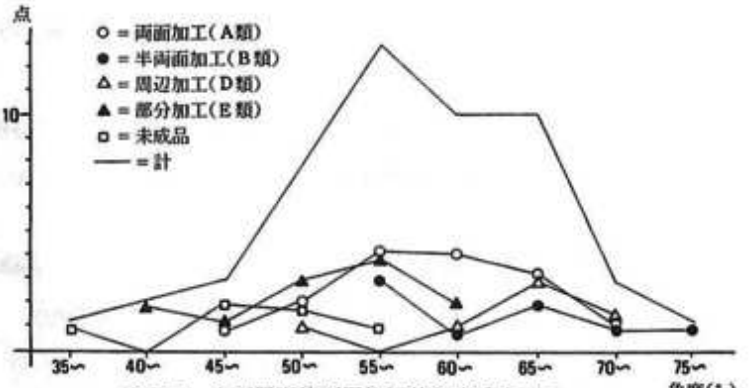
第66図　尖頭器形態別長幅比と厚さの関係グラフ

(2)，E：6.5(6)，未成品：9(4)となる。

〔先端角・周縁調整角度〕 第67・68図は，それぞれ形態別の先端角と周縁調整角度の分布グラフを示した。先端角については，特に計測例数が少ない。最も数の多いA類では60～64°にピークがあるが，B・E類では55°以下が多いようである。B・E類については資料が少なすぎ，傾向としては把握し得ない可能性も大きい。



第67図 尖頭器形態別先端角分布グラフ



第68図 尖頭器形態別周縁調整角度分布グラフ

周縁角度は，わずかでも周縁部が残っていれば計測可能であるため，比較的資料数も多い。完形品とかほぼ全体形を知り得るような資料では，先端寄り・中央・基部寄りの両側縁で計測した平均値を採った。各分類毎の平均値を見ると，A・B・Dでは60～65°の間に収まり，Eと未成品は50°前後の値を示す。さらに細かく検討すると，A類では55～60°までにピークが分散しB類もこれに近いのに対し，D類では65～69°と大きい値の所にピークが来る。資料数が少ないため，1点ある50°という値に引きずられて平均値も下がったのであろう。形態観察の項で指摘したD類の周辺加工の急さが計測値にも現れている。E類もピークこそA類と同じ55～59°に来ているが，分散の仕方が低い値の方に主として広がっているために平均値も低くなっている。未成品の角度はE類に近いが，製作途中にあると考えれば今後どのように変化するかの予測は難しい。角度の呈示のみに留めておく。

〔破損〕 尖頭器の破損の仕方を，ナイフ形石器と同じく六つに分類し集計した(第18表)(第IV章第2節2参照)。形態別では，いずれの場合も破損の現れ方に類似性がある。完成品が少ないのはもちろんのことであるが，原形をよく保っているB類もほとんど認められず，断片であるC類が圧倒的に多い。総数に対する割合は，B類がわずかに6%であるのに対し，C類は74%を占めている。

第18表 尖頭器の形態別破損分類

形態 ＼ 破損分類	A	Ba	Bb	Ca	Cb	Da	計
両面加工(A)	3	3		6	5	3	20
半両面加工(B)	1	1		1	5		8
片面加工(C)				1	2		3
周辺加工(D)				1	7		8
部分加工(E)	1		1	5	7		14
未 成 品	1	2		2	3		8
不 明				1	3		4
計	6	6	1	17	32	3	65

これを尖頭器の使用という観点から，先端部(分類Bb・Ca)と

先端を持たない破片(分類Ba・Cb)に分けて集計すると，それぞれ18点と38点になる。基部側が多く発見されており，一見すると破損した尖頭器の着柄された部分が遺跡に持ち帰られるという仮定によく符合しているように思える。ところが，このBa＋Cb類の内容を再吟味してみると，先端のみならず基部側も破損している例が13点も含まれていることが判明した。両端を欠損するという現象がモデル的な活動系の中でうまく説明できないためこれを除けば，結局先の仮定に沿うのは25点しかなくなる。先端部側18点に対し，それに対応し得る基部側も25点と近似した数が残されていることになり，単純な解釈は困難である。

分　　布

さて，各項目毎に個別に資料の呈示と検討を行って来たが，最後にこれらの分布上の特色を指摘しておきたい。分布の詳細は後節に譲るが，形態によって著しく片寄った在り方をする点について触れる。

大きくG列を境に，尖頭器分布域を南北に分け，それぞれの形態組成を見てみる(第19表)。

第19表　尖頭器のブロック別形態組成

形態＼ブロック	1	2	3	4a	4b	I群周辺	I群合計	散a	5a	5b	6	II群周辺	II群合計	散b	10	11	12	III群周辺	III群合計	散c	合計
両面加工(A)		3	1	2			6	1	3	2		1	6	1		4			4		18
半両面加工(B)		3		2	2		7				1		1								8
片面加工(C)		1		1			2	1													3
周辺加工(D)				6	1	1	8														8
部分加工(E)	1		1	6	2	3	13			1			1								14
未成品		2		4			6		2				2								8
不明				3			3		1				1								4
合計	1	9	2	24	5	4	45	2	6	3	1	1	11	1		4			4		63

これによると，北半は多様な形態を持つのに対し，南半はほとんどがA類で占められ，未成品・不明を除くとその他は2点しか含まれていない。全体を一つとして見ていた時の形態の多様さが，ほぼ完全に分布北半に由来するものであったことがわかる。

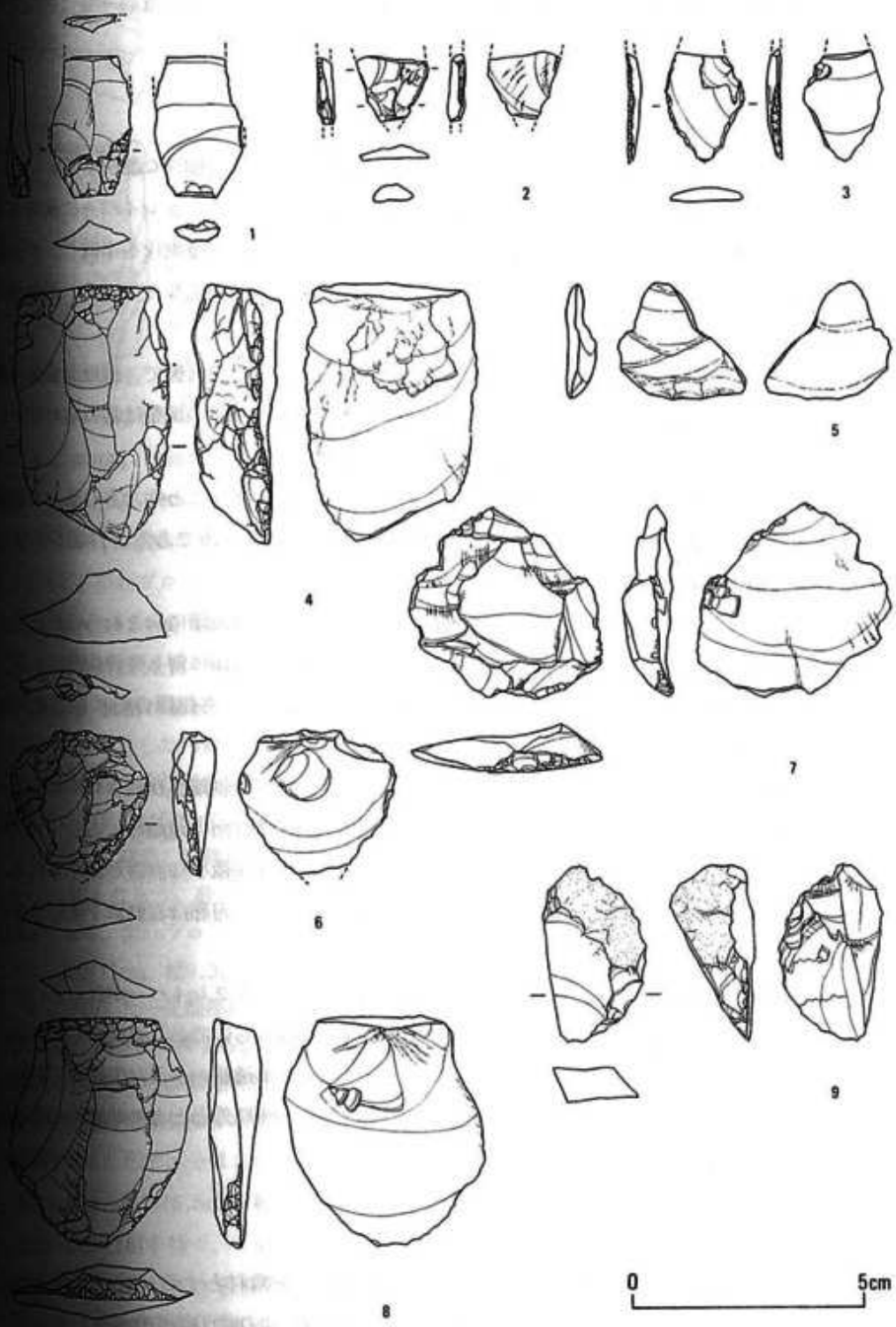
東海から関東地方まで含めて，これほど多様な形態組成を持ち，かつ量的にも安定した遺跡が，ほぼ原位置を保った状態で発掘された例は他にないと考える。このため比較する材料がなく，このような現象をどのように解釈すべきか判断が難しい。ここでは現象の説明に留め，他の石器・遺構等も統合して後に再論したい。　　(山下)

2.　ナイフ形石器

ナイフ形石器は，合計3点発見されている(第69図1～3，第20表)。1・2は第4a，3は第4bブロックに属しており形態的には完成度の低いものである。個別に説明する。

1は先端を欠く基部加工のナイフ形石器である。ブランティングの角度は緩い。折れ面の力は背面から腹面に抜けている。整った縦長剥片を素材とする。

2・3はともに二側縁加工であるが，いずれもブランティングが弱い。素材の形状も整わず，



第69図 尖頭器文化に属するナイフ形石器(1～3)，スクレイパー(4～9)

2は背・腹両面に打瘤を残す。3は薄い横長剥片である。2は背→腹，3は腹→背に折れている。（山下）

3．スクレイパー

6点発見されている（第69図4～9，第20表）。少数であるため，個別に説明する。

4は縦長の大型剥片を素材とする。P－2F⑥の個体別資料中で，スクレイパーに使用される過程を接合資料として説明した。詳細はそちらに譲るが，本例は大型剥片を半截し，その側縁に刃部を作り出している。調整加工は不揃いであるが，頑丈な刃部になっている。刃部角は71°を測る。

5は，不定形で薄い剥片を素材とする。風化の進行した粗質の安山岩製で，剥離面全体に観察が難しい。刃部は下縁に形成されるが，3～4枚の大きな剥離痕以外の調整は認められない。本項で説明はしたものの，その認定には最も問題の多い石器である。

6はほぼ円形の剥片を素材に，打面側を除く全周に刃部を作り出したと考えられる。下端部は欠失する。刃部の調整は丁寧である。刃部角は40～50°とやや緩やかである。打面を大きく残している。凝灰岩製。

7は性格の明瞭な遺物分布から導かれた領域区分によって尖頭器段階に含まれることになったものである。素材には丸い整った剥片を使用している。機能部は打面に対して遠端部にある。小範囲ではあるが整った調整加工を施している。刃部は72°を測る。右側縁の特に腹面側に顕著な刃こぼれが認められる。

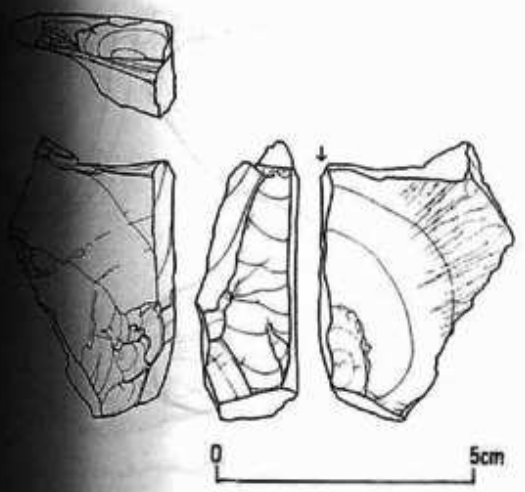
8は，若干縦長で楕円形の素材を利用する。素材背面にも整った剥離痕が残されており，一連の目的剥片剥離工程中の一枚を利用したと考えられる。刃部は打面の遠端部にあり，入念な調整によって66°の刃が付けられている。両側縁にも使用痕のような微小な剥落が認められる。

9は礫表を残す厚手の，半分に割れたような剥片を素材とする。刃部は右側縁下半にあり，67°を測る。

関東地方の例を参考にすると，この時期の尖頭器にはもう少しスクレイパーが伴っているようにも思える。先に尖頭器の未成品としたものがこの不足を充めるものである可能性もあるが，一般的に伴出が認められるのはエンドスクレイパーの類である。本遺跡のような尖頭器の形態，量を揃える遺跡が関東地方にもほとんどないことを考えると，時期差とともに地域差も考慮しておく必要があろう。（藤田）

4．彫　　器

1点のみ出土している（第70図）。厚手で縦長の不定形剥片を素材とする。背面側から剥片の先端を除去し，その折断面を打面として右側縁に一回の打撃により彫刀面を作り出している。彫刀面は幅広で長く，小型の剥片を目的とした剥離の痕跡とも考えられる。第10ブロックに属する。チャート製。（宮坂）



第70図 尖頭器文化に属する彫器

5．敲石類・台石

合計８点の敲石類と１点の台石が出土している（第71図１～第72図７）。

１は，２点の接合資料で，長さ9.4cm，幅6.4cm，厚さ４cmである。扁平な円礫の一先端部にあばた状の敲打痕が認められる。軽微な使用痕であるが，明瞭に使用部を観察し得る。形態区分はⅠa類である。砂岩製で重さは235gを測る。第5ｂブロック。

２は，ほぼ半割したような礫形態で，最大長6.1cm，幅8.4cm，厚さ４cmである。先端部にあばた状の潰れ痕が明瞭につけられている。こつこつと連続して敲かれた痕跡を留める。Ⅰa類に入れられる。石材は砂岩，重さは[illegible]である。第4aブロック。

３は，最大長6.1cm，幅9.5cm，厚さ6.3cmを測る。厚い石材を使用し，エッジに当る部分にごく軽微な敲打痕を留める。こつこつと敲かれた潰れ痕である。形態区分ではⅠa類になる。[illegible]岩を用い，重量は486gである。第３ブロック。

４は，ずんぐりした円礫を素材に，長さ10.7cm，幅6.8cm，厚さ6.3cmを測る。一先端部に[illegible]，あばた状の敲打痕を留める。使用程度は軽微なものと言える。Ⅰa類に属するもので，[illegible]岩を用い，重量は626gである。第4aブロック。

５は，激しく破砕した礫の端部に，軽微なあばた状の敲打痕を有する。もとの礫形態を考慮するとⅠa類となろう。最大長5.5cm，最大幅5.9cm，最大厚４cmである。砂岩を用い，重量[illegible]gである。第4bブロック。

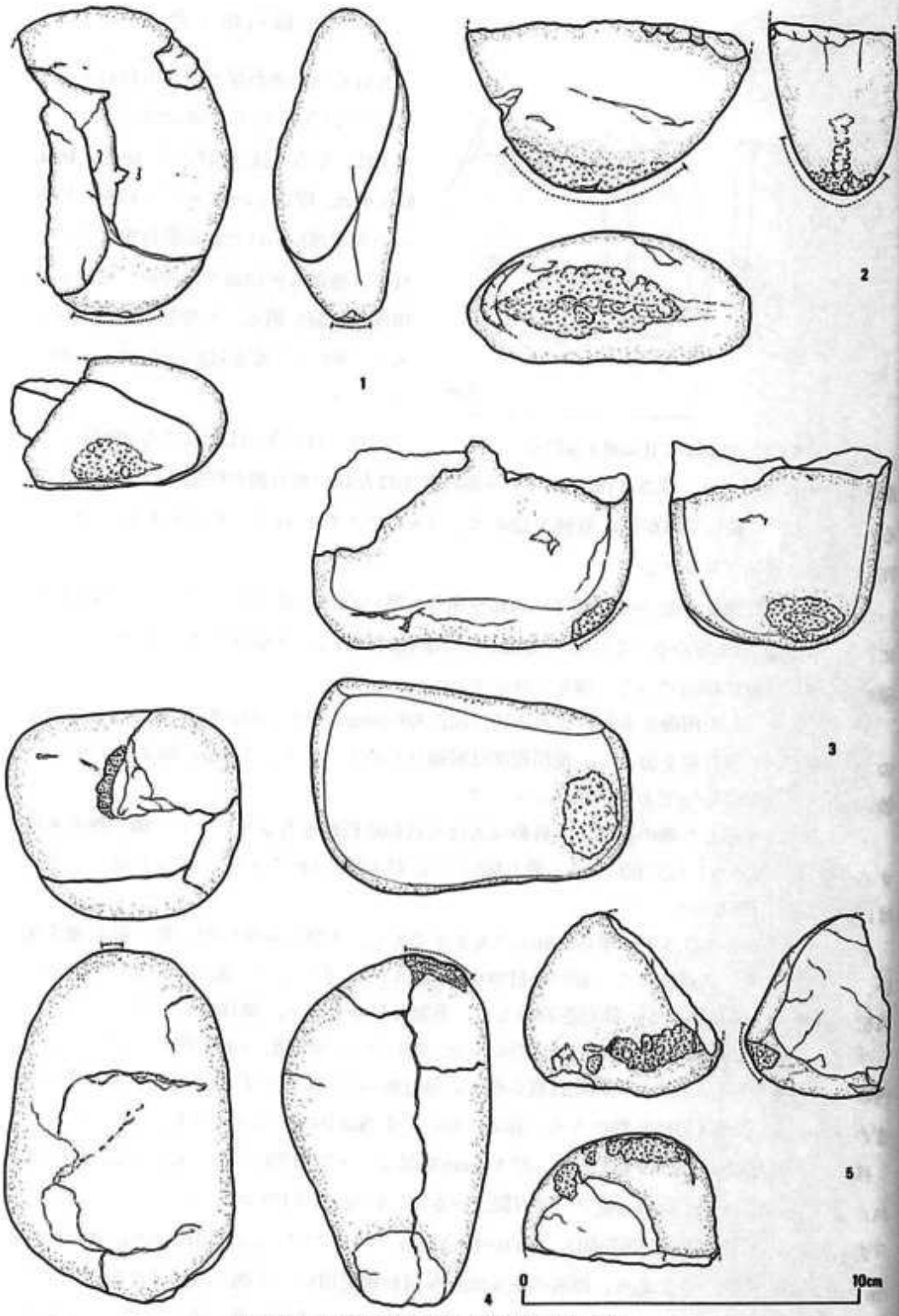
６は，長さ11cm，幅9.3cm，厚さ3.8cmの大きさである。大型で扁平な四辺形の自然礫を用い，最も突出した一先端部にごく軽い敲打痕を留めている。こつこつと敲かれたあばた状の潰れである。Ⅰa類に属する。砂岩を石材とし，重量は443gを測る。第4bブロック。

７は，３と同様の礫形態である。最大長5.8cm，幅9.5cm，厚さ3.5cmを測る。扁平な自然[illegible]の側縁部に軽微なあばた状の敲打痕を残す。敲打痕は先端部のみに留まらず，周縁部にも[illegible]ている。形態区分はⅢ類に入る。砂岩を用い，重量は159gである。第4aブロック。

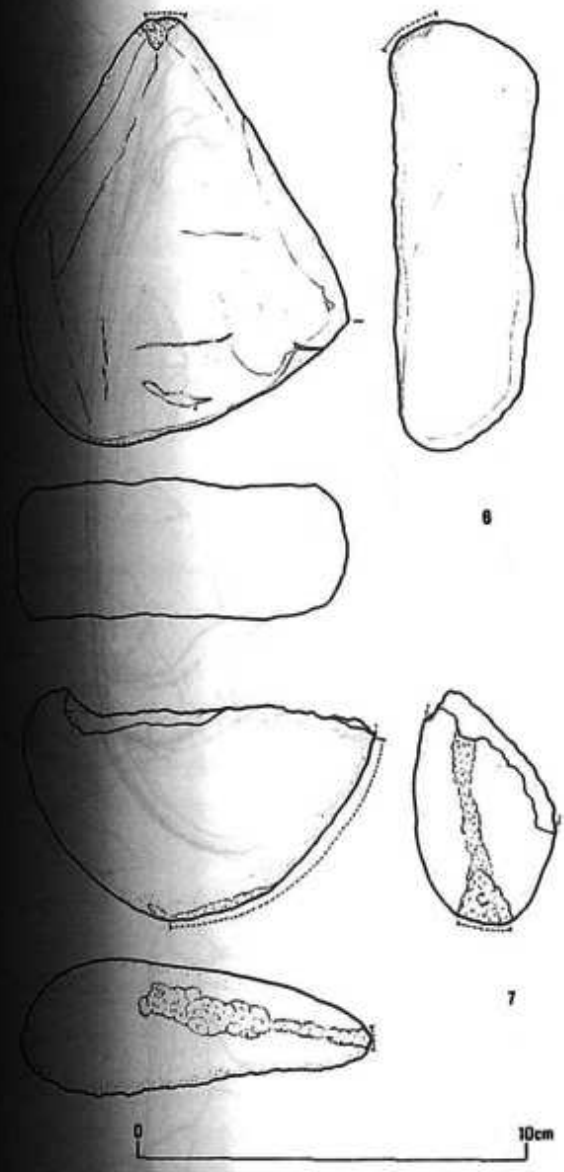
８は１点は，長さ16.5cm，幅7.6cm，厚さ７cmを測る。一先端部にのみ，軽いあばた状の潰れたような敲打痕を持つ。Ⅰa類で，砂岩製。重さは1,450g。第４bブロック。

台石は１点出土している（第73図）。２点の接合資料で，長さ32.3cm，幅15.9cm，厚さ10.5cm，重量7.2kgの大きさである。厚みのある大きな自然礫を用い，片側の表面部に細かいあばたの敲打痕を留めている。使用痕は敲打によるもののみで，面的な磨れ痕や擦痕などは観察されない。石材は砂岩である。第4aブロック。

（黒坪）



第71図　尖頭器文化に属する敲石類（Ia類）



第72図 尖頭器文化に属する敲石類
（Ia類：6，Ⅲ類：7）

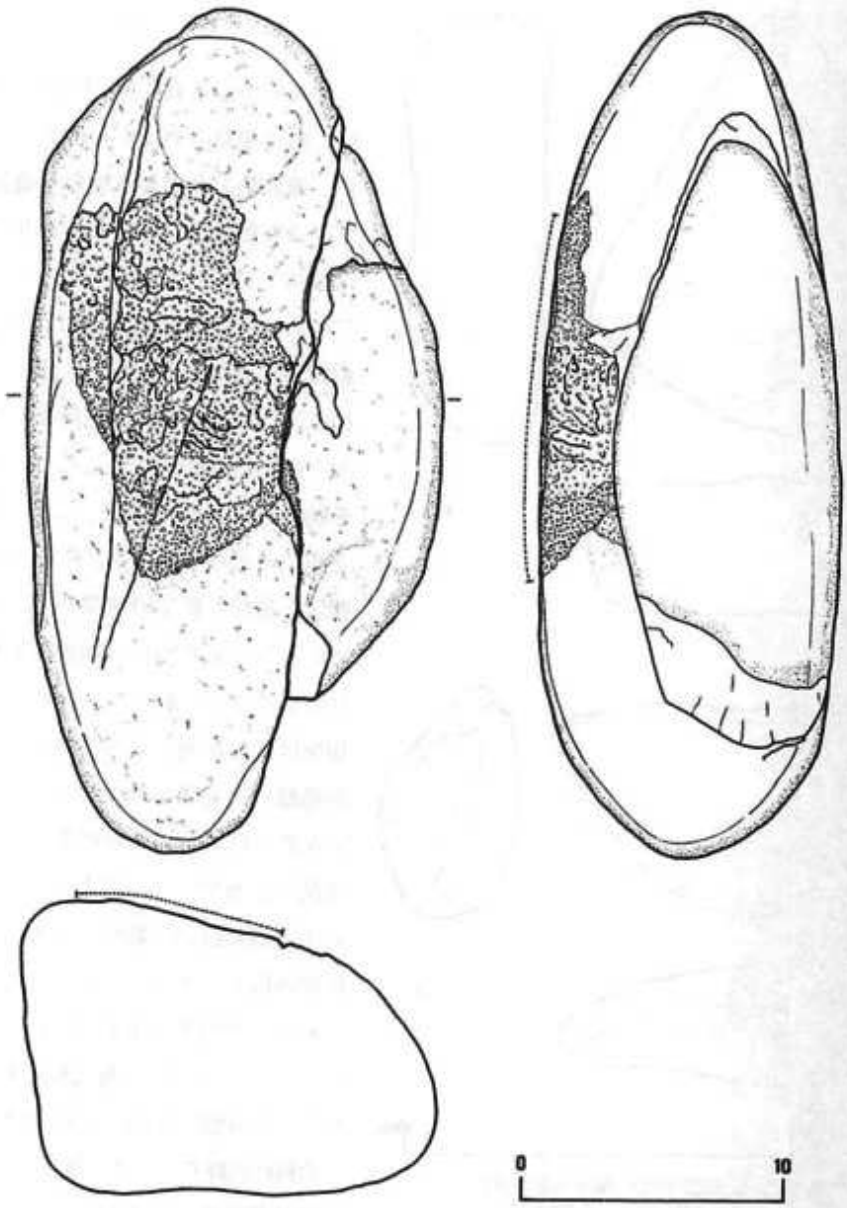
6． ＲＦ

加工痕のある剥片（以下ＲＦと略す）は，13点発見された（第74図１～75図13，第20表）。２点がⅡ種接合資料なので，資料数は15点になる。ＲＦの識別は極めて定性的な規準によって行われている。確実に意図的な加工を施して製作した二次加工のある石器と，二次加工は行わないが石器を使用した結果刃こぼれが副次的に生じたＵＦの狭間を埋める分類項目である。このことは，立脚点の異なる分類方法である技術形態学と機能形態学の狭間を埋めることにもなり，必然的に分類規準も曖昧になるように思われる。すなわち，分類規準は剥片が剥がされた後の二次的な剥離痕に，人間の加工しようとする意図が読み取れるか否かに置いた。この意図は，通常，一定以上の大きさの類似する剥離痕が連続的に認められる所に読み取ることができる。また，通常の石器の使用では生じ得ないと考えられるような大きさの剥離痕がある場合にも，この意図を認める事が多かった。

素材は多様で全く済一性を欠く。１・２は比較的整った素材を使用している[illegible]は大型の不定形剥片，調整剥片，礫表付剥片等である。３はポイントフレイクを素材とする。６と７は不定形剥片であるが，相互に接合している。剥片剥離技術のどの段階で生じる[illegible]が興味深い。

[illegible]にも，ナイフ形石器や削器に近いものから，ＵＦとの判別が難しいものまである。１・[illegible]は，加工部こそ限定されているが，角度・大きさはブランティングに近い。１では２ケ所に[illegible]された加工を繋ぐ剥離面は急角度で，ブランティングの代用と考えられなくもないが，不明[illegible]ため本類に含めた。

[illegible]と５は尖頭器に似た加工痕を持つ。４は加工方法・形態とも特異であるが，腹面先端から

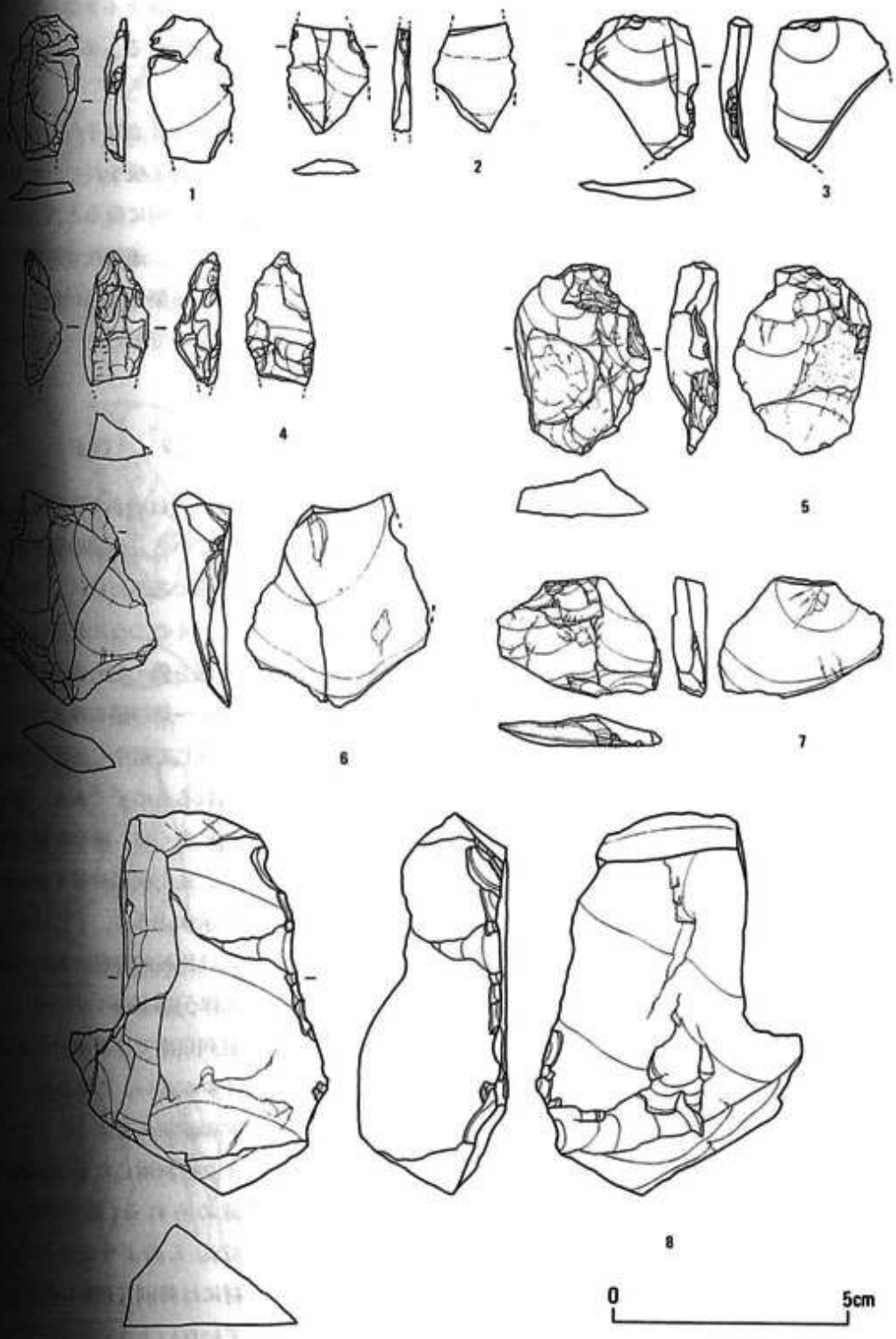


第73図　尖頭器文化に属する台石

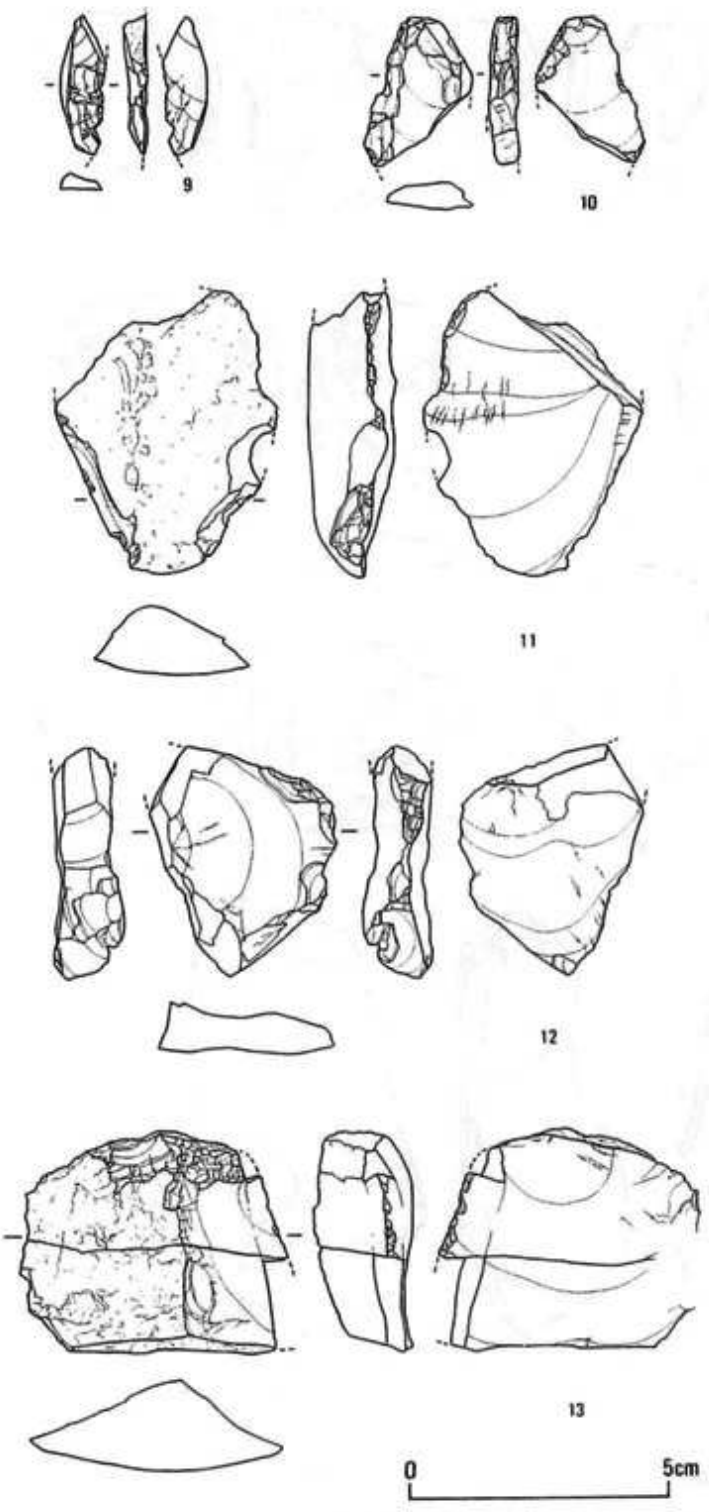
2枚の剥離痕が入っており機能的には尖頭器とすべきものかもしれない。5は素材が歪んでいる上に熱破砕を被っており判断が難しい。わずかな加工がゆるやかな角度である上に全体形が尖頭器に似る所からは，尖頭器の未成品を想起させる。

9・11・12・13は，いずれも削器に近い刃部を持つ。刃部そのものの済一性は欠いているが，加工痕の大きさ・角度・連続性等から，それぞれに可能性が指摘できるものである。11のみ凹刃である。

接合する6と7はともに独特な刃部を持つ。加工部位は少ないにもかかわらず，個々の剥離痕は大きい。加工痕の連続性・規則性よりも，大きさ故にＲＦに分類されたものである。3は



第74図 尖頭器文化に属するＲＦ



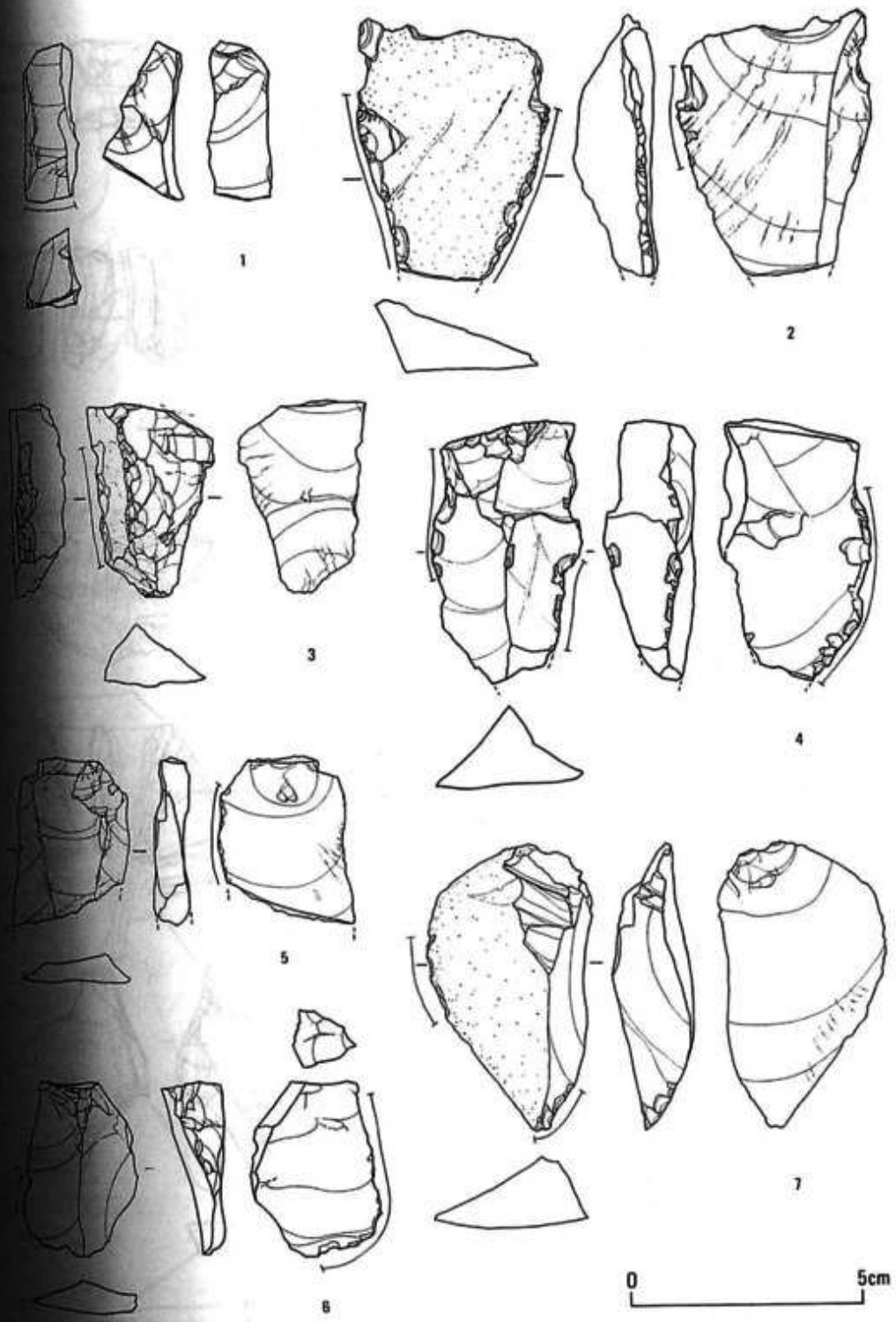
第75図　尖頭器文化に属するＲＦ

第３層ナイフ形石器文化で説明する，ＲＦのＨ類に似る。

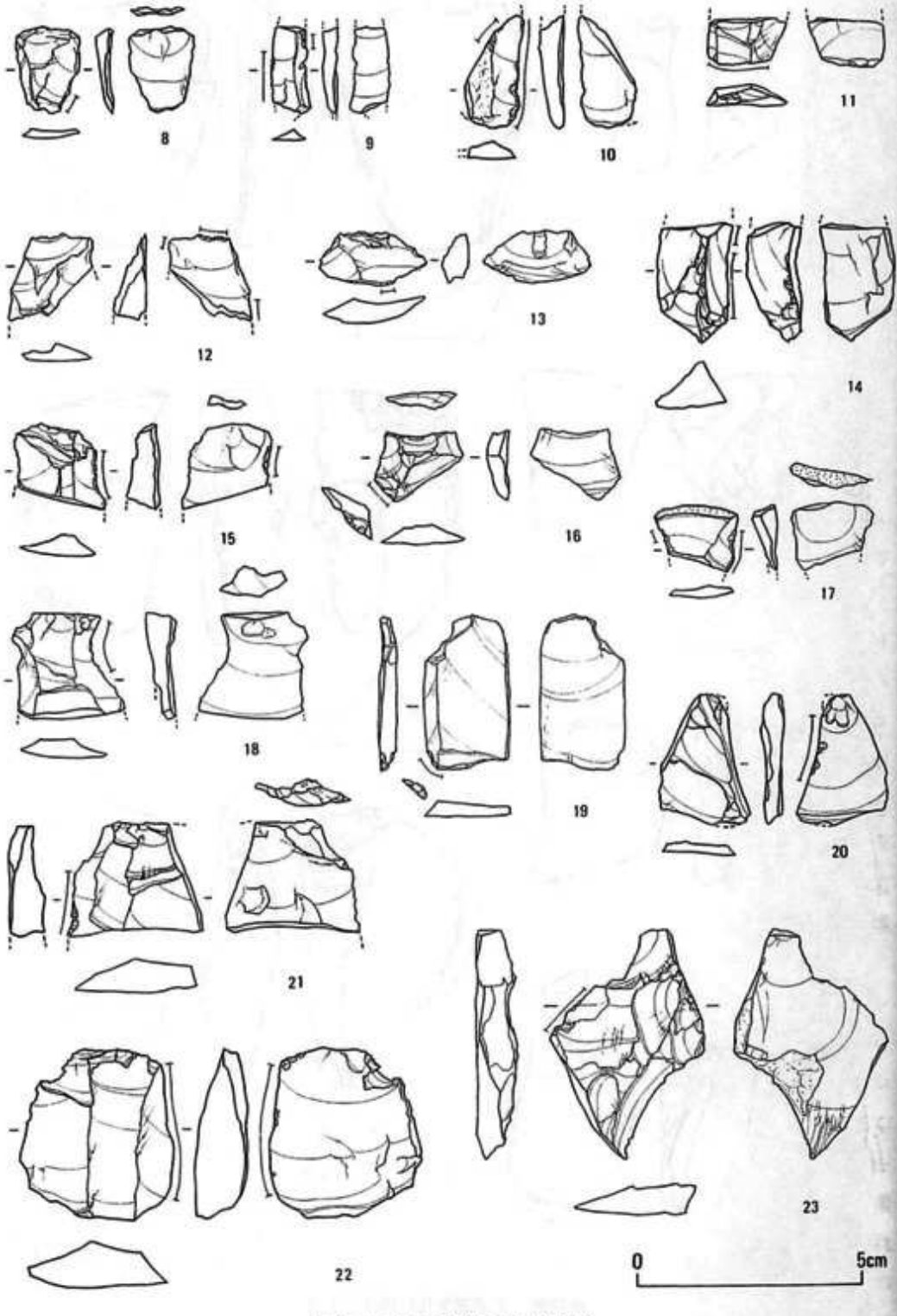
他の３点はそれぞれに独自の加工痕を持つ。定型的石器の何に似ると言うのではなく，連続性や規則性のみから製作意図が感じられるものである。　（山下）

7．　ＵＦ

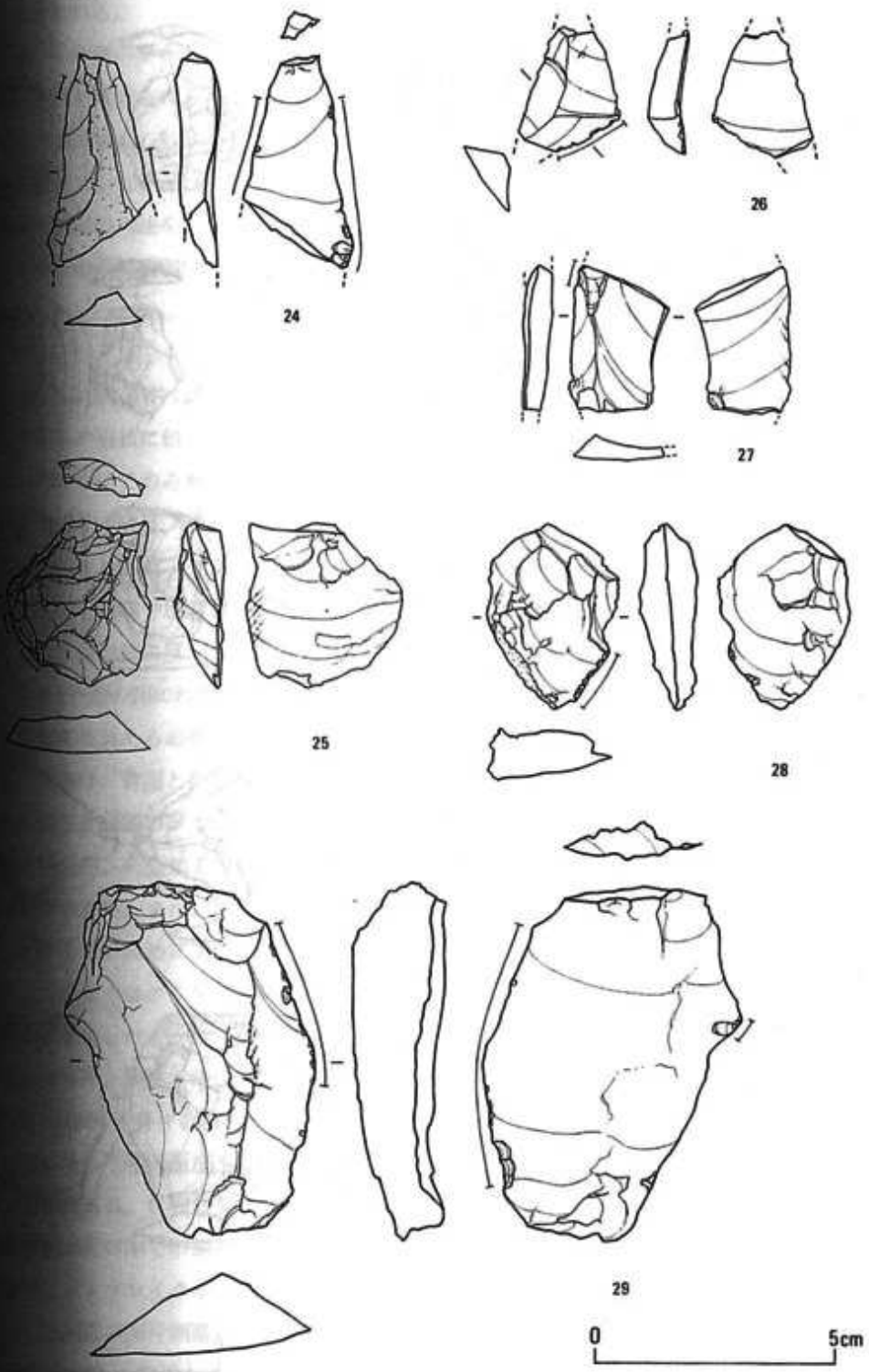
ＵＦは合計183点発見されている。分類の規準が不明瞭であるだけに，第76図１～４のようにＲＦに近い刃部を備えるものから，同図５～第79図42のようにかろうじて微小な剥落が認められるものまである。圧倒的に多くは，微小な例である。また次項や第４節以降で示すように，１Ｇ区以北には比較的通常の剥片剥離に伴う資料が多いのに対し，Ｈ列以南ではポイントフレイクが多い。このため，ＵＦの素材にもポイントフレイクを利用したものが多く認められる（第79図30～42）。このようにＵＦの素材には特別な選択は行われていないようである。その場に最も普遍的な剥片素材がそのままＵＦに利用され



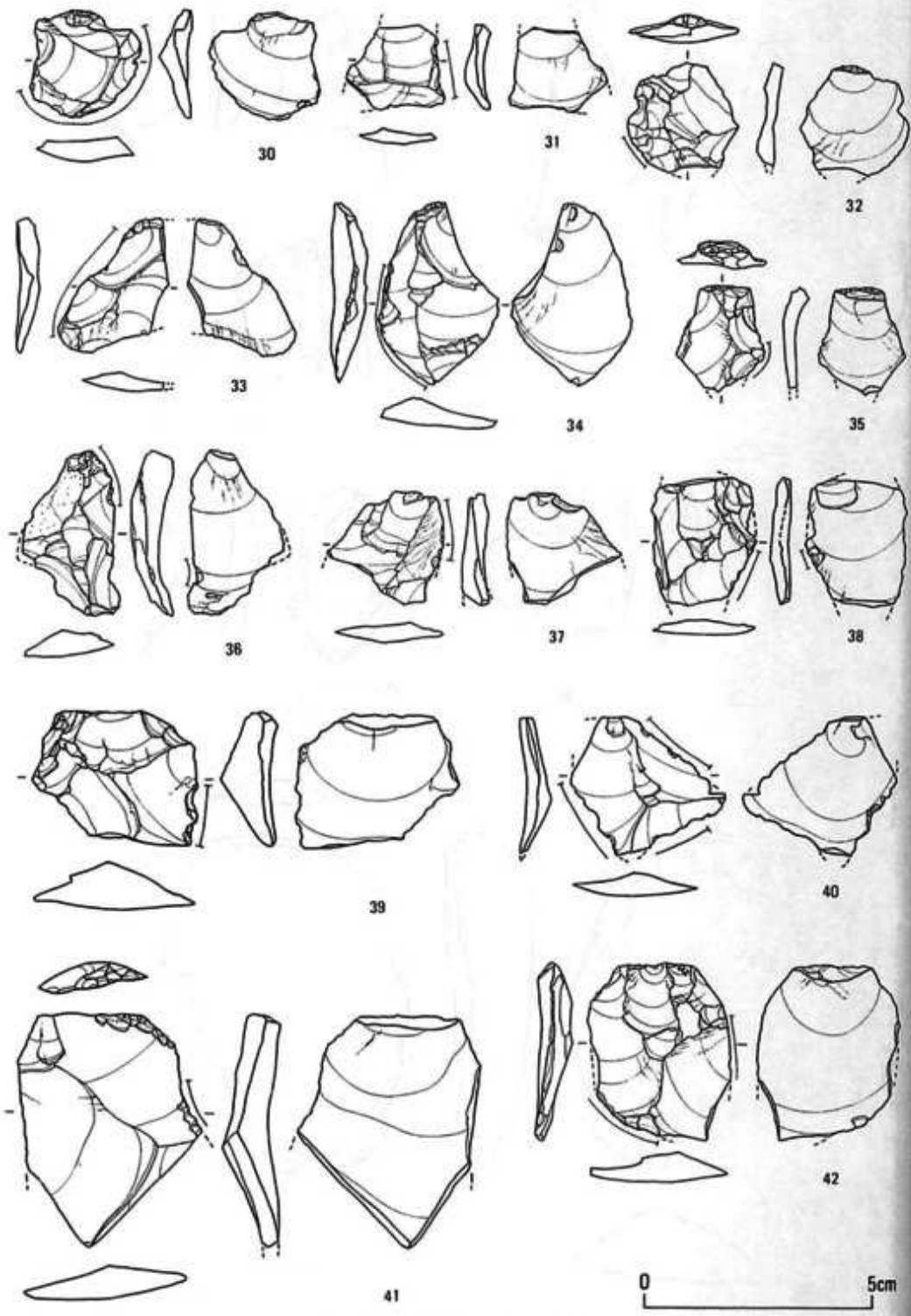
第76図 尖頭器文化に属するＵＦ



第77図　尖頭器文化に属するＵＦ



第78図 尖頭器文化に属するＵＦ



第79図　尖頭器文化に属するＵＦ（ポイントフレイクを素材とする例）

ると思われる。

UFは，その量の多さから判断しても，定式化しない人間の諸活動の幅広い部分を補っていた石器の集合と考えられる。したがって，本来であれば定型化した石器と同等の重要性と意味をもつものであるが，数多くの研究が行われた今日でも依然としてこれといった有効な分析方法が確立されていないように思える。本稿でも新たに全体を網羅した分析を行うべきではあるが，分析・提示の方法を十分に検討するだけの時間を割くことができなかった。ここでは，できるだけ多くの石器実測図を示すに留めた。（山下）

8. 剥片・砕片

剥片は1,503点，砕片は911点である。遺跡全体に尖頭器製作の痕跡を強く残しているだけに，定型石器や石核に較べて剥片・砕片の量が多い。ここでは特にポイントフレイクの形態と違った分布についてのみ触れておく。

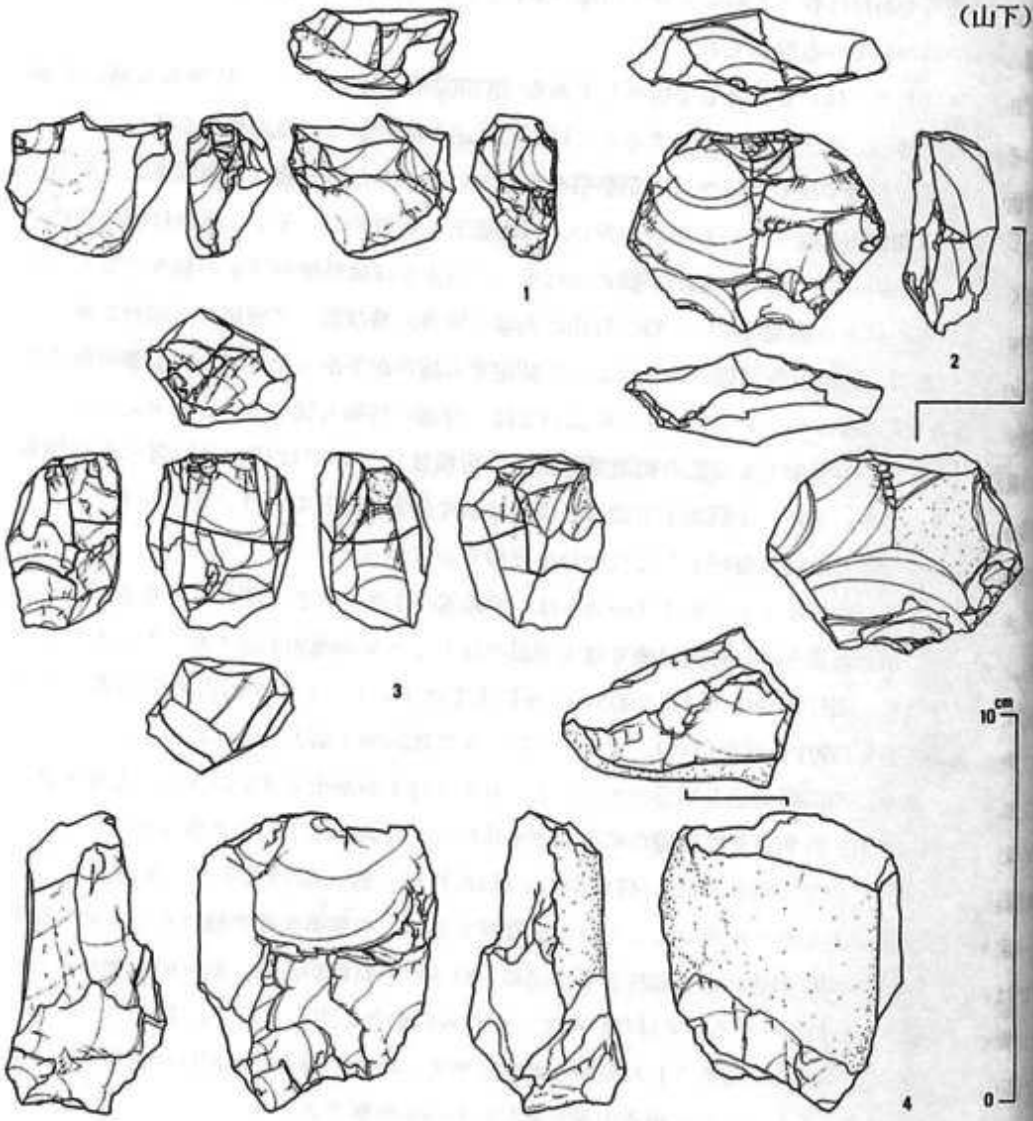
ポイントフレイクは，UFとして図示してある(第79図30～42)ように，特徴を容易に把握することができる。32・35を典型とすると，打面には逆の面のかつての調整痕を残しており，背面側にも同じ側縁や反対側縁からの調整痕を留めている。また側面観は尖頭器表面の曲面にそって，剥片腹面側に反っている場合が多い。打面直下も特徴的で，多くの場合打瘤の発達が著しく，打面と打瘤の間にわずかの窪みが認められる。このような諸特徴が認定の基本となるが，必ずしも全てを具える必要はない。特に打面は剥離と同時に飛び散って破損する場合が多い。このような時は，背面と側面観の特徴によって認定する場合が多かった。また，調整剥離の初期の片面加工尖頭器のポイントフレイクにおいては，打面の特徴も異なることが考えられ，これだけではない。両面加工尖頭器の初期調整剥片の可能性については156～158頁の個体別資料を参照されたい。また，片面加工尖頭器の場合は剥片を素材としており，ポイントフレイクの生産量が少ないために実資料としては十分に把握できなかった。

さて，このようなポイントフレイクの分布は，尖頭器の生産と大きく関わってくる。すなわち，本節1で示したように，H列以南では尖頭器のほとんどが両面加工品であったことから推定できるように，剥片・砕片合計1,604点の95%以上をポイントフレイクが占めている。一方G列以北では剥片・砕片合計810点中，ポイントフレイクは30%未満と考えられる。もっとも，ここではおそらく非両面加工尖頭器のポイントフレイクは十分摘出できていないことを考慮しておく必要はある。G列以北では確かに尖頭器全体に占める両面加工品の割合は少ないが，尖頭器の総数が多い中での割合の低さ(47点中の7点)だけに，搬出品のあることも想定すると，少量ポイントフレイクが出現することは十分理解できる。本章第3節で触れるように，北半ではむしろ通常の剥片剥離による剥片が多く認められる点に特色がある。剥片の形態からその判別が必ずしも判然とする訳ではないので，それらの割合を明示することは難しいが，100点以上，おそらく20～30%はそうした資料を含むと考えられる。南半では同様の資料が5%に満たないことを考えると，いかに両者の差が著しいものか推察できよう。（山下）

9. 石　　核

石核は，破片や母岩と思われる資料も含めると15点発見されている(第20表)。このうち5点が接合して2点の石核になるので，石器数は12点である。多くが，わずかに剥離をしたものとか破片であり，満足な形態を留めるのは図示した4例のみである(第80図)。いずれも複数の打面を持ち，四角からやや縦長の剥片を取っている。打面は複数の大きな剥離痕で構成されるが，意図的な打面調整とするには若干粗雑である。1は厚手の剥片を素材として，2面以上で剥片を取っている。3は角柱状の残核となっているが，2・4では打面の多さにもかかわらず作業面は一定しており，遍平な盤状の残核になっている。3は受熱のためか3点に破砕されて発見されている。いずれの場合も，頭部調整は施していない。打面角は，80～90°の間である。

(山下)



第80図　尖頭器文化に属する石核

尖頭器

遺物	No.	形態	長さ	幅	厚さ	先端角	重さ	破損分類	石材*1)	素材*2)	個体No.	ブロック	挿図番号
2 E 2	A 6	A	68	25	8.8	(41°)	14	A?	Tu	—			60－11
1 F18	A 2	D	—	—	8.9	—	—	Cb	Sh	F	P－2 F⑤	P I 周	62－35
1 F20	A 3	A	75	24	10.5	(45°)	18.0	Ca	Sh	—	P－2 F⑥	P 4 a	60－10
1 F20	A 4	E	—	—	4.0	62°	—	Ca	Sh	F		P I 周	63－47
1 F24	A 2	E	—	—	—	48°	—	Ca	Sh	F	P－2 F⑤	P 4 a	63－39
	A 4	—	—	—	—	—	1	Cb	Sh	—	P－1 F③	P 4 a	64－60
	A58	未	73	43	9	52°	22	A	Sh	—	P－1 F③	P 4 a	64－56
	A 113		（1 F24 A58と接合）									P 4 a	64－56
	A 115	未	—	—	—	—	15	Cb	Sh	F	P－1 F⑥	P 4 a	64－54
	A 195	D	—	—	—	—	—	Cb	Sh	F	P－1 F③	P 4 a	62－31
	A 199	D	38	33	5	95°	6	A	Sh	F	P－1 F③	P 4 a	62－36
	A 211	C	—	—	—	—	2	Cb	Sh	F	P－1 F②	P 4 a	62－29
	A 213	—	—	—	—	—	1	Cb	Sh	F	P－1 F①	P 4 a	64－59
	A 225	D	—	17	—	—	—	Cb	Sh	F	P－1 F③	P 4 a	62－34
	A 376	E	39	20	7.2	43°	4.3	Bb	Sh	タテ	P－1 F①	P 4 a	63－42
	A 385	E	—	—	—	—	4	Cb	Sh	F	P－1 F②	P 4 a	63－45
	A 394	E	—	—	5	—	4	Cb	Sh	タテ	P－1 F①	P 4 a	63－46
1 F25	A 4	B	—	—	—	—	—	Cb	Sh	F		P 4 b	61－20
	A 190	E	—	—	—	—	1	Cb	Sh	F	P－2 F⑦	P 4 b	62－38
	A 191	E	—	—	—	66°	2	Ca	Sh	F		P 4 b	63－41
	A 195	E	—	—	—	—	—	Cb	Sh	F	P－1 F③	P 4 a	63－49
2 F11	A 5	B	—	—	10.6	53°	—	Cb	Sh	F	P－2 F②	P 2	62－26
	A 7	A	37	31	8.0	61°	8.3	Ba	Sh	—		P 2	61－12
2 F12	A 1	E	—	—	—	59°	—	Ca	Sh	タテ		P 1	63－50
2 F16	A 1	未	—	—	11	—	18	Cb	Sh	ヨコ	P－2 F①	P 2	64－55
	A 4	E	—	20	6.9	(40°)	—	Cb	Sh	タテ	P－2 F④	P I 周	63－40
	A11	A	—	—	—	—	—	Cb	Sh	F	P－2 F②	P 2	60－4

遺 物	No.	形態	長さ	幅	厚さ	先端角	重さ	破損分類	石材*1)	素材*2)	個体No.	ブロック	挿図番号
2 F16	A18	C	—	—	—	55°	—	Ca	Sh	F	P－2 F②	P2	62－27
	A20	E	—	—	—	—	2	Cb	Sh	タテ	P－2 F④	P3	63－44
	A42	B	40	19	8.7	42°	4	A	Sh	タテ	P－2 F③	P2	61－22
	A48	B	—	—	—	—	—	Cb	Sh	F	P－2 F②	P2	61－21
	A65	A	—	—	—	—	1	Da	Tu	—	P－2 F④	P2	61－17
2 F17	A 4		（1 F20 A 3と接合）									P3	60－10
2 F22	A 6	未	—	—	—	—	1	Cb	Sh	F		P2	63－51
1 G 3	A33	D	—	—	—	—	1	Cb	Sh	F		P4 a	62－33
	A41	—	—	—	—	51°	—	Ca				P4 a	64－58
	A49	B	—	18	11.1	51°	—	Cb	Sh	F	P－1 G⑦	P4 a	61－23
	A89	D	20	12	3.8	—	—	Cb	Sh	タテ		P4 a	62－30
1 G 4	A 1	A	60	25	6.9	40°	9.7	A	Sh	—		P4 a	61－14
	A13	未	41	35	6	64°	8	A	Sh	F	P－1 F②	P4 a	64－52
	A19	B	24	10	3.8	(36°)	1	Ba	Sh	タテ		P4 a	61－19
	A46	D	—	—	—	—	3	Cb	Sh	F	P－2 F⑦	P4 a	62－32
	A 157	E	—	—	—	41°	—	Ca	Sh	F	K 2－2 G⑫	P4 a	62－37
1 G 5	A 6		（1 F24 A199と接合）									P4 b	62－36
1 G10	A 2	C	—	—	—	—	—	Cb	Sh	F		P散a	62－28
1 G18	A 1	A	—	21	7.0	—	—	Cb	Obs	—		P散a	60－8
2 G 1	A 7	B	—	—	—	—	—	Ca	Sh	F		P4 b	61－24
	A12	E	42	28	7.0	74°	10	A	Sh	F	P－1 G①	P I 周	63－48
0 H10	A 4	—	—	—	—	—	1	Cb	Sh	—		P5 a	64－57
	A 6	未	67	40	10	86°	23	A	Sh		P－0 H⑧	P5 a	64－53
	A 7	A	—	—	—	—	—	Cb	Sh	—		P5 a	60－6
	A23		（0 H10 A 6と接合）									P5 a	64－53
	A 103	A	—	—	—	61°	—	Da	Sh	—	P－0 H⑥	P5 a	61－16
0 H19	A 1	E	—	—	—	—	—	Cb	Sh	F		P5 b	63－43
0 H20	A75	A	—	—	—	60°	—	Ca	Sh	—	P－0 H③	P5 b	60－5

1 H 3	A 4	B	—	32	11.8	—	16	Cb	Sh	F		P 6	62－25
1 H 6	A 5	A	—	—	—	58°	—	Ca	Sh	—	P－0 H②	P 5 a	60－3
1 H 7	A 4	A	—	24	8.3	—	—	Cb	Sh	—		P Ⅱ周	60－7
1 H16	A 9	A	—	—	—	67°	—	Ca	Sh	—	P－0 H⑧	P 5 b	60－1
1 I 8	A 4	A	54	27	9.5	47°	11.2	A	Sh	—		P 8	61－15
1 I 18	A 1	A	72	34	14.5	55°	35	Ba	Sh	—	P－1 I⑩	P11	60－9
	A28	A	—	—	—	—	—	Ca	Sh	—		P11	60－2
	A 129	A	—	—	—	—	18	Cb	Sh	—	P－1 I⑥	P11	61－13
1 I 23	A 3		（1 I 18 A 1 と接合）					Ca				P11	60－9
表	A 105	A	—	—	—	—	—	Da	Sh	—			61－18

ナ イ フ 形 石 器

遺 物 No.	形態	長さ	幅	厚さ	先端角	刃部角	重さ	破損分類	折れ*3)	*4)	素材*2)	石材*1)	個体No.	ブロック	挿図番号
1 F24 A 166	—	—	—	—	—	—	0.7	Cb	V→D V→D	—	不定	Sh	P－1 F③	P4a	69－2
1 F25 A 162	D	31	19	6.4	—	33°	4.0	Ba	D→V	0	タテ	Sh	P－1 F②	P4a	69－1
2 G 1 A13	A_1	—	17	2.5	—	—	1.1	Ba	D→V	55°	ヨコ	Sh		P4b	69－3

ス ク レ イ パ ー

遺 物 No.	長さ	幅	厚さ	重さ	刃部角	素材剥離面	石材*1)	個体No.	ブロック	挿図番号
0 F25 A 4	36	55	17	43	71°	83°	Sh		P散a	69－4
0 G10 A 1	42	40	9	13	72°	—	Sh		P散a	69－7
1 G12 A 1	30	34	8	9	60°	70°	Tu		P散a	69－6
2 G 1 A 8	25	26	10	3	49°	—	An	P－1 F⑩	P 4 b	69－5
0 H19 A 4	—	—	—	11	67°	—	Sh		P 5 b	69－9
1 I 23 A65	49	44	10	20	66°	78°	Sh		P11	69－8

RF

石 器	No.	個体No.	素材*2)	石材*1)	長さ	幅	厚さ	重さ	刃部角	打角	ブロック	挿図番号
1 F15	A 1	P－2 F⑤	タテ	Sh	32	17	4	2	65°	—	P I 周	74－1
1 F24	A 325	P－1 F③	F	Sh	—	—	—	＜1	57°	—	P4 a	75－9
1 F25	A82		不定	Tu?	28	21	5.5	3	63°	—	P4 a	75－10
2 F11	A 6	P－2 F⑤	不定	Sh	41	29	9.6	10	68°	75°	P 2	74－5
2 F16	A49	P－2 F⑩	不定	Sh	26	34	6.8	5	63°	77°	P 2	74－7
2 F16	A62	P－2 F⑩	不定	Sh	42	39	8	10	57°	74°	P 2	74－6
2 F16	A69	P－2 F⑩	（2 F16 A62と接合）								P 2	74－6
2 F21	A31		F	Sh	—	14	9	4	73°	—	P4b	71－4
1 G5 推定復原	A 3	P－2 F⑦	不定	Sh	42	(55)	18.2	40	80°	73°	P4b	75－13
1 G17	A 5		タテ	Sh	23	18	3.8	1	64°	—	P散a	74－2
2 G 1	A 1	P－2 F⑦	（1 G5 A 3と接合）								P4b	75－13
1 I 20	A 1		不定	Tu?	—	—	15.7	26	72°	—	P III 周	75－11
1 J 3	A 6	P－1 J①	不定 (Pt.F)	Sh	30	25	3.5	3	65°	63°	P12	74－3
1 J 6	A 2		不定	Tu	44	34	12	11	72°	—	P III 周	75－12
1 J 6	A 4		不定	Sh	82	50	30.4	104	60°	—	P III 周	74－8

遺構	No.	素材	剥片	打面数	打面調整	取られた剥片	石核	ブロック	個体No.	挿図番号
		頁	剥	1 2 3以上	レヅキ ヒワリ ナシ	数 タテ長 ヨコ長 不定形	高さ 幅 厚さ 重さ 打面角			
1F24	A49	○		○	○	5< ○	46 32 30 43 84°	P4a	P−1F③	80−3
	A98		○ ○		○	1 ○	50 50 28 39 81°	P4a	P−1G③	
	A101	（1F24 A49・1G4 A87と接合）						P4a	P−1F③	80−3
	A127	（1F24 A98と接合）						P4a	P−1F③	
	A194(母)		○				49	P4a	P−1F②	
1F25	A48	○		○	○	5< ○	53 64 23 65 65°	P4a	P−1G①	80−2
2F7	A6	○		○	○	5< ○	76 62 38 180 84°	P1		80−4
2F21	A7		○	○	○	5< ○	38 24 45 31 87°	P I周		80−1
	A44						56	P4b		
1G3	A2	○		○	○	5< ○	38 28 17 17 85°	P4a	P−1G③	
	A75(片)							P4a		
1G4	A87	（1F24 A49・A101と接合）						P4a		80−3
1G19	A4(母)	○					144	P散a		
1H2	A1	○	○		○	2 ○	44 66 46 103 78°	P II周	単	
	A5(片)					○	8 75°	P6		

（ ）内は推定復原値。ただし発掘調査時にわずかに損傷を被っているものは推定復原値を示しているが（ ）は付していない。

＊1）Sh：頁岩　Tu：凝灰岩　Obs：黒曜石　An：安山岩

＊2）タテ：長幅比1.5：1より長い剥片　ヨコ：長幅比1：1.5より幅広の剥片　不定：長幅比1.5：1～1：1.5の間の剥片
F：剥片素材である事以上は判定不能（尖頭器のみ）

＊3）D：背面　V：腹面

＊4）素材の剥離軸と石器の中心軸との交叉角度

第3節　個体別資料と技術

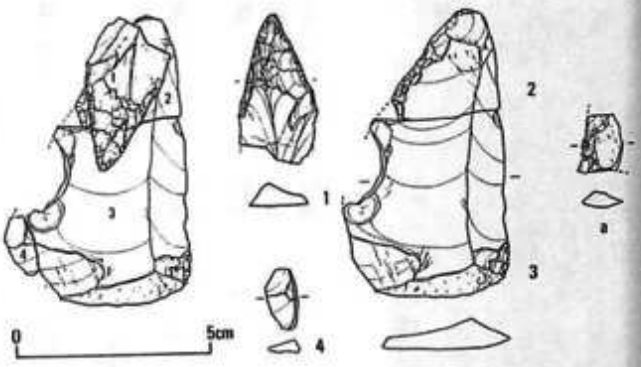
個体別資料の内容を説明するが，主な視点は(1)石器素材をどのように供給しているかという剥片剥離技術と，(2)素材をどのように加工して石器，主として尖頭器を作り出しているかという所にある。両方の技術をともに持つ個体はほとんどないため，以下(1)と(2)に分けて記載する。(1)では接合資料を中心に述べるが，(2)ではあまり接合例がなく，個体を構成する各資料群について述べる。

1．剥片剥離技術を示す個体別資料

4個体について記載する。剥片剥離工程の手順を探るために，特に作業の開始段階・打面転移・各種の調整について注意する。また，個体毎に含まれる二次加工のある石器についても，種類・形態などに注意する(第25表)。

＜P－1 F①＞(第81図)　18点の資料からなる。6点が尖頭器製作時にできるポイントフレイク，4点が尖頭器である。2点が接合して1点の尖頭器となるので，尖頭器の実数は3点である。

一組の接合資料がある。わずかに4点の接合例であるが，尖頭器の素材について知ることができる。

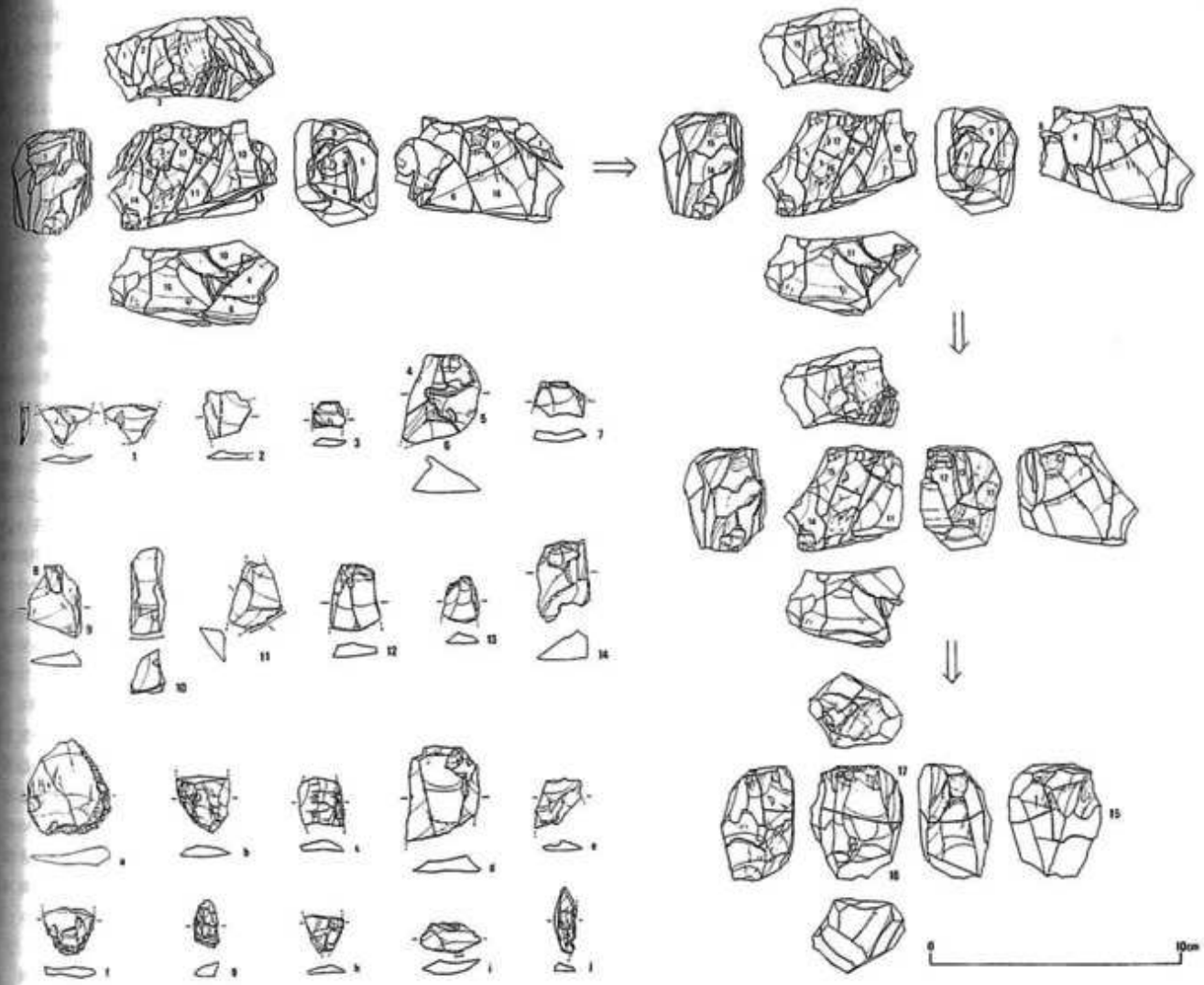


第81図　個体別資料P－1 F①

イ→①1 F24A376(Pt)→ロ→②1 F24A58(Pt)＋③1 F24A113(Pt)
④1 F25A22 (C)

イ)長さ6cm以上の大型で整った剥片を，2枚以上取っている。①も同様の剥片であるが，加工され尖頭器になっている。本来7cmほどあったと考えられる素材の下半3cm位を除去し，中間部を先端にしている。基部側も1cm位欠失しているが，現存部に全く調整痕を残さないことから考えて，基部にはほとんど加工を施さなかったと思われる。①の右側でロ)の整った剥片を取る。②と③は接合して，大型の尖頭器となる。④は本来②・③と同じ剥片であったものが，尖頭器の製作に当って折り取られたものである。

本資料では，一見すると小さな素材で足りるような剥片素材の片面加工尖頭器でも，2倍近い素材から作られる例もあることを知ることができる。また，同一個体中に類品はないが，尖頭器の素材となる剥片は，②・③接合資料のように，そもそも大型で整ったものである可能性もある。



第82図　個体別資料P－1F⑥

この個体は，本遺跡で数枚の目的剥片を取った後，再び持ち去られている。目的剥片だけが持ち込まれた可能性も強い。

＜P－1 F③＞（第82図） 61点の資料からなる。このうち14点がⅡ種接合して7点になっている。5点の尖頭器と1点のナイフ形石器を含むが，いずれも接合しない。8組の接合資料があるが，いずれも一連の手順の中で捉え得るものである。A群以外は断片なので，A群について詳述する。

一個体別資料中に，背面に大きく礫表を残す剥片がわずかしか認められないことから，本遺跡は荒い調整の後遺跡に持ち込まれたと考えられる。最初に①・②と連続して取られるが，接合のため詳細はわからない。ロ）では石核の整形も兼ねてか，5 cm以上の剥片を2枚以上とって石核を大きく二分割の後，再び大きく整形する。この一環として③をとる。ハ）で打った剥片を取り，すぐに打面を移しニ）で新たな打面作出を行う。再びハ）の剥離面に打面を移し，④～⑨の剥片群を取る。この中にはⅡ種接合が多いため，剥片数は4枚である。いずれも不定形な剥片である。破片である④がＵＦになっている。打面を90°移し，続いて⑩～⑬の剥片群を取る。これらは，直方体の石核の木口面に当る部分で取られており，縦長で形態的にそろっている。⑩・⑪はＵＦになっている。特に⑩の刃こぼれは著しく，スクレイパーとして使われてもおかしくはない。ロ）で石核を二分割した面に180°打面転移の後，⑭の調整剥片を取る。これはＵＦになっている。⑮＋⑯＋⑰が残核である。3点は熱破砕によって割れたようだ。割れ面のリングとフィッシャーは，中心から放射状に縁辺に向っている。

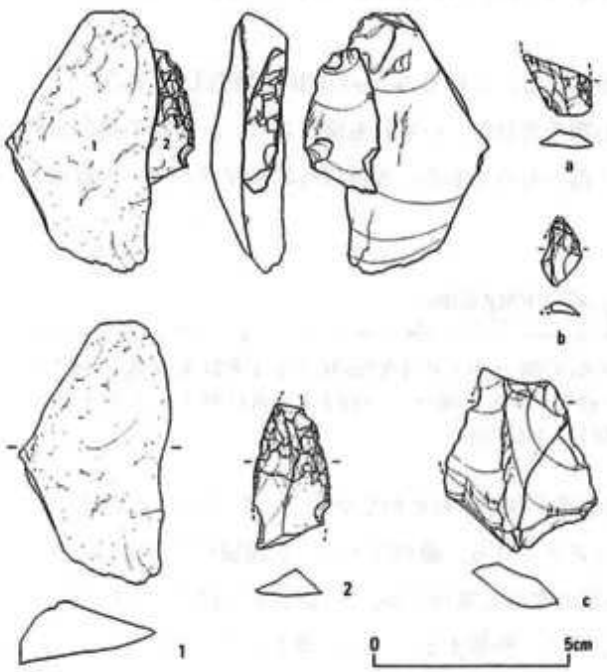
この接合資料では，5 cm以上と3～4 cmの2種類の剥片が目的とされていたようである。ロ）で最初に大型のものを取り，以降では石核を半割して小型のものを取ろうとしている。一定の時間幅の中で異なる剥片を異なる時期に必要としたと考えるよりは，常に大小二種類の素材の需要があり，これらは両者を得るために一気呵成に剥離されたと考えるべきであろうか。打面転移は著しい。一打面当り最も多くて6点の剥片を取っているが，石核の調整とか打面作出の失敗もあったと考えられ，ここでは計7回の転移が認められる。しかもそれらは，組織的な手順をもって行われてはいないようである。打面調整・頭部調整は認められない。

＜P－2 F④＞（第83図） 資料数は計22点である。2点の尖頭器片と1点の尖頭器先端剥片，4点のポイントフレイクを含む。

接合資料は，わずかに2組4点であるが，一方は尖頭器の素材の一端をよく示している。

イ→①2 F7 A 5 (B)→②2 F16A 4 (Pt)

この剥片剥離初期と考えられ①は打面に剥離面を持つ以外，背面は全て自然面である。②は



第83図　個体別資料P－2 F④

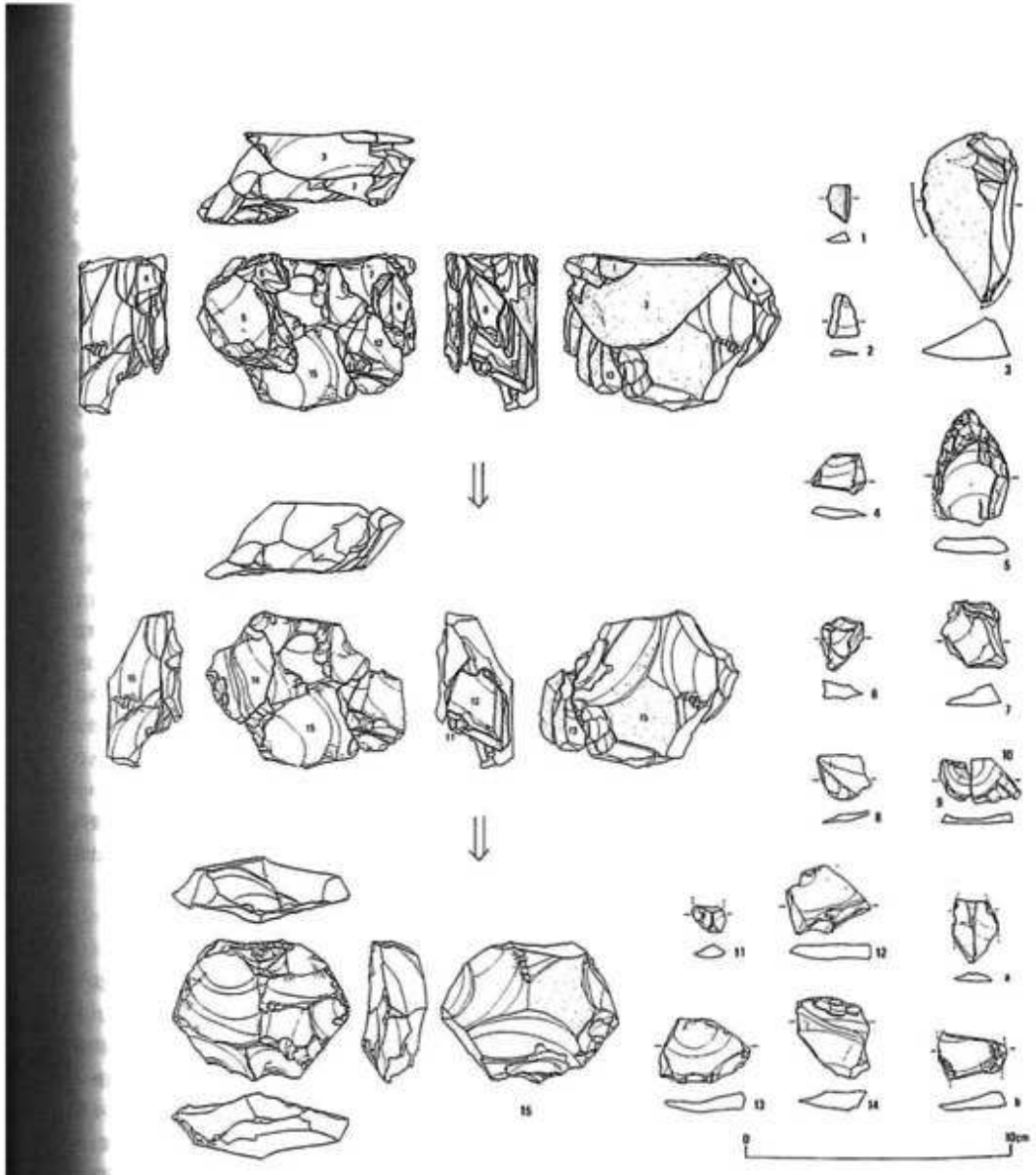
①と同じ打面から連続して取られたと判断される。現状は欠損しているが，背面右半に自然面を持つ，長さ5～6cmの石刃状剥片であったと考えられる。

②は素材基部の背面側にのみ加工を加えた部分加工の尖頭器である。残る1点の尖頭器も，基部破片ではあるが背面側への部分加工品と考えられる。これらに対し，尖頭器製作途中に生じたと思われる先端剥片は，両面に加工が施されている。あまりにも断片であるために，これが即座に両面加工尖頭器の存在を示すことにはならないが，その可能性を示唆するものである。個体によって尖頭器の形態が決まるような規制は緩かった可能性がある。

＜P－1 G①＞(第84図)　40点よりなる資料である。尖頭器を2点，ポイントフレイクも3点含む。15点が接合している。

イ→①1 G 4 A14(B)→②1 G 4 A144(B)→ロ→③1 G 3 A84(UF)→④1 F24A99(B)┼⑤1 G 5 A31
→ニ→⑧1 G 3 A74(B)→ホ┼⑨2(B)→⑥1 F24A35(B)+⑦1 G 4 A97(B)→ハ→ト┼⑪1 G 4 A118(B)→チ┼⑫1 G 5 A 9 (B)→⑬1 F24 A G 1 A12(Pt)+⑩1 F24A52(B)→ヘ
96(B)┼ヌ→⑭1 GA 3 (UF)→ル→⑮1 F25A48(D)
→リ

イ)すでに剥片剥離の初期工程は終り，目的剥片剥離もある程度進行しているようである。非接合資料中にも礫表を残す剥片はあまりない。①～④は，石核背面側で連続的に剥がされているが，打面の作出と目的剥片剥離を併用しているようである。①～ロ)は失敗剥離で微小なものしか得られず，しかも階段状になってしまっている。これを③の剥離で一気に取り除いている。③・④の剥離面を打面として，続く⑤～ハ)の小剥片を取る。④～ハ)と前後関係は不明だが，ほぼ並行してニ)～ヘ)の作業が打面を違えて行われる。ニ)～ホ)は①～④と似て，剥片剥離と打面作出を兼ねたような作業である。両群の打面は180°異なっている。⑨～ヘ)は再び90°打面を移し，遺跡に持ち込まれた段階からすでにあったと思われる打面から剥がされている。共に長さ・幅とも5cm程の大きな剥片であったと考えられる。⑨+⑩は後に尖頭器になっている。④～ハ)とニ)～ヘ)の工程がト)で再び交叉する。ハ)・ヘ)ともにト)の小剥離痕に切られている。すぐに180°打面を転移し⑪・チ)を剥がした後，再び元にもどり⑫・



第84図　個体別資料 P－1 G①

⑬を取る。③の剥離痕を打面に，石核背面からリ)で剥片を取ろうとしたが失敗している。リ)と交叉しないため前後関係はわからないが，リ)～ル)は⑬と180°異なる打面から取られている。ヌ)・⑭は形態的に整っているが，ほぼ方形に近い剥片である。このような剥離の結果，⑮の石核には大きく三つの打面が残されている。

作業を整理してみると，(Ⅰ)石核右背面に打面作出：①～④，(Ⅱ)石核左背面に打面作出：ニ)～ホ)，(Ⅲ)石核上方の打面より剥片剥離：⑨～ヘ)，(Ⅳ)(Ⅰ)で作られた打面から剥片剥離：⑤～ハ)・ト)・⑫・⑬，(Ⅴ)石核左側と(Ⅱ)で作られた打面から剥片剥離：ヌ)～ル)の5段階に分けられる。このうち(Ⅲ)・(Ⅴ)が不定形ながら整った剥片を取っているのに対し，他では小形とか礫表を持つ剥片しか得られなかったようである。本資料も打面の移動は激しく，8回を数える。打面・頭部調整等の整形のための剥離は施していない。

⑨+⑩では尖頭器の製作技術を窺うことができる。素材は径4～5cm，厚さ6～8mm位の平板な剥片と考えることができる。これをほぼ半割し，大きい破片の一端に調整を施して先端を作り出している。このため尖頭器だけを観察すると横長剥片を素材としているように見える。

わずか4例ではあるが，異なる二つの剥片剥離作業の存在を知ることができた。一つはP－1F①とP－2F④で見たように，整った縦長剥片を目的とする内容である。こちらは，接合資料が少ないために全体の工程はわからないが，尖頭器の素材として縦長剥片が求められた事実は認めてもよいであろう。もう一つはP－1F③とP－1G①によって示された工程で，こちらは縦長剥片に対する強い欲求は認められない。むしろ四角く厚味のある剥片で，企図する尖頭器の大きさに足りれば良いという印象が強い。後者の場合には素材の形状を有効に生かそうとする意識は少ないようである。また後者の場合には，こうした剥片を得るための剥離工程中に，組織的に打面調整や石核調整・打面転移等を組み込むことはなかったようである。打面調整や石核調整は認められず，打面転移は極めて頻繁に工程上の規制なく行われているように思われる。（山下）

2. 尖頭器製作技術を示す個体別資料

尖頭器の製作技術で問題となるのは，いかなる素材を使用し，加工工程に一定の手順が認められるか否かである。具体的には，本遺跡のように剥片素材で片面加工尖頭器の多い中で，大型両面体を素材とするような例があるのかどうかであり，それらの調整加工法として例えば荒い整形から仕上げの細調整まで，異なる作業工程として認識し得るような手順を踏んでいるか否かである。これらの検討のために，調整剥片(ポイントフレイク)を大きさによって分類した(第25表)。ポイントフレイクの認定規準は，(1)打面と背面の為す角度，(2)背面の剥離痕，(3)側面から見た時の剥片全体の反り，(4)打瘤のでき方，(5)打面の形状に置いた。(1)は，尖頭器の計測値で周縁調整角度として示したものが参考になる。これに調整途上にある事を考慮し40～80°の鋭角であることを規準にした。(2)では，打面に近い剥離痕は腹面と同じ方向，遠いも

のは逆方向から剥離されていることが基本となる。逆方向からの剥離痕は持たないものも多い。(3)は，尖頭器の表面に沿ってやや内湾(腹面側に反る)するのが普通である。(4)は，木や骨角のソフトハンマーを打ちおろして調整剥離を施したようで，多くの打瘤は打面に三日月状に貼りついて発達が悪い。また打点が特定できずに拡散し，打面と打瘤の間はわずかに窪んでいる。(5)は，平坦・複剥離面・自然面と多様である。他の要素との関係が特に重要である。破損している例も多い。

大きさの分類では，細長いものを側縁から調整する工程を追跡するということで，ポイントフレイクの長さを規準にした。全体を概観して，ⓐ60～41mmⓑ40～25mmⓒ20±4 mmⓓ15mm以下の4段階に分けた。一部この範疇からはずれるものもある。

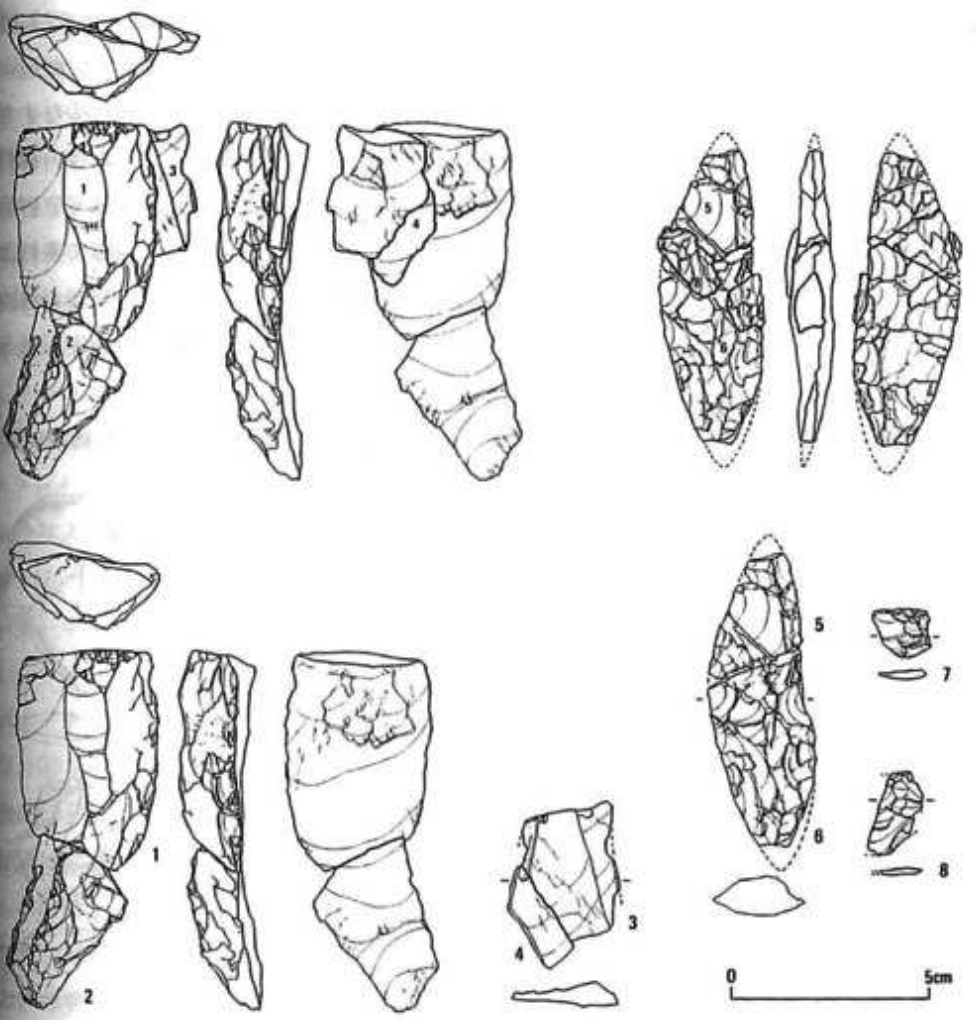
＜P－1 Fⓓ＞　9点で構成される。このうち8点はポイントフレイクである。1点のやや大型欠損品を除き，いずれも概ね1～2cmの長さである。長さの分類結果は，ⓒ6点，ⓓ1点である。これらのポイントフレイクの大きさから考えてそれらが取られた尖頭器は，その段階で幅3～4cmはあったと推定できる。打面を残す3点は，いずれも調整打面様になっており，尖頭器が部分的にしても両面に加工が施されたものであったことがわかる。さらにこのうちの1点は，背面に尖頭器の素材の打面と打瘤を留めており，平坦な打面の剥片を素材として尖頭器を作り出そうとした一連の個体であることを示している。

本個体は，たとえ素材は搬入品であったとしても，可能性として指摘し得る両面・半両面・部分加工の尖頭器を製作した結果全体を示すものとしてはあまりに資料不足である。すでに使用過程にある尖頭器の部分修正的な工程を想定した方が妥当なようである。あるいは，一気に製品を完成させるのではなく，極めて気まぐれに加工を断続させるような局面があって，その一部のみが残された可能性も全く否定することはできない。

＜P－2 F①＞　10点で構成される。このうち9点がポイントフレイクと思われるもので，大きさ，背面の状況ともP－1 Fⓓに似る。大きさの分類はⓒ4点，ⓓ4点である。打面は3点で観察できるが，2点が平坦，1点が調整打面になっている。調整打面の1点は背面の加工がまだほとんど行われておらず自然面を残しており，このポイントフレイクが尖頭器の素材の背面側で剥がされていることがわかる。このことから，ポイントフレイクの打面の調整痕は素材腹面側の加工であり，背面側に先行して調整されたことがわかる。

本個体も，全体の解釈はP－1 Fⓓと同じである。

＜P－2 F⑥＞(第85図)　35点で構成される。相互に接合はしないが，この中には2片が接合して1点になる両面加工尖頭器(5・6)と，1点の削器(1)が含まれている。削器は下半部の折損した剥片を利用しているが，折れた下半部も発見されており，接合によって旧状を知ることができる。これによると，本来の素材は長さ9cm，幅4.5cm，厚さ1.5cm位の大型剥片である。一方尖頭器もわずかに欠けた先，基端を推定復原すると，長さ8cm，幅2.5cm，厚さ1cm位で，本遺跡では最大例の一つである。尖頭器も，同一個体中にあってこれだけが大型両面体等の異なる素材から作られたと考えるよりは，削器同様あるいはさらに大型の剥片を



第85図 個体別資料P－2 F⑥

素材としたと考えた方が蓋然性が高い。

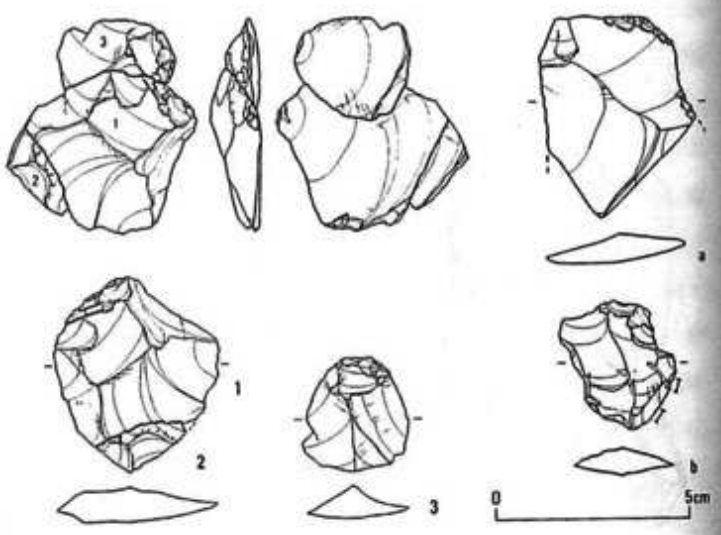
次にポイントフレイク23点を見てみる。2点が尖頭器と接合(7・8)しており，最終段階の調整剥片であることが明瞭である。長さは2cm位と1cm位で，長い方の先端には腹面とは逆方向の剥離痕を残す。打面は一方は複剥離，他方は平坦である。

この2点から，一つにはポイントフレイクの打面が小さい時には，特に平坦打面についてその極限された範囲の観察を拡大解釈する事が難しい事がわかった。打面側が本当に未調整か否かは，ポイントフレイク全体での複剥離打面を持つものとの比率から判断する必要がある。両面加工が明らかな本資料中の尖頭器に伴うポイントフレイク全体でも，複剥離面打面を持つもの7点に対し，平坦打面が4点もあるのである。二つには，細身の尖頭器の最終調整剥片でも予想外に長いポイントフレイクを取っていることがわかった。当然これは計測方法の不一致[4]とも関わるが，完成した尖頭器が2.5cmの幅であるのに対し，長いポイントフレイクは2cm近くもある。

大きさの分類はⓑ3点，ⓒ11点，ⓓ7点になる。ⓑのポイントフレイクは幅2.5cmの尖頭器の仕上げの調整としては大きく，より前段階に属すると考えられる。しかしながら，仮にこれを仕上げの直前の段階から残っていると考えようとすると，あまりにも資料点数が少なすぎるように思える。ある程度の加工後すでに使用中のものを搬入し，再度修正加工した位の資料数であろうか。しかしこの場合にも，あまりにも接合点数が少ないという問題点は残っている。

さて，非接合のポイントフレイクにはやや大型のものを含むが，その中にも明瞭に素材面を示す部分はない。この事は，先に指摘した素材の大きさを補足するものである。削器も含め，本個体の基礎となる剥片剥離技術はよほど大きな，少なくとも長さ10cmを越える剥片を得ることを目的としていたようである。

＜P－0H①＞（第86図）　66点で構成される。1組のⅡ種接合資料があり，石器数は65点になる。全てポイントフレイクと考えて大過ない。このうち，ほぼ原型を復原し得る35点について長さを分類するとⓐ3点，ⓑ3点，ⓒ11点，ⓓ18点となる。数の上ではⓑとⓒの間に一つの境界が引かれるようである。技術形態的にはどうであろうか。打面は剥片の長さが伸びるに従って，大きいものが若干出現してくるが，基本的には複剥離打面で，打面直下の打瘤も眼らみが弱く散っており，相互によく似ている。ところが背面の剥離痕を見ると，ⓐとⓑ～ⓓの間に差が認められるようである。すなわち，ⓑ～ⓓでは通常のポイントフレイクがそうであるように，打面近くの剥離痕はほとんど腹面と同じ方向から剥がされ，先端近くでは多方向の剥離痕が認められる（1～3）。これに対し，ⓐでは打面近くの剥離痕も含めて多方向から剥がされている(a)。ⓐの資料数が少ないという難はあるが，この現象を解釈すると，ⓐの剥片を取る前にはまだ尖頭器を製作するために全体を両側縁から縦長に整形する，という段階には至っておらず，比較的不定形な状態にあったのではなかろうか。ⓐの剥片の背面のみは，素材の剥離面を留めていると考えられるのである。



第86図　個体別資料P－0H①

＜P－0H②＞　46点で構成されている。尖頭器の先端部破片を1点含むが，他は全てポイントフレイクと考えてよい。P－0H①と同様にこれらを区分するとⓑ6点，ⓒ2点，ⓓ9点ということになる。ⓐの大型剥片は含んでいない。形態的特徴は，P－0H①と同じである。

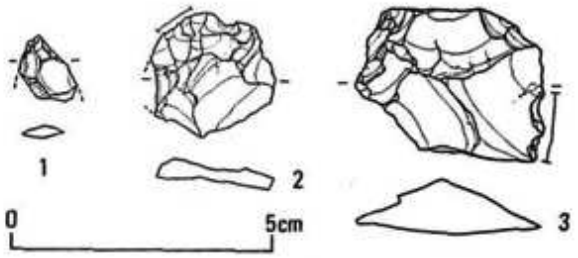
この個体別資料は，構成要素からするとある程度尖頭器としての形態を備えた状態で遺跡内

に持ち込まれ，最終の仕上げまでの作業内容が残されていると解される。とは言え，ⓑ・ⓒ・ⓓの量比がP－0 H①とは大きく異なっており，具体的手順，加工程度に違いがあると思われる。

＜P－0 H⑤＞ 12点で構成される。全てポイントフレイクと考えられる。残る1点は通常の剥離工程の中で理解し得る資料は含まれない。長さはⓒ2点，ⓓ8点を含んでいる。形態的にはP－0 H①と同じである。

本個体は，P－0 H②よりさらに加工程度の進行した状態で遺跡に持ち込まれたと考えられ，まさに尖頭器の最終仕上げ工程のみを残していると言える。

＜P－0 H⑥＞(第87図) 特徴の強い石材である。24点で構成される。尖頭器の先端片(1)とUF(3)を1点ずつ含む。1は，欠損面の観察から，製作途中に生じた一種のポイントフレイクと考えられるものである。3は抉り入り削器の範疇に入れてもいいような，しっかりとした剥離面を持っている。ポイントフレイクを素材とする。

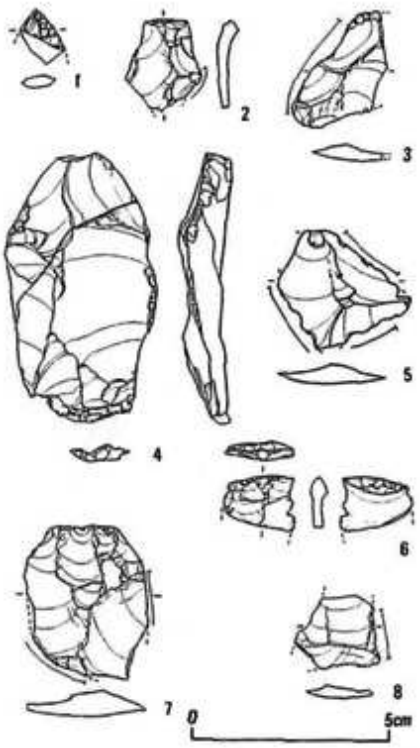


第87図 個体別資料P－0 H⑥

ポイントフレイクの大きさ区分はⓑ3点，ⓒ5点，ⓓ9点となる。形態的特徴は，P－0 H①以下の個体と共通する。

評価は，P－0 H②と同じで，ある程度加工されたものが持ち込まれ，遺跡で完成させられたと考えられる。資料内容はP－0 H②より充実しており，上の評価をより忠実に物語っていると言える。

＜P－0 H⑧＞(第88図) 113点で構成される。Ⅱ種接合資料が1組含まれるため石器数は112点である。尖頭器先端破片(1)と未成品(4)を各1点含む以外は全てポイントフレイクと考えられる。4は，大型の剥片を利用しているが，形態に特徴がある。長さは6.5cmほどもあり，打面の様相はポイントフレイクに似るが，先端部にはかつての石核の下底面と思われる平坦面を残している。すなわち，この素材がポイントフレイクであるとすれば，両側縁にまたがる横断するような剥片であることになる。しかしそう考えるには側面から見た時の剥片のカーブが弱過ぎるとか，打面周辺の調整の入念さに較べ反対側縁に全く細調整がないなどの問題が残るよう



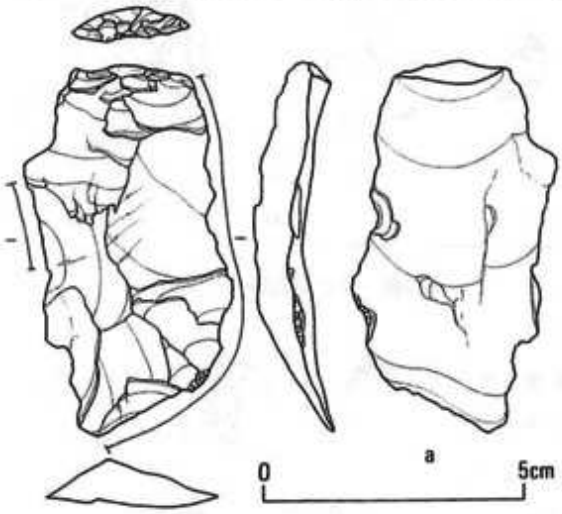
第88図 個体別資料P－0 H⑧

に考えられる。また，P－0H①で尖頭器製作の初期工程に当ると考えられた大型の剥片群と比較すると，背面の様相には大きな差があるように思われる。

ポイントフレイクの長さ分類では，丁度ⓐとⓑの間の長さ4cm位のものが4点，ⓑ11点，ⓒ21点，ⓓ27点である。充実した内容を示している。形態は他と共通する。

遺跡に持ち込まれた段階の本個体は，長さ4cm位のポイントフレイクが示しており，ある程度まで調整された大型の両面体であったと考えられる。仮に4がポイントフレイクの一部を構成するものであったとしても，他の資料との間に長さの上で大きな隔たりがあり，本遺跡内で調整された一連の工程の中では捉えられないと考えられる。他の遺跡で，よほど大きな素材を調整する過程で生じたものを携えてきたと判断される。

＜P－1Ⅰ①＞(第89図)　29点で構成される。図の大型剥片以外はポイントフレイクで，長さはⓑ1点，ⓒ5点，ⓓ3点となる。破損品が多いため，全体の長さを推定し得るものは少なかった。やや不釣合いな量比を示している。本個体を含むブロックは完掘されており，撹乱もなく石質も特徴的であることを考慮すると，ⓓの資料がやや少ないように思う。尖頭器を完全に仕上げないで，荒い調整を行っただけで遺跡外に持ち出した可能性もある。形態的には他と共通する。



第89図　個体別資料P－1Ⅰ①

P－0H⑧同様，本個体にも1点だけ長さ7cmと大きな剥片を含んでいる(第89図)。この剥片はまさにポイントフレイクの相似形をしており，同類のものと考えてもよいであろう。他のポイントフレイクとの量的な不連続は，P－0H⑧と同様な解釈ができると考えられる。本資料もUFであるが抉り入り削器的な刃部を持っており，調整剥片として剥がされた後も携帯・使用されたものであろう。

＜P－1Ⅰ⑤＞　47点で構成される。全てポイントフレイクである。長さはⓑ3点，ⓒ15点，ⓓ21点である。仕上げ工程の資料としては最も充実している個体の一つである。形態は他と同じで，両面加工尖頭器の製作を物語っている。

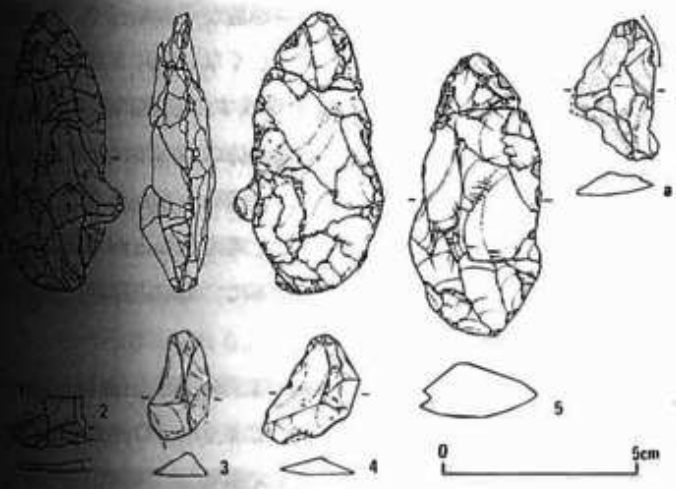
本個体も，かなりの程度まで加工された半製品として遺跡に持ち込まれ，完成されている。

＜P－1Ⅰ⑥＞　非常に特徴のある個体である。21点で構成される。大型尖頭器の胴部破片を1点含んでいる(第61図13)。この破片から推定すると，尖頭器の最大幅は3.5cm位あったようである。他の20点は全てポイントフレイクである。長さ分類では，ⓒ5点，ⓓ7点となる。形態的には他と同じである。

本個体では，尖頭器とその調整剥片の両方が残されているため，相互の大きさのバランスを

ることができる。まず，ポイントフレイクの長さ組成から判断すると，「ほぼ完成された尖頭器が遺跡に持ち込まれ，わずかに調整が加えられた」という総合評価になろうかと考える。この時の尖頭器の大きさは，大きくても幅3cm，長さ8cm位までのものを念頭において，ところが，個体中に含まれる尖頭器片から全体形を復原すると，幅3.5cm，長さ10cmは大きいと思われる大型品である。また破損面を観察すると，製作途中に加わったとは考え難い強力からの力で破損しており，どうも完成品としての扱いを受ける中での折損のようである。これが事実であるとすれば，一つには本個体を残した人々は非常に大型の尖頭器を使用していたという事実と，二つには完成品がある程度まで大型化しても，仕上げ工程の加工の細かさの差を実資料から判別することは難しいという二つの問題点が生じることになる。全体を検討した後に再度述べる。

<P－11⑩>（第90図） 23点で構成される。**II種接合の尖頭器1点（5）と剥片1点**（1・2）を含むため，石器数は21点になる。3点のポイントフレイクが尖頭器に接合している。ポイントフレイクの長さ分類は，ⓐ**1点**，ⓑ**4点**，ⓒ**3点**，ⓓ3点である。**全種類を持つ**が，量比が他の個体とは著しく異なる。他の尖頭器と比較する時，大型である点，加工の荒さ，節理面で破損した先端部のII種接合など



第90図 個体別資料P－11⑩

を考慮すると，加工途中での破損による放棄も十分考えられる。本個体では尖頭器が7.2×3cmの大きさであるのに対し，相応の大きさのポイントフレイクがそろっているといえる。ポイントフレイクの形態は他と変わらない。ⓐのみは，やはり背面の様相が他のポイントフレイクと異なっている。

本個体も，遺跡に持ち込まれた時にはやはり個体中の尖頭器よりも一回り大きな両面体であったと考えられる。しかし，剥片素材の尖頭器が往々にしてそうであるように，この尖頭器も横断面で見ると眼らみに片寄りが認められ，あたかも片面がかつての主剥離面であったかの観を呈する。大型の剥片が両面体に加工され携行されていた可能性も考えておく必要があろう。

接合資料から判断すると，たとえ発掘時のサンプリングエラーを考慮に入れたとしても，残されるべきポイントフレイクの欠落が目立っているように思われる。原因の一つとして，本個体が当所でわずかに調整された後持ち出され，その先でさらに細調整の後再び当所に持ってきたという動きを考えることができる。また，他の場所で荒い調整が加えられ，そこで生

じたポイントフレイクの一部が携帯され，当所に遺棄されたと考えることもできる。残された状況からは，いずれとも決し難い。

＜P－1 J①＞　88点で構成される。3組6点のⅡ種接合があり石器数は85点になる。5点の，ポイントフレイクとするには躊躇する資料を含む。またポイントフレイクを素材としたRFが1点含まれる(第74図3)。80点のポイントフレイクは，長さⓐ1点，ⓑ5点，ⓒ13点，ⓓ26点より成っている。尖頭器製作工程を示す資料としては，質・量ともに最も充実しているものの一つである。

本資料では，ⓑは当然のことながらⓐの1点でもすでにポイントフレイクとしての特性を具えている。また，いずれの背面にも，本個体が剥片に由来するものであるという積極的な根拠はない。ⓐの資料が勁少であるために，ⓑを基準にするならば，幅4～5cmの両面体として遺跡に持ち込まれた個体と考えることができる。ⓐはわずか1点である所から，たまたま素材の長軸に近い方向に剥いだとか，偶発的なものと理解したい。資料総数から判断して，本遺跡で尖頭器が完成されたと考えられる。先述したポイントフレイクらしくない剥片5点は，いずれも打角が90°に近く，4点の背面は礫皮に被れている。個体を構成する圧倒的多数のポイントフレイクとこれらの不整合を考えると，遺跡に持ち込まれた両面体の完成度にその由来を求めざるを得ない。その両面体とは，たとえば片面はすでに整っているにもかかわらず，他方には自然面や未調整の部分を残すような，不完全な調整品であったと考えることができる。

以上，尖頭器の製作を物語る個体として13資料を例示した。以下に，素材と技術的特徴についてまとめをしておきたい。

素材の特徴は，G列を境に南と北では異なっており，この違いは，例示した個体数にも明瞭に反映している。すなわち，かつて尖頭器の分布量・形態で触れたように，G列以北では剥片素材で周辺・部分加工の尖頭器が多く発見されている。これらの尖頭器は，素材から製品に至るまでの加工程度すなわち変形度が小さいために，ポイントフレイクの生産量が少なく，復原される技術的特徴を必ずしも実資料で確実に裏付けることが難しい。部分加工や周辺加工尖頭器のポイントフレイクは，小さい上に量的にも少ないために発掘時の回収が難しいと考えられるのである。G列以北ではこうした資料が多いために，具体的に尖頭器の製作を知ることができる個体として例示できるものが少なく，わずかに3個体を示したに留まっている。しかも，これら3個体の場合も，数少ない両面加工尖頭器の製作を示している可能性が強いのである。

G列以北の明らかな尖頭器の素材としての剥片は，むしろ1.剥片剥離技術を示す個体別資料の中で示したP－1 F①や2 F④，1 G①で知ることができる。P－1 F②，2 F④の場合は整った長さ5～8cm位の縦長剥片を利用している。石核や他の剥片から考えられるものに較べると，大型で優美な素材を尖頭器に使用していると言えよう。一方1 G①では，大型ではあるが形態はあまり整わない剥片を，折断することで幅を狭くして尖頭器に使用している。剥片剥離技術も，基本的にはこうした尖頭器素材の需要と表裏一体を成している。すなわち，本質的には5cm以上の縦長の剥片を希求しつつも，素材の変化に対応できるだけの調整技術の獲得に

よって，不定形剥片までをも含めた剥片剥離技術を受容していると言える。

H～J列の資料は，これらと全く様相を異にしている。両面加工尖頭器以外がわずかに2例であったことからも想像できるように，G列以北とは逆に尖頭器製作に関連しない遺物はほとんどない。しかも，残されたポイントフレイク中で素材の形態が大型剥片であったことを推定し得るような例もほとんどない。この点を，全体を通して第25表の「ポイントフレイク組成」から見てみよう。ⓐ～ⓓに長さを分類した結果を見ると，ⓐからⓓまで量的に安定して持つ個体はわずかに0H①，1I⑩，1J①の3例にすぎない。他はⓑあるいはⓒ以下の小型品のみで構成されている。また，表の「他」の項目に入っているのは，ⓐ以上の大型品であるが，これも3個体にしか例が認められず，しかもそれらは本文中でも示したようにⓐ段階のポイントフレイクとの連続性をスムーズに追跡できないものである。これら，大型のポイントフレイクを含む個体でも，剥片背面の剥離痕は比較的小さな剥離面で構成されており，素材が大型剥片であったことを示すような大きな剥離痕はない。

このようなポイントフレイクの観察結果から，H～J列ではわずかに剥片素材の尖頭器を含むものの，大多数はすでに両面体としての概形が作られたものが遺跡内に持ち込まれているものと考えられる。ⓑ・ⓒ階級より小さいポイントフレイクが多い点を考慮すると，これらの両面体は，幅3～4cm位にまで加工されたものから，ほぼ完成されたものであったと考えられる。遺跡内では，需要に応じて逐次それらの両面体を完成させるとか，使用中の製品の部分的な調整が行われたと考えられる。さらに，このことはある程度調整された両面体が準備されるような遺跡がどこかにあり，通常はそのような両面体が携行されていた可能性をも示している。また，ⓐ階級やそれ以上の大型のポイントフレイクが稀で，そうした多くがUFやRFとして発見される事実は，尖頭器製作の初期工程そのものが，他の石器素材を供給する役割をも担っていた可能性が高い。尖頭器製作の初期工程と中・末期工程で，特別に指摘し得るような技術的差異は発見できなかったが，荒作り→携行・仕上げという意味で，少なくとも二つの明瞭に意識された段階差があったことが窺われるのである。（山下）

第4節 石器の分布

1. ブロックの設定

尖頭器を主体とし，ナイフ形石器をほとんど伴わない石器群は，ナイフ形石器群が集中的に分布する領域よりも西側に南北に連なるように分布している（別添第3・10図）。他と同様にブロックの設定を行い，分布の状況を説明したい（第21表）。

第1ブロック（P－1）

2F6・7・11・12区に分布する。長軸4.5m，短軸2.8m，面積9㎡ほどの楕円形を呈するが，

第21表　尖頭器文化所属石器のブロック別組成表

器種 / ブロック	ナイフ形石器	尖頭器	スイクバレー	彫器	RF	敲石	台石	UF	剥片	砕片	石核	計
1	0	1	0	0	0	0	0	7	5	0	1	14
2	0	9	0	0	4	0	0	4	52	20	0	89
3	0	2	0	0	0	1	0	3	38	7	0	51
4a	2	24	0	0	2	3	2	63	373	229	9	707
4b	1	5	1	0	3	3	0	7	45	16	1	82
I周	0	4	0	0	1	0	0	4	10	3	1	23
散a	0	2	3	0	1	0	0	6	12	0	1	25
5a	0	6	0	0	0	0	0	20	191	66	0	283
5b	0	3	1	0	0	2	0	18	277	109	0	410
6	0	1	0	0	0	0	0	0	9	1	1	12
II周	0	1	0	0	0	0	0	3	4	1	1	10
7	0	0	0	0	0	0	0	5	86	144	0	235
8	0	1	0	0	0	0	0	2	8	1	0	12
9	0	0	0	0	0	0	0	0	4	2	0	6
散b	0	0	0	0	0	0	0	6	11	0	0	17
10	0	0	0	1	0	0	0	6	5	0	0	12
11	0	4	1	0	0	0	0	23	247	181	0	456
12	0	0	0	0	1	0	0	3	121	131	0	256
III周	0	0	0	0	3	0	0	2	2	0	0	7
散c	0	0	0	0	0	0	0	1	3	0	0	4
	3	63	6	1	15	9	2	183	1503	911	15	2711

石器群の分布は極めて散漫で，ブロックの中央部付近は空白になっている。尖頭器1点，UF7点，剥片5点，石核1点の計14点で構成されている。砕片が全く含まれず，尖頭器の製作作業の痕跡をもたないブロックである。トゥールの出現率が57.15%と極めて高い値を示す。

第2ブロック（P－2）

2F11・16区に分布する。径3.5m，面積10㎡ほどの円形を呈し，石器群がブロック全面にわたって万遍なく分布している。器種は尖頭器9点，RF4点，UF4点，剥片52点，砕片20点の計89点で構成されている。

第3ブロック（P－3）

2F16・17・22区に分布する。径4.2～4.5m，面積12㎡ほどの円形を呈しており，分布規模の面では第2ブロックに類似するが石器総数が少ない。器種組成は尖頭器2点，UF3点，敲石類1点，剥片38点，砕片7点の計51点で構成される。

第4ブロック（P－4）

1F17・18・19・20・21・22・23・24・25，2F16・21，1G2・3・4・5・8，2G1区に多量の石器群が分布する。ただし，石器群の内容は尖頭器石器群と細石刃石器群の両者が見られ，従来の編年観では二時期の異なった石器群が混在する姿と認識された。そこで，第III章第5節で述べた方法により，両石器群の分離を試みた。

また，本ブロックをさらに詳細に検討すると，大きく東・西二ケ所に集中部が分かれる可能性が考えられた。西側を第4a，東側を第4bブロックとして基本単位を設定した。１Ｆ16，２Ｆ16・21，２Ｇ１区内の資料でブロックに含まれなかったものについては，尖頭器石器群の他のブロックとの関連も考慮して，第Ｉブロック群周辺部として扱った。

第4aブロック(Ｐ−4a)は１Ｆ17・18・19・20・23・24・25，１Ｇ３・４・５・８区に分布する。長軸26m，短軸15m程の楕円形を呈し面積は80㎡に達する。尖頭器24点，ナイフ形石器２点，ＲＦ２点，ＵＦ63点，敲石３点，台石２点，剥片373点，砕片229点，石核９点の計707点で構成される。石器群は全体的にかなり密に分布するが，それでも詳細に見れば，１Ｆ24区東北部から１Ｆ25区西北部及び１Ｇ３区東北部から１Ｇ４区西北部にかけての２ケ所に，石器群が特に集中する核がある。さらに２ブロックに細分し得る可能性を含むが，ブロックを設定する段階で不確定要素をもつため，一括して取り扱うことにした。

第4bブロック(Ｐ−4b)は１Ｆ25，２Ｆ21，１Ｇ５，２Ｇ１区に分布する。径13m面積16㎡ほどのほぼ円形を呈し，尖頭器５点，ナイフ形石器１点，スクレイパー１点，ＲＦ３点，ＵＦ７点，敲石類３点，剥片45点，砕片16点，石核１点の計82点で構成される。石器数はあまり多くはないが，２Ｆ21区西南部に分布上の核をもつ。

第５ブロック（Ｐ−５）

０Ｈ４・５・９・10・14・15・20・25，１Ｈ１・６・11・16・21区に分布する。剥片，砕片が非常に多くかなり密集した分布状況だが，詳しく見ると南北２ケ所に分布上の核をもつため，２ブロックに細分した。

第5aブロック(Ｐ−5a)は０Ｈ４・５・９・10，１Ｈ１・６・11区に分布する。長軸8.9m，短軸6.3m，面積36㎡ほどのほぼ円形を呈し，ブロック全面に石器群が集中的に分布する。０Ｈ10区中央部から東南部にかけて特に密に分布する核がある。器種組成は尖頭器６点，ＵＦ20点，剥片191点，砕片66点の計283点で構成されている。トゥールの出現率が低いことや密集型の分布を示すことなどは，尖頭器石器群における石器製作ブロックの典型的な例である。

第5bブロック(Ｐ−5b)は０Ｈ14・15・19・20・25，１Ｈ11・16・21区に分布する。径８m，面積59㎡ほどの円形を呈し，分布範囲，石器総数の面で第5aブロックを凌ぐ。ただ，分布の中心は０Ｈ15，１Ｈ11区で，ブロック南半では分布密度が低くなる。器種組成は尖頭器３点，スクレイパー１点，ＵＦ18点，敲石２点，剥片277点，砕片109点の計410点で構成されている。尖頭器石器群の中では極めて少ない敲石が２点まとまっているが，第5aブロックと同様トゥールの組合せは単純で，出現率も低い。

第６ブロック（Ｐ−６）

１Ｈ２・３・７区に分布する。長軸3.8m，短軸1.8m，面積３㎡ほどの楕円形を呈する小型のブロックで，石器総数も少なく散漫な分布状況を示す。器種組成は尖頭器１点，剥片９点，砕片１点，石核１点の計12点で構成されている。

第7ブロック（P－7）

1H23・24・25区に分布する。長軸4.0m，短軸2.0m，面積6㎡ほどの楕円形を呈し分布の広がりは第6ブロックとほぼ同じであるが，本ブロックでは剥片，砕片が極めて密集して分布している。特に1H24区東南部は分布上の核があり，石器群が集中している。しかし，本ブロックは北側半分近くが撹乱によって削られており，必ずしも本来の状態は留めていない事に留意する必要がある。器種組成はUF5点，剥片86点，砕片144点の計235点で構成されている。剥片，砕片は尖頭器を製作する際に生じる調整剥片類であり，本ブロックで数点の尖頭器が製作されたことを物語っている。

第8ブロック（P－8）

1I7・8区に分布する。長軸5.2m，短軸3.2m，面積9㎡ほどの楕円形を呈するが，ブロック中央部は空白となっている。器種組成は尖頭器1点，UF2点，剥片8点，砕片1点の計12点で構成されている。

第9ブロック（P－9）

1I9・14区に分布する。径2.0m，面積2㎡ほどの範囲に剥片4点，砕片2点の計6点が小さくまとまっている。第8ブロックと共に，周囲には極めて散漫に石器群が分布しており，ブロックとして小さく空間的に区切るよりは，むしろ1I区北半の散漫分布域として巨視的に見た方が意味があるのかも知れない。

第10ブロック（P－10）

1I21・22，1J1区に分布する。径5.5m，面積16㎡ほどのほぼ円形を呈するが，ブロック中央部は空白となり，その周囲に彫器1点，UF6点，剥片5点の計12点が散漫に分布する。

第11ブロック（P－11）

1I18・19・22・23・24，1J3区に分布する。長軸8.3m，短軸7.0m，面積34㎡ほどのほぼ円形を呈し，ブロック中央部には石器が密集している。器種組成は尖頭器4点，スクレイパー1点，UF23点，剥片247点，砕片181点の計456点で構成される。第4aブロックとともに尖頭器石器群の中では石器総数の最も多いブロックである。

第12ブロック（P－12）

1J2・3・7・8区に分布する。長軸7.9m，短軸5.0m，面積31㎡ほどの楕円形を呈し，分布の形状は隣接する第11ブロックに類似する。器種組成はRF1点，UF3点，剥片121点，砕片131点の計256点で構成される。尖頭器を製作したブロックであることは，調整剥片類が多量に存在することにより明白であるが，第7ブロックと同様，製品が全く含まれていない。

以上，ブロックの分布状況を概観してきたが，各ブロックは一定の範囲に多量の石器群が密集して分布するものが多く，ナイフ形石器群の項で述べるA_2類ブロック（第Ⅵ章第4節）が中心的な存在である。これにB・C類が加わっており，A_1類は全く含まれていない。第2b層のナイフ形石器群では，尖頭器がまとまって検出されたK2－5ブロックだけがA_2類で，他の中心的なブロックはA_1類である。中心的なブロックの形状の違いが両石器群の分布上の大

きな違いといえる。ただ，これは場の機能の違いというよりは，石器製作技術の違いが反映されているものと思われる。

ブロック外の石器群

ナイフ形石器群と同様，石器にはブロックの周辺部に位置するものと，ブロックとは一定の隔りをもって分布するものとがある。

ブロック周辺部の石器群は，第1～7・11・12ブロックの周辺に分布する。石器組成は尖頭器5点，ＲＦ4点，ＵＦ9点，剥片16点，砕片4点，石核2点の計40点で構成される。ブロック群の中に取り込んで詳述したい。

散漫分布域の中で，小ブロックに含まれていない石器群は，尖頭器2点，スクレイパー3点，ＲＦ1点，ＵＦ13点，剥片26点，石核1点の計46点である。詳細な分布状況はブロック群と対応させた形で後述したい。

ブロック群と散漫分布域

本石器群もナイフ形石器群のように複数ずつのブロックが一定のまとまりをもち，ブロック群として認識できる。ただ，同一ブロック群内においてもブロック相互の境界が明瞭である点はナイフ形石器群のブロック群とは異なっている。

第Ⅰブロック群は第1・2・3・4a・4bブロック及びその周辺部によって構成されている。ブロックの類型はA_2類1ケ所，Ｂ類2ケ所，Ｃ類2ケ所である(第Ⅵ章第4節参照)。長軸27m，短軸18mほどのメガネ状の広がりをもつ。石器組成は尖頭器45点，ナイフ形石器3点，スクレイパー1点，ＲＦ10点，ＵＦ88点，敲石類9点，剥片523点，砕片275点，石核12点の計966点である。

第Ⅱブロック群は第5a・5b・6ブロック及びその周辺部により構成されている。A_2類2ケ所とＣ類1ケ所である。長軸19m，短軸15mほどの楕円形の広がりをもつ。石器組成は尖頭器11点，スクレイパー1点，ＵＦ41点，敲石2点，剥片481点，砕片177点，石核2点の計715点である。

第Ⅲブロック群は第10・11・12ブロック及びその周辺部により構成されている。ブロックの類型はA_2類2ケ所とＣ類1ケ所である。長軸18m，短軸11mほどの楕円形の広がりをもつ。石器組成は尖頭器4点，彫器1点，スクレイパー1点，ＲＦ4点，ＵＦ34点，剥片375点，砕片312点の計731点である。各ブロック群とも分布範囲や石器総数，ブロック数に大きな相違はない。

散漫分布域はブロック群とブロック群の間を埋めるようにして分布している。**散漫分布域a**はＯＦ区南端，ＯＧ区東端部，ＩＧ区に分布する。長軸28m，短軸19mほどの楕円形の空間に尖頭器2点，スクレイパー3点，ＲＦ1点，ＵＦ6点，剥片12点，石核1点の計25点がまとまりなく分布する。**散漫分布域b**はＩＨ区南東部，ＯＩ，ＩＩ区北半部に分布する。径17mほどのほぼ円形を呈する空間に第7・8・9ブロックを含んでいる。ブロック群としてもよいのだが，分布範囲の小さなブロックがあまり固まらずに分布し，また第8・9ブロックはＣ類で極

めて散漫なため，全体的にまばらな印象を受ける。ブロック外の石器群についても，あまりブロックに近くはなく，周辺部とは言えない状況である。したがって，一応散漫分布域として区分しておく。石器組成は尖頭器1点，ＵＦ13点，剥片109点，砕片147点の計270点で散漫分布域としては剥片，砕片の数が極めて多いが，大半は第7ブロックに属している。散漫分布域cは1Ｊ区南東部と2Ｊ区北西部で，ＵＦ1点，剥片3点が分布する。

各散漫分布域はブロック群とは異なり，分布範囲，石器総数，各器種の内容などがまちまちである。（島立）

2.　器種別分布

1）　尖頭器

尖頭器はブロック内に56点，ブロック周辺部に5点，散漫分布域に2点分布する（別添第11図）。まず尖頭器を調整加工のあり方から両面加工，半両面加工，片面加工，周辺加工，部分加工，未成品に分類し，ブロックあるいはブロック群を単位として，その分布状況を見てみよう。全体では両面加工18点(28.6%)，半両面加工8点(12.7%)，片面加工3点(4.8%)，周辺加工8点(12.7%)，部分加工14点(22.2%)，未成品8点(12.7%)，不明4点(6.3%)である。両面加工が最も多いが半両面加工，周辺加工，部分加工も一定量含まれており，特に中心的な形態は認められない。バラエティに富んだ尖頭器群と言える。しかしブロックを単位として見ると，実情は異なる。5種類の加工形態の全てを組成としてもつのは第4aブロック1ケ所である。これに両面加工，半両面加工，片面加工を持つ第2ブロック，半両面加工，周辺加工，部分加工を持つ第4bブロック，両面加工及び部分加工を持つ第3・5bブロックを除くと，残りのブロックは1種類の加工形態しか持っていないのである。第5a・8・11ブロックは両面加工，第6ブロックは半両面加工，第1ブロックは部分加工だけを保有している。このようにブロック毎に見ると，尖頭器の加工形態には偏りのあることがわかる。ただ，各ブロックの尖頭器の保有量はバラツキがあるため，ブロック群としてまとめた形で検討する。

第Ⅰブロック群は両面加工6点(13.3%)，半両面加工7点(15.6%)，片面加工2点(4.4%)，周辺加工8点(17.8%)，部分加工13点(28.9%)，未成品を含むその他9点(20.0%)の計45点で構成されている。部分加工が最も多いが群を抜いているわけではなく，各種の加工形態が一定量ずつ含まれている。加工形態にバラエティのあることが大きな特徴である。第Ⅱブロック群は両面加工6点(54.5%)，半両面加工1点(9.1%)，部分加工1点(9.1%)，その他3点(27.3%)の計11点で構成されている。両面加工の割合が高く，両面加工の未成品を加えれば，この傾向はより一層明瞭となる。第Ⅲブロック群では4点の尖頭器全てが両面加工である。以上3ケ所のブロック群を見ると，第Ⅰブロック群は加工形態のあり方がバラエティに富んでいるが，第Ⅱ・Ⅲブロック群は両面加工を基本形態としており，加工形態は単純なものとなっていると言う違いが認められる。加工形態の組成の差がいかなる現象を反映しているのかは類例が乏しく明らかではないが，恐らく若干の時間差を持つか，あるいはほぼ同時期ではあっ

でも異なった集団によって製作されたものではないかと考えられる。

次に尖頭器の破損状況と分布の関係を検討したいと思う。破損形態の分類方法はナイフ形石器のそれに準じて行うものとする。全体では破損形態A類5点(7.9%)，破損形態B類7点(11.1%)，破損形態C類49点(77.8%)，破損形態D類2点(3.2%)で，破損度合の大きいC類が圧倒的に多い。ブロックの類型毎に見ると，A類ブロックは破損形態A類2点(5.4%)，B類5点(13.5%)，C類29点(78.4%)，D類1点(2.7%)の計37点で構成されている。破損度合の大きなC類が多く，完形あるいは完形に近いものはわずかである。B類ブロックは破損形態A類1点(6.3%)，B類2点(12.5%)，C類12点(75.0%)D類1点(6.3%)の計16点で構成される。A類ブロック同様，破損度合の大きいものが中心で，完形，完形に準ずるものの割合は少ない。C類ブロックは破損形態A類1点(33.3%)，C類2点(66.7%)の計3点で構成される。資料数が少ないため不明瞭だが，完形品の占める割合はA・B類ブロックより高い。ブロック周辺部及び散漫分布域では破損形態A類1点(14.3%)，C類6点(85.7%)である。

尖頭器は基本的に遺跡外で使用された器種であったと思われる。したがって遺跡内に残された破損品の多くは使用による折損ではなく，製作時における偶発的なものであろう。事実数点の尖頭器はブロック内でII種接合し，完形に近い状態になる。また個体別資料を検討してみると，破損品の分布するブロックが製作された場所と一致することがわかる。そこで，破損品及び同一個体の砕片類の多いA類ブロックでは尖頭器を頻繁に製作し，その結果，破損品の占める割合が高いものと思われる。ナイフ形石器の破損品がB類ブロックに偏って多いこととは対照的である。ただ，尖頭器の製作をあまり行ってはいないB類ブロックや全く行っていないC類ブロックあるいはブロック外の破損品については，あるいはナイフ形石器と同様，遺跡内における使用によって破損，遺棄したのかも知れない。

2) ナイフ形石器，スクレイパー，彫器，RF

ナイフ形石器は第4aブロックに2点，第4bブロックに1点分布する(別添第11図)。尖頭器の調整加工がバラエティに富むあり方は，南関東地方では相模野編年第V期に相当し，小型不定形のナイフ形石器を若干伴うとされている。第4aブロックの3点のナイフ形石器は，いずれも個体別資料の検討を経て本石器群に共伴すると認定したもので，より東側に広く分布するナイフ形石器文化期のものが混在しているわけでない。3点とも剥片・砕片などが密集する領域に分布し，破損形態はBa類2点，Cb類1点である。

スクレイパーは第4bブロック1点，第5bブロック1点，第11ブロック1点，散漫分布域a 3点の計6点が認められる(別添第11図)。第11ブロックと散漫分布域aの1点がエンドスクレイパーで，残る4点は削器である。これらの他にも削器との関連が考えられる石器が何点かはあるが，第2節2項で説明したように調整技術の面からは尖頭器と区別がつけられないため，一括して尖頭器に含めて考えることにした。いずれもほぼ完形品で，2点は石器の集中するA類ブロックにあり，3点は石器の分布が極めて散漫な，散漫分布域にある。こうした分布のあ

り方は，ナイフ形石器群でも認められた。

彫器は第10ブロックに1点分布する(別添第11図)。石器群の分布が極めて散漫なC類ブロック内にあり，ナイフ形石器群と共通している。

RFはブロック内に10点，ブロック外に5点が分布する(別添第11図)。内訳は第2ブロック4点，第4aブロック2点，第4bブロック3点，第12ブロック1点，第Iブロック群周辺部1点，第IIIブロック群周辺部3点，散漫分布域a1点である。ブロック類型別に見ると，A類ブロック3点，B類ブロック7点，ブロック群周辺部4点，散漫分布域1点で石器のあまり集中していない所にややまとまって分布するという傾向を持つ。(島立)

3)　敲石類・台石

敲石類は合計9点分布する。それぞれについて，個別にブロックとの位置関係を中心に分布状態を見て行きたい(別添第11図)。

まず器種については9点すべてが敲石である。すべてブロック内に分布する。

ブロックは合計14ケ所認められ，これらのうち4ブロック(3・4a・4b・5b)から敲石が出土している。

第3ブロックからはIa類の敲石が1点出土している。石器総数は51点で，疎らに散っている。敲石はブロックの最も外縁部に位置する遺物群中に入る。

第4aブロックは尖頭器群最大のブロックである。ここにはIa類の敲石2点とIII類の敲石1点が分布する。このうち1点(Ia類)は，ブロックの最北部に当るブロック外縁部に位置する。極めて遺物の密集する区域(ブロック東側)からは明らかに外れている。しかしながら，III類の敲石はこの密集部分のちょうど真中に分布している。もう1点のIa類の敲石は，遺物密集域ではないが，ブロック範囲の中心点近くで遺物が安定して多く出土している所に分布している。

第4bブロックにはIa類の敲石が3点分布している。これらはブロックを取り囲むように，遺物点数の少ないブロック外縁部に位置している。

第5bブロックからは，II種接合したIa類の敲石が2点出土している。他の石器点数は合計408点と比較的多い。9m×9.2mの広がりをもつ第5aブロックが北に接している。第5bブロックの遺物密集域は，第5aブロックと接するあたりに認められる。敲石はこの部分から明確に外れて位置しており，遺物分布密度の稀薄な周縁帯に当っている。

台石は第4aブロックから2点出土している(別添第11図)。この2点は接合するため，石器としては1点と言うことになる。ブロック北縁に接するような位置に当っており，周囲の石器の分布は非常に少ない。ところが水洗選別資料中では南に接してポイントフレイクを含む多量の微細遺物を検出しており，正に石器製作時の工作台として利用された可能性が高い。(黒坪)

4)　UF

UFはブロック内に161点，ブロック外に22点が分布する(別添第12図)。剥片や砕片と同様，中央群全域に分布するが，第6・9ブロック及び散漫分布域aには1点も含まれていない。

第22表は各ブロック及びブロック周辺部・散漫分布域のＵＦとそれぞれの石器総数とを較べたものである。石器総数に対するＵＦの占める割合はブロック毎にバラツキがあるが，平均すると16.04％になる。ブロック，ブロック群周辺部，散漫分布域でＵＦの含まれる割合を集計すると，平均値はそれぞれ11.50％，24.41％，27.79％となり，ブロック内の方がＵＦの占める割合が低いことがわかる。さらにブロックを類型単位で集計するとＡ類ブロック4.78％，Ｂ類ブロック6.30％，Ｃ類ブロック23.33％となる。やはり石器総数の最も少ないＣ類ブロック内のＵＦの占める割合が最も高い結果となった。Ａ類ブロックでは第７・12ブロックのように剥片・砕片が極めて多いもののＵＦがわずかしか含まれていないものがあり，全体的に平均値を低下させている。

ＵＦは非常に数の多いトゥールで，それは全石器群の分布とほぼ同じように見える。それではＵＦの分布と他の器種を含めたものの分布とではどちらがバラツキが大きいだろうか。この点を検討してみよう。まずブロック内で考えてみると，ブロック内の全石器群の数はＵＦの16.31倍である。全石器とＵＦの数をそのまま集計して標準偏差を出すと，仮にバラツキが同じでも16.31倍の差が出てしまうのである。そこで各ブロックのＵＦの値を16.31倍にして，ＵＦと全石器群の比較を行った。標準偏差はＵＦが260.36，全石器群は207.62となり，ＵＦの方が分布にバラツキがあることがわかった。換言すれば，ＵＦの方が分布に偏りがあるということになる。この点を別の角度から見てみよう。ブロックを単位とし，ブロック内全てのＵＦが，それぞれ各ブロックに何パーセント含まれているのかを算出した(第22表)。つまり，ＵＦについて，各ブロックの全ブロックに対する割合をそれぞれ算出し，同様の操作を行った全石器群での値との差を求めた。例えばブロック全体の石器群が100点あり，ａブロックに10点あれば，ａブロックの占有率は10％ということにするわけである。仮にＵＦの値が石器総数に比例していれば両者の差は０になるはずである。ところが第22表を見るとわかるように，ブロック毎にＵＦの含まれ方は一定ではなく，差が０とはならない。ブロック類型毎に合計すると，Ａ類ブロック－7.42，Ｂ類ブロック＋0.24，Ｃ類ブロック＋7.18となる。この方法でも，やはり石器総数の少ないブロックの方がＵＦの占める割合の高いことが証明された。ＵＦは明らかに使用された石器で，その意味では他の加工を施した石器類とは概念規定が全く異なっている。しかしその特性ゆえ，ブロックの活動を明確に反映し得るものである。Ａ類ブロックでは石器の使用が低調で，Ｃ類ブロックの方では活発であったということを暗示しているのかも知れない。

５） 剥片

剥片はブロックに1,461点，ブロック群周辺部に16点，散漫分布域に26点が分布する(別添第10図)。ブロック内での石器総数に対する剥片の占める割合は第１ブロックの35.71％から第６ブロックの75.00％までの範囲にあり，平均57.09％になる。剥片の各ブロックにおける占有率と全石器群の占有率の差は第5bブロックの＋3.35から第７ブロックの－3.06まであるが，この２例は例外的なもので，他は全体的に差は小さく，全石器群と剥片とはかなり比例した分

第22表　ブロック別UF出現頻度

ブロック	UF	石器総数	UF % 組成比	UF % 占有率(A)	全石器 % 占有率(B)	A－B %	UF×点 16.31	ブロック類型
1	7	14	50.00	4.35	0.53	+3.82	114.17	C
2	4	89	4.49	2.48	3.39	−0.91	65.24	B
3	3	51	5.88	1.86	1.94	−0.08	48.93	B
4 a	63	708	8.90	39.13	26.96	+12.17	1027.53	A
4 b	7	82	8.54	4.35	3.12	+1.23	114.17	B
5 a	20	283	7.07	12.42	10.78	+1.64	326.20	A
5 b	18	410	4.39	11.18	15.61	−4.43	293.58	A
6	0	12	0	0	0.46	−0.46	0	C
7	5	235	2.13	3.11	8.95	−5.84	81.55	A
8	2	12	16.67	1.24	0.46	+0.78	32.62	C
9	0	6	0	0	0.23	−0.23	0	C
10	6	12	50.00	3.73	0.46	+3.27	97.86	C
11	23	456	5.04	14.29	17.36	−3.07	375.13	A
12	3	256	1.17	1.86	9.75	−7.89	48.93	A
小計	161	2,626	−	100	100	0	2625.91	
平均値	11.50	187.57	11.73	7.14	7.14	|3.27|*	187.57	
標準偏差	15.96	207.62	16.16	9.92	7.91	|3.32|*	260.36	
ブロック周辺部 I	4	23	17.39	44.44	56.10	11.66		
II	3	11	27.27	33.33	26.83	+6.50		
III	2	7	28.57	22.22	17.07	+5.15		
小計	9	41	−	99.99	100	0		
散漫分布域 a	6	26	23.08	46.15	55.32	−9.17		
b	6	17	35.29	46.15	36.17	+9.98		
c	1	4	25.00	7.69	8.51	−0.82		
小計	13	47	−	99.99	100	−0.01		
ブロック A	132	2,348	5.62	72.13	86.51	−14.38	1957.56**	
B	14	222	6.31	7.65	8.18	−0.53	207.62	
C	15	56	26.79	8.20	2.06	+6.14	222.45	
ブロック周辺部	9	41	21.95	4.92	1.51	+3.41	133.47	
散漫分布域	13	47	27.66	7.10	1.73	+5.37	192.79	
小計	183	2,711	−	100	99.99	+0.01	2713.89	
平均値	36.60	542.80	17.67	20.00	20.00	|5.97|	542.78	
標準偏差	47.74	905.12	9.75	26.09	33.35	|4.63|	708.04	

*絶対値の平均・標準偏差　**以下はUF×14.83で計算

	UF占有率 −全石器占有率	UF 組成比 $\bar{x}$	σ_n
A類	−7.42	4.78	2.66
B類	+0.24	6.30	1.68
C類	+7.18	23.33	22.61

布のあり方を示す。その点を別の形で検討してみよう。ブロック内での全石器群は剥片の1.80倍ある。そこで各ブロックの剥片の値を全て1.80倍し，剥片と全石器群の数量を等しくした上で，それぞれのバラツキを調べてみた。剥片は標準偏差209.31，全石器群の標準偏差は207.62で，両者の間の差はわずかなものだった。以上のことから剥片と全石器群とは分布の上では密接な関連をもっており，換言すれば剥片が全石器群の分布を規定しているわけである。砕片の多く分布するA類ブロックも石器群が散漫に分布するC類ブロックや散漫分布域についても剥片の占める割合は50～70%に集中しており，特に偏ることはない。ただし剥片の数量自体はブロックに大小があるのと同様，かなりの違いがある。特にA類ブロックにおいては砕片と混在して多量に分布しており，大半が砕片と同じような非目的的な性格を持ち，石器製作作業に伴って遺棄された状況が窺われる。一方，ブロック群周辺部・散漫分布域では剥片の組成比の平均はそれぞれ36.14%・64.71%である。ブロックの中で30%台に第7ブロックがあるが状況は全く異なる。すなわち第7ブロックでは砕片が多いため相対的に剥片の比率が下がるが，ブロック周辺部では砕片もほとんどなくトゥールの占める割合が高くなっており，対照的である。

6） 砕片

砕片はブロック内に907点，ブロック外に4点が分布する。ブロックの中ではA類ブロックに860点分布しており，全体の94.4%を占めている。他はB類ブロック43点，C類ブロック2点である。石器の平面分布図(別添第10図)を見ると，第4a・5a・5b・7・11・12ブロックといったA類ブロックでは，ブロックの中心部を中心に，ほぼブロックの全面にわたって砕片が集中的に分布する。他では第2・3ブロックにおいて砕片がややまとまりをもつが，数量はあまり多くない。砕片は石器製作作業によって副次的に生じ，そのまま遺棄されたものであると思われる。したがって砕片の量は石器製作作業の量，頻度に比例するはずである。砕片の数は第4aブロックの229点が最も多く，石器製作作業が頻繁になされたことがわかる。一方，第7ブロックは石器総数に対する砕片の占める割合が61.28%と非常に高く，これに剥片をも考慮すると，砕片が多量に生じるような尖頭器の製作作業を集中的に行ったのではないかと思われる。他にもA類ブロックは全般的に尖頭器の製作を行い，その結果，砕片が集中的に分布したものであろう。逆に他のブロックに砕片がほとんどないことを見ると，石器製作空間とそうでない空間とがかなり明確に分かれていたと判断される。

7） 石核

本石器群では石核の検出例に乏しく，ブロック内に12点，ブロック外に3点が分布する。分布の内訳は，第4aブロックに9点が集中しており，他には第1・4b・6ブロックに各1点，第Ⅰ・Ⅱブロック群周辺部に各1点，散漫分布域aに1点があり，分布南半の第Ⅲブロック群及びその周辺一帯には全く分布していない。第Ⅰブロック群に全体の80%が含まれているが，当群内の尖頭器は両面加工品が少なく，大半は素材の一次面を残しており，剥片素材であることがよくわかるものである。したがって明瞭な石核を残すと思われる。一方第Ⅲブロック群ではすべて両面加工品で，また多量の調整剥片類の存在を考慮すると，遺跡内に遺棄されていない

尖頭器もかなり製作されているようである。これらの尖頭器がどのような素材から作られているのかは明らかではないが，分割礫状のものを素材としていると考えれば，明瞭な石核が残されていないこととも合致する。石核の分布の違いには，以上のような石器製作技術上の差違が背景となっているのではないだろうか。（島立）

3．尖頭器石器群の器種組成

本石器群の石器は尖頭器とＵＦが主体を占め，これにスクレイパー，彫器，ナイフ形石器，ＲＦ，礫石類，台石がわずかに伴うという組成を示している。全石器群2,711点中二次加工のある石器は282点で10.39％を占める。一方剥片・砕片は2,414点で88.95％と極めて多量に含まれている。本石器群は尖頭器とその素材生産関係の剥片類，二次加工の際の調整剥片類及びＵＦによって構成されていると言っても過言ではないような内容を示す。ただ，器種別分布の項で触れた通り，本石器群は大きく北群と南群とに分かれており，石器製作技術のあり方が異なっている。北群はナイフ形石器群に近いあり方で，縦長剥片を組織的に生産し，それを素材として両面加工，半両面加工，片面加工，周辺加工，部分加工といったバラエティに富む尖頭器を製作する。ＵＦも尖頭器の素材を生産する技術の中で得られた剥片を利用している。また，わずか３点ではあるがナイフ形石器が伴う。

一方，南群は尖頭器の素材を生産する技術内容を示す資料がなく，素材剥片あるいはブランクを搬入した後に二次加工を行って仕上げている。したがって，ブロックを構成する石器群の大半は尖頭器の製作に伴って生じるポイントフレイクである。ＵＦについてもポイントフレイクを利用したり，他の場所で尖頭器の素材を生産した際に得られた剥片を搬入し使用したと思われる。南群の石器群は両面加工の尖頭器とそのポイントフレイク群によって特徴付けられる技術構造を示す。そこで南北両石器群を分離して考察する。

北群の石器群

北群は第Ｉブロック群と散漫分布域ａである。ブロックの内容はＡ類ブロック１・Ｂ類ブロック３・Ｃ類ブロック１となる・全体では尖頭器47点，スクレイパー４点，ナイフ形石器３点，ＲＦ11点，ＵＦ94点，敲石類９点，剥片535点，砕片275点，石核13点の計991点で構成される(第21表)。トゥールは168点で16.92％を占める。ナイフ形石器群と同様，定型石器，ＵＦ，礫石器，副次生産物(剥片・砕片・石核)に区分し，ブロック毎に組成状況を見てみよう(第23表)。

定型石器は実数で第4aブロックが圧倒的に多いが，組成比では第２ブロックが最も大きい。組成比の平均は8.36％で，第２ブロックの14.61％から第３ブロックの3.92％までの範囲にある。５ケ所全てに尖頭器が含まれるが，他の器種は第２ブロックにＲＦ，第4aブロックにナイフ形石器とＲＦ，第4bブロックにナイフ形石器とスクレイパー，ＲＦが若干伴う程度である。尖頭器以外の器種の存在は不安定と言える。ＵＦは第２ブロックの4.49％から第Ｉブロックの50.00％までの範囲で組成する。平均値は15.45％でバラツキが大きい。礫石器は第３ブロ

第23表 尖頭器北群領域別石器組成

領域	定型石器	UF	礫石器	副次生産物	計	ブロック類型
第1ブロック	1(7.14)	7(50.00)		6(42.86)	14	C
2	13(14.61)	4(4.49)		72(80.90)	89	B
3	2(3.92)	3(5.88)	1(1.96)	45(88.24)	51	B
4a	28(3.95)	58(8.90)	5(0.71)	611(86.44)	707	A
4b	10(12.20)	7(8.54)	3(3.66)	62(75.61)	82	B
小計	54(5.72)	84(8.90)	9(0.95)	797(84.43)	943	
平均値	10.80(8.36)	15.80(15.56)	1.80(1.27)	157.40(74.81)		
標準偏差	9.88(4.35)	21.16(17.30)	1.94(1.39)	223.44(16.58)		
第Iブロック群周辺部	5(21.74)	4(17.39)		14(60.87)	23	
散漫分布域a	6(23.08)	6(23.08)		14(53.85)	26	
計	65(6.55)	94(9.47)	9(0.91)	825(83.08)	993	

( )内は%，他は点数

クに1点(1.96%)，第4aブロックに5点(0.71%)，第4bブロックに3点(3.66%)が分布する。数の少ない器種で，南群を含めても14ブロック中4ブロックにしかない。副次生産物は第1ブロックで42.86%と低い値を示す以外は75～90%の範囲で組成し，剥片・砕片共一定量含まれている。

以上のことから器種組成をブロック類型と関連させて考察すると，A類ブロック(第4aブロック)は多量の剥片・砕片によって規定され，また石核が10点含まれていることから，尖頭器の素材生産から二次加工まで一貫して石器製作作業を行った空間と解される。3.95%を占める定型石器については，大半が尖頭器であり，また未成品も少なくないことから石器製作作業と関連付けて考えることができる。ただ，使用によって初めて認識できるUFが67点もまとまっていることや敲石類が含まれていることからすると石器製作作業以外の活動も合わせて行われていたことは間違いないようである。もっともUFを道具の製作に使用したとすれば，工作空間的性格をもつ空間としての認識は，より一層強まる。

B類ブロックは第2・3・4bブロックの3ケ所で，石器総数はそれぞれ89点，51点，82点と中規模のものである。剥片・砕片が全体の80%程度含まれており，石器製作作業の痕跡を示す。しかしA類ブロックに較べ副次生産物の量が少なく，あまりまとまった作業を行ったとは考えられない。トゥールとして尖頭器・ナイフ形石器・RF・UF・敲石類が含まれるが，尖頭器が多い。二次加工の際に生じる砕片類が少ないことや個体別資料の在り方を見ると，全てをブロック内で製作したのではなく，一部は搬入されていると考えざるを得ない。トゥールと副次生産物の割合はA類ブロックと大差なく，その意味では活動内容に差異を見出すことはできない。規模が格段に違う点を考慮すれば，A類ブロックはB類ブロックとほぼ同じ活動を継続的に行った空間とすることができる。作業内容の質的な差というよりはむしろ量的な差として捉え得る。

C類ブロック(第1ブロック)は尖頭器及びUFが全体の50%以上を占め，また砕片が全く

ないこと，石器総数が14点と少ないことなどから石器製作作業を行っていたと想定することは困難である。UFを中心とした石器の使用空間と考えられる。もちろん単純な器種組成のため，A・B類ブロックとC類ブロックとの間に石器の使用に関して差違があったか否かは明らかではない。ただ，敢えて居住期間と結びつけて考えれば，C類ブロックは本遺跡内で居住を開始して，携帯してきた道具類を消費し尽くす前，換言すれば石器製作作業の必要性が生じる前にその空間の使用を停止した，短期間利用した空間として捉え得る。C類ブロック形成後，さらに石器製作活動が伴えばB類ブロックとなり，その場所が継続的に利用されればA類ブロックとなるような状況が推察される。尖頭器の破損状態の分布を加味しても，基本的に各ブロックとも破損度合の大きなものが多いということで，ブロックの類型毎に質的差違を示す要素が認められなかった。第2b層のナイフ形石器群の場合，A類ブロックとB・C類ブロックとの間には，器種組成及び石器の破損状況の面で質的な差が認められ，異なった機能空間として把握し得た。また各ブロックが同一個体によって相互に結びつけられており，異なった機能空間を包括する集落像が想定された。本石器群についても同様の現象が認められることが予想されたのではあるが，実際にはA類ブロックと共にB類ブロックにおいても石器製作活動に結びついた要素が顕著で，A・B類ブロックを異なる機能空間と認識することはできなかった。後述するように北群内においても同一個体によって複数ブロックが結びついてはいるが，1単位集団が異なる作業を通してA・B類両ブロックを形成するというブロック群の構成原理は不明瞭であった。

南群の石器群

南群は第II・IIIブロック群及び散漫分布域B・Cである。ブロックの内訳はA類ブロック5，C類ブロック4となる。全体では尖頭器15点，スクレイパー2点，彫器1点，RF4点，UF89点，敲石類2点，剥片968点，砕片636点，石核2点の計1720点で構成される。トゥールは117点で6.83%を占める（第24表）。

定型石器の組成比は第6ブロック他の8.33%から第7・9ブロックの0%までの範囲にあり，平均すると3.29%（標準偏差3.62）となる。ブロック類型毎ではA類ブロックの平均0.98%，C類ブロックの平均7.14%で，C類ブロックの方が高い値を示す。しかし，C類ブロックの場合，各ブロックの定型石器の量は第9ブロックを除いていずれも1点である。ブロックの石器総数が少ないため，計算上高い値を示すことになるわけである。したがって，定型石器の占める割合が高いこと自体，定型石器を頻繁に使用したことに直接結びつくものではない。ただ，A類ブロックもその点，大差ないものかも知れない。A類各ブロック内の石器総数が第7ブロックの235点から第11ブロックの456点までと極めて多いにもかかわらず，定型石器の数量は第5aブロックの6点を最高に，第5bブロック4点，第11ブロック5点，第12ブロック1点とわずかしか含まれないのである。定型石器の組成内容も第5aブロックは尖頭器6点，第5bブロック尖頭器3点，スクレイパー1点，第11ブロック尖頭器4点，スクレイパー1点，第12ブロックRF1点とまちまちである。C類ブロックでも第6・8ブロックに尖頭器各1点，第10ブロッ

第24表 尖頭器南群領域別石器組成

領域	定型石器	UF	礫石器	副次生産物	計	ブロック類型
第5aブロック	6(2.12)	20(7.07)		257(90.81)	283	A
5b	4(0.98)	18(4.39)	2(0.49)	386(94.15)	410	A
6	1(8.33)			11(91.67)	12	C
7		5(2.14)		230(97.87)	235	A
8	1(8.33)	2(16.67)		9(75.00)	12	C
9				6(100)	6	C
10	1(8.33)	6(50.00)		5(41.47)	12	C
11	5(1.10)	23(5.04)		428(93.86)	456	A
12	1(0.39)	3(1.17)		252(98.44)	256	A
小計	19(1.13)	77(4.58)	2(0.12)	1,584(94.17)	1,682	
平均値	2.11(3.29)	8.56(9.61)	0.22(0.38)	176.00(87.03)		
標準偏差	2.13(3.62)	8.62(15.08)	0.63(0.13)	161.97(17.54)		
第II群ブロック周辺部	1(10.00)	3(30.00)		6(60.00)	10	
第III群ブロック周辺部	3(42.86)	2(28.57)		2(28.57)	7	
散漫分布域b		6(35.29)		11(64.71)	17	
散漫分布域c		1(25.00)		3(75.00)	4	
計	23(1.34)	89(5.17)	2(0.12)	1,606(93.38)	1,720	
A類ブロック	16(0.98)	69(4.21)	2(0.12)	1,553(94.70)	1,640	
C類ブロック	3(7.14)	8(19.05)		31(73.81)	42	
ブロック周辺部	4(22.22)	5(27.78)		8(35.71)	17	
散漫分布域		7(33.33)		14(66.67)	21	

クに剥器1点が含まれているだけで，尖頭器石器群のブロックとは言っても南群の半数近い四つのブロックには1点の尖頭器も含まれてはいない。したがって，A・C類全てのブロックを通じて，定型石器を使用する活動は極めて低調だったと言っても良いだろう。UFは第6・9ブロック以外で一定量保有されている。組成比では平均9.61%(標準偏差15.08)で，ブロック類型毎に見ると，Aブロックは組成比が第12ブロックの1.17%から第5aブロックの7.07%までの範囲にあり，平均すると4.21%となる。バラツキはあまり大きくない。一方，C類ブロックでは第10ブロックの50.00%から第6・9ブロックの0%までの範囲で，平均すると19.05%となる。ただ，4ブロック中2ブロックにはUFが保有されていないことなど，組成上のバラツキが大きい。礫石器は第5bブロックに2点がまとまっている以外には全く分布していないので傾向は掴めない。副次生産物は非常に多く，組成比は第10ブロックの41.47%から第9ブロックの100%までの範囲にある。ブロック類型毎では，A類ブロックの組成比は第12ブロックの98.44%から第5aブロックの90.81までの範囲にあり，平均94.70%である。C類ブロックでは組成比が第10ブロックにおいて例外的に低く41.47%だが，平均すると73.81%になる。

簡単にまとめてみると，A類ブロックは定型石器が約1%，UFが3～5%程度と極めて低い組成比を示し，また礫石器も例外的なものである。代わりに多量の剥片・砕片類(ポイントフレイク)が含まれており，まさに尖頭器の調整加工を行った場として認識できる。一方，C

類ブロックでは砕片が極めて少ないことからも窺える通り，石器製作作業を行った痕跡は全く認められない。また，二次加工のある石器も第10ブロックの7点以外は，第8ブロック3点，第6ブロック1点，第9ブロック0点と少なく，他の石器群のようにそれらを持ち込んで使用した空間と積極的に評価することもできない。

次に分布上のまとまりとして設定したブロック群について見てみよう。第7・8・9ブロックでは小規模で密集的な第7ブロックを除いて散漫な分布を示す。ブロックとして設定したものの，周囲の散漫分布域bとの境界が不明瞭で，あたかも第7ブロックの周囲が散漫分布域として認識した方が良いような状況である。したがって，第7・8・9ブロック及び散漫分布域bとによって形成される領域を仮に散漫分布域Bとして分析する。

第Ⅱ・Ⅲブロック群及び散漫分布域Bを見ると，いずれも剥次生産物が90～95%ほどで一定している。定型石器は散漫分布域B0.37%，第Ⅲブロック群1.37%，第Ⅱブロック群1.68%で，大差なく少ない。UFも第Ⅲブロック群4.65%，散漫分布域B4.81%，第Ⅱブロック群5.73%と有意差はない。以上を見ると，定型石器・UF・剥次生産物の含まれ方はブロック群，散漫分布域とも大差なく，比較的等質である。またブロック構成も，第Ⅱ・Ⅲブロック群ともA類ブロック2ケ所とC類ブロック1ケ所で，石器総数も700点ほどで，両者に差違はない。散漫分布域Bは石器総数が少なく，石器群の分布が疎であるが，石器の器種組成及びA類ブロックとC類ブロックの組合せで構成されている点では第Ⅱ・Ⅲブロック群に準ずるものとして捉え得る。したがって，南群は石器製作作業によって形成されたA類ブロックを中心とする三単位の石器群で，他の様々な活動内容については分布の上からでは認識し得ない。

通常，石器総数が多ければ一定期間はその場で生活したもの，逆に少なければ，ごく短期間のキャンプ地と想定する場合が多い。確かにナイフ形石器群のように一個体から多くの道具を製作する場合など，多くの個体を消費していることを居住期間と結びつけることも可能であると思う。しかし本石器群の場合，石器総数は多いものの，大半がポイントフレイクで，尖頭器1点を作るのにも多くのポイントフレイクが生じることを考えると，数点の尖頭器を製作することによって，わずかの期間にまとまったブロックが形成される可能性が充分に考えられる。石器製作以外の活動痕跡があまりにも乏しいことを考えると，尖頭器製作後，わずかの期間で再び移動していったのではないかという印象を受ける。（島立）

第5節　個体別資料の検討と分布

1．個体別資料の外観的特徴

尖頭器文化期に属する資料は，合計2,711点である。このうち個体識別できたのは，接合によるもの145点，非接合のもの981点で合計1,126点である。個体数は合計68である。接合率5.3%，個体識別率41.5%である。個体識別の困難な砕片を除外すると，接合率7.9%，個体

識別率61.1%になる。この他，単独個体は13点0.5%含まれている。

以下，代表的な8個体について外観的な特徴を示しておく。

個体別資料番号P－1F①

石材は頁岩である。全体の色は灰黄色である。石英，黒雲母等の微細な有色鉱物を含む部分とシルト質の部分とから成る。節理面にはうすい灰色の膠着物が残存する。剥離面には，この膠着物が1ミリ程度の線となって現れている。

個体別資料番号P－1F③

石材は頁岩である。全体の色は，うすい白黄色である。全体的に堅いシルト質から成るが，局所的に微細な有色鉱物を含む部分がある。節理は発達しているが，よく密着している。剥離面においてそれが微細な線模様となる。微細な亀裂が局所的に集中している。石質は堅硬である。

個体別資料番号P－2F④

石材は頁岩である。全体の色は，うすい白黄色である。若干赤味を帯びている部分もある。節理はあまり認められず，全体的に泥質である。石質も軟質である。

個体別資料番号P－2F⑥

石材は頁岩である。全体の色は灰黄色から白黄色である。節理，亀裂が著しく，その空隙には黒褐色あるいは黄白色の微細な砂状物質が残存する。剥離面において黒褐色の残存物は，微細な血管状の模様を呈する。

個体別資料番号P－0H①

石材は頁岩である。全体の色はうすい灰黄色である。全体に微細な雲母や黒色鉱物が散在する。節理面には，灰色，白色の粉末状物質が残存し，剥離面において灰色を呈した縞模様として現れる。

個体別資料番号P－1I⑥

石材は頁岩である。全体の色はうすい灰色である。全体に節理，亀裂が著しい。特に亀裂の著しく広いものでは1～2mmの空隙を有する。その空隙には黄褐色の膠着物が残存する。灰色の帯状あるいは斑状の模様が見られる。石質はきわめて堅硬である。

個体別資料番号P－1I⑩

石材は頁岩である。全体の色は灰黄色である。部分的であるが，灰色部分と交互に現れ，それが縞模様を呈している。灰色の微細線が直線あるいは波状に現れている。

個体別資料番号P－1J①

石材は頁岩である。全体の色は灰黄色である。黒色の煤状の模様とうすい灰色の直線的模様が部分的にある。全体に微細な黒色鉱物や，微細な気泡が散在する。（徳永）

第25表　尖頭器文化に属する個体別資料一覧表

個体No.	石質	資料総点数*	個体類型	非接合点数	接合点数	石器組成 Kn	Pt	Sc	RF	UF	B	C	D	ポイントフレイク組成 ⓐ	ⓑ	ⓒ	ⓓ	他	不明	剥離工程	関係ブロック	挿図No.
P－1 F①	頁	18	B	14	4		4			1	12	1				2	2		1	中＋P	P4a	81
②	頁	52	(B)	38	14	1	3			3	43	1	1				1		1	中＋P	P4a・P4b	
③	頁	61	B	23	38	1	6		1	13	34	1	5			2				中＋末＋P	P4a・P4b・外	82
④	頁	9	C	9	0					1	8					6	1		1	P	P4a	
⑤	頁	5	C	5	0						4	1				3	1		1	P	P4a・外	
⑥	頁	3	C	1	2		1				2					1				P	P4a	
⑦	頁	2	?	2	0						2									?	P4a	
⑧	凝	4	?	4	0						4									?	P4a・P4b	
⑨	頁	2	?	0	2						2									?	P4a	
⑩	安	11	?	11	0			1	1		8		1							?	P4a・P4b	
⑪	凝	2	?	2	0						2									?	P4b	
P－2 F①	頁	10	C	10	0					1	9					4	4		1	P	P4b	
②	頁	4	?	4	0		4													?	P 2	
③	頁	2	C	0	2		1				1					1				P	P 2	
④	凝	22	B	18	4		2		2	1	16	1				1	3			中＋P	P1・P2・P3・外	83
⑤	頁	14	B	14	0		2		2		10									中＋P	P2・P3・P4a・外	
⑥	頁	35	C	25	10		2	1		1	30	1			3	11	7		2	入P	P2・P3・P4a・外	85
⑦	頁	9	B	5	4		1		2		6						1			中P	P4b	
⑧	頁	2	(D)	2	0						2									(入)	P1	
⑨	頁	5	(A)	2	3					3	2									(中)	P2・P3	
⑩	頁	3	(C)	0	3				3											－(P)	P2	
⑪	頁	2	C	0	2		1				1						1			P	P2	
⑫	頁	3	(D)	1	2						3									(入)	P2	
P－1 G①	頁	40	B	25	15		2		1	6	28	2	1				3			中＋末＋P	P4a・外	84
②	頁	17	A	15	2					2	14		1	0	0	0	0	0	0	末	P4a	
④	頁	4	D	0	4					3	1									入	P4a	
⑤	頁	10	A	8	2					2	8					?			?	中	P4a	